

令和３年度
富山大学におけるFD活動報告書

富 山 大 学
教育・学生支援機構教育推進センター

目次

あいさつ	1
1. 第1回全学FD2021「アクティブ・ラーニングの基礎と事例」実施報告	
開催趣旨	4
当日プログラム	6
参加者内訳	7
当日資料	8
チャットへの質問・回答	59
参加者アンケート設問・回答結果まとめ	62
2. 第2回全学FD2021「学生が主体的に学べるためのクラスデザイン」実施報告	
開催趣旨	76
当日プログラム	77
参加者内訳	78
基調講演資料	79
栗田先生（Sli.do）への質問・回答	134
参加者感想	135
参加者アンケート設問・回答結果まとめ	139
3. 各部局におけるFD活動報告	
人文学部・人文科学研究科	150
人間発達科学部	151
経済学部	153
理学部	155
工学部	156
医学部医学科	158
医学部看護学科	159
薬学部	161
芸術文化学部	163
都市デザイン学部	164
教養教育院	165
4. 全学におけるアンケート結果	
DP達成度調査結果	170
卒業時調査結果	199
5. 全部局FD活動一覧及び参加状況	
令和3年度FD参加状況	205
令和3年度FD活動実施状況・実施予定一覧	206
6. 各種資料	209

令和3年度富山大学におけるFD活動報告書

あいさつ

令和3年度富山大学におけるFD活動報告書を発刊するにあたり、ご協力いただいた全学FD・教育評価専門会議委員の皆様には、深く感謝いたします。このようなFD活動の地道な取り組みが大学の教育力向上に大きな貢献をしていると考えます。

昨年度まで10年間にわたり本専門会議議長を務められた橋本勝教授の後を引き継いで、私が議長を務めることになりました。お引き受けすることになった経緯をお話して、ご挨拶とさせていただきます。平成30（2018）年度より富山大学では全学組織として教養教育院が始動しました。ちょうどこの年に広島大学で開催された全国大学教育研究センター等協議会へ参加する機会を得ました。そこで他大学での教育改革の事例報告を聞き、その場に集まった方たちとの交流をすることができました。また、平成30年度と翌年度の教育改善検討WGの座長に任じられ、教養教育院のFDの企画などの教育改善に携わることになりました。大学教育改革へ意識を向けていたので、FDのテーマとして他大学の教育改善やカリキュラム改革の取り組みを調査し、本学として学ぶべき事例を紹介しました。このような経験を全学FD・教育評価専門会議の活動に活かすことができると考えています。この仕事をお引き受けしたからには、微力を尽くして取り組む所存です。

全学FDのテーマを決めるに当たっては、大学として緊急性・重要性の高いテーマを選び、できるだけ多くの教員が参加し、FDで学んだことを実際に授業に活かしてもらうことを念頭におきました。第1回全学FDのテーマは「アクティブ・ラーニングの基礎と事例」、第2回のテーマは「学生が主体的に学べるためのクラスデザイン」としました。本年度の全学FDの参加者は、第1回には313名、第2回には159名、延べ472名と過去最多の参加をみることができました。参加者の声、アンケートを見ると肯定的な意見を多くいただくことができ、当初の目的は果たせたと確信しております。特に第2回の東京大学総合教育センターの栗田佳代子先生のご講演とワークショップは好評でした。

本報告書には、全学FDだけでなく各学部のFDのテーマや課題を載せています。各学部で取り組んでいる活動を学部間で情報共有し、更なる教育改善の活性化に向けてほしいと願います。本年度の各学部のFDでは、コロナ禍の教育をテーマにしているものが多く、また、アクティブ・ラーニングの模範事例の紹介がいくつかありました。また、大学教員としての基本的なティーチングスキルをテーマにしたFDもあります。いずれも重要な内容です。その中で注目されるのは、芸術文化学部と都市デザイン学部が、今後の課題としてコロナ禍での学生の心身の状態に着目している点です。「コロナ禍において教員と学生の接触機会が減少しており、学生の心身の不調を早

期に発見することがより難しくなっている」(都市デザイン学部)、「大学に登校できないことによる学生間のつながりの希薄化の把握とメンタルケアが必要」、「オンライン講義での学修状況の把握—講義内容をどこまで修得できているかをどうやって把握するか、また学修を深めるためにはどうすればよいか」(芸術文化学部)。挙げられた課題はこの時期において非常に重要な問題です。今年度留年した学生と面談する機会があり、生活の状況を直に聞くことができました。コロナ禍になって遠隔授業の間は一日ほとんどアパートの中で生活していてクラスメートにも会うことはなく、特に留年してしまうと誰とも会うことも話すこともなくなるようです。遠隔授業は学生によっては気楽に自室から授業に参加できるという良い面もありますが、クラスメートに会うこともなく、生活のリズムを崩してしまい、講義をさぼりがちになるといったマイナス面があります。芸術文化学部が課題として挙げている「学習状況の把握」については、2年間続いたコロナ禍の成績への影響や留年率の変化などを各学部で調査して、全学で情報共有して、早急に対策を講じなければならないと考えます。

全学FD・教育評価専門会議議長
谷井 一郎

1. 第1回全学FD2021
「アクティブ・ラーニングの基礎と事例」
実施報告

全学FD2021「アクティブ・ラーニングの基礎と事例」開催趣旨

全学FD・教育評価専門会議議長 教養教育院 谷井一郎

昨年来遠隔授業を余儀なくされ、それまでの対面授業と勝手が違い、双方向的な授業が難しくなりました。このような状況の中で教員の中には「もっと能動的な深い学びをさせたい」という思いを抱いている方が多数いらっしゃるのではないのでしょうか。また、学生から「一方向の講義はつまらない」「もっとアクティブ・ラーニング型の授業を増やしてほしい」という意見が出ています。そこで、今回のFDはアクティブ・ラーニングを広く普及する目的で企画しました。以下の文章は、「アクティブ・ラーニングの基礎と技法について」のプレゼンテーション資料を参考にお読みください。

「そもそもアクティブ・ラーニング(AL)とは何？」という素朴な疑問に答える形で、ALの背景、AL技法にはどんなものが有り、講義のタイプによってどの技法を用いるべきか、について簡単にご説明申し上げます。

多くの教員の皆様はALというとグループ学習を思い浮かべられるのではないのでしょうか。しかし、ALというのは、そうではなくもっと広い技法で、教員から学生に一方向的に知識を伝達するスタイルではなく、学生が“考え、書き、話し、発表し、体験する”といった、聞くだけでなく、さらに能動的な活動を伴うスタイルの学習のあり方の総称で、様々な技法があります。

ALが求められる社会的背景について言及しておきます。1つには、少子化にともない入学してくる学生の質が多様化していることが挙げられます。2つめとして、大学には時代の変化や社会のニーズに応じた人材育成が求められているということです。“前に踏み出す力”“考え抜く力”や“問題解決力”“リーダーシップ”などが挙げられていますが、これらの力は一方向的な講義形式の教育では身につけません。そのような背景のもとで大学教育にはパラダイムシフトが必要とされています。これまでの“教員主体”から“学生主体”へ、教員の役割は“知識を伝える専門家”から“学習のファシリテーター役”へ、そして「教員が教えたこと」ではなく「学生ができるようになったこと」が重視されるようになりました。そのためにはALを取り入れなければならないということになります。

ALはグループ学習だけではなく、様々な技法があります。大事なことは、講義の目的、規模や学習スタイルに応じて技法を選択することです。大人数の講義型で知識の伝達が主な目的であれば、できるだけシンプルで手間や時間のかからない技法を選ぶべきです。クリティカルシンキングやスキルの育成が目的であれば、グループ学習のような学生同士で学習することに多くの時間を割いたほうが良いということになります。

ALの技法は以下の3つのタイプに分けることができます。

タイプ1は知識の伝達が主目的の講義で使える技法です。シンプルで手間がかからず、大人数講義で使えます。タイプ2は学生どうしの活動を伴う技法です。タイプ1よりやや複雑ですが、それほど難しくはないので、比較的取り入れやすい技法といえます。タイプ3ですが、これは学生が中心になって作業を行い、教員はファシリテーター役になるものです。このタイプでは、学生を信頼

して、教員による介入を極力減らすことが大切になります。本日の事例紹介は、この3つのタイプのいくつかの技法を使った授業の具体例です。

最後に、本学では講義型の授業が多くありますが、その多くはおそらくは教員による一方向的な授業になっているのではないのでしょうか。知識の伝達が主目的だとしても、学生が考え、書く、話す、発表する、体験するといったALの技法をとりいれることによって、学習効率を上げ、学習の質を高めることができます。本日の事例紹介を参考に、授業に少しの工夫を取り入れてみませんか。

2021年6月23日

全学FD2021 プログラム

6月23日（水） 13:00～14:30（「Zoom」ミーティングによるオンライン開催）

テーマ：アクティブ・ラーニングの基礎と事例

全体のコーディネーター 谷井 全学FD・教育評価専門会議 議長

13:00～13:02 開会挨拶・日程説明 谷井議長

13:02～13:08 アクティブ・ラーニングの基礎と技法 谷井議長

13:08～14:28 事例紹介 各学部・教養教育院より優れた取組みを紹介
（以下、事例紹介者及びご紹介いただいたアクティブラーニングの技法）

人間発達科学部 黒田 卓 教授

Moodle を活用：投票機能（クリッカー）、掲示板利用

理学部 松田 恒平 教授

コメントシート（授業理解度確認及び感想カード）

工学部 大路 貴久 教授

小レポート、形成的小テスト、クリッカー

医学部 桶本 千史 准教授

シンク・ペア・シェア、ケーススタディ、グループ発表／ディスカッション

人文学部 大西 宏治 教授

ディスカッション、ワークショップ

都市デザイン学部 柴柳 敏哉 教授

グループワーク、シャトルカード利用

芸術文化学部 奥 敬一 教授

調査学習（企画書作成、マップ作成）、フィールドワーク（観察と記述）、グループワーク

薬学部 新田 淳美 教授

グループワーク／グループ発表、ロールプレイ、能動的質疑応答、調査学習

経済学部 中村 真由美 教授

調査学習（学生自身が自由にテーマ、データ、仮説を設定し、計量分析を行う）

教養教育院 福田 翔 准教授

海外の大学とつないだオンラインコミュニケーション（応用活動）

※当初、質疑応答の時間を設ける予定であったが、時間の都合上、チャットで受け付けることとした。

14:28～14:30 閉会挨拶 磯部 教育推進センター長

【参加者内訳】

教員	
役員	3
人文科学系	15
教育学系	17
社会科学系	17
芸術文化学系	30
教養教育学系	17
理学系	26
都市デザイン学系	29
工学系	38
医学系	24
薬学・和漢系	33
教育研究推進系	17
非常勤講師	8
小計	274

職員	23
----	----

学生	
人文学部	1
経済学部	2
理学部	2
医学部	2
薬学部	2
工学部	1
芸術文化学部	1
都市デザイン学部	1
大学院生	4
小計	16

合計	313
----	-----

アクティブ・ラーニング(AL)の基礎と技法

ALを正しく使いこなすには

富山大学教養教育院 谷井一郎

アクティブ・ラーニング(AL)とは

アクティブ・ラーニング ≠ グループ学習だけ

- 教員から学生に一方向的に知識を伝達し、学生はそれを聞くという形式とは異なる学修のあり方
- 学生が考え、書く、話す、発表する、体験することを伴う学習活動に授業時間内外で参加する
- そのような学習のあり方の総称

ALが求められる社会的背景

- 学生の多様化: 少子化に伴う大学進学率の増加, それによって学生の質が多様化
- 時代の変化やニーズに応じた人材育成が求められている
 - (1) 社会人基礎力(経済産業省): 前に踏み出す力, 考え抜く力, チームで働く力
 - (2) 学士力「汎用的技能」(文部科学省): コミュニケーションスキル, 問題解決力, 自己管理能力, リーダーシップ

これらの力は一方向的な講義形式の教育では身につかない

大学教育のパラダイムシフト

「教える」から「学ぶ」の重視へ

「教員が～を教える」より「学生が～できる」ようになったかを重視

教授パラダイム		学習パラダイム
教育の目的	教師から学生へ知識を伝える	学生の発見や知識構成を引き出す
知識	教師が持っていて, 学生から見れば「向こう」にあるもの	学生個人の経験により形成され, 構成され, 創出され, 獲得されるもの
主体	教員	学生
教師の役割	学生に知識を伝える専門家	学習のファシリテーター 学習方法や学習環境のデザイナー

どの技法を選択したらよいか

授業の目的・規模や学習スタイルに応じて選択する

▶ 授業の目的

知識の伝達が目的か

スキルの育成が目的か

▶ 学習スタイル

個人で学習する

チーム・グループで学習する

AL型授業の技法・学習活動例(類型):タイプ1

赤字は事例紹介

主導形態	AL型授業 としての 戦略性・複雑性	技法・学習活動例	授業規模
教員主導 講義中心型	低	ミニッツペーパー	大人数 でも可
		コメントシート	
		小レポート	
		形成的小テスト	
		クリッカー (Moodleにて)	
		反転学習	

AL型授業の技法・学習活動例(類型):タイプ2

赤字は事例紹介

主導形態	AL型授業 としての 戦略性・複雑性	技法・学習活動例	授業規模
教員主導 ハイブリッド 型	中	シンク・ペア・シェア	大人数 でも可
		ピア・インストラクション	
		ディスカッション	中人数
		グループ発表	
		ディベート	
		ワールドカフェ	
		ロールプレイ	

AL型授業の技法・学習活動例(類型):タイプ3

赤字は事例紹介

主導形態	AL型授業 としての 戦略性・複雑性	技法・学習活動例	授業規模
学生中心 作業・探究型	高	グループワーク	中人数
		ジグソー法	
		ポスターツアー	
		ケーススタディ (PBL)	
		調査学習	
		フィールドワーク	
		模擬授業	

講義型の授業にも アクティブ・ラーニングを

ALの技法（学生が考え、書く、話す、発表する、体験する）を取り入れることによって、学習効率を上げ、学習の質を高めることができる

授業に少しの工夫を

基礎生化学

(理学部生物学科 専門必修科目)

におけるコメントシートの活用

学術研究部理学系 松田 恒平

基礎生化学の授業構成(内容としては生化学入門)

- 1) 生化学ガイダンス
- 2) 生物を構成する分子、特に水と他の生体成分との相互作用
- 3) pHと酸－塩基I
- 4) pHと酸－塩基II
- 5) 生物を構成する分子(アミノ酸)の諸性質
- 6) 生物を構成する分子(タンパク質)の諸性質
- 7) 生物を構成する分子(情報伝達物質)の諸性質
- 8) 生物を構成する分子(脂質)の諸性質
- 9) 生物を構成する分子(糖質)の諸性質
- 10) 生物を構成する分子(核酸)の諸性質
- 11) 酵素の生物化学(総論)
- 12) 酵素の生物化学(反応速度論的解析I)
- 13) 酵素の生物化学(反応速度論的解析II)
- 14) 酵素の生物化学(反応速度論的解析III)
- 15) ゲノミックスとプロテオミクス

上記の各項目を講義する。

**生物学科では個別入試に数学を課していない
センター試験の数学得点率5割未満でも入学可能**

項目4) 水の電離・イオン積・pH



$$\text{平衡定数 } K_{eq} = [\text{H}^+][\text{OH}^-]/[\text{H}_2\text{O}]$$

$$25^\circ\text{C中での } K_{eq} = 1.8 \times 10^{-16}$$

純水の濃度: ? M...1000gの水/リットルと捉えれば
 $1000/18$ (水の分子量)=55.5 mol/リットル=55.5 M

水溶液中では

$$[\text{H}^+][\text{OH}^-] = 1.8 \times 10^{-16} \times 55.5 = 0.999 \times 10^{-14}$$

水のイオン積

SørensenによるpHの定義:水素イオン濃度の逆数の対数

$$\text{pH} = \log 1/[\text{H}^+] = -\log[\text{H}^+] \quad (\text{実際には水素イオンの実効濃度})$$

$$\log[\text{H}^+][\text{OH}^-] = \log[\text{H}^+] + \log[\text{OH}^-] = \log(1 \times 10^{-14}) = -14$$

練習問題

pHの机上計算(実際にはpHメーターによって実測)

(1) 0.01mol/lの塩酸2ml

$$[\text{H}^+] = 0.01 \text{ mol/l} = 1 \times 10^{-2} \text{ M} \text{ 従って、} \text{pH} = -\text{Log}([\text{H}^+]) = 2$$

(2) 0.25mol/lの硫酸10mlに水90mlを加えた溶液

$$[\text{H}^+] = 1 \times 10^{-1} \times 2 \times 0.25 \text{ mol/l} = 5 \times 10^{-2} \text{ M} \text{ 従って、} \text{pH} = -\text{Log}([\text{H}^+]) = 2 - \text{Log}(5) = 1.3$$

(3) 固体の水酸化ナトリウム(分子量40.55)2.0gを水に溶かして200mlとした溶液

$$\text{水酸化ナトリウム溶液のモル濃度} = (2/40.55) \times 5 = 0.25 \text{ mol/l}$$

$$[\text{OH}^-] = 2.5 \times 10^{-1}, [\text{H}^+][\text{OH}^-] = 1 \times 10^{-14}, [\text{H}^+] = (1 \times 10^{-14})/(2.5 \times 10^{-1}) = 4 \times 10^{-14}$$

$$\text{pH} = 14 - \text{Log}(4) = 13.4$$

(4) 0.1mol/lの酢酸5ml(電離度0.016)

$$[\text{H}^+] = 0.1 \times 0.016 = 1.6 \times 10^{-3}, \text{pH} = 3 - \text{Log}(1.6) = 2.8$$

項目12) 活性化エネルギーと化学反応の速度との関係

アレニウスの式

$$k = Ae^{-E/RT}$$

k : 速度定数

A : 温度に無関係な定数(度数因子)

E : 活性化エネルギー

R : ガス定数

T : 絶対温度

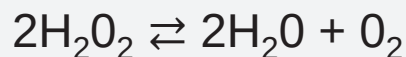
$$\ln(k) = \ln(A) + (-E/RT)$$

$$\text{アレニウスプロット: } y = mx + b$$

自然対数から常用対数へ変換

$$\log k = \log(A)/2.303 - E/2.303RT$$

H_2O_2 の分解反応



触媒無しの場合 活性化エネルギー 75,000 J/mol

カタラーゼ有りの場合 活性化エネルギー 20,000 J/mol

練習問題

過酸化水素の分解反応の速度はカタラーゼによって触媒されると何倍に増加するか？

触媒無しの場合

$$\log k_{\text{無}} = \log(A) / 2.303 - 75000 / 2.303RT \cdots (1)$$

カタラーゼ有りの場合

$$\log k_{\text{カ}} = \log(A) / 2.303 - 20000 / 2.303RT \cdots (2)$$

両反応速度の比較として $k_{\text{カ}} / k_{\text{無}}$ を求める

(2)式から(1)式を引く

$$\log k_{\text{カ}} - \log k_{\text{無}} = (75000 - 20000) / 2.303RT$$

$$\log(k_{\text{カ}} / k_{\text{無}}) = 55000 / 2.303RT, R = 8.31, T = 300 (26.85^\circ\text{C}) \text{ とすると}$$

$$\log(k_{\text{カ}} / k_{\text{無}}) = 9.579 \cdots$$

$$k_{\text{カ}} / k_{\text{無}} = 10^{9.579 \cdots}$$

項目13) 酵素反応の速度論(Henri-Michaelis-Mentenの古典的解析)



迅速平衡近似による反応速度式の解析

$$v / V_{\max} = ([\text{S}] / K_s) / (1 + ([\text{S}] / K_s)), \text{ただし } K_s = K_{-1} / K_1$$

定常状態近似による反応速度式の解析

$$v / V_{\max} = ([\text{S}] / K_m) / (1 + ([\text{S}] / K_m)), \text{ただし } K_m = (K_{-1} + K_p) / K_1$$

基礎生化学の成績下位者数の推移(2010年度～2020年度)

開講年度(履修数)	可	不可(%)	備考
2010 (39名)	22名	4名(10)	選択科目(2,3,4年対象)
2011 (40名)	14名	10名(25)	以降 必修科目(1年対象)
2012 (52名)	10名	12名(23)	
2013 (50名)	16名	8名(16)	パワポ授業止める
2014 (44名)	7名	9名(20)	授業内容の大幅な見直し
2015 (48名)	5名	5名(10)	コメントシートの導入
2016 (46名)	6名	7名(15)	
2017 (51名)	7名	5名(9)	絶対評価→相対評価を意識
2018 (44名)	4名	2名(5)	
2019 (41名)	5名	2名(5)	
2020 (36名)	4名	4名(11)	新コロ禍による混乱

コメントシート

講義に対する意見、感想、質問などを書くもの
(富大シャトルカードなど既存)

授業理解度確認及び感想カード

A5のカード(A4紙を半分にしたもの)を授業開始時に配布

- ・授業内容で理解できたこと
- ・授業内容で理解できなかったこと
- ・授業の質問、感想(任意)

- ・授業外学修の確保(宿題への解答)

教え合い



授業の見直し

成績下位者数の減少には効果あるかも/成績上位者への教育には不向き

私の授業実施例

学術研究部工学系
(工学部工学科 電気電子工学コース)
教授 大路 貴久

【授業科目】：創造工学入門ゼミナール（1年生，少人数）
電気機器工学1, 2（2, 3年生，90人）
電気電子設計（4年生，40人）

} 電気主任技術者
関連科目

ほか

AL keyword: 小レポート、形成的小テスト、クリッカー

目次

紹介

- ▶ 授業でのAL実施例
 - (0)講義準備（機材，環境）
 - (1)講義の様子（スライド(pdf)等）
 - (2)要点まとめ課題（毎週）
 - (3)レポート課題（隔週程度）
 - (4)チャットでクイズ（たまに）
- ▶ 各項目の位置づけ
- ▶ まとめ

2020年度「学生が選ぶザ・ティーチャー」

- ・「工学部で全13名，そのうちの1人」
- ・「電気電子工学コース」の学生投票で，
- ・「2位タイ（3人）」



Top of the Top ではない，普通の授業



どなたでも取り入れることができる

(0)講義準備（機材，環境）

- ▶ Moodle, zoom, ヘッドセット&ウェブカメラ
- ▶ PDFスライド
- ▶ ペンタブレット, 書画カメラ
- ▶ Mathpix, TeXclip（数式用）

(1)講義の様子(スライドPDF)

- ▶ 教科書より平易な内容
- ▶ 図は手書き（あたたかみ）
- ▶ 数式はTeX
- ▶ ペンタブで追記
- ▶ 教員ONで表情を見せる
- ▶ 余談を入れる，身振り手振り
- ▶ 楽しそう，面白そう（たまに笑って！）

The screenshot shows a Zoom meeting interface. The main window displays a slide titled "Y-Y結線" (Y-Y Connection) with handwritten notes in red and green ink. The slide includes a circuit diagram of a three-phase system with a star (Y) connection. The diagram shows three phases (U, V, W) and a neutral point (中性点). Handwritten notes include "相電圧" (phase voltage) and "相電流" (phase current). Below the diagram, there are equations for the relationship between primary and secondary voltages and currents.

Y-Y結線図

【関係式】(1次側のみ)

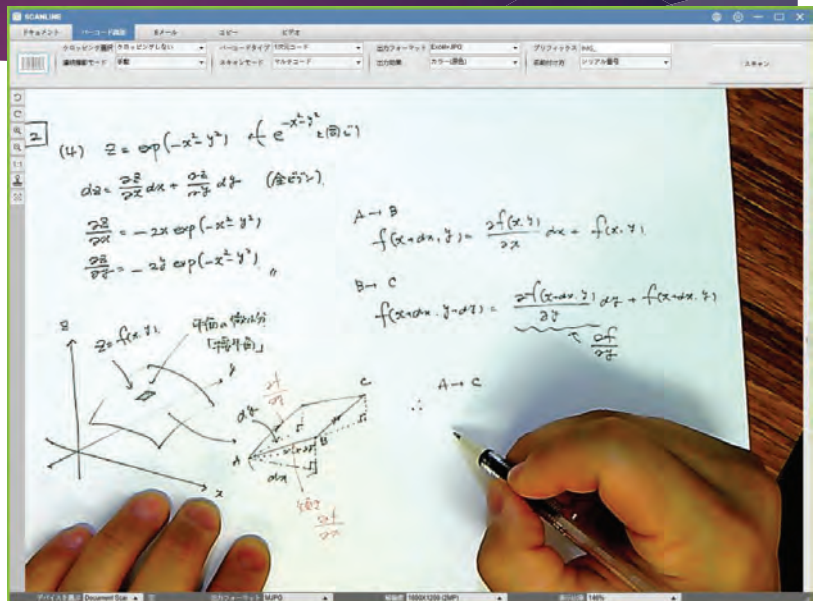
$$\begin{aligned} \dot{V}_{UV} &= \dot{E}_U - \dot{E}_V \\ \dot{I}_U &= \dot{I}'_U \end{aligned}$$

※ 1次側: 大文字, 2次側: 小文字
※ 相電流には「I」をつけています。
※ 線間電圧は「V」、相電圧は「E」で表現しています。
※ 2次電流だけ, 便宜上, 流出方向を正としています。

Copyright © Takahisa OHg, Univ. of Toyama (無断コピーや無断転載を禁じます)

(1)講義の様子(書画カメラ)

- ▶ 「演習」で活用
- ▶ 先生の筆跡 = 板書風 (きれい・きたない, 速い・遅い) (あたたかみ)
- ▶ 間違える過程も見せる
⇒ 間違いを指摘してくれる (双方向性?)

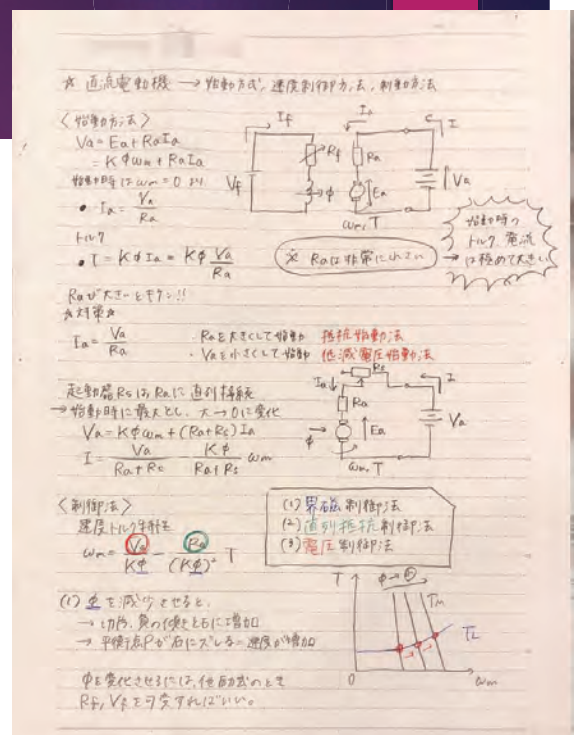


(2)要点まとめ課題

【moodleでのアナウンスメント文】

- ★本日の内容について、学修したことをまとめて提出してください【※切：xx/xx, 23:59まで】
- ・ A4, 1ページ以上 (ただし手書き)
 - ・ 「なるほどと納得した点」や「ここが重要、試験に出そう」など、要点をまとめる作業です。
 - ・ 授業を聞きながら「メモ書き」しておけば、それが参考になるかもしれません。
 - ・ (もしあれば) 感想なども書いてください。

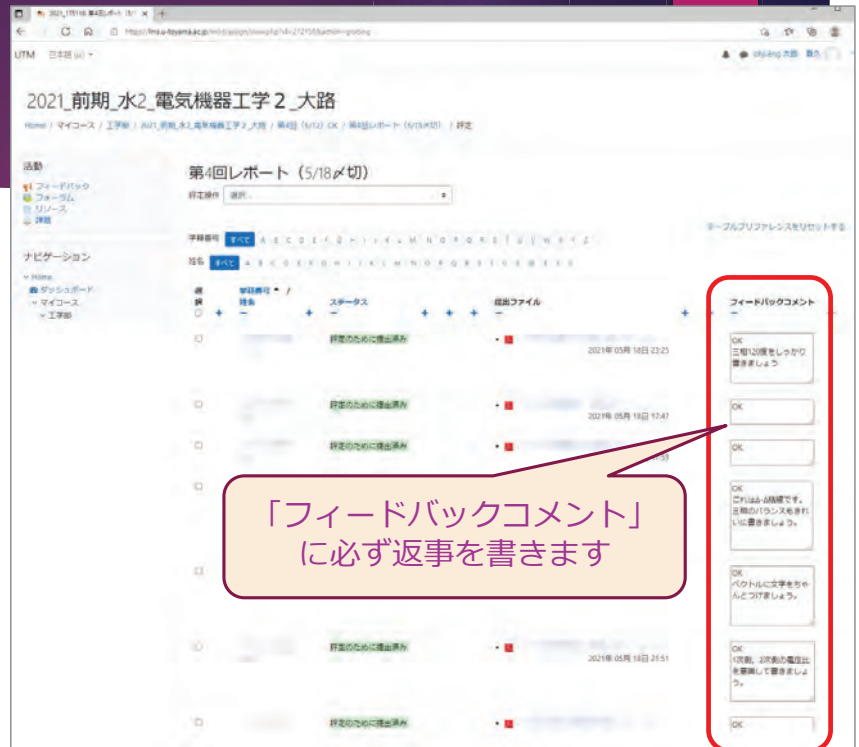
- ▶ 毎回提出 (出席替わり)
- ▶ (教員側) 授業内容のどこに着目して纏めたかがわかる
- ▶ (学生側) 纏める = 自身の理解状況を把握する (「理解度共有, 形成的」になっている)



要点まとめ課題のよい例

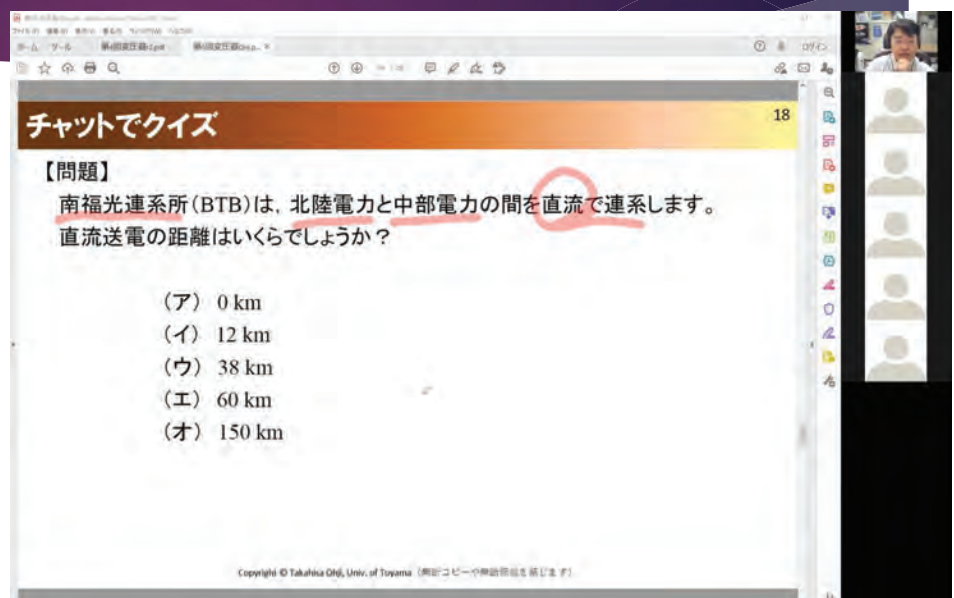
(3) レポート課題

- ▶ 隔週程度で実施
- ▶ その回の内容に関連した簡単な**小テスト**（要提出）
- ▶ moodleにコメントを必ず記載（**双方向性**）
（「OK」としか書いてないと逆に不満が出たり...）

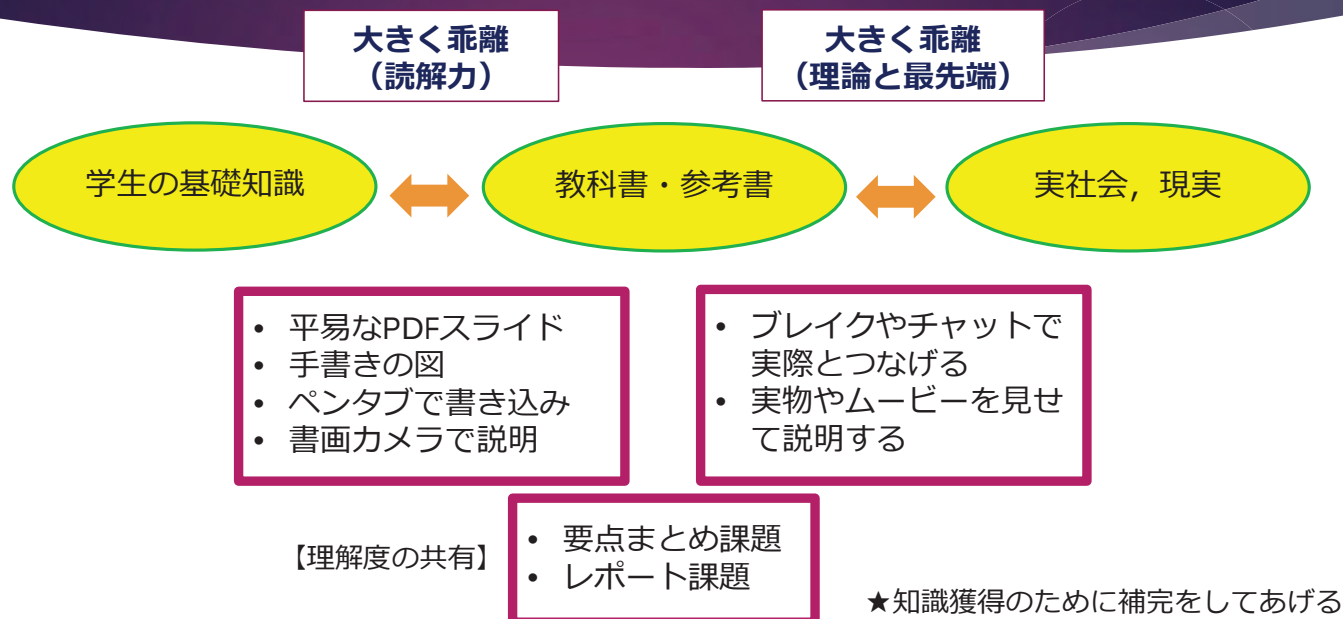


(4) チャットでクイズ

- ▶ 講義の中盤あたりで（たまに）クイズをします
- ▶ Zoomのチャット機能を使って解答を投稿してもらいます（**クリッカー**の代わり）（**双方向性、面白さ**）
- ▶ 「ブレイク」「チャットでクイズ」= 余談用スライドで**実社会**の繋がりを与えます。



それぞれの位置づけ



まとめ

- ▶ 正直, ALというほどの大したことはしていない。時流に乗れていない。
(少なくとも授業内容を電子化しておけば, 将来, 反転授業等に役立つかも...)
- ▶ Moodle, zoom 以外の最新のツールを駆使してもよいだろう。しかし, テクニカルな部分は結局, 学生に飽きられる。ローテクな準備でも, 興味を持たせる授業を提供できる。
- ▶ 適度な双方向性は重要。行き過ぎた双方向性 (介入) は学生にとって苦痛かも。感想を求めることを義務付けないようにしている。
- ▶ 「リモート授業」だらけ = 孤独, (授業) 退屈, (提出物) 手一杯...
対面の機会も失われ, 教員がどんな人かも分からずに過ごしている学生にとって, 教員の雰囲気わかる「あたたかみのある授業」が必要ではないでしょうか。
- ▶ アフターコロナの授業 : ハイブリッド化, 反転授業 のための全学的環境整備が必要

全学FD 2021

アクティブ・ラーニングの 基礎と事例

医学部看護学科
小児看護学
桶本 千史

ご紹介する事例の概要

【対象学生】

医学部看護学科 2年生（約80名）

【講義科目】

小児看護学総論（後期・全15コマ）

【講義タイトル】

終末期にある子どもと家族の看護

授業にアクティブ・ラーニングの技法を取り入れた目的・意図

- 臨床現場で求められる、その場で思考し、その場で対応するという体験を垣間見ることで、これまで学習した知識や、今後学習する知識の活用方法について、学生自身が考える機会とする。
- 問題に遭遇した際の対応について自分以外の他者の考えを聞くことで、多様な視点があることを知り、一つの視点に限定せず、問題解決のために多様な視点から検討することの必要性について理解する。

どのような技法か

シンク・ペア・シェア

[手順]

- ① テーマ（問題）を提示する。
- ② 1人で考える。
- ③ ペア（2人組）になる。
- ④ 互いに意見を交換する。
- ⑤ （必要であれば）ペアで1つの意見にまとめ、発表する。

- 他者の意見と比較しながら、自分の考えを明確にしたり、深めたりしていくのに有効な手法
- ペアで取り組むことで、グループワークや発表が苦手な学生に、発言しやすい環境を提供することができる

終末期にある 子どもと家族の看護

小児看護学総論

本講義で学習すること

- 終末期の定義について理解する
- 子どもの終末期の特徴と「生命を脅かす病気」について理解できる
- 終末期にある子どもの特徴について理解する
- 終末期にある子どもと家族への看護の視点について理解する
- 終末期にある子どもと家族への支援の課題について理解する
- 終末期にある、ある小児の一場面から、看護者としての対応を考察する

終末期における看護（対応）について 考えてみよう・・・

- 小児がんで個室入院中の9歳男児
- 半年近くに及ぶ治療を続けてきたが効果なく、疼痛緩和を中心とした治療へ移行しており（PCAポンプで麻薬を持続投与）、ここ数日は24時間臥床状態で傾眠傾向が続いている。
- 時折、朦朧とした様子で「ありがとう、ありがとう。」「お父さん、お母さん大好きだよ。」と言い、再び眠る様子が見られる。
- 両親に対しては、以前より、余命は数か月程度だろうと告知されていたが、医師より「いつどうなってもおかしくはない状態である」との説明が改めてなされた。

そんなある日・・・

母は席を外しており、父親が児に付き添っていた。
父親より「痛がっているんで来て下さい。」とナースコールあり。

看護師が訪室し、患児に「痛いの？」と声をかけて近寄ると、いきなり患児に腕をつかまれる。爪が食い込むほどの力で看護師の腕をつかみながら、「助けて！」と言う。

Q. あなたがこの看護師だったら、この場面においてどのような対応をしますか？ 出来るだけ具体的に考えてみましょう。

- ⇒ 2～3人のグループで話し合ってください（5～10分）
- ⇒ 話し合った内容を発表して下さい（2分程度で）
- ⇒ 発表内容に対する意見や疑問

ALを取り入れたことによる効果（学生の反応）

＜講義後のレスポンスペーパーより一部抜粋＞

- 授業の最後で事例を考えた時、頭の中で用語を理解しているだけでは対応できないと感じた。具体的に自分ならどうするかを考え、他の人の意見も共有して、自分の対応力を上げられたらいいと思う。
- 実際に自分が臨床に出た時にどう行動するかが大事で、いくら知識があっても動かなかったら意味がないので、考えながら授業を聞けるようにしていきたいと思います。
- 国家試験に通らないといけないから、それに向けての勉強はもちろんだけれど、また種類の違う勉強が必要というか、そういったことを今回の事例で改めて実感しました。1人の人間として人と向き合う力というか、暗記や試験勉強では身につかないもっと深いところにある力が求められているなあと思います。

教養教育 総合科目「富山の地域づくり」の アクティブラーニング

担当 大西宏治（人文学部）

キーワード：富山、ワークショップ、インプット、アウトプット

大西担当の「富山の地域づくり」の授業

■授業のねらい

1. 地域づくりのアカデミックな視点の把握
2. 自治体の地域づくりを理解
3. 地域課題を自分事として考え、解決策を構想

■授業の内容

1～10回：自治体、地域の団体の地域づくりの取り組みや課題をそれぞれの職員からうかがう

後半5回：地域課題を解決する方法をワークショップで考える

ワークショップは富山市役所と他部局の教員に支援を受ける

2018、2019年度の授業

受講者数：80名

高度差

【座学】

- オリエンテーション（アカデミックな位置づけ）
- 国の取り組み（国土交通省北陸地方整備局）
- 富山県の取り組み（富山県観光振興課）
- 富山市の取り組み（コンパクトシティ、レジリエンス、スマートシティ、SDG s）
- 高岡市の取り組み（歴史文化都市）
- 魚津市の取り組み（選ばれるまち）
- 立山黒部ジオパーク（環境保全）

【ワークショップ】10名 8グループで実施

- 第8～12回 富山市のレジリエントシティのワークショップ（5回分 1日：集中）
「富山市の30年後を考える」
→30年後に来てもらう人たちに向けた地域づくりを考える
→ファシリテータに富山市役所、他部局の教員、授業のOB・OGを活用



Understand: Learn about Users

富山に来る観光客の人物(ユーザー)を自由に設定してみよう!

WHO/NAME (名前):

AGE (年齢):



Family Life(生活・家族構成)

Where do they live? (どこに住んでいる?)

What is their family structure and social support network? (家族構成は? よく一緒にいる友達は?)

Daily life (日々の生活)

How do they make a living? (どうやって生計を立てている?)

What other institutions or groups are they involved in? (どんな団体やサークルに入っている?)

Education & Information (教育・情報)

What is your education background? (学校では何を学んだ?)

日本語能力

low high

ITリテラシー

low high

Where do they get their information? (いろんな情報はどこで手に入る?)

Vacation (バケーション)

What are your user's immediate objectives for the vacation? What are they looking for? (ユーザーがバケーションをとるときは? ユーザーはバケーションに何を求めている?)

What are the activities that your user is planning to do during their vacation? What will they get excited about? (ユーザーがバケーション中に計画しているアクティビティは? ユーザーは何を楽しみにしている?)

STRENGTHS + OPPORTUNITY (強み+チャンス)

Why would your user come to Toyama? Be specific about the type of activities they could do and why Toyama will have what your user profile is looking for. (なぜユーザーは富山に来るのか? ユーザーができるアクティビティについて具体的に書(描)いてみよう。)

Sketch or write!

NEEDS + VALUES (ニーズ+価値)

What does your user prioritize?

What qualities do they value?

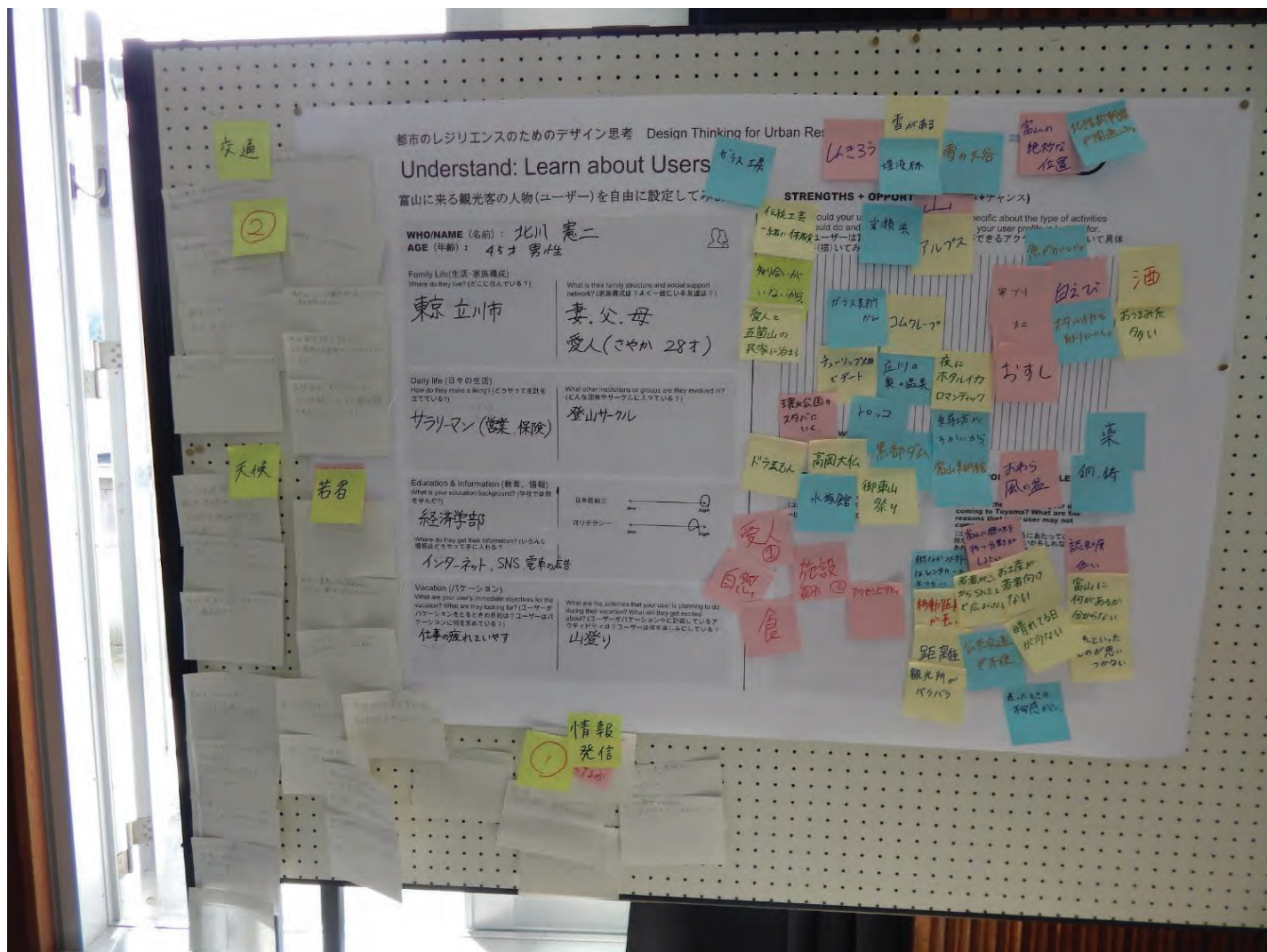
(ユーザーの優先順位が高いものは? ユーザーは何に価値を感じるのだろうか?)

PAIN POINTS + CHALLENGES

(課題)

What are the barriers to your user coming to Toyama? What are the reasons that your user may not come to Toyama?

(ユーザーが富山に来るにあたっての課題は何だろうか? 富山に来ないかもしれない理由があれば、それは何だろうか?)



2020年度のワークショップ

受講者数 80名

【座学】

オンラインだがこれまで同様に実施

【ワークショップ】

• オンラインで実施

第9回 オンラインワークショップの方法を伝える

授業のOB・OGを参加者に、都市デザイン学部安江准教授をファシリテータとして、富山市を住みよくするためのアイデア出しの模擬ワークショップを示した

高度差

テーマ：未来共創

学生の感想

ワークショップの様子を見ていて、あれだけ**急な議論だったにもかかわらずしっかりとまとめまで行われていた**ので、自分たちでもある程度は行うことができるなと感じました。結構ぶっ飛んだ話や現実的ではない話も上がっていましたが、最終的にそういった意見もくみ取ってまとめが行われていたので、**ちょっと違うかなと思った意見でも思いついたことはなんでも意見として挙げて議論を深めていくのが重要**だと思いました

オンラインワークショップの実施

高度差

• ワークショップの内容

4回にわたるグループでの話し合い（ワークショップ）

ワークショップの成果の発表会

• 形態

5名1グループを機械的に分割して構成し、毎回同じメンバーで話し合いを実施する

• ファシリテータ

話し合い中に定期的にグループに介入して話し合いを円滑化する

高度差

日 付	テーマ	内 容	担 当
7月6日(月)	暮らしの課題を集めよう (WITHコロナ)	新型コロナ禍を経験し、自身が 感じた変化やこれから生まれる 課題等について共有しよう。	未来戦略室 (とやまシティラボ・未来共創)
7月13日(月)	暮らしの課題を集めよう (コロナ以外)	コロナ禍以外で、各自が感じてい る課題や困りごとについて共有し よう。(SDGsのテーマやゴールを 意識しながら)	未来戦略室 (とやまシティラボ・未来共創)
7月20日(月)	課題の解決方法を考えよう	まちの「ありたい姿」を想像し、そ のために解決すべき課題とその 解決方法について考えよう。	環境政策課 (SDGs)
7月27日(月)	具体的な解決策を考えよう	課題解決のための具体的な方策 について考え形にしよう。	環境政策課 (SDGs)
8月3日(月)	発表	具体案の提案発表 (全グループ)	環境政策課／未来戦略室

7月20日のスライド

本日のワークショップのテーマ

高度差

4000

ワークショップの進め方①

高度差

4000

2050年を想定) こんなまちに住みたい」、「こんなまちになってほしい」というキーワードを考え、グループ内で共有してください。

各自で調べてきた優先的に解決すべき3つの課題に関する日本や世界の情勢も適宜共有してください。

ワークショップの進め方②

高度差

4000

お願い：これまでと同様に話し合いの経過（将来のまちのキーワード、それをつなぎ合わせた理想のまちのイメージ）をワードに記録して提出をお願いします。

高度差

各グループで設定した理想のまちを
実現する方策について、できるだけ
具体的な提案を2つ以上考える

高度差

発表会のスライドの例

富山で歩く生活

aグループ

工学部 山際真二郎
経済学部 杉本侑那
経済学部 中川純奈
人文学部 甲谷満里奈
都市デザイン 本間和志

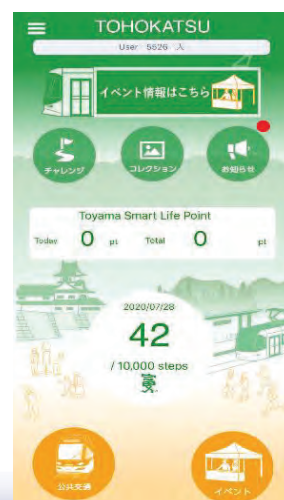
高度差

4000



とほ活「富山で
歩く生活」
Smart Life & Smart Walk

開く



理想のまちのイメージ

高度差

40



高度差

4000



年は、公共交通の発達がさらに進むことや

ことに繋がるため、解決すべきである。

(活気)が減る

課題の解決方法

高度差

...

4000



(楽しんで歩けるよう)にする。

高度差

4000

報告のまとめ

報告のまとめ

高度差

- 地域づくりを学ぶ
課題を自分で考える
正解のない課題を考える
多様な価値観を踏まえた課題解決が必要
- 対話の重要性
自分と異なる考えの人が存在することを理解する
アイデアを共有することが重要である
一人で思いつけなくても、話し合えば思いつくことも

→ワークショップによるアクティブラーニングが有効なタイプの授業だった

芸術文化学部からの取り組み紹介

芸文総合演習Dにおける アクティブラーニング

授業主担当：奥敬一

授業の位置付け

- 「芸文総合演習」は、コース別の専門教育の導入にあたる演習（2年生前期）
- 「芸文総合演習D」では、主に「地域キュレーションコース」での学びに関連する基礎的技法を身につける（40-60名程度）
- “料理”を作るための道具を解説するが、包丁や鍋や電子レンジの構造だけ教えても意味はないので、実際に基本的な使い方をひとつお体験し、何ができあがるかを理解することが狙い→アクティブラーニングになる理由

演習の構成

- ・ 演習はそれぞれ専門の違う 4 名の教員で担当

テーマ	担当教員	概要	アクティブラーニング技法
地域産業資源の活用	安嶋是晴	RESASを用いて地域の特性を把握し、その情報をもとに地域産業資源活用に関する企画を作成する	調査学習、グループワーク
地理情報による地域の理解	奥敬一	国土地理院の地理情報をもとに、地域の特徴を理解し、地域の変遷を表す地図を作成する	調査学習
アーカイブ資料の活用	松田愛	各種文献資料のデータベースの使い方を知り、アート×地域の実践例を調査する	調査学習
フィールドワークによる観察と記述	島添貴美子	フィールドワークで必要とされる観察と記述の手法を実験を交えて学び、特定の場所を対象に実践する	調査学習、フィールドワーク

- ・ さらに最終回でグループディスカッションと教員による講評を行い、各テーマで学んだことを学生間で共有する

芸文総合演習D 1回～4回 (安嶋担当)

(概要)

RESAS（地域経済情報システム）を活用し、地域の実態を把握するとともに、各受講者の出身地の課題を解決する企画提案を行う。内容は①講義、②ワーク、③グループワーク（GW）を繰り返し行う。

第1回 地域を知る	第2回 地域を分析する	第3回 地域を活かす	第4回 地域を企画する
①講義：地域経営の理解を深める。 ②ワーク：自己紹介シート作成 ③GW：自己紹介のグループワークで操作と作法に慣れる。	①講義：リーサスの操作法を学ぶ。 【次回まで課題】 ②ワーク：出身地のSWOT分析を作成する	③GW：第2回の課題のシェア ①講義：フィッシュボーンやピラミッドチャートなど企画の手法を学ぶ。 ②ワーク：地域活性化企画案検討	③GW：地域活性化企画案のシェア ①特別講義：高岡市職員による日本遺産の講義 ②ワーク：高岡市の日本遺産の発信方法の検討 ③GW：日本遺産の企画のシェア

(最終提出物)

- ・ 地域課題解決の企画提案書の作成（パワーポイント10枚程度）
- ・ 高岡の日本遺産の新しい発信方法の提案書の作成

ワークで使用したシート（一部）

自己紹介シート

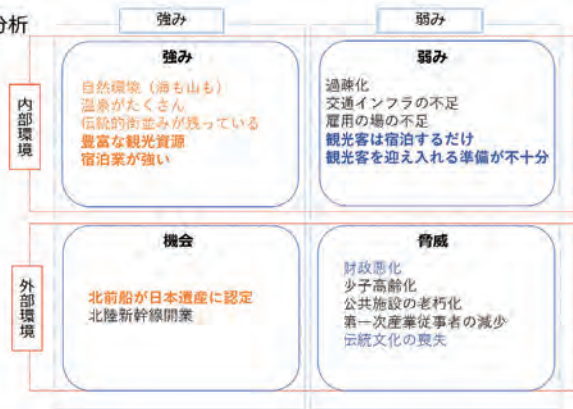
所属・氏名（ふりがな）・ニック
ネーム

出身地およびその地域の自慢

趣味（好きなスポーツ、音楽、映画、
書籍などなど）

高岡市の印象（良い所・悪い所）

SWOT分析



日本遺産制度の認知度を高めつつ、高岡の日本遺産を発信（PR）する方法を提案してください（できるだけお金をかけない方法で提案してください）。1人 5つ以上。必要に応じて枠を追加してください

学籍番号
氏名

企画案タイトル1	高岡の日本遺産構成文化財のモデルツアーコースの企画提案
具体的内容	テーマ別のモデルコースを作成（女性向け、歴史向け、子ども向け、結婚式（10年）、磁器婚式（20年）、真珠婚式（30年）、金婚式（50年）など）
企画案タイトル2	高岡の日本遺産 構成文化財スタンプラリーの実施
具体的内容	構成文化財の各所にスタンプを置き、コンプリートの際には景品を贈呈する
企画案タイトル3	高岡の日本遺産 アナデジ アーカイブの実施
具体的内容	高岡の日本遺産に関わる出版物、映画、ドラマ、CM、ホームページ、など、アナログ・デジタルすべての情報ツールを1か所で確認できるポータルサイトを作成する。
企画案タイトル4	学生が選んだ高岡の日本遺産構成文化財人気ランキングの実施
具体的内容	学生の視点で日本遺産の構成文化財のおすすめを投票しランキングを発表。投票理由も聞くことで若い人が好む日本遺産構成文化財を表出化する。
企画案タイトル5	全国の「高岡さん」を日本遺産大使任命
具体的内容	全国の高岡さんへに日本遺産大使を任命する。HPなどで募集を行い、応募者には日本遺産大使〇〇という任命書と名刺を配布し、PRに貢献してもらう。年に1度、高岡さん交流会を実施する。有名人として代表は高岡早紀。

学生の成果事例（一部抜粋）

石川県加賀市

～北前船ミュージアムを拠点とした観光～

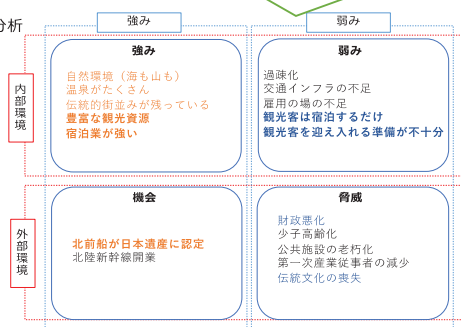
11980XXX
○○○○

RESASによる分析



地域状況の検討

SWOT分析



企画提案

“（仮）北前船主ミュージアム”を拠点とした観光

拠点とする場所：北前船の里資料館

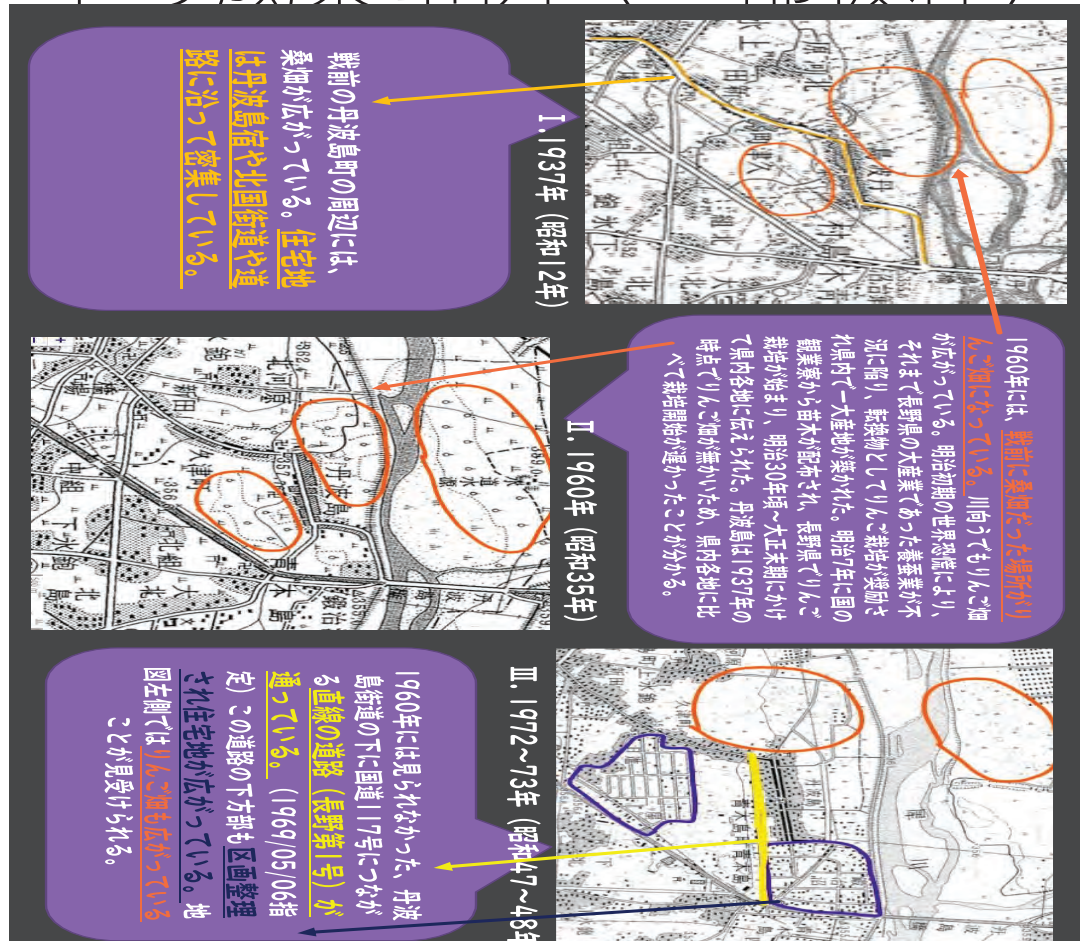
○概要

- ・北前船主の秘宝（図録はある）を公開して展示し、
 - ・地域の観光の目玉となる博物館（美術館要素もある）をつくる
- 『北前船の里資料館』を博物館・美術館風に改名（例：北前船主ミュージアム）

○取り組み

- ・常駐ガイドの設置
- ・ガイドの質を保つためにガイドマニュアルを製作する
- ・お土産をつくるー（旅行にきた実感が欲しい）
- （伝統工芸品を用いた1500円以下のストラップ、置物など）
- ・館内で特産品を食べることができる場所をつくる
- ・レンタルサイクル、レンタル和傘の貸し出し

学生の成果事例（一部抜粋）



効果

- 授業評価アンケートにおいて「全体理解」「説明補助手段」「授業工夫」「総合満足度」などの項目で学部平均より高い評価
- ゼミでの研究活動や、卒業研究の導入がスムーズに

薬学部におけるアクティブラーニング科目の紹介

薬剤師養成をミッションとする臨床系科目「病院薬学」での事例

薬学部・薬物治療学研究室
新田淳美

「薬学部での薬剤師養成科目」とは？

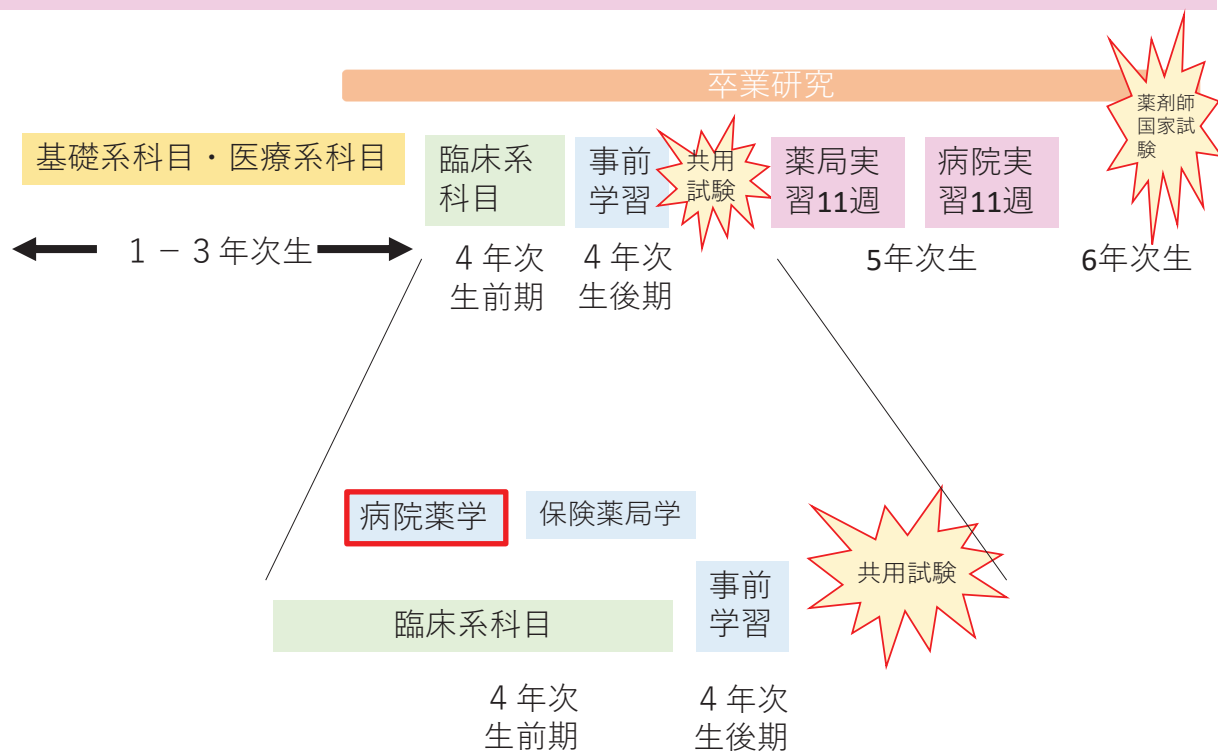
- ✓平成18年（2007年）入学生から、薬剤師免許国家試験受験資格を有する課程は履修期間が6年に延長された。
- ✓それに伴い、半年間の臨床実習が義務付き、全国薬学部・共通の共用試験への合格の必要がある。
- ✓事前学習+（共用試験合格）+病院実習11週間+薬局実習11週間 が、全国統一ルールである。



旧課程での事前学習 (2014年度入学生まで)

- 知識を持たず、動作や操作を覚える場となっていた。
- 1年生の時の早期体験以来、医療現場に接する機会がないので、実感がわかないことが多い。
- 薬剤師の存在意義を感じずに、グループワークをしている感があった。

改訂コアカリで科目を増やした (2015年度入学生以降)



手法

- 1, **演習とグループワーク**を取り入れる。自分が薬剤師になった気持ちで、学生同士で服薬指導の練習したり、SOAPの記載を体験する。
- 3, **調査研究・プレゼンをする**。薬剤師 1 日体験を実施する。

手法

- 1, 演習とグループワークを取り入れる。自分が薬剤師になった気持ちで、学生同士で服薬指導の練習をしたり、ケーススタディでSOAPの記載をの練習をする。
- 2, 薬剤師 1 日体験を実施する。

薬剤師 1 日体験・・・3 週間に渡って実施する

1 週目

7-8病院の若手薬剤師に非常勤講師として、大学へ講義に来ていただく。学生も7-8グループに分け、それぞれの病院に振り分け、各薬剤師の講義を受ける。

2 週目

前の週に自分が講義を受けた薬剤師が所属している病院へ訪問して、薬剤師の業務を見学する

3週目

病院で見学・経験したことに加えて、さらに、詳細に調査を行い、グループごとにパワーポイントを作成して、発表する。

薬剤師 1 日体験・・・3 週間に渡って実施する

1 週目

7-8病院の若手薬剤師に非常勤講師として、おいでいただく。学生も7-8グループに分け、それぞれの病院に割り振り、講義を受ける

毎日何時から働き始めている？

始業約20分前

実習には遅くても5分前には来てね！

若手薬剤師が学生に示したスライドの1枚

薬剤師 1 日体験 ・ ・ 3 週間に渡って実施する

2 週目

前の週に自分が講義を受けた病院へ訪問して、
薬剤師の業務を見学する（薬剤師 1 日体験）

- ✓ 公共交通機関を使用し、無理のない時間に訪問する。
- ✓ 前の週に病院薬剤師から体験する予定の事柄や、各病院の情報を教えてもらい、学生は、それぞれ調査をしている。
- ✓ 薬剤師が働いている姿、薬剤部内やチーム医療での役割を目のあたりにする。
- ✓ 多くの機器があり、自分達が思っていた以上に薬剤師は対人業務であり、自分の知識をどのように活用することが重要かを感じる。
- ✓ 自分達が調べたことが妥当かなども、医療現場の方に教えてもらう。
- ✓ 薬剤部の方々を見て、卒後キャリアについても想像可能となる。

薬剤師 1 日体験 ・ ・ 3 週間に渡って実施する

3週目

病院で見学・経験したことに加えて、さらに、詳細に調査を行い、グループごとにパワーポイントを作成して、発表する。

- ✓ 薬剤師の業務で重要なことを情報共有する。
- ✓ 一方で、病院の機能、医療圏によって、業務内容が異なることを情報共有できる。
- ✓ パワーポイント作成の過程で、学生同士で、薬剤師像への思いを話しあい、矛盾する時には、個別に教員も交えて、議論する。
- ✓ パワーポイントは紙媒体で共有する。

想定内で良かったこと

- ✓ 病院における薬剤師の医療への貢献を認識できる
- ✓ この後に実施する臨床前実習に対して、現実味を感じるようになる
- ✓ 学生同士が各病院の情報を共有することで、病院の機能によって、医療の状況が異なり、薬剤師へ期待される事柄が異なることを実感する

予期していなかった良かったこと

- ✓ 5年生次の実務実習時には、1つの病院で11週間の実習をすることから複数の病院の雰囲気を知ることができる
- ✓ 非常勤講師に本学を卒業後3-10年の薬剤師を派遣してくれることで、卒業生同士が後進への教育に興味を持ってくれる。臨床実習時の指導方法等の卒業生同士の情報交換のきっかけになっている
- ✓ 学生の中には、非常勤講師として、戻ってきたいという者もいる

困っていること

- ✓ 各病院への訪問やパワーポイントの発表資料の作成に午後の時間を半日使うため、卒業研究のための時間を割り込む。
- ✓ 各病院に行くための手段が限定的である。
- ✓ 非常勤講師費用の抑制のため、外部講師の招聘ができない。富山県の医療を薬剤師として背負う人たちに「非常勤講師」の称号のもと、大学で後進の教育に携わってほしい。
- ✓ 非常勤講師費用の一律抑制について、今後、考えて欲しいです。

経済学部のアクティブラーニングの事例 —「調査データ解析」の場合—

富山大学 経済学部

中村 真由美

自己紹介

- ・経済学部経済学科教員の中村真由美
- ・専門は社会学
- ・担当ゼミや授業は、社会調査法や産業社会学など
- ・研究は労働社会学と家族社会学。専門職とジェンダー間格差、少子化、家庭内役割分業などのテーマを扱っています。

本日の報告の構成

以下の点について順にお話していきます。

- (1)どのような技法なのか具体的な説明
- (2)授業にアクティブ・ラーニングの技法を取り入れた目的
- (3)アクティブ・ラーニングを取り入れたことによる効果

(1)どのような技法なのか具体的な説明

- ・対象としている授業は、経済学部「調査データ解析」という授業^(注1)。
- ・内容は、(1)基本的な統計分析手法をまず座学で学ぶ。(2) そのうちの2つの手法^(注2)を使い、学生さん自身が個票データ^(注3)を分析して^(注4)、レポートを執筆。
- ・キモとしては、学生さん自身が分析するデータやテーマ(仮説)を自由に選ぶことができること。
- ・テーマは広く許容。ワークライフバランスから幸福度からパチンコから肥満度まで。変数が含まれているデータがあれば何でも可。
- ・通常の統計分析の授業だと、使用するデータや仮説はあらかじめ決められていることが多い。データと仮説の両方を自由に学生さんに設定してもらえる点は珍しいと思います。

注1: 通常は30~45名程度。半期授業で15回構成。

注2: 通常は、クロス表分析と独立性の検定、および、重回帰分析を用いて、それぞれレポートを書いてもらう。

注3: 個票データとは回答者ひとりひとりの回答状況がわかるような、集計前のデータのこと(生データとも呼ぶ)。データアーカイブ(データの図書館のようなもの)から借り出すことが可能。データアーカイブは東京大学のSSJDAなどを利用。

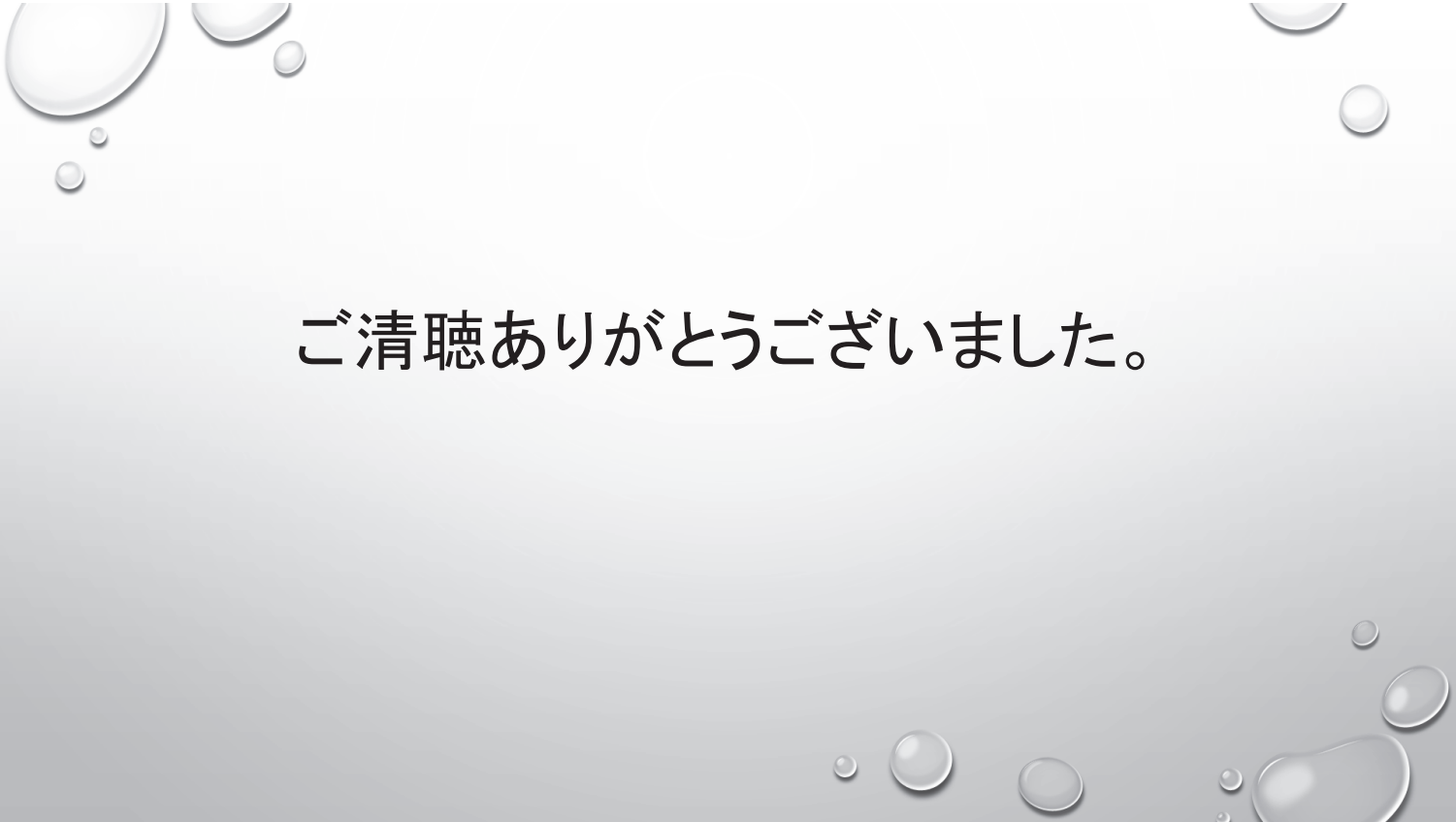
注4: 統計ソフトはユーザーフレンドリーなSPSSを使用。非対面で自宅作業を強いられていた間は、SPSSは高額で買いにくいので学生さんたちは自宅ではSPSSフリー互換ソフトのPSPPを使用していた。

(2)授業にアクティブ・ラーニングの技法を取り入れた目的

- ・もともと前期にある座学の授業の「2」としてはじまった。前期に座学で学んだ知識を、後期では学生さん自身に自分なりに深掘りしてもらいたかった。
- ・社会調査士科目E科目なので、統計分析技術を学んでいただくということも目的。
- ・データ分析の授業では、先生が決めたデータ、先生が決めた課題をやることが多い。やらされている感があって、興味も持ちづらい。
- ・当授業では学生が興味を持っていることをテーマにして、データを選び、仮説を立てる。ひとりひとりが自分が興味を持っているテーマを深掘りできるということに意義がある。
- ・統計分析技術だけでなく、テーマについての知識も深められる。一石二鳥。

(3)アクティブ・ラーニングを取り入れたことによる効果

- ・授業評価でも、「この分野に、より興味を持った」という項目が高くなっていた。計量分析の楽しさを感じてもらえた。
- ・この授業をきっかけに、その後の専門ゼミでも計量分析のゼミを選ぶ学生さんや、テーマを発展させて卒業論文にする学生さんもいる。
- ・自分が興味があるテーマ(例:持ち家と幸福)を掘り進めたことで、将来の仕事につながった学生さんもいる。
- ・大変なので、学生同士でも助け合うのもよい点。(ひとりひとりテーマが違うので人の回答を丸写しするというリスクもない)
- ・お膳立てされた綺麗なデータではないので、データハンドリングの上でも訓練される(欠損値の扱いとか、変数の加工とか試行錯誤しながらやることに)。



ご清聴ありがとうございました。

海外の大学とつないだオンラインコミュニケーション（応用活動）

福田 翔 （教養教育院）

1. 授業概要

2. ALの目的・技法

3. ALの効果

「発展多言語演習中国語」（前・後学期：集中講義）

- ・ **対 象** : 全学部
- ・ **レベル** : 初級～初中級～中級

（中国語の初級の途中の学生・初級の授業を終えた学生）

- 初級の中国語をもとに、**会話力、表現力、読解力**のさらなる向上を目指す。
- **自然な中国語会話**が収録された教材、**中国の文化や社会に関する文章**を利用する。
- 自分で**作文**を書いたり、中国の大学生と**オンラインで会話**をしたりする。

（2021年度授業シラバス「授業のねらいとカリキュラム上の位置付け」より要約）

1. 授業概要

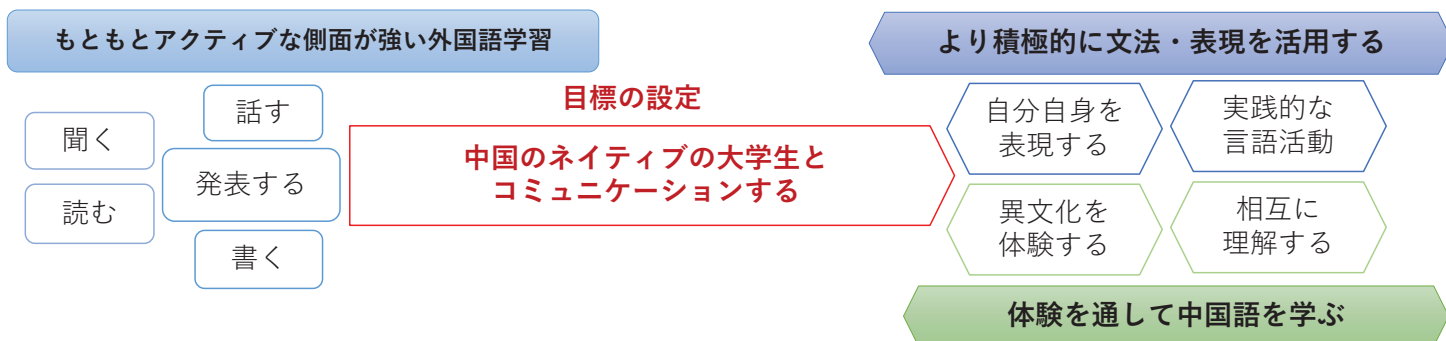
2. ALの目的・技法

3. ALの効果

(1) 授業にアクティブ・ラーニングの技法を取り入れた目的

初修外国語の場合、特に「初級-初中級-中級」レベルの授業では、教員からの一方的な文法事項の解説や単調な発話・対話練習になりやすい¹。

如何にして学生が主体となって、能動的に中国語学習を行えるような仕組みを作るか？



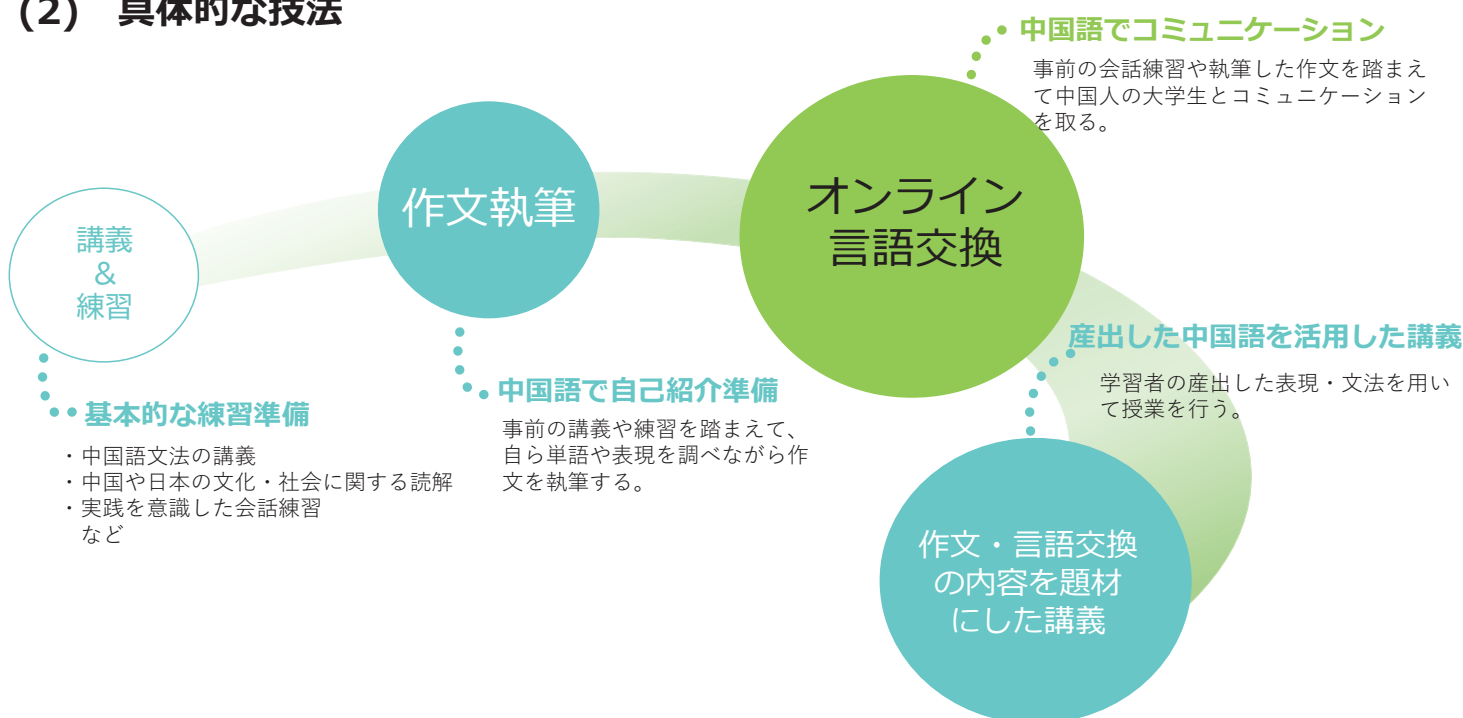
1. 「特に、初習言語の文法の授業では、とすると教員が文法事項の説明をするという一方的な授業になりやすい。学習者が練習問題を解く（知識を再生する）という活動はあるものの、やはり文法知識のインプットを行う要素が強く、文法知識の応用およびそのアウトプットを促すための活動は十分でないように思える。」（近藤他2018:267）

1. 授業概要

2. ALの目的・技法

3. ALの効果

(2) 具体的な技法



3. ALの効果

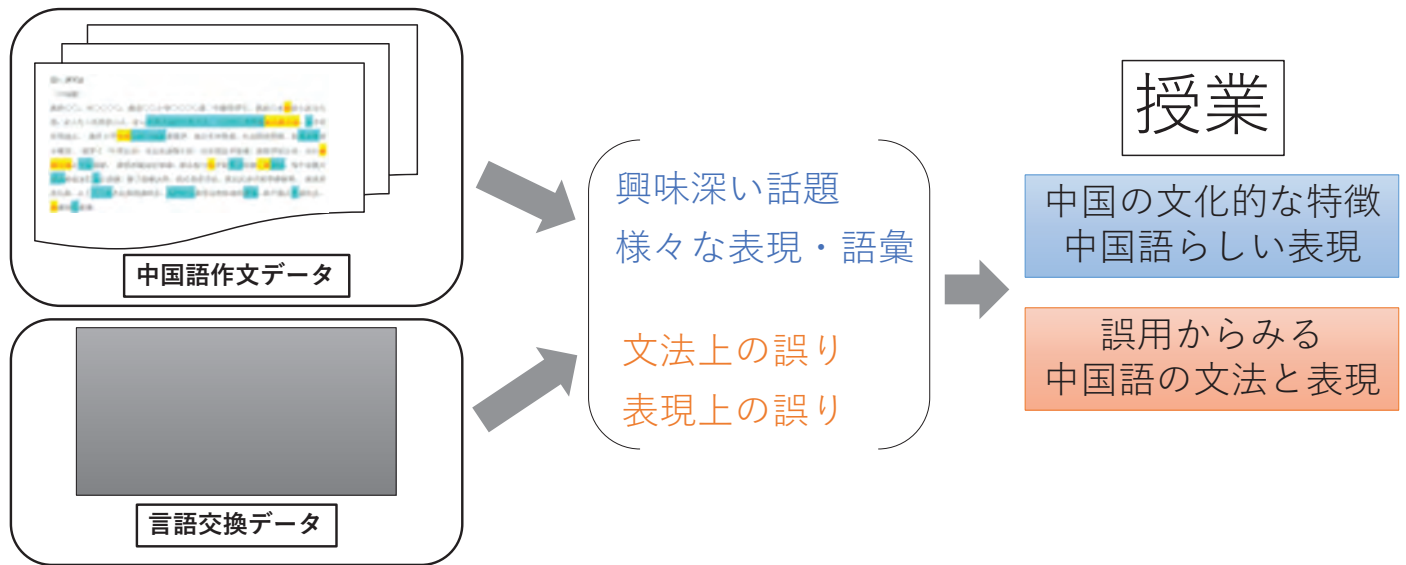
3. ALの効果

1. 授業概要

2. ALの目的・技法

3. ALの効果

言語交換・作文の内容を題材にした中国語の講義



自らが作成し、表現した中国語を題材にして、文法や表現の解説を行うことで、より中国語が身近に感じられ、学習意欲が高められる。

1. 授業概要

2. ALの目的・技法

3. ALの効果

- 単語や文法事項の学習等、単調になりやすい練習も**目的意識をもって**行うことができた。
- 通常の音読・発話・会話練習が**より活発に**できた。
- 表現したい内容のために、自ら単語・文法・表現等を**独自で調べる**ことができた。
- 学生自身での**様々な工夫・発見**が見られた。

1. 授業概要

2. ALの目的・技法

3. ALの効果

自分の意見や考え、好きなものなどについて書くことで中国語をより一層自分のものにすることができたと思います。

後半は書いた作文の内容からは脱線して、中国語の発音や好きな音楽や映画についての話をしていました。そういった日常的な会話の中から中国の文化や日本との相違点を知ることができました。

これまでの授業などでは、インプットする時間はあがるがアウトプットする機会はあまりなかったのですが、この授業ではより中国語が身についた。知らない単語も自分でしっかり調べるので身につくのが普通の授業と比べ速いと感じた。

やはり日本とは違う文化を持っているということを画面越しではあるものの自らのやりとりで知ることができたので達成感でいっぱいでした。

自分が日本語で書きたいと思った語彙と自分の知っている語彙の間にはどうしても大きな差が生まれるので、表現を工夫するのが大変でした。

相手から日本についての質問が来たり、私のほうから相手の学生生活について質問をしたりし、そこから会話を広げることで、非常に活発な会話をすることができました。

海外にも自分が好きな日本の音楽を好きでいてくれる人がいるのかと思うととても嬉しく思うと同時に、インターネットが普及した社会では海外という場所はそう遠くないのだなと実感させられました。

事前に質問を考えてきたことで無言の時間が減ってより有意義な時間になったと思いました。

授業後独自に実施したアンケートから一部抜粋
(アンケート内容は「承諾書」による許可を得て掲載)

ご清聴ありがとうございました

参考文献

Cushing, Sara (2020) Assessment of Writing. In *The Concise Encyclopedia of Applied Linguistics*, edited by Carol A. Chapelle, pp.120-127. UK:Wiley Blackwell.
近藤野里・新居明子・川口裕司・鳥越新太郎・杉山香織 (2018) 「『アクティブ・ラーニングと外国語教育』研究会報告」『名古屋外国語大学論集』2号, pp.267-283.

チャットへの質問・回答

	質問／感想	回答
黒田先生のご発表について	学生のノートの内容をシェアするのも、まなボードというものをを使えばできるのでしょうか。	マナボードは小黒板のようなイメージのアナログのボードです。ノートは写真を取らせて、Moodleで共有しています。
	なるほど、moodleでアップした内容を他の学生も参照できるのですね。	はい。掲示板モジュールを利用しています。
	moodleをクリッカーとして使うときにはどのようにしているか教えてください。	投票モジュールを利用しています。学生さんには、自分のスマホからアクセスしてもらっています。
	黒田先生ご紹介の学生さんのノートは、板書をもとにしたとかではなく、デジタル教材として提供済みのテキストと黒田先生の解説を受けて、図解を入れたものを学生がまとめている、そのまとめ方をいい意味で競い合う、といったアクティブさがあると考えてよいでしょうか。「少し振り返ると、かなりは思い出せる」かどうかは、アクティブラーニングを授業者が設計するために必須のポイントですね。	はい。授業を聞いて（Moodleの説明を読んで）自分で再構成してもらっています。
	黒田実践は、授業者再構成に挑戦させるのがみそですね。そのために学生が内容理解を深めたら、まさにアクティブラーニングの効果。ご紹介いただいたのはよくできた事例のようですが、どの学生さんもだいたい上手にできるものなのでしょうか。再構成しやすさをふまえて、どんなレベルの課題になっているのでしょうか。不評な学生さんが不評する理由は？	すべての学生さんでうまくいっているとは思いますが、他の人のまとめを見ることで、自分のノートのまとめ方が変わってくる学生も結構います。Moodleだとプロフィールから、自分のフォーラムへの投稿だけを時系列で表示することができますので、授業の最初の頃と、最後の頃を比較して見てもらうことで、学び方の変化を感じてもらっています。学習内容的には教職の必修だったり、資格取得に必要な科目ですので、どちらかという記憶中心だとは思いますが、不評な学生の一番の理由は、やはり「恥ずかしい」ということです。ただ、ノート共有の趣旨を何度も話すことや、他の人のノートを見ることを通して、徐々に変わってくるように思います。対面授業のときには、欠席しても、他の人のノートがあるので助かるということもあるようです。
	「不評な学生の一番の理由は、やはり「恥ずかしい」ということです」とのこと。私の場合、手描きのシートにコメントを赤ペンで加え、スキャン、匿名化したうえで全員にムードルで共有。匿名化と励ましや再問いかけ共有目的で、「恥ずかしさ」を越えた意義を感じてもらえればと。。。効果はどうか。少なくともやめてほしいとの反応はありません。	自分の発言に責任を持ってもらうことも大切だと思い、あえて匿名掲示板ではなく、普通の掲示板を利用しています。やめてほしいまでの反応はありません。
松田先生のご発表について	高校までの数学で経験済みだが、十分理解できていなかったが、松田先生の授業で数学の考え方もよくわかった、数学を使う意義も実感できた、といった脳内のアクティブ化が生じているといいですね。そういう検討は可能でしょうか。あるいは、経験済みないかほとんど覚えていない状況だとすると、上のようにはなかなかいかないですね。	数学に苦手意識を抱いている学生にも数学的解析の重要性やシンプルな数式で生命現象を再現できることなど興味を抱かせるような授業の工夫は可能だと思います。
	松田先生、パワポやめて、たぶん、板書にしたのだと思いますが、どのような効果があったか教えてください。経済学部での必要な数学を高校までに十分に身につけずに入学してくる学生が多く、先生と似た問題に直面していると感じています。基本的な数学を教えるには、ゆっくり何回も教えるしかないと思っていますが、それをする必要な範囲がおしえられなくなります。先生はどのように対処してますか。	覚えていないというのは問題ですが、少し振り返ると、かなりは思い出せるのではないのでしょうか。知識の見方を変えたり、他領域での活用を知ること、知識の再構成が起きると思います。
大路先生のご発表について	大路実践では「アクティブラーニングをあまり考えていない」とのことですが、実際に学生さん（学習者）がアクティブになっているのかわかるか、大事ですね。ハイテク、ローテクいずれにおいても、授業者によって学習者がいかにブレイズオンになっているのか、そこが評価ポイント。学生さんたちの脳内は、どうなっているのでしょうか？	ALをあまり考えていないというか、ALを意識して準備しなくても、AL的になっていることが大事だと思います。まさにブレイズオンをいかに構築するかに注力しています。
	「ALを意識して準備しなくても、AL的になっていることが大事」（大路先生）というのは、学習者の脳内をあたり前に意識して授業づくりを深めるという基本の再確認ですね！ ありがとうございます。	

桶本先生のご発表について	桶本実践の実践例は、看護師さんの卵にとって効果的だと思えますね。どんな予備知識がある段階で、この実践課題に取り組むのでしょうか？ 個人的な興味ですが、私もこの課題の予備知識に興味あります。	看護学科では、1年生で一般教養の他、看護の基礎となる（すべての領域で共通基礎知識として必要となる）看護対象論や看護方法論等を学び、2年生で様々な領域の診断・治療学の他、成人看護学、老年や精神、母性、小児領域における看護の総論・概論を学んでいます。 ご提示した実践例は、2年生での学習がもうすぐ終了する時点、2年生までの学習がほぼ済んだ時点でのものです。 小児領域に限定するならば、小児医療領域でみられる代表的な疾患の診断や治療についての学習、小児看護における対象者の特徴（小児の成長発達過程、各発達段階の特徴、現代社会における小児・家族の特徴など）、小児の身体状況をアセスメントするための知識・技術、症状を有する小児の看護などを学んだ上での実践例となります。 ちなみに、本実践例提示以降、次の学年で小児看護の各論（アレルギー疾患や心疾患、染色体異常、神経疾患など、様々な疾患・治療に特有の看護について）を学び、更に次の学年で実際の臨床現場で実習を行っています。
「大西先生について	富山の地域づくりを受けた学生さんから、その経験を聞くことができました。興味深い体験だったようでした。一方で気になるのは、行政施策に沿って素直に考えてしまう面も強いようでしたが、ぶっ飛んだ発想が現状打開のためのパワー（批判精神を忘れない粘り強い建設性）を指向するものとしたら、とっても素晴らしいと感じてしまいました。学生さんたちの実際、もっともっと私も学びたいと思いました。	
奥先生のご発表について	奥先生の芸文での実践、ワークをやるのは授業時間中でしょうか。授業時間前後の時間外の取り組みをうながす要素はあるのでしょうか。着々と技法を体験して、身につけられるようになっているようですね。 「授業時間中に行う部分と宿題として次の週までに行う部分があります。授業内でも手を動かす時間があると理解が定着」←いいですね。追いつけたり、再発見があったり、ブレインズオンになるためにも、時間内にも手を動かす！！	ワークには授業時間中に行う部分と宿題として次の週までに行う部分があります。授業内でも手を動かす時間があると理解が定着するように思います。段階的に課題を進めていく作りになっているので、授業時間外学習にもそれなりに効果があるものと思います。
「新田先生について	薬学部の実践、きっといろいろな授業への取り組みへの積極性をもたらしているのではないのでしょうか。しかしながらなぜゆえ「しよせん薬剤師は。。。」といった意識が生じてしまっているのでしょうか。ほかの学部においても、多かれ少なかれありえる問題かもしれません。薬学部のそうなる原因に関して、ヒントなりがあれば幸いです。共通教育の際にも、職業専門、市民性教育両面から動機づけアップのために活用したいと存じました。	医師が処方しないと薬剤師は調剤ができないという思いが強いと思います。しかし、医療現場に行ってみると、「今日、薬剤師さんいないなら、カンファできない」と、チームリーダーの医師がいたりします。自分がどれほど社会に貢献できるのかを早い時期に認識させることは大事だと思いますし、どうすれば頼られる人材になれるのかを早い時期に感じさせたいと思っています。
中村先生のご発表について	中村実践の肝心なところを聞き逃してしまいました。すいませんが、教えていただけましたら幸いです。データセットとテーマとが組み合わさった課題のようなものを学生さんが選べるようになっているのでしょうか。それとも、テーマにあわせたデータを学生さんたちが自分で集めていくようになっているのでしょうか。全体のコマ数と進行のイメージを教えてくださいましたら幸いです。	データは基本となるデータ（わりと広い幅の内容を聞いている調査データ）を提示します。さらに、それ以外のテーマを学びたい人には、データアーカイブのサイトの検索の仕方を教えて、あてはまるデータを選んでもらいます。データの見つけ方がわからない学生は私が支援します。ほとんどの学生さんは最初に提示した基本的なデータを使われます。 でも、学生さんが選択できるようにしています。コマ数と進行のイメージは15コマです。最初に2-3週間授業をやって、そのあと演習の時間を数週間+アルファずつ設けます。
	15コマ使ってじっくり進めていくのでしょうか。少ないコマ数でも応用可能なやり方の方ですね。	

福田先生のご発表について	教養教育の福田先生に質問です。 中国側の参加者はどのように確保されましたでしょうか。 私の朝鮮語の場合こちらの学生はあまり外国語の表現力が 高くないので相手にしてもらえない対話者を見つけるのが困 難ですが、日本語の学習者なののでしょうか。先方の学生は この対話に参加することで何か得るものはあるのでしょうか。	中国側の参加者は、中国の大学の先生にお願いして、学生 の参加者を募ってもらっております。中国側の学生は、 （専門とは限りませんが）日本語も勉強しております。そ のため、言語交換では「半分は中国語のみで会話、もう半 分は日本語のみで会話」としているため、中国側の参加者 にも学習上のメリットがあります。また、中国側の学生に も日本語で作文を書いてもらい、教員側で添削・コメント をつけて返却しており、できる限り参加学生には、教育で お返しができるようにと考えております。
	福田実践の「少し高いレベル」というのがポイントです ね。ピゴツキーによる発達最近接領域理論とも重なりま す。その際、相手側の中国人学生さんには、授業者からど んなはたらきかけを事前にされているのでしょうか？	そうですね。「少し高いレベル」というのを常に意識し ております。ただ、そのレベルを見極めることが難しいこ とも多々あり、まだまだ手探りの状況です。中国側の学生 には、こちらの学生の中国語のレベルを事前にお伝えし （また、こちらは中国側の学生の日本語能力を事前に聞い ておき）、たとえば初級のレベルの学生には、「できる限 りゆっくり話をして、分からないときは文字で書く （チャット機能等利用）等してください」というようにお 願いしています。学生同士もはじめは戸惑いもあるよう ですが、それにも徐々に慣れていき、相手のレベルにあわせ て母語を話すことができるようになるのを見て、こちらが 感心させられることも多々あります。
AL全般について	参加されている先生方へ ①AL導入にあたり、今までの授業にプラスして行くとこれ まで以上に課題に時間がかかって、充実したキャンパスラ イフを送れなくなってしまうと思います。ぜひ導入の際は 授業や課題にかけける時間も考慮していただきたいと思い ます。 ②学生の授業に対する熱量は人それぞれです。グループ ディスカッションを行うとグループ人数が多ければ多いほ どどうしても特定の受講者に負担がかかってしまうと思 います。そのため私は学生の熱量の底上げが大切だと考えま す。先生方にはALをなぜ行うべきなのか個人的な考えを最 初に伝えていただければと思います。目的を理解すること でやる気も出ます。 私個人の意見ですが、ALは大学にかぎらず社会に出た時 に必要になってくるであろう対話する力、ひいては人間力 の醸成に不可欠だと思います。このことを学生が広く理 解すれば熱量の底上げ、ALのレベルアップにつながると思 います。 コロナ禍で通常の業務や研究もお忙しいと思いますが、ぜ ひ学生の将来につながるALの積極的な導入をお願いしたい と思います。 学生としてUD Matesなどを通してできる限り協力させて いただきます。	司会を務めた谷井より回答します。 貴重な意見を書き込んでいただき、ありがとうございます です。 教育は教員と学生が作り上げるもので、教員側の一方的 な思いだけで受け取り手である学生が応答しないと教育本 来の価値を高めることはできません。学生からの意見を大 事にしたいと思います。 ①について 昨年度遠隔授業を余儀なくされたことで、課題学習という 方法を取らざるを得ないと考えた教員がいました。そのこ と自体悪いことではないのですが、学生から課題が多くて 大変だったという声が届いています。今年度は修正され ることと思います。ALにも様々な技法があり、授業外学習 が増えるものばかりではありません。多くは授業の中で 行う双方向的な技法です。ALが広く取り入れられると、学 生にとって授業に緊張感をもって楽しく取り組むことが できると思います。きつめに感じた課題は後で振り返ると役 に立っていることがわかると思います。 ②について グループディスカッションの問題点を指摘していただき、 ありがとうございます。ファシリテーター役の教員の技 量を上げていくしかありません。研修会を行うなど対策を考 えていきます。

全学FD2021 参加者アンケート

全学FD・教育評価専門会議

本日は、全学FD2021に御出席いただき、ありがとうございます。今後の企画の一層の充実を図るため、アンケートに御協力をお願いいたします。

1. 属性を選んでください。

ア. 教員 イ. 職員 ウ. 学生

2. 所属を選んでください。（1で「職員」を選んだ場合は回答不要）

（1で「教員」を選んだ場合）

ア. 人文科学系 イ. 教育学系 ウ. 社会科学系 エ. 芸術文化学系
オ. 教養教育学系 カ. 理学系 キ. 都市デザイン学系 ク. 工学系
ケ. 医学系 コ. 薬学・和漢系 サ. 教育研究推進系
シ. 非常勤講師（教科をご記入ください _____）
ス. その他（ ）

（1で「学生」を選んだ場合）

ア. 人文学部 イ. 人間発達科学部 ウ. 経済学部 エ. 理学部
オ. 医学部 カ. 薬学部 キ. 工学部 ク. 芸術文化学部
ケ. 都市デザイン学部 コ. 大学院生

3. 開催時期について、どう思いますか。

ア. 適当である イ. 変えたほうがよい（時期： ）

4. 全学FD2021に参加しての評価を次の中から選んでください。

ア. とても意義があった イ. おおむね意義があった
ウ. どちらとも言えない エ. あまり意義がなかった
オ. 意義がなかった

5. アクティブ・ラーニング技法の中で、今後ご自身の授業の中に取り入れてみたいと考えたもの、興味を持ったものを選んでください。（複数回答可）（※学生の場合は、今後受けてみたいと考えたもの、興味を持ったものを回答）

【本日紹介した技法 ア～コ】

ア. 小テストによる理解度把握とフィードバック（形成的小テスト）

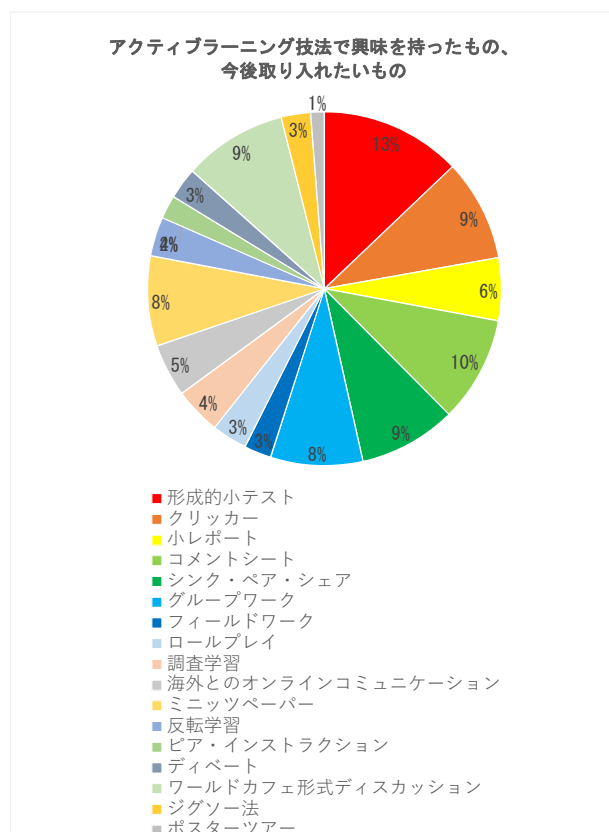
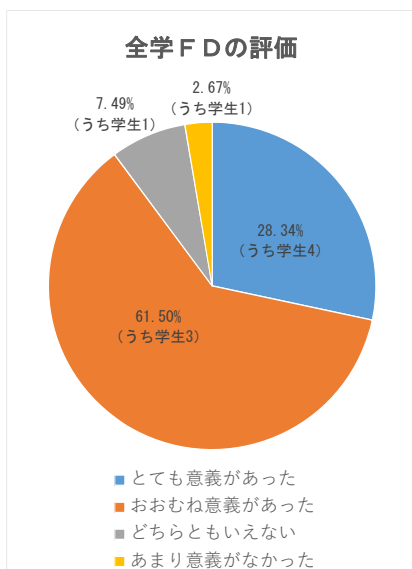
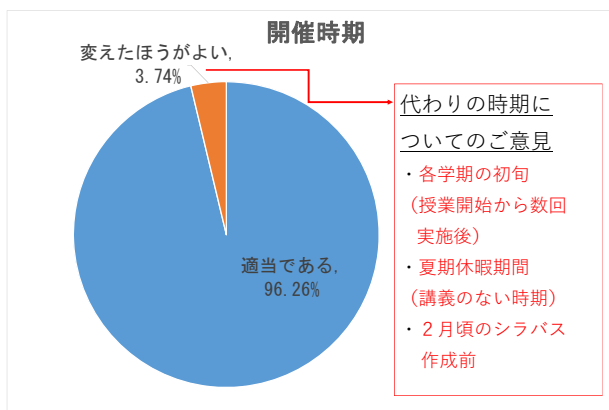
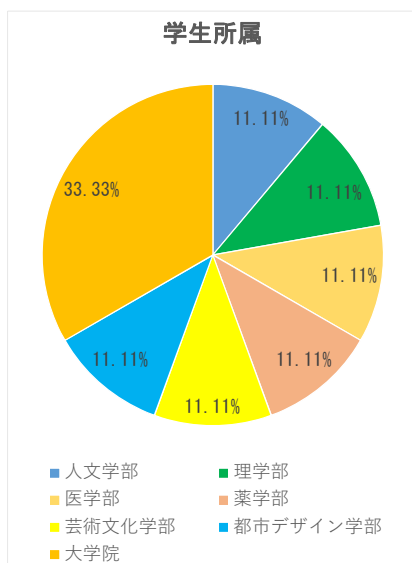
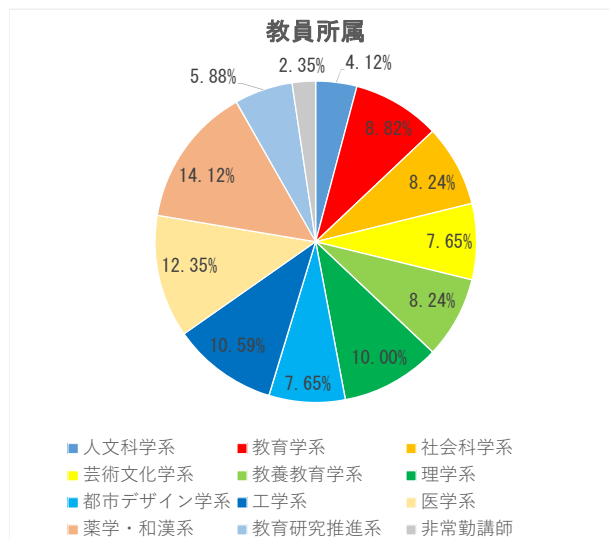
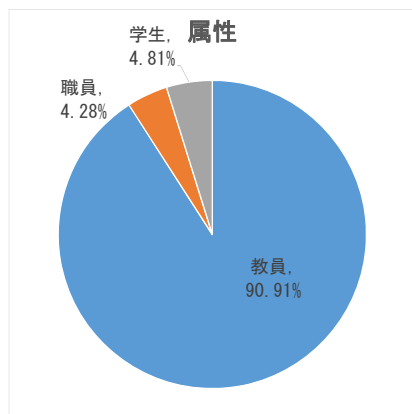
- イ. Moodleの投票機能を利用したクリッカー
- ウ. 小レポート
- エ. コメントシート
- オ. シンク・ペア・シェア（課題に対し個人で考えた後、ペアで共有・議論し、さらに大きなグループで共有する）
- カ. グループ発表・グループディスカッション・グループワーク
- キ. フィールドワーク
- ク. ロールプレイ・ケーススタディ
- ケ. 調査学習
- コ. 海外の大学とつないだオンラインコミュニケーション

【本日紹介しなかった技法 サ～チ】

- サ. ミニッツペーパー（授業で配付し、疑問点・理解度等を簡単に記入する用紙）
- シ. 反転学習
- ス. ピア・インストラクション（課題に対し解答に至るまでのプロセスや根拠をグループ内で教え合う）
- セ. ディベート
- ソ. ワールドカフェ形式ディスカッション（グループ間を移動しながらディスカッションしていき、最後に全体で情報を共有する）
- タ. ジグソー法（グループ内で1つのテーマを分割し、それぞれが内容について勉強したのち、学んだ内容を持ち寄り、協力して答えを導き出す）
- チ. ポスターツアー（グループで課題についてのポスターを作成したのち、グループを再編成し、全てのグループのポスターをまわる）

6. 本日の全学FDについて、ご意見・ご感想を自由にご記入ください。
7. 今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、ご記入ください。
8. 今後、より多くの教員・職員・学生に、全学FD研修会に参加していただくために良い考えがあればご記入ください。

全学FD2021 参加者アンケート結果



設問6 本日の全学FDについてのご意見・ご感想

—肯定的な意見—

- ・次の会議出席のため少し早めに退席させていただきましたが、勉強になりました。
- ・多様な教育手法を学ぶことができてよかった。
- ・参考になりました。
- ・想像よりも良かったです。さまざまな取組をされていることがわかり、勉強になりました。
- ・皆さんが大変工夫されて授業を行っていることを知って刺激になった。また、多くの学部から300名近くの参加があり、オンラインの威力をあらためて感じた（以前のFDではこんなに参加しなかったように思います）。
- ・薬学の話は新鮮で面白かった。
- ・学生達の知的好奇心を刺激し、主体的に学ぶ場をいかに作り出していくのか、実践されている先生方のご発表を拝聴し、とても勉強になりました。講義内容を考える際に参照できるように、本日の資料を見返す事ができればと思います。
- ・とても有意義でした。
- ・私は語学を教えていますので、コロナ禍でのアクティブラーニングは正直厳しいです。福田先生の海外の大学と、というのはできたらとても素晴らしいと感じました。マスクは取れるし、一対一だし、何より緊張感と喜びが百倍です。入門では難しいですが、能動的になれる方法を探っていきたいし、またアイディアを各方面からいただければと思います。
- ・大変参考になりました。次回の企画が楽しみです。
- ・zoomによる開催方法でよかった。
- ・本日発表された先生方が、様々な手法で学生の学習意欲を刺激し、その反応を授業にフィードバックされていることに感銘を受けました。
- ・非常勤は孤独な稼業でございますので、お誘いにまず感謝を申し上げます。alの展開と技法に、新たな知見も多く、大変有意義で今後試みたいものがありました。しかし、開催のご連絡を今少し早めにいただけますとスケジュール調整がさらにスムーズだったと存じます。しかしリマインドメールがございましたので助かりました。
- ・各先生方のご努力、工夫がわかり大変勉強になりました。
- ・事例紹介いただきました先生方のどの取り組みにも重要なエッセンスが感じられ、とても充実した研修会だったと思います。特に、看護の先生のお話の中で「過去のFDで紹介された手法を取り入れた」といったお話もあり、FDでの活動が活かされている部分も含め、先生方の授業の実践の様子が窺えて良かったと思います。
- ・駆け足であったのは事実かもしれないが、各部局で実践を行なっている内容を共有していただけたのはとても興味深かったです。全部局から選定している点が、極めて重要だと思います。
- ・様々な学部等の特性も踏まえた発表はとても参考になった。
- ・他学部の様子を伺いしれたのはよかった。専門が異なるとそれぞれ異なる手法、また共通

な手法もあると感じた。ちなみに、そもそも芸文では、作品やアイデアや設計を教えるので、アクティブラーニングは昔から進んでいると思います。

- ・他分野の取り組みが聞けたので、有意義でした。
- ・先生方の実践方法を拝聴し、大変勉強になりました。
- ・本FDを通してアクティブ・ラーニングが特別な取り組みではなく、様々な工夫で実施可能であり、また実際に行われていることを認識したことで、教育改善への理解が深まりました。引続きこのような取り組みを実施していただければ幸いです。
- ・限られた時間であったが、さまざまな事例が知れて有意義だった。
- ・授業改善に役に立ちそうな内容であった。
- ・部局ごとの取り組みが分かって興味深かった。年に一度、このような形で実施してほしい。
- ・色々な取り組み方を知ることができて良かった。今後の参考にしたい。
- ・各学部それぞれのお立場からの取り組みを聴くことができて良かったです。
- ・途中から別のWeb会議があったので、最後まで聞けなかった。熱意ある先生方の素晴らしい講義が知れて大変勉強になった。
- ・多種多様な事例を紹介いただき、大変参考になった。ご報告いただき、ありがとうございました。
- ・ご紹介いただいたALを取り入れる際のテクニカルな部分の解説をサイボウズなどで共有していただけたらと思います。
- ・勉強になりました。
- ・他学部の教員のさまざまな授業に関わる取り組みを知ることができてよかった。
- ・このような会を設けてもらうのは大変意義深いですし、嬉しいです。
- ・アクティブラーニングにはたくさんの手法が存在することを知り、自身の学習に生かせる良いご講演でした。(学生)
- ・アクティブ・ラーニング=グループワークだと思っていましたが、考えを改められました。様々な観点からの取り組みを知れ、他学部の様子も少し見えたので面白かったです。(学生)
- ・アクティブラーニングを意識していなくても、気づいたらアクティブラーニングをやっていることもあるんだな、と思いました。先生方は学生の学力を高めようと色々工夫していることがわかりました。私の個人的な、学生としての立場からの意見なのですが、グループワークは、同じグループの学生の資質や能力、やる気によって学習の質が変わったり、真面目な学生にとってはストレスが大きくなるのが課題だと思います。同じグループの学生が真面目で、自分と同じくらいか自分より高い能力があつてやる気もある場合は、自分の物理的(実際に手を動かして課題を進める)負担も心理的(自分がバリバリ頑張らないと終わらないかもしれないという不安、心配)負担も少なく済み、このグループのメンバーとなら、安心して頑張れる！と思えます。しかし、授業時間中にグループで作業を進めないといけないのに同じグループの学生が授業を欠席したり、グループで話

し合う時に意見を出してくれない人ばかりだと、真面目な学生ほどなんとかしなければと頑張ってしまう、割りを食うことになるのです。大学での自分の経験では、1年生の色々な学部の学生が混じって講義を受ける教養科目で、各学部1名くらいずつでグループを組んで話し合うことがあったのですが、自発的に意見を言ってくれる人が全然いなくて、なんか私が司会をやる流れになってしまい、嫌でした。偏見と個人的経験に基づくと、薬学科の学生のみか、医学科の学生が3分の1くらいの割合で混じっている他学部混合のグループだとグループワークに心地よく取り組みました(私は薬学科です)。それと、グループが大きくなり過ぎると他人任せの学生が出てくるので、4人くらいまでがちょうどいいと思います。(学生)

—建設的な意見—

○時間配分について

- ・慌ただしかった。
- ・30分ほどの質疑応答の時間を入れて、2時間の開催でも良いのではないかと思った。
- ・もう少し少数の方に掘り下げたお話しを、時間をかけてしていただいてもよかったかもしれません。
- ・時間が少し足りないと思いました。
- ・それぞれの発表者の伝えたいことが多く、時間が足りなかったように感じました。
- ・質疑応答の時間があればより良かったと思います。
- ・たくさんの先生方のお話を聞いたのは良かったです、相当駆け足な感じだったので、もう少しゆっくり聞きたかったです。
- ・もう少し発表者数を少なくして、それぞれのお話を丁寧にお聞きしたいと思いました。
- ・辛口になります。アクティブラーニングの研修であるはずのこの研修会が全然アクティブラーニングになっていませんでした。全学部から1人ずつ出す必要はなく、3人程度の事例でひとりの持ち時間を長くし、発表内容を濃くすべきです。それとせつかくZoomでやるなら双方向の質疑応答の時間は保障してください。今日の内容ならYoutubeのライブ配信レベルです。
- ・発表時間が守られていないのが残念でした。長々と話す人がいる一方で、短く切り上げざるを得ない人もいました。タイムキーパーを設けるなどして、司会がしっかり仕切るようお願いいたします。
- ・質疑応答時間がなくなったのが少々残念でした。
- ・盛りだくさんでした。発表者数を少し絞って質疑応答があってもよかったかなと思います。
- ・質疑応答またはグループ討議時間を確保した方がよい。
- ・質疑応答の時間が足りないのが、残念だった。アクティブラーニングの浸透を阻む壁が何なのか、課題について共有したかった。例えば、学生も教員も忙しい。カリキュラムのス

- ・リム化，コアカリキュラム化，15週担当から部分担当化などが必要・・・とか。
- ・時間が短く早口でわかりにくい。それなら複数日としても良かったと思います。
- ・90分という時間に対しては発表者が多すぎた。全分野からの発表という目論見だと想像するが，どの発表者も「時間がないので」とおっしゃっていて，聞いている方も慌ただしく，消化不良感が残った。
- ・スケジュールが過密過ぎるように思いました。
- ・質疑応答の時間が無く，残念でした。
- ・有意義な内容であったが，時間がタイトだった。(学生)

○内容について

- ・内容はもっと具体的でもいいように感じました。例えば，moodle を活用したアクティブラーニング，地域人材を活用したアクティブラーニングのようなテーマです。内容を絞って頂いたことで，発表者同士の議論も質問もできるように感じました。
- ・通常の，基本的な知識を教え理解させる授業では，取り入れるのが難しい事例が多かった様に思います。そのような座学の授業は，何コマかイベント的にグループワークを取り入れる時間を割くように，方針転換する必要があるかも知れませんね。
- ・科目（分野）によってはアクティブラーニングの技法が適さないケースもありうると思います。そういった「失敗事例」の共有も，もしかしたら役に立つのかもしれないな，と感じました。
- ・高校等で行われているような「研究授業」のような方法で，実際に講義を体験（または参観）してみることもオンラインであれば実現し，学べることが多いかもしれません。教室で行われている講義の実況中継でも，Zoomを用いた形でも…。
- ・アクティブラーニングの階層について理解が深まるとよかったかと思います。
- ・学部独自のものは参考にしようがない。
- ・発表者が多すぎたと思う。演習のアクティブラーニングではなく，講義のアクティブラーニングに焦点をあてて欲しかった。
- ・一回のFDで多くの人に報告してもらうより，分野ごとに具体的事例をしっかりと話してもらうほうがよいように感じた。
- ・もともとALな（実習や調査などが含まれる）授業，決まった正解がない授業，の紹介であったと思います。また，どのように学生を評価するのが難しい気がします。
- ・理系の授業で取り入れられそうもないお話も多かったですが，参考にしたいと思うものもありました。できればタイムスケジュールがはっきりしていると参考になりそうな部分だけ聞くことが容易で助かります。
- ・ディスカッション形式を取り入れて欲しい。(学生)

—その他—

- ・学生の参加が少なかったように思うが、教員と一緒にではハードルが高いと思う。同じ内容で良いので、学生限定で開催すると良いのではないかな。
- ・今回のご発表の中でも、さらに深く(一人もしくは二人各 20-30 分程度)お伺いする機会があればと思う。
- ・あまり参考にはならなかった。
- ・どこかで、今日のパワポデータが見れるようにして頂けると嬉しいです。
- ・参加者が少なくておどろいた。Zoom の限度が 300 なので足りないかと思っていたが接続者が 300 だった。少なくとも教員の参加は義務づけた方がよいと思う。
- ・スライドのページ送りが共有されなかった発表があり残念だった。
- ・今回、各部局から選定された講師はどのような基準で選出されたのか、あるいは「この発表の中ではアクティブラーニングの技法の中でこれを取り入れている」ということを事前に(もしくは各プレゼンの冒頭に)示していただけると、聞く側もどのような内容に焦点をおくかが判断しやすいかもしれません。
- ・Adobe Reader で表示した PDF を画面共有しながら説明する、というのは限界があると思います。
- ・チャット欄を使用してのディスカッションは混乱しやすく(単一の教員による連投など)、参加人数が多いことから双方向ではなく「質問は受け付けて、別途(報告書などで)回答を行う」という最後にお示しいただいたスタンスが良いかもしれません。
- ・教室で受講生全員が Moodle につないだときに、教室の無線 LAN の許容数を超えるのではないかな? (例えば Moodle の投票機能を使う場合) 学生から「繋がらない」という不満が出る可能性。
- ・講演で、Moodle に写真を共有してといった事例の紹介があったが、Moodle 上のファイルサイズの許容値は緩和されているのか。昨年度はかなり厳しく制限されていて、今年度も特に緩和された通知がないので、Moodle に画像ファイルなどをたくさん置くことが可能になっているのかどうか知りたい。
- ・学生の意見を聞くことができれば良かったと思います。
- ・5 は必須とのことですが、とくに取り入れたいものはありません。
- ・総合情報基盤センターでの実践的研修が企画されるとよい。
- ・アクティブラーニングは、教員側の負担が増す一方で学生の学びは表面的になりがちのようにも思えた。5. の質問の回答選択肢に「特にない」「その他」がないのはどうかと思います。
- ・学生のモチベーションを上げることから始めなければならないことが重要と思う。
- ・富山大学として、アクティブ・ラーニングのあり方が不明瞭であり、温度差を感じます。
- ・全学部の先生のお話を伺うことができ、今の「アクティブラーニング」のイメージがやはり文系や芸術・デザイン系のものだという認識がより一層強まった。資格などの関係で講

義, 実習とも教育内容が厳しく規定されていて学生数も多い理系では, 楽しいグループワークに割ける授業時間が全くない。ただ理系では講義中の例題演習がすでにアクティブラーニングであるとみることもできる。

- 書画カメラで教員のミスの例が出されていましたが, ヒトの温かみはたしかに必要で, デジタル化の流れの中で少し忘れかけていることを思い出したような気がします。
- 関西出身の先生のつかみが大事, という一言が印象的でした。まさにその通りだと思います。
- 数学の知識を与えてその知識を用いて工学上の問題を数学的に扱うための基礎として数学の授業を担当していますが, 学生の個人差が大きすぎて困っています。どうしても, (高校での学びにも差がすでに生じているためか, また予習を義務付けてもちゃんと予習してこないとかの理由などで) 理解の遅い学生に授業ペースを合わせてしまいがちになります。しかし, このことで時間を取られてしまい, 教えたいと思っている学術的内容の量が制限されて, 高度な教材をパスしてしまい, 出来る学生に高度な学習の機会を与えないまま授業が終わってしまい申し訳なさを感じています。アクティブラーニングがすべて解決できると思いませんが, 知識や数式中心の授業で, 学生間の格差を認め, 学生の能力に応じて指導できるようなAL手法がありますでしょうか? 授業準備にかけることのできる教員の時間も他の業務との関連で制限されていることも加味してご教示いただけると有難いです。
- 配布資料があると理解しやすい。(学生)
- もっと学生を増やしてほしい。(学生)

設問7 今後, 全学FDで取り上げてほしいテーマ

- 授業評価の在り方
- 中間管理職の苦悩
- 好かれる先生になるには?
- 情報の入手方法をいろんな分野の先生方から紹介してもらいたい。
- 文学作品の講読のような, どうしても和訳・古典的な授業方法に偏りがちな授業におけるアクティブラーニングの実践について
- 授業満足度を上げる方法
- 今, 検討が進められている授業成果の可視化について聞きたい。可視化をする意義, 可視化をすることで学生指導に与える効果, 可視化の方法等。また, 現在進められている可視化では 5 つの目標を設定し, 達成度が正五角形になるように授業ごとの重み付けを行おうとしているが, 正五角形になることにどんな意味があるのかわからない。以上のような内容を他大学での事例をもとに聞きたい(都市デザイン学部は昨年発表があったし, その他学部はまだ行っていないから)。
- 大学の施設紹介と利用実践

- ・富山大学では、遠隔授業に zoom を使っています。県内の小学校では Microsoft teams を使っているようです。新入生が取り組みやすいアプリケーションで授業を行える方が良いように思いますので、富山大学では今後どのような展望をお持ちか知りたいです。
- ・知識や数式中心の授業で学生間の格差に寄り添った授業指導のあり方
- ・雑な申し上げ方ですが、フィードバックの技法と展開。また、その一環としての論述的な課題の採点方法、フィードバック、そして、評価の公平性をどう担保するかという問題は、今後の季節、悩ましいところです。その辺りの先生方の取り組みのあり方など、知りたくもあり、一つの全学的なシステムを構築していただくとありがたく存じます。
- ・「学生の授業満足度」と実際の成績（GPA）との関係、部局間比較（理系 vs 文系）など、授業満足度について総合的な解析を紹介して欲しい（満足度の高い事例紹介ではなく、全体像把握が目的）。
- ・授業における著作物の利用方法や注意点
- ・教養教育
- ・成績評価の厳格化
- ・ペアやグループでの活動に参加できない学生がいる場合の対処。もっと大人数の講義での工夫。
- ・分野によって仕事の指針が全く異なります。そこで、教員の有意義な時間の使い方を分析すれば、今後の教育・研究の参考になると思います。
- ・さまざまな講義形態を受講した学生の意見をもっと聞く機会があればよいと思います。
- ・オンライン講義の上手なやり方
- ・学際的な PBL 学習
- ・本学ではデータサイエンスを全学必修としているのだから相応の知識と技術を全学の教員が持っているべきなので、データサイエンスについて教員がきちんと学ぶ機会を FD として作って欲しい。
- ・学生発案授業
- ・国際化
- ・学生も参加させた「学生・教員意見交換会」
- ・学生からの教員評価はどのようになっているのか？自分は評価されているのかよくわからない。
- ・どの様な取り組みでも良いのですが、全学を結ぶせつかくの企画なので、ブレイキングルームなどを用いて異なるキャンパスの人間を話し合わせる/ディベートさせる事が面白いのではないかと思います。異なる価値観の意見、新しい出会い、間接的にもかもしれません。Web 上のフィルターバブルに包まれ、同じ考え方の人間が集まりやすい時代です。何かを生むには起爆薬が必要かと思っています。「面白い大学」を謳ってますしね。
- ・チームティーチング（単なるオムニバス式でないもの）。教育技法を共有化し、教科集団

の資産としてゆくような取り組みが本学には必要である。

- ・発表者のお一人（確か、理学部の松田先生）が、今回の発表は、成績上位者に対する対応ではなく、下位者の救済策というようなことをおっしゃっていた。学生の多様化への対応という場合、従来の授業ではついていけない層への手当が中心になるのは当然のこととは思っているものの、そちらにばかり重点をかけると、成績上位者にとっては退屈な授業になってしまう恐れがある。この問題への対応も考えてみる必要があると思う。
- ・理系の授業改善
- ・アクティブラーニング 反転学修
- ・例えば、オンデマンド方式のレポート採点の評価など、moodle 上で、ワンクリックで偏差値曲線（得点分布）が表示されるシステムなど。既に取り入れている大学もあると存じます。a1 の取り組みの事後処理？のスピードアップと公平さの担保をどのようになさっているか。どのような形で a1 を導入しても、最終的には評価がついて回るので、その工夫を知りたく存じます。
- ・AL 技法の各論。もう少し活用事例を知りたい。（学生）

設問 8 今後、より多くの教員・職員・学生に、全学FD研修会に参加していただくために良い考えがあればご記入ください。

—周知方法について—

- ・授業内で学生に呼びかける。
- ・告知が不十分では。ポスターなどをもっと目立つように掲示したらと思います。
- ・学生については教員側からアナウンスをもっと行うことが必要ではないか。
- ・粘り強い広報活動を続けていただく、というのが近道かもしれません。今後ともご尽力のほどを、よろしくお願いいたします。
- ・FDに参加する意義を更に明確にする。
- ・学生はFDという単語に慣れておらぬようです。
- ・「教員も参加するアクティブ・ラーニングの研修会」という内容から少し堅苦しそうなイメージを持ったが、実際は違った。学生に参加してもらうためには「気軽に参加できる」という雰囲気を出せば良いのではないかと思う。（学生）
- ・授業を担当していらっしゃる教員の方々に、授業内で宣伝していただく。（学生）

—開催方法について—

- ・オンラインでの開催は時間の制約の負担が軽減されるので、メリットが大きいと思います。ただ、講義がある時間帯に実施すると講義のために参加できない教員・学生も出ますので、この時間帯は休講にするなどの対処が必要かと思います。
- ・教員に対しては、学部毎に適当な部屋を決めてそこに集めてFD研修を行う等。
- ・zoom 開催、質疑の時間の余裕があるとよいかと思います。

- ・今回のような ZOOM 形式の方が参加しやすいと思う。
- ・できれば対面で行った方がよい。
- ・オンライン形式が良いと思う。
- ・今回のような形は参加しやすくて良いと感じました。
- ・Zoom の参加人数を見てもオンライン開催の形式は全学の FD などでは非常に有効ではないか。コロナ後もこの形態が良いと思う。
- ・オンタイムはなかなか参加率アップにならないと思われる。オンデマンドも検討してください。
- ・今回、300 名近い参加者があったのは、オンライン開催だったからだと思う。オンライン開催、あるいは会場とオンラインのハイブリッド開催は多くの参加者を集めるのに適しているのではないか。
- ・オンラインは参加しやすいと思う。

—開催日時・開催後の動画公開等について—

- ・アーカイブにして保存。レポートの書き方の動画のように。
- ・週末の空いた時間に視聴できれば良い。平日はいろんな仕事に追われているので。
- ・せっかく各回の内容が良くても、時間の都合で参加できない方も多くいらっしゃるかと思います。FD の動画や資料をアップロードする学内限定サーバや moodle のフォーラムを立てたりして、FD コンテンツに触れる機会を拡大していったらどうかと思います。
- ・今回は準備期間も短く難しかったとは思いますが、「学生参加」を謳うのであれば、参加しやすい時期や時間（水曜 3 限は授業のある学生もいる）を考えるとともに、今回のように多くの発表を詰め込んで質疑の時間がほとんど残らないようなプログラムにはしない方がよいと思います。「学生参加っていうから出てみよう」って来た学生にとっては、ほとんど質問や意見を述べる機会が無いというのは、不満が残ることになり次に繋がらないのではないのでしょうか。
- ・ビデオ等を利用して複数回視聴できるようにすると、機会が増えると思います。
- ・教授会等のため参加できない部局がありましたので、収録した動画を学内で視聴できるような機会を設けていただければ幸いです。

—内容・構成について—

- ・大きいテーマとその後に個別テーマで、各自行きたい部屋に行けるといいかと思います。学部別とか。
- ・詰め込みすぎない。
- ・内容のブリーフペーパーのようなものを作成すれば興味を持ってくれるのではないか。
- ・分科会方式はどうか。自分の担当教科に関連しないもの（が多い FD）についてはなかなか参加しづらい。同一時間帯に 3, 4 つの分科会を設けて、一つの課題（アクティヴラー

ニングなど) について、それぞれの分科会に分かれて集中的に類似教科(群) ごとに発表を聞き議論する(2, 3名の発表者), などの形式のほうが良くはないか。知っている教員の取り組み, 自分に関係した取り組み目当てに参加しようと思うのではないか。

- ・多分野(多職種)交流の場として活用できれば, 新たな発想が生まれると思うが, 具体的には思いつかないです。(学生)

—その他—

- ・必要だと思えば, 自然に参加するでしょう。
- ・学生さんの意見を取り入れるのは有意義ですが, 一人の意見が恰も全体の意見のように取り扱うような事にはならないようにして頂きたい。
- ・修了証などを発行する。
- ・学会の認定医システムのように業績評価に直結するポイント制にしたらどうか。ポイントが付くとなると参加するだろうし, きちんと研修を受けたことの証明にもなるだろうと思った。また, 今回のように優れた事例を提示した先生に高得点が付くとなおよい。論文執筆が得意な教員もいれば, 逆に研究は苦手でもよい教育をしている先生がいてもいいと思う。教育が得意な先生のインセンティブになる制度になるのではないか。
- ・不参加者は昇給対象としない。
- ・参加しようという気になるくらいゆとりが持てる状況になること。できるだけ雑務を軽減するとゆとりができ, FDを含め自己啓発に取り組む意識が持てると思います。
- ・私は大学に入学して3年目にして初めてFDというものに参加したのですが, 今まで参加してこなかった理由は, FDの開催日時が講義や実習とかぶったり(薬学部はわりといつもそう), 参加する学生は先生方との話し合いをしなければいけなさそうで面倒くさそうだと思ったり, FDで言いたい意見を持っていなかったり, そもそもFDがあることを忘れていたりしたからです。今回は, たまたま実習がない日で時間が空いていて, 学生は意見を言わなくても良さそうな内容で, 申し込みをしなくても当日にメールでZOOMのURLが届いたので気軽に参加できました。薬学部が講義や実習をしている時間と被るのは仕方ないとしても, 今回のように申し込みをしなくても当日にZOOMのURLがメールで届くとFDの存在を思い出すことができますし, 気軽に参加できるので, これからも続けるといいと思います。FDで表明したい意見がなくても, とりあえず参加して話を聞いてみると, 意見を持つ学生もいると思います。ZOOMのチャットに書き込むのは匿名でないためハードルが高いですが, このようなアンケートになら書き込めるので, こういったアンケートを続けてほしいです。(学生)

2. 第2回全学FD2021 「学生が主体的に学べる ためのクラスデザイン」 実施報告

第2回全学FD2021「学生が主体的に学べるためのクラスデザイン」開催趣旨

全学 FD・教育評価専門会議議長 教養教育院 谷井一郎

私たち大学教員は教員免許資格を持っていない方がほとんどです。考えてみると教育者として在るための知識やスキルを学ぶ場そのものがほとんどなかったということに気づかされます。そこで、全学 FD・教育評価専門会議では“大学教員に必要な教育に関する基本的な考え方とスキルを学ぶ企画”を立てました。本年の6月に開催した第1回富山大学全学FD2021では、アクティブ・ラーニングの基礎と実践例を学ぶというテーマで開催しました。今回の研修会では、その第2弾として東京大学総合教育センターの栗田佳代子先生をお招きして、クラスデザインについての基調講演を行ってまいります。さて、講義が一方向になると学生の学ぶ意欲が見えません。どうしたら学生をもっと生き活きと積極的に学びの場に参加させられるだろうか。そんな教員の悩みを解決することがFDのサブタイトルにある“学びの場を変えたい”に込めた意味です。本研修会では基調講演後にワークショップを行い、実践的に学ぶ場を設けています。オンラインでのワークショップはアクティブ・ラーニングを体験できる機会にもなります。

最後に、本研修会によって本学の教育の質が向上し、学生が生き活きと意欲的に学べる授業が増えることを願っています。

第2回全学FD2021 プログラム

10月27日（水） 13：00～15：50（「Zoom」ミーティングによるオンライン開催）

テーマ：学生が主体的に学べるためのクラスデザイン

13：00～13：03 開会挨拶・趣旨説明 谷井 全学FD・教育評価専門会議 議長

13：03～14：40 基調講演 栗田 佳代子（くりた かよこ）氏

（東京大学 大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター 教授）

演題 「“学びの場を変えたい” 学生が主体的に学べるクラスデザイン」

（質疑応答を含む）

14：40～14：50 小休憩

14：50～15：50 ワークショップ（個人ワーク，グループワーク）

15：50 閉会挨拶 磯部 教育推進センター長

【当日参加者内訳】

教員	
役員	1
人文科学系	0
教育学系	7
社会科学系	0
芸術文化学系	6
教養教育学系	14
理学系	7
都市デザイン学系	33
工学系	27
医学系	5
薬学・和漢系	12
教育研究推進系	7
非常勤講師	3
その他	1
小計	123

職員	12
----	----

学生	
大学院生	1
小計	1

他大学	9
-----	---

合計	145
----	-----

【オンデマンド参加者内訳】

教員	
都市デザイン学系	3
工学系	5
医学系	1
薬学系	1
教育研究推進系	4
小計	14

合計	14
----	----

総計	159
----	-----

<https://app.sli.do/event/2ptjcotl>

任意のブラウザで

あるいは“sli.do”を検索し、#にtoyama



富山大学FD研修

学びの場を変えたい 学生が主体的に学べるクラスデザイン



東京大学
大学総合教育研究センター
栗田佳代子

2021年10月27日

第1部

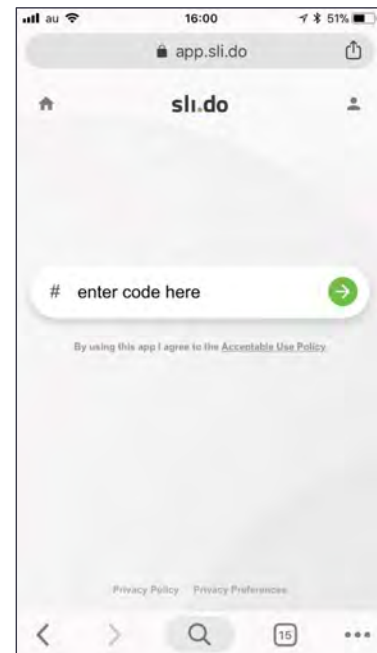
オンラインの質疑応答システム
です

[使い方]

- 手持ちのスマホ等のブラウザで「sli.do」を検索
- #のエリアに「toyama」と入力

[機能]

- 学習者からの質問
- 教授者からの発問



2

目次

- 第1部
 - はじめに
 - ADDIEモデル
 - 反転授業
 - おわりに
- 第2部
 - アクティブラーニングの実際

3

はじめに

4

はじめに ～目的・目標～

- 目的
 - 効果的な授業を設計方法について知り、実際の授業デザインに活用する
- 目標
 - **ADDIEモデル**の各要素を説明できる
 - 授業をデザインすることの意義を説明できる



5

はじめに ～経験を思い出す～

- これまでに実施した（受けた）授業のうち、失敗だったものを一つあげてください
 - いつ
 - トピック
 - なぜ「失敗だった」と感じたのか？

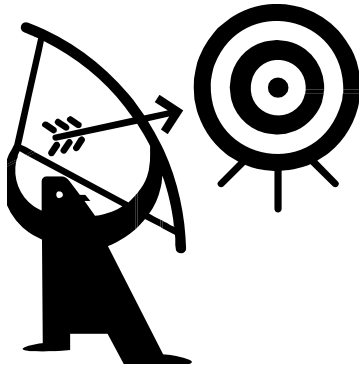
6

ADDIEモデル

7

デザインの意義

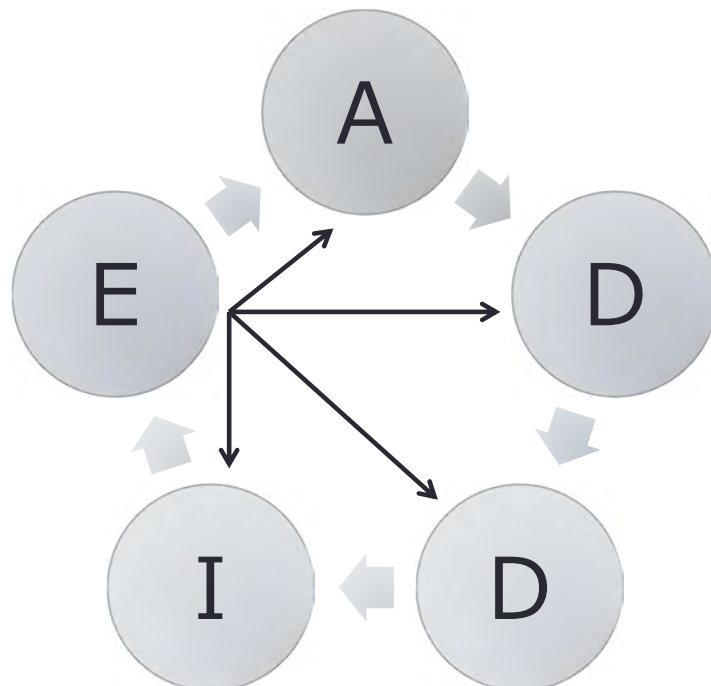
受講者にとって	講師にとって
・学びが深めやすくなる ・目標が達成されやすくなる	・時間を有効活用できる ・改善に活かせる ・工夫の共有を容易になる



8

ADDIE モデル

- ・インストラクショナルデザインのモデル



9

ADDIE モデル

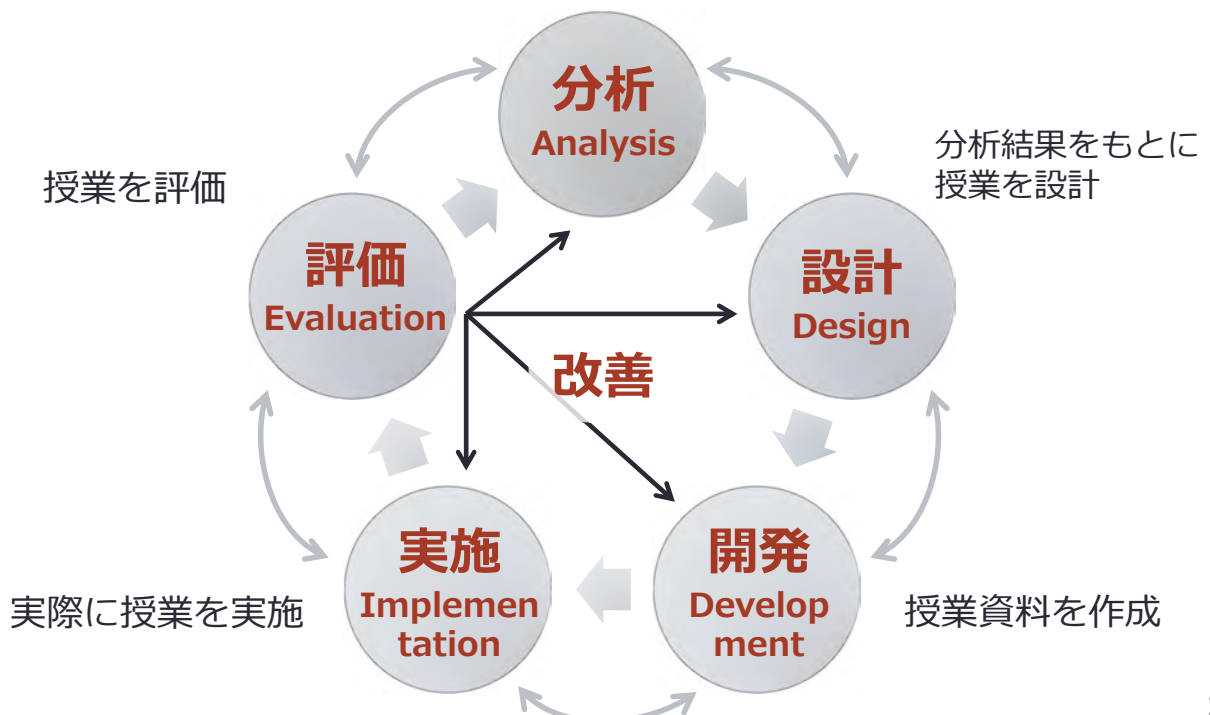
- ・インストラクショナルデザインのモデル



10

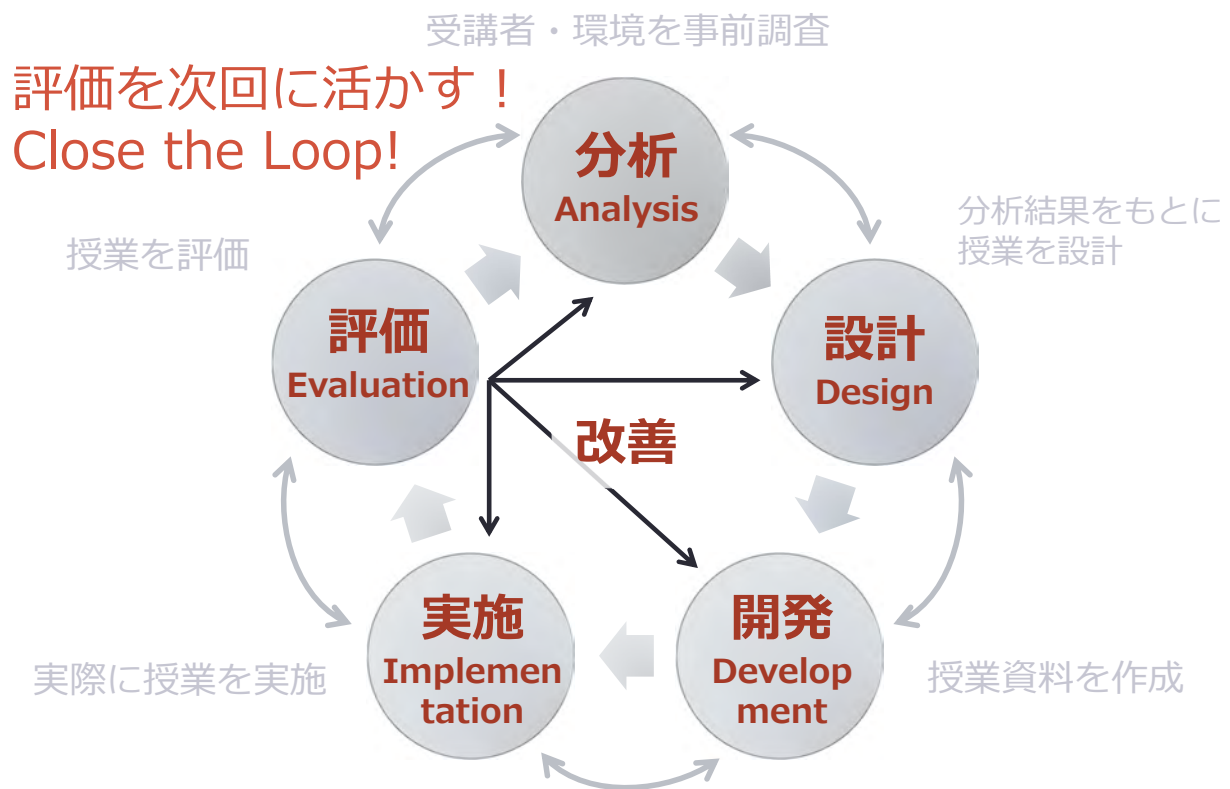
ADDIE モデル

受講者・環境を事前調査

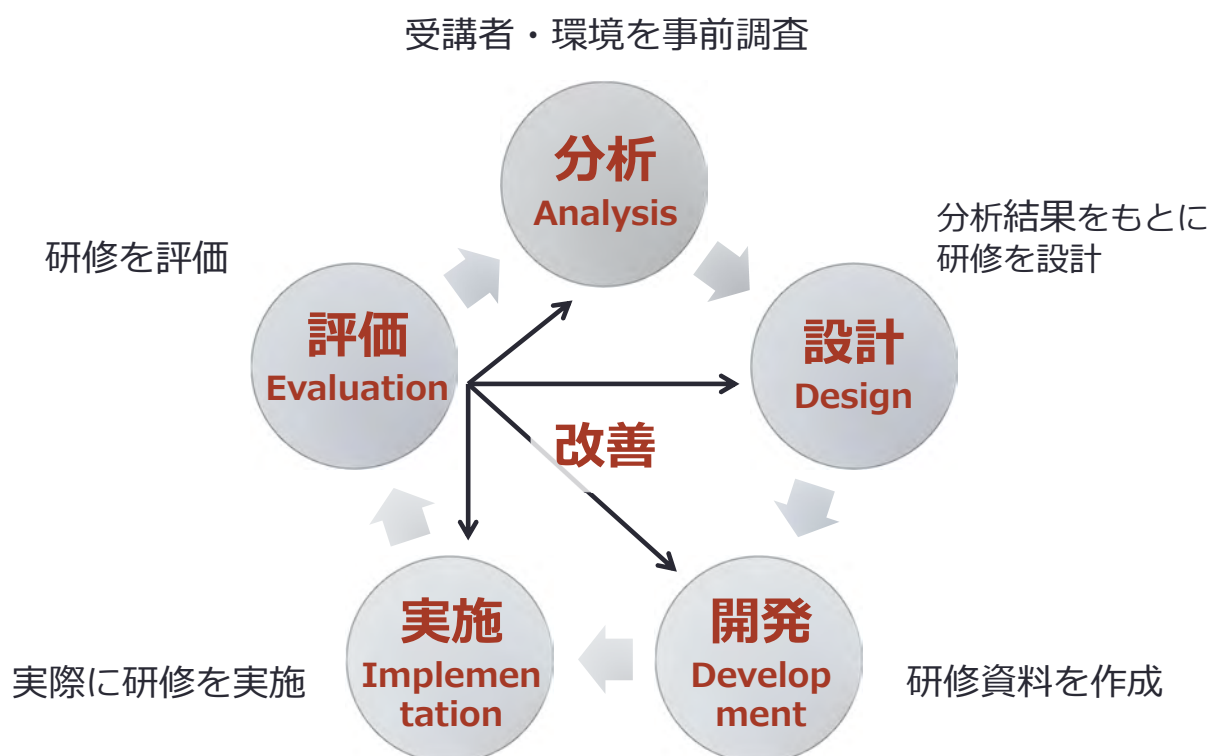


11

ADDIE モデル



ADDIE モデル

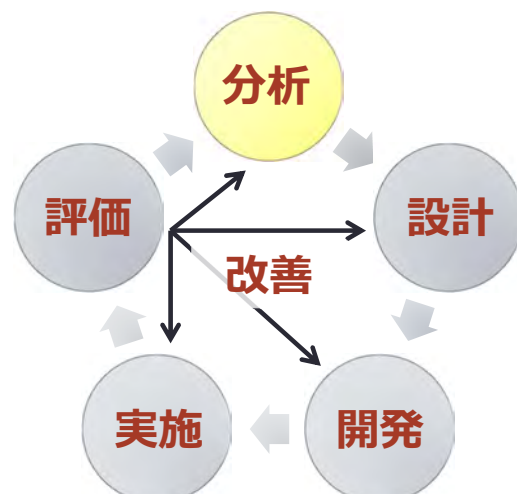


分析

14

分析 Analysis

- 良い授業設計をするための**事前調査**
- どのように情報を集めるか？



15

どのような分析が必要か？

- 良い授業設計に必要な**事前調査**
 - ニーズ：何を望んでいるか
 - 対象：初学者～専門
 - 意欲：低い～高い
 - サイズ：数人～数百人
 - 時間：90分、105分
 - 場所：教室の広さ、机の配置、可動性、オンライン
 - 使える機器：プロジェクタ、黒板



16

どのように集めるか？

- 情報の集め方
 - 引き継ぎ時に聞き取り
 - ウェブサイト等からの情報収集
 - その場で学生に直接たずねる



17

設計

18

設計 ～ ADDIE モデルの "Design" ～

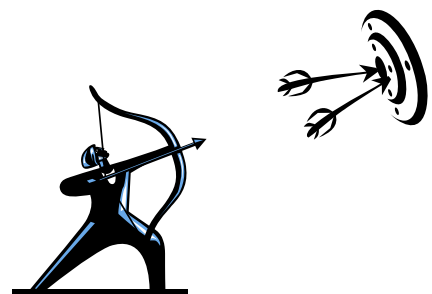
- **目的・目標**を明確にして設計する
 - 目標を適切に, ブレずに, 明確に定める
 - 「ジャンプすれば届く」目標に設定する
- 設計の方針
 - Backward Design
 - 導入 → 展開 → まとめ
- 留意点
 - 目的・目標
 - 内容の整合性
 - 構成



19

目的と目標

- 目的
 - この研修の**存在意義**
 - 「なぜこれを受講しなければならないのか？」
という問いに対する答え
- 目標
 - **できるようになってほしい事柄**
 - **目的を具体化したもの**
 - そのまま**評価項目**になるもの
 - 適切な目標は**受講者の自学自習**を促す



20

目標の設定

- Bloom の教育目標分類（タキソノミー）（Bloom 1956）
 - AL で知識よりも高次の目標にアプローチする

高次 ↑ 低次	認知領域 (知識)	情意領域 (態度)	精神運動領域 (スキル)
	評価		
	統合	個性化	自然化
	分析	組織化	分節化
	応用	価値付け	精緻化
	理解	反応	巧妙化
	知識	受け入れ	模倣

21

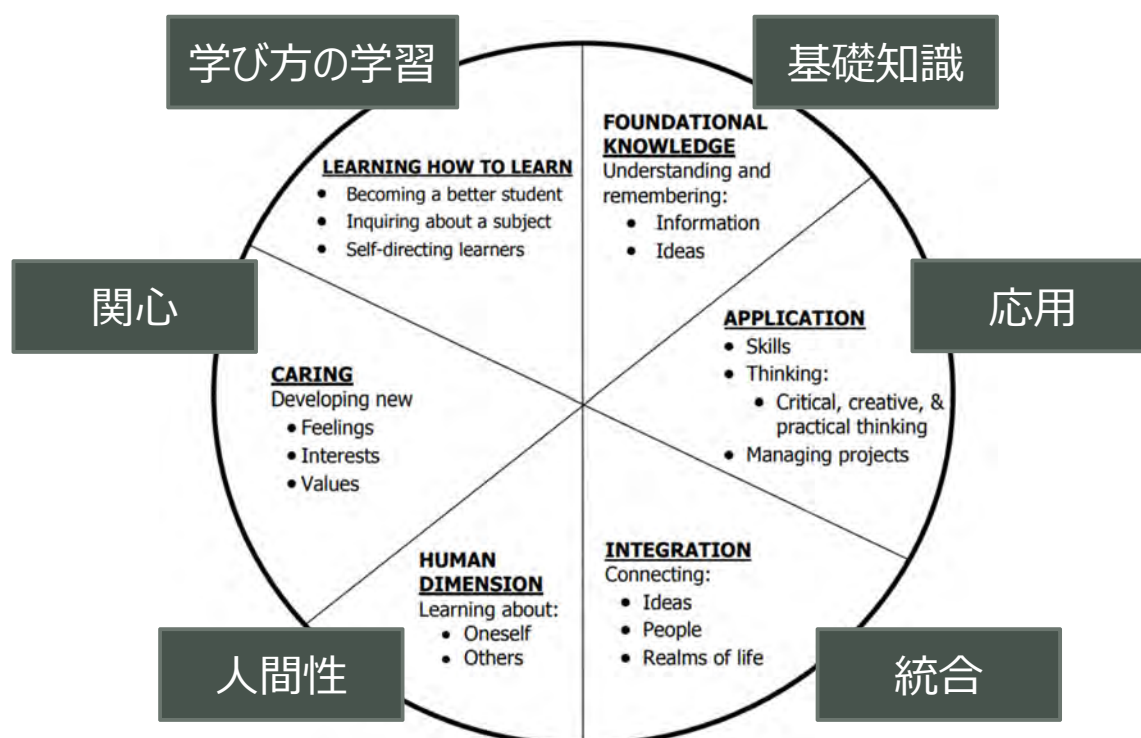
Bloomの分類に用いる動詞例

覚えておく	理解する	適用する	分析する	評価する	創造する
順序立てる 定義する 記述する 複製する 識別する ラベル付けする リストアップする 位置を決定する 名づける 想起する 暗唱する 認める 再現する 選択する 明示する	関連づける 分類する 比較する 対比する 記述する 区別する 話し合う 実証する 説明する 推論する 解釈する 言い換える 言い直す まとめる 翻訳する	計算する 構築する 実証する 開発する 利用する 見積もる 検討する 実行する 策定する 実施する 修正する 見取り図を描く 解決する 使用する	分類する 組み合わせる 比較する 対比する 討論する 図解する 検討する 実験する 外挿する 策定する 説明する 組織する 予測する 質問する	見積もる 主張する 査定する チェックする 結論を出す 批評する 検出する 判断する 正当化する モニタリングする ランク付けする 等級を決める 推薦する 選択する 試験する 比較検討する	組み立てる 築く 構成する 構築する 設計する 策定する 生成する 統合する 作り出す 提案する 再配置する セットアップする 変換する

大学における「学びの場」づくり(2014)p.233

22

Finkの「意義ある学習」に関する分類

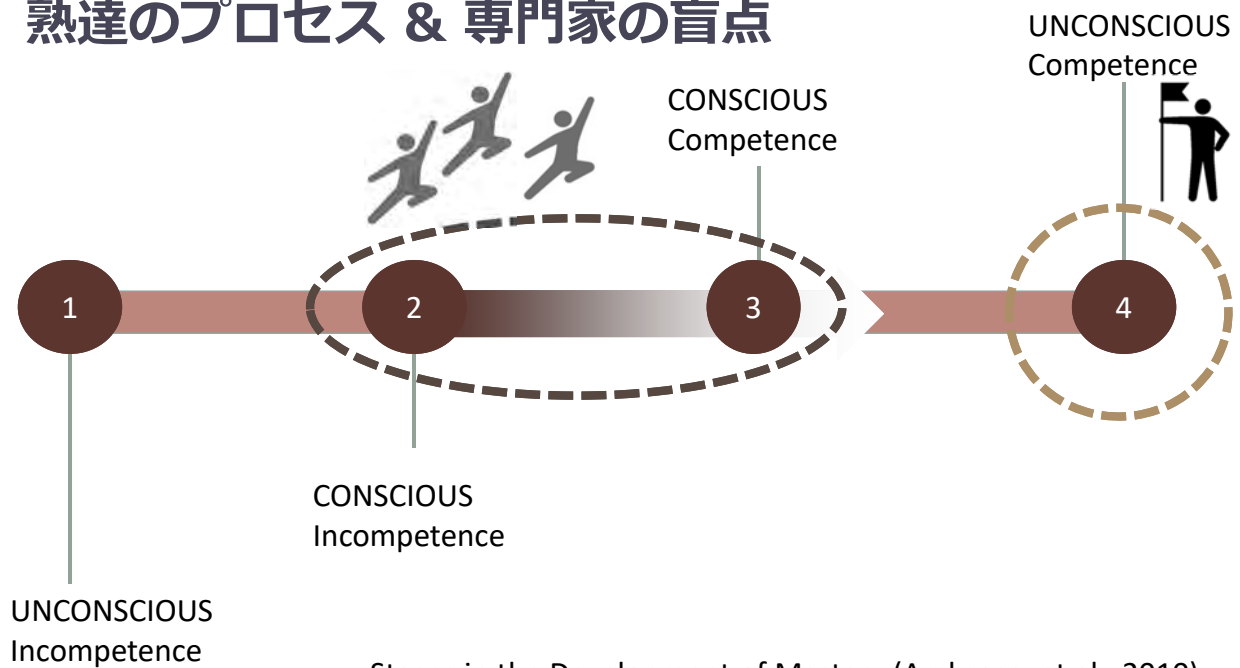


<https://www.deefinkandassociates.com/GuidetoCourseDesignAug05.pdf>

23

目標の設定の際に・・・

熟達のプロセス & 専門家の盲点



東大FFP

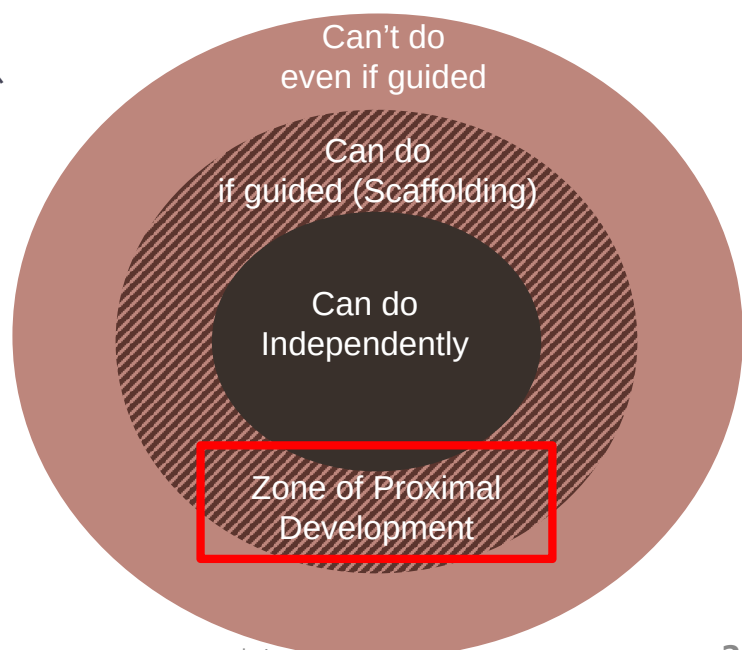
24

目標の設定の際に・・・

最近接発達領域

Zone of Proximal Development
(ヴィゴツキー, 1978,2001)

(子どもが) 自力で問題解決できる現時点での発達水準と、他者からの援助や協同により解決可能となる、より高度な潜在的発達水準のずれの範囲



東大FFP

25

設計 ～ ADDIE モデルの "Design" ～

- **目的・目標**を明確にして設計する
 - 目標を適切に、ブレずに、明確に定める
 - 「ジャンプすれば届く」目標に設定する
- 設計の方針
 - Backward Design
 - 導入 → 展開 → まとめ
- 留意点
 - 目的・目標
 - 内容の整合性
 - 構成
 - モチベーション



26

方法 ～Backward Design～

Backward Design (Wiggins & McTighe & 2005)

• 学習目標を決めて授業計画を行う

- ① 学習目標、学習成果を決める
 - 例) 栄養について理解し、自分や他者に対してバランスの良い献立を考案することができる
- ② 評価方法、最終課題を決める
 - 例) 3日間キャンプのバランスが良い美味しい献立の作成
- ③ 授業内容、方法を決める
 - 例) 食べ物の種類、必須な栄養素



27

方法 ～導入・展開・まとめ～

(鈴木ら 2007 改変)

時間配分	流れ	ガニエの9教授事象	(例) 本研修
10-15%	導入	・ 学習者の注意を喚起する ・ 学習目標を知らせる ・ 前提条件を確認する	
75-85%	展開	・ 新しい事項を提示する ・ 学習の指針を与える ・ 練習の機会を設ける ・ フィードバックをする	
5-10%	まとめ	・ 学習の成果を評価する ・ 学習の保持と転移を促す	

28

設計 ～ ADDIE モデルの "Design" ～

- ・ **目的・目標**を明確にして設計する
 - ・ 目標を適切に, ブレずに, 明確に定める
 - ・ 「ジャンプすれば届く」目標に設定する
- ・ 設計の方針
 - ・ Backward Design
 - ・ 導入 → 展開 → まとめ

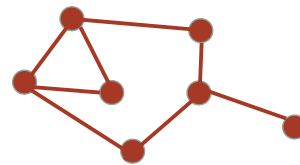
- ・ **留意点**
 - ・ 目的・目標
 - ・ 内容の整合性
 - ・ 構成



29

構成のヒント ～知識の体系化～

- 学生が知識を体系化できるように促す
 - グラフィック・シラバスの提示
 - 意識的な知識の関連付け
 - 経験, 事例, 知識相互
 - 90分の授業ならばコンテンツとしては3つ程度。それらの順序、関係性、抽象・具体の展開に注意



東大FFP

30

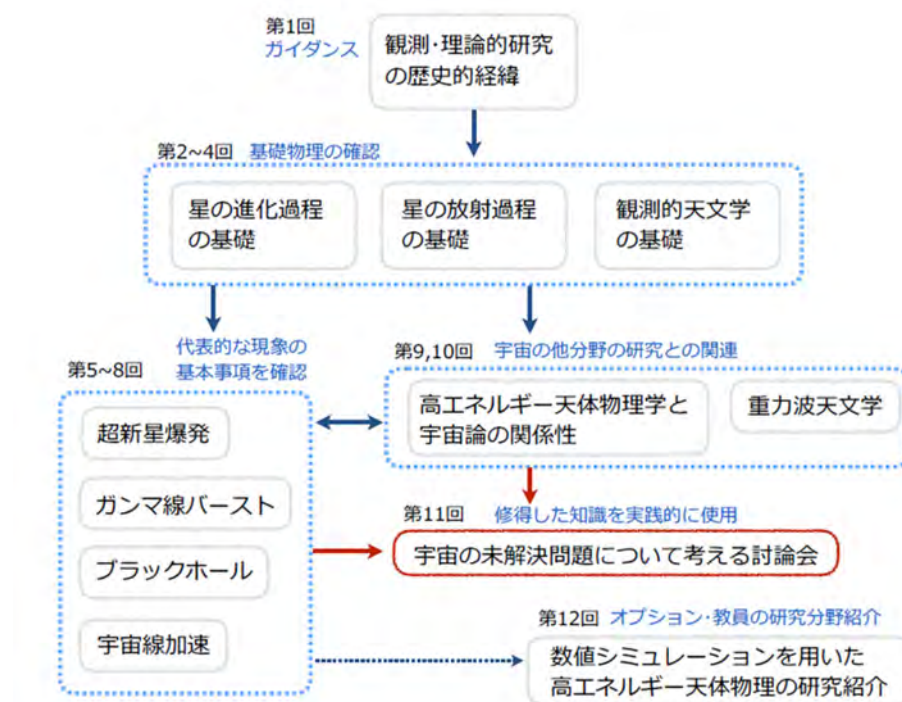
例) 天体物理学

授業計画

- | | |
|------|--|
| 第01回 | ガイダンス、高エネルギー天体についての観測的・理論的研究の歴史的経緯 |
| 第02回 | 星の進化過程の基礎 |
| 第03回 | 星からの放射過程の基礎 |
| 第04回 | 観測的天文学の基礎 |
| 第05回 | 星の最期の姿・超新星爆発 |
| 第06回 | 宇宙最大級の爆発現象・ガンマ線バースト |
| 第07回 | ブラックホールは暗黒天体なのか？ |
| 第08回 | 宇宙線はどこからやってくる？ |
| 第09回 | 高エネルギー天体现象と宇宙論の関係性 |
| 第10回 | 重力波天文学の最新の研究 |
| 第11回 | 宇宙の未解決問題について考える討論会
→これまでの授業で取り上げた、あるいは自分で調べた宇宙の未解決問題を1つ題材とし、グループに分かれて討論を行い、各グループごとに発表する |
| 第12回 | 数値シミュレーションを用いた宇宙物理研究 |

31

例) 天体物理学



32

構成のヒント ~90/20/8~

- 理解しながら聞けるのは90分まで
- 記憶に残しながら聞けるのは20分
→内容を20分毎にわかる
- 8分ごとに参画させる

(ロバート・パイク, 2008)

コースデザインの考え方 ～足場かけ～

教員ができること

自律的学習者

• 足場かけ Scaffolding

(Wood, Bruner & Ross, 1976)

- 補強（モチベーションの持続）
- 自由度の縮小（タスクの単純化）
- 指示の調整（適切な方向づけ）
- フラストレーションの制御
- デモンストレーション

• 足場外し Fading

(Collins, Brown & Newman, 1988)

- 必要性解消
- 教育的意図
- 制約および優先順位

これらを参考に
コースデザイン・クラスデザイン

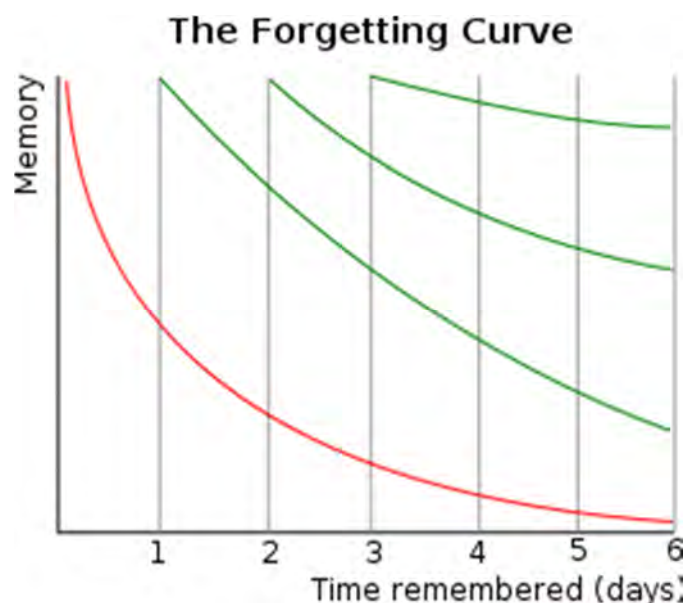
東大FFP

34

構成のヒント ～忘却曲線～

• 反復の重要性

(Ebbinghaus, 1885)



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ForgettingCurve.svg>

クレジット

Image from Wikimedia

東大FFP

35

モチベーションとは

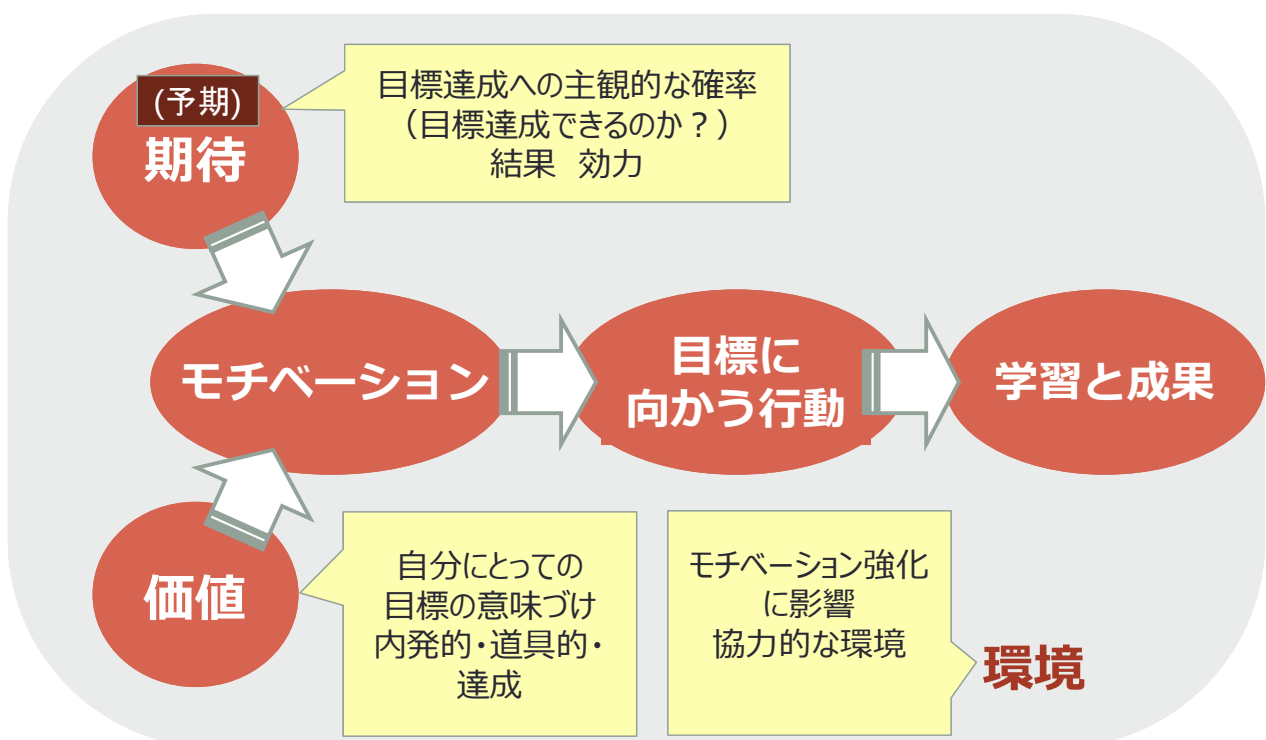
Student's motivation
generates, directs, and sustains
what they do to learn.

(Ambrose et al. 2010)



36

モチベーションのモデル



(Ambrose, et al., 2010 改変)

37

開発

38

スライドデザイン

- 伝わるデザイン
 - <https://tsutawarudesign.com/>



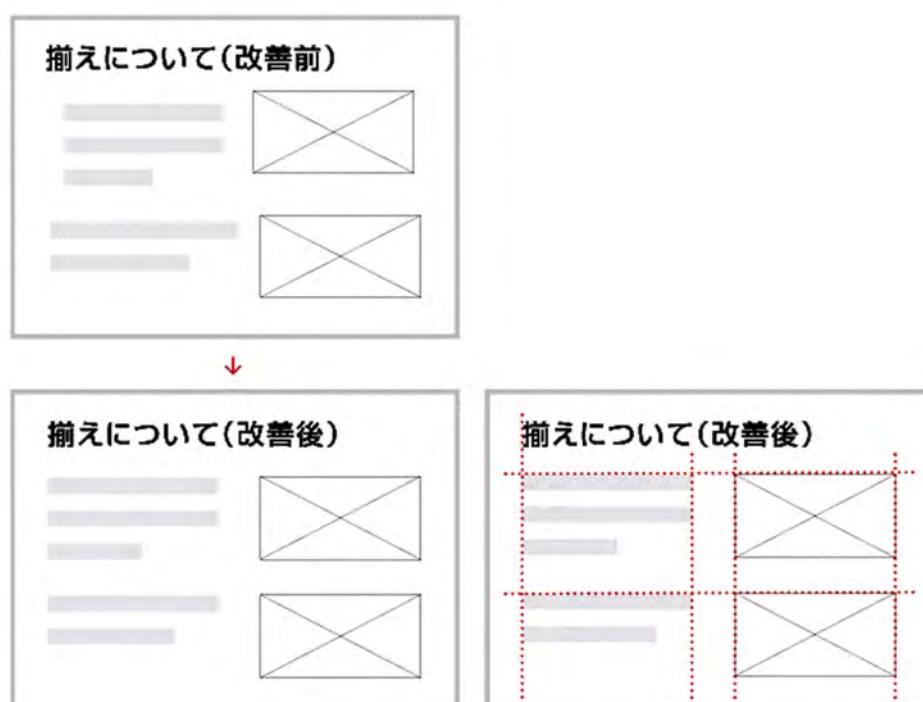
39

書体：フォントの選び方

- 基準
 - きれいなフォント
 - 太字や斜体に対応したフォント
 - 読み間違いの無いフォント

40

レイアウト：揃えるところは揃える



<https://tsutawarudesign.com/miyasuku4.html>

41

レイアウト: まとめる

グループ化でわかりやすく

花に関する話

- マメ科植物の花がそこら中にたくさん咲いていました。
- 花は白と赤でできていました。

牛に関する話

- 数百頭の牛がそこら中でこっちを見えています。
- 牛にはいろいろな色の牛がいました。



→

グループ化でわかりやすく

花に関する話

- マメ科植物の花がそこら中にたくさん咲いていました。
- 花は白と赤でできていました。

牛に関する話

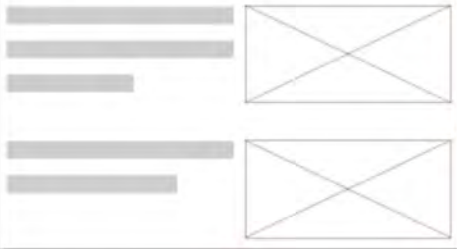
- 数百頭の牛がそこら中でこっちを見えています。
- 牛にはいろいろな色の牛がいました。



42

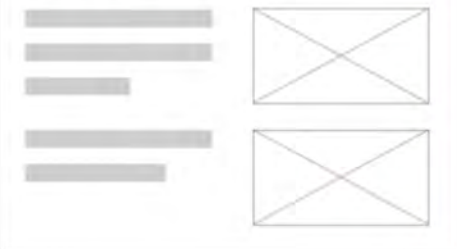
レイアウト: 余白をとる

接近を避ける

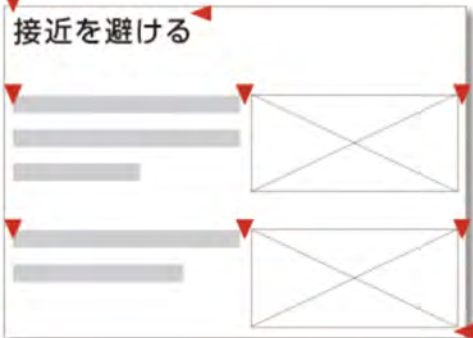


↓

接近を避ける



接近を避ける



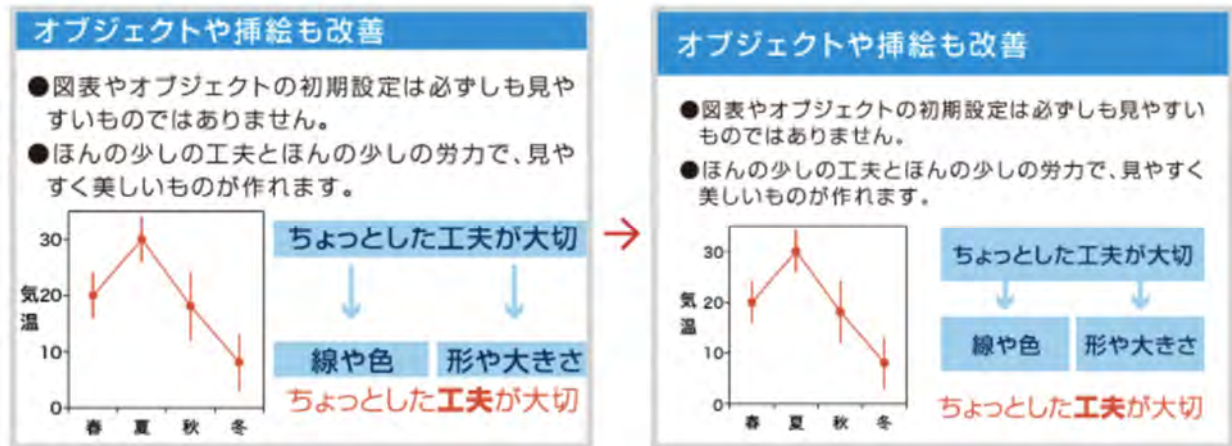
↓

接近を避ける



43

レイアウト: 余白をとる

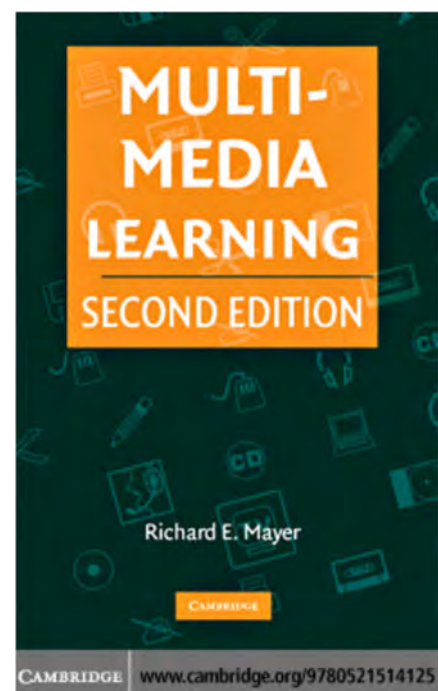


<https://tsutawarudesign.com/miyasuku4.html>

44

マルチメディアの使い方

- Multimedia Learning
 - メディアの使い方と学習の関係性を 12 の原理としてまとめている
 - e-learning を想定しているが、スライド作成にも応用可能
 - 残念ながら翻訳本なし



(Mayer 2009) 45

12の原理

原理の種類	内容
Coherence	内容に関係ない興味を引く要素（文字・図・音）は省く
Signaling	内容の構造を明確にする（見出しを提示、キーワードを強調）
Redundancy	図、ナレーション、文字を同時に提示するのではなく、文字は抜かす
Spatial Contiguity	対応する図と文字は近くに配置する
Temporal Contiguity	図とナレーションは別々ではなく、同時に出す
Segmenting	スライドを自動で進ませるのではなく、学習者に操作させる
Pre-training	事前に、キーとなる概念や特徴を知っておいてもらう
Modality	アニメーションと合わせるのは、文字よりもナレーションにする
Multimedia	文字だけではなく、図・画像を追加する
Personalization	フォーマルな方式ではなく対話的な方式にする
Voice	機械の音声を使うのではなく、人間の音声を使う
Image	講師の顔が出ていることで必ずしも学習が促進されるわけではない

(Mayer 2009 を元に作成)

46

以下のスライドの改善点は？

ADDIE モデル

ADDIE モデルはインストラクショナルデザインで用いられているモデルです
良い授業設計をするために分析をして、次の設計の準備をします
そして、授業の目的・目標を明確にして授業の流れや内容を設計します
その後は、具体的に授業資料を作成するという開発の段階です
実際に授業を行う実施の段階です
最後は授業に対する評価をします

47

以下のスライドの改善点は？

- Signaling Principle
 - 内容の構造を明確にする（見出し、キーワードを強調）

ADDIE モデル

- インストラクショナルデザインのモデル
- 分析：学生・学習環境を事前調査
- 設計：分析結果を元に授業を設計
- 開発：授業資料を作成
- 実施：実際に授業を実施
- 評価：授業を評価

48

以下のスライドの改善点は？

- Multimedia Principle
 - 文字だけよりも図・画像があった方が学習が進む

ADDIE モデル

- インストラクショナルデザインのモデル
- 分析：学生・学習環境を事前調査
- 設計：分析結果を元に授業を設計
- 開発：授業資料を作成
- 実施：実際に授業を実施
- 評価：授業を評価



49

以下のスライドの改善点は？

- Spatial Contiguity Principle
 - 対応する図・画像と文字は近くにあった方が学習が進む

ADDIE モデル



50

情報量

- 過不足ない (= 必要十分な) 情報の提示
 - スライド内の情報をできるだけ削減する
 - スライド以外の配布資料の情報量をできるだけ削減する

ADDIE モデル

ADDIE モデルはインストラクショナルデザインで用いられているモデルです
良い授業設計をするために分析をして、次の設計の準備をします
そして、授業の目的・目標を明確にして授業の流れや内容を設計します
その後は、具体的に授業資料を作成するという開発の段階です
実際に授業を行う実施の段階です
最後は授業に対する評価をします

ADDIE モデル



51

実施

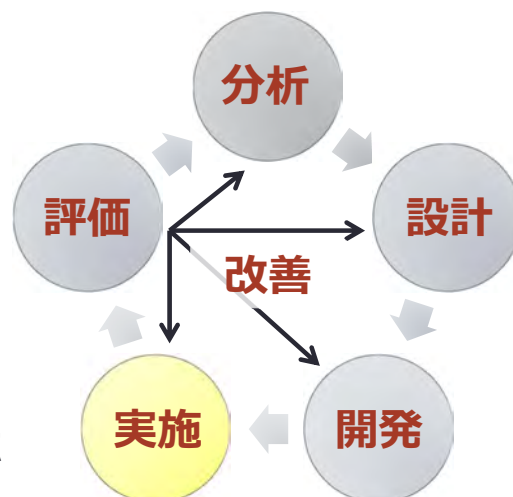
52

実施 Implementation

- 実際の授業を行う
 - デリバリーに注意する
 - 声の明瞭さ
 - 話のスピード
 - 身振り手振り など

- 注意する点
 - 学生の理解度
 - ワークの進行度

＊理解度に応じた臨機応変な対応



53

デリバリー

• デリバリーにおけるポイント（西野 2012 を参考に作成）

カテゴリ		ポイント	
話し方	声の大きさ	声は小さすぎないか？	口は大きく開いているか？
	声の明瞭さ	滑舌よく、クリアに聞こえるか？	
	話す速度	理解できないほどはやくないか？	退屈になるほど遅くないか？
	抑揚のつけ方	強調したいところで大きさ、トーンを変えているか？ 繰り返しているか？	
	間の取り方	話が切り替わる場所、理解を促すところで間をとっているか？	
振る舞い方	顔の表情	堅くなっていないか？	無表情じゃないか？
	視線の向け方	全体に目配せしているか？	1人を見る時間は適切か？
	身振り手振り	意味に合わせたジェスチャーができているか？	
	姿勢	背筋は伸びているか？	

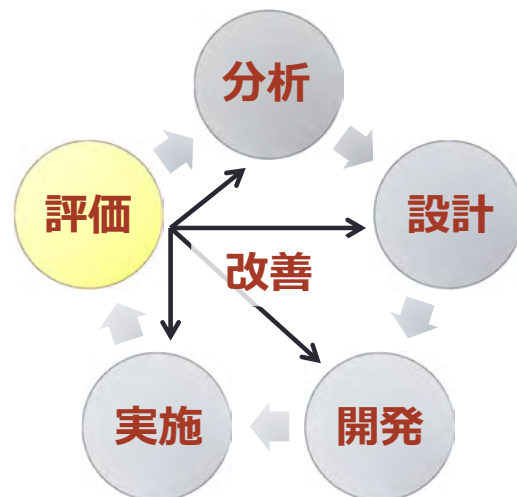
評価

評価 Evaluation

- 適宜行う評価: ADDI の各段階における評価
- 最後に行う評価: クラス, コースの最後の評価

- 評価の方法

- 自己評価
- 学生評価
 - ミニツツペーパー
 - アンケート
 - テスト
- 第三者評価
 - 同僚, オブザーバー



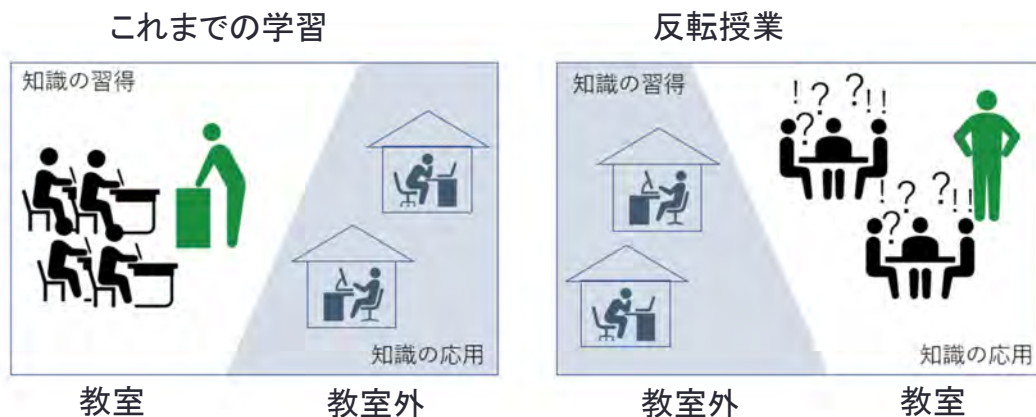
56

反転授業

57

反転授業（Flipped Class）とは

- ・事前に基礎知識に関する学習をして、授業では議論・演習を行う
- ・ブレンド型学習(Blended Learning) の一つ



58

反転授業の意義

- ・意義
 - ・授業の改善
 - ・教育効果を高める (Means et al., 2009)
 - ・インタラクティブな講義を実現する
 - ・授業前の学習分析ができる
 - ・Just-in-time-teaching
 - ・学生の多様性に対応する
 - ・授業の効率性を高める (採点の自動化など)

59

反転授業構成のGolden Rule

- 反転授業を成功させるために重要なこと
 - In Classの綿密な計画
 - In Classのアクティブ・ラーニングを取り入れた設計
 - Out of Classで学んだことを思い出す、活用、拡張する
 - Out of Classの学習内容に直接的に関連させる
 - 学生の積極的な関与の仕掛けの工夫
 - 事前課題・授業・成績評価・個人的ミーティング

<https://docs.google.com/document/d/1arP1QAKSyVcxKYXgTJWCrJf02NdephTVGQltsw-S1fQ/pub#id.suagqb7wve21>

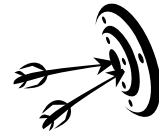
60

おわりに

61

おわりに ～目的・目標～

- 目的
 - 効果的な授業を設計し実施・評価できる
- 目標
 - **ADDIEモデル**の各要素を説明できる
 - 授業をデザインすることの意義を説明できる



62

第2部 モチベーション

はじめに ～目的・目標～

- 目的

- モチベーションについて学びつつ、オンライン授業におけるアクティブラーニングの方法について学ぶ

- 目標

- モチベーションの喚起・維持・向上に重要な、価値・期待・環境の各要素を説明できる
- オンライン授業におけるアクティブラーニングの実際を体験する



64

統計学はやっぱり嫌い？

社会学部の1年生に「統計学の基礎」を初めて教えることになりました。初回のガイダンスでは、数々の多変量解析や統計量の推定方法など、最新の情報も含めて学生に披露したのですが、魅力はほとんど伝わらなかったようです。

初回のガイダンスには100人ほどでてくれたはずなのに、登録はその3分の1でした。今日が2回目でしたが、授業にきてくれる学生も配布資料をもらった後は次々机に伏して寝てしまいました。学生のほとんどはやる気がないようです。やはり文系学生は興味がないのでしょうか。

大前提

- 学生が主体的に学んでいくためにモチベーションの喚起と維持は重要かつ必須

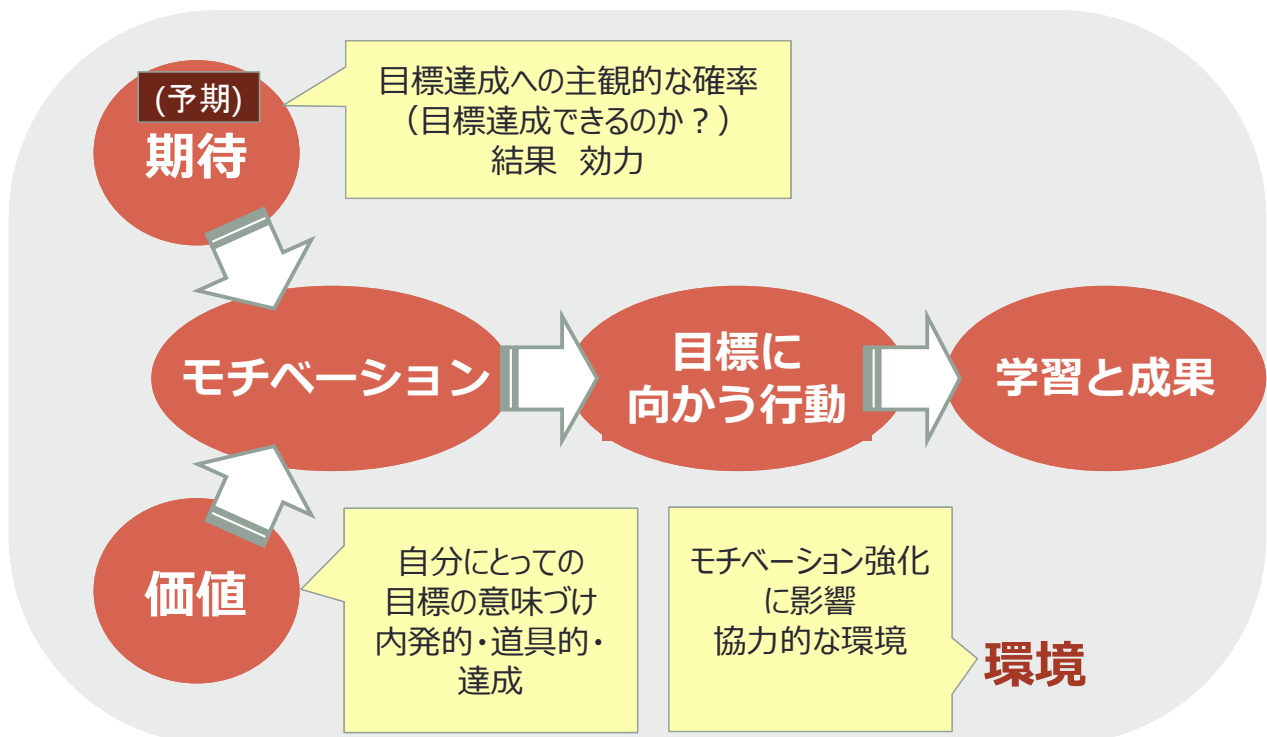
モチベーションとは

Student's motivation
generates, directs, and sustains
what they do to learn.

(Ambrose et al. 2010)



モチベーションのモデル



(Ambrose, et al., 2010 改変)

68

期待と価値 ～期待 Expectancy～

(予期)

- 期待: 目標達成への主観的確率
 - 授業を通して目標達成 (が期待) できそうか?
- 授業内容が難しすぎるとモチベーション低下
 - 期待が低すぎる
- 授業内容が簡単すぎるモチベーション低下
 - 期待が高すぎる

69

期待と価値 ～期待を高める方法～

(予期)

- 目標、授業内容、評価を調和させる
- 授業内容の適切なレベルを見きわめる
 - 「ジャンプすれば届く」難易度に設定
- 的確なフィードバックを与える
- 効果的な学習方法を説明する

(Ambrose, et al., 2010、栗田ほか 2014 改変)70

期待と価値 ～価値 Value～

(予期)

- 授業にどれだけの**価値**を見いだせるか？
- **達成価値**
 - 目標やタスクの習得と達成から満足感が得られるかどうか
例：量的データの分析ができてレポートが書けた！
- **内発的価値**
 - タスクを行うことそのものから満足感が得られるかどうか
例：プログラミング自体が楽しい！
- **道具的価値**
 - 他の重要な目標を達成する上で、その内容が役に立つかどうか
例：大学院での研究に応用できる！

期待と価値 ～価値を高める方法～

(予期)

- 授業内容を学生の関心と結びつける
- 将来における授業内容の重要性を示す
- 何に価値をおいているか示し、それを評価する
- 授業内容に対する情熱や意欲を示す

(Ambrose, et al., 2010、栗田ほか 2014 改変)72

期待と価値 ～環境との関係性～

(予期)

- **協力的環境であると感じられると、価値・期待との相互作用によってモチベーションが強化される**
- 協力的な環境を作る方法
 - シラバスと初日の授業で雰囲気確立する
 - 雰囲気に関してフィードバックを受ける

(Ambrose, et al., 2010、栗田ほか 2014 改変) 73

教授者にできること

- 学生にとって**高い価値**を考える
- 学生の**期待を高める**工夫をする
- **協力的な環境**をつくりだす

+参考:ARCSモデル

74

ワーク：教授にアドバイス

どうすれば良かったのか？を考えて、アイデアを増やしましょう。

【個人】ルーム名と同じ番号の各グループのシートで作業

- あいうえお順に上から使う
- 付箋には、「×××すると良い（価値）」のように改善案と観点を記載する。（あとで該当部分に貼っていくのでどの部分かを記載する必要はない）

【グループにわかるる】アイデアの共有

- 個人で考えたアドバイスをあいうえお順に披露
 - 似ているものは集める・重ねる
- さらに付け足せるものがないか考えましょう

ARCS モデル まとめ

		サブカテゴリ	内容
A	注意	知覚的喚起	好奇心を持ち、驚嘆させるような刺激
		探究心の喚起	思考を促すなど探究心の喚起
		変化性	情報の提示方法の変化
R	関連性	目的指向性	学生に関係ある授業目的・目標の設定
		動機との一致	学生のニーズに合致
		親しみやすさ	授業内容を学生の体験・知識と紐付け
C	自信	学習要求	到達目標およびその評価基準の提示
		成功の機会	成功体験の機会提供
		コントロールの個人化	成功要因を自分に帰属させるようにすること
S	満足	内的強化	学ぶこと自体を楽しむようにサポート
		外的報酬	学習に対して何かしらの報酬
		公平さ	全員平等に公平に扱うこと

76

オンライン授業の実際

77

対面と比較したときのオンラインの特徴

- ・長所
 - ・消耗品など物理的な物品環境の準備不要
 - ・時間場所の制約なし
 - ・平等な学習環境提供
 - ・円滑な情報共有
 - ・効果的なグループワーク
 - ・記録が容易
- ・短所
 - ・会議システムの知識が必須
 - ・参加者のモチベーション維持
 - ・通信環境・機器の制約
 - ・「体験」は難しい
 - ・雑談など「インフォーマルな場」の欠如

78

オンライン授業 Tips

- ・授業前
 - ・別デバイスでも参加して、疑似シミュレーションする
 - ・共有リンクなどは予め用意しておく
- ・授業中
 - ・こまめに問いかけたり、ワークしたり、質問に回答する
 - ・協力者にチャットの質問を拾ってもらう
 - ・研修をしながらチャットを確認するのが難しい場合あり
 - ・別デバイスで参加する（参加者からの見えを確認できる）
 - ・他ツールを併用する
 - ・Slido（質問共有）
 - ・Google ドキュメント・スプレッドシート・スライド（ワークシート）

79

Google Formによる討議活性化のための準備

- グループ討議をするとき、難しいと感じることは？
 1. Google Formをつくり、その回答シートも作成してURLを控えておく。共有設定に注意
 2. 参加者にGoogle Formのリンクを送り回答してもらう
 3. しかるべき時間経過の後、回答シートのリンクを送る
 4. 画面共有しながら、コメントをしたり、議論を深める
 5. 場合によっては、ここからグループワークを始めることも可能

Google
Form

0

参加者に寄り添う研修

- 参加者は孤独にPCに向かっている
- 基本的に「不安」
- 参画してもらう流れ
 1. クローズドクエスチョン
 2. オープンクエスチョン
 3. グループワーク（自己紹介を含めた短時間、簡単）
 4. グループワーク（長時間、複雑）

(参考) グッドプラクティス事例から

- 参加者の不安な気持ちに寄り添う
 - アイスブレイクの実施、授業方針・評価方法の明示など
- 匿名の質問・コメント環境を作る
 - Slido、LINE オープンチャット、Comment Screen …
- 適宜リフレッシュの時間を入れる
 - 冒頭の雑談やクイズ、ストレッチ、授業途中の質疑応答の時間…
- 学習者にも頼る・助けてもらう
 - 学習者のほうが寧ろ知っていることも多い
- グループワーク前には丁寧な指示出しを行う
- 録画した動画を学習者に共有 / 同じ内容を再放送する

Comment
Screen

82

グループワーク (ブレイクアウトセッション)

83

学生からのフィードバック (授業から)

「授業における良かった点」（今後も続けたら良いと思うこと）に対して、16件中12件がグループワークに関する指摘

- ・グラウンドルールを最初に明示していることもあり、グループワークをととても気持ちよく行えた。初対面の人ばかりでこれだけGWが頻繁にあるにも関わらず負担を感じなかった
- ・オンラインの中でのグループワークの取り組み方の指示が丁寧でよかった。自己紹介をすることや、発表順番をあらかじめ共有しておくことでスムーズに取り組めた。

84

グループワークの意義

- ・変化性を持たせられる（モチベーションを高められる）
 - ・一方向だとあきる
- ・理解を深める
 - ・議論・共有することで理解が深まる
- ・場へのエンゲージメントを高める
 - ・参加者相互のつながりを深める
 - ・メンタル的にも重要

85

グラウンドルール

学びにひらかれた場を一緒につくるために．．

- ・「安心して転べる」「何からでも学べる」場です
- ・ 傾聴の態度で
- ・ 3K：敬意をもって，忌憚なく，建設的に

86

シェアのルール

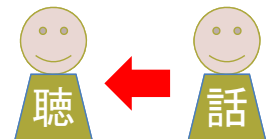
<話し手>

- ・ 考えたことをわかりやすく説明する
- ・ 専門用語は極力使わないか相手にわかるように説明する

<聴き手>

- ・ まずは興味を持って聴くことに徹する
- ・ 相手をしっかりと受け入れる
- ・ 相手の振り返りを深めることを目的にしたフィードバック（反応・質問など）をする

敬意を持って
忌憚なく
建設的に



一人あたりの
時間を決める

87

グループワークの注意点

- グループワークの目的を明らかにしておくこと
- 指示を明確にすること
 - やるべきこと(What), その順序(How), 時間(How long)
 - ゴール (Why: 何のためにグループワークを行うのか)
- 心理的安全性の確保 (初対面の場合にはグループワーク前に, 全体でアイスブレイク, あるいは自己紹介から)
 - いきなりグループワークに放り込まれて作業開始は難しい
- もたつかないようにリンクなどは予め準備しておくこと

88

Google ドキュメントを用いたグループワーク

- (研修前準備) Google Driveに予めグループ数分のワークシートを用意
 - 例: フォルダ「groupwork」を作成し, group1, group2, …のようにファイル作成
 - GAS:<https://kayokokurita.info/post-965.html>
- (研修中) 参加者とGoogle Driveのフォルダを共有. このとき「編集可能」にしておくこと
- (研修中) ブレイクアウトセッションのRoom番号と同じ番号のワークシートを使うように指示.
(Room番号はブレイクアウトセッション中の上部に表示参加者の名前の先頭にグループ番号を入れると楽)
- ブレイクアウトセッション中, 教員はグループの進捗確認ができる
- (研修中) ブレイクアウトセッション後, 適宜全体でワークシートを共有し発表やコメント, 補足などを行う

89

やってみましょう！

- Google Driveのフォルダを開いておきます
- ブレイクアウトルームにわかれます
- グループ番号と同じ番号のファイルを開けます
 - 書いてある指示のとおり書き込んでみます
- 時間が来たら戻ります

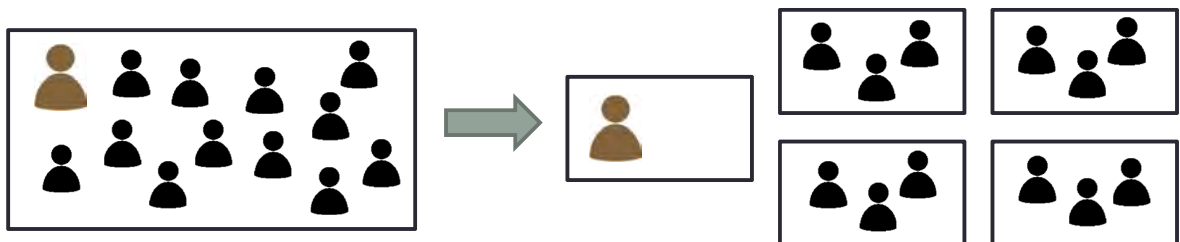
- (あとで) GASによるファイルコピー デモ

GAS

90

Zoom ブレークアウトセッション

- 学生をグループに分けることができる



- 「ブレークアウトセッション」を押す
- セッション数（グループ数）を入力し、参加者の割り当て方（グループの分け方）を「自動」か「手動」が選択し、「セッションの作成」を押す
- 「オプション」からブレークアウトの時間（初期設定8分）、メインルームに戻るまでの猶予時間カウントダウン（初期設定60秒）を設定する
- 「すべてのセッションを開始」を押す
- 学生がグループ別の部屋へ移動して、議論・作業する
- 時間が来てカウントダウンが終わったら、学生全員がメインの部屋に戻ってくる

91

Zoom ブレークアウトのポイント（設定）

- セッション最大数は50
 - 1グループ3～4名が話しやすいと考えたと
学生150～200名までの利用が適切か？
- 各部屋に分かれた後は時間変更はできない
 - 時間設定は「詳細設定」の「分科会室は次の時間後に自動的に閉じます」と「分科会室を閉じた後のカウントダウン」で設定
 - ブレークアウトにかかる時間＝ 前者の時間(行きの移動時間含む)+後者の時間+帰りの移動時間
- 「全参加者を自動で分科会室に移動」をオンにする
 - 強制的に各部屋に移動させることができる
- 設定中に入室した人も割り当てられる
 - 各ブレークアウトセッションの右端にある「割り当て」や数字をクリックすると、その人の名前がさらに右側のボックスに現れる
- 必要に応じて「名前の変更」をして、受講者の名前の前にグループ番号を付与する（ホスト・共同ホストが名前変更可能）

92

Zoom ブレークアウトのポイント（実施）

- 教員の声による指示出しは各部屋に届かない
 - テキストは送ることができる（ブロードキャスト）
- 教員は各部屋の会話内容を全体的に把握できない
 - Google ドキュメントなどを使って、各グループの進捗を把握できるようにしておく
- 教員が学生を直接ヘルプするには各部屋に入る
 - 学生が「ヘルプを求める」を押す
 - 教員がヘルプを求めていることが表示され、「ブレイクアウトルームに参加する」を押すとその部屋に入ることができる
- 実施中でも人の入れ替えは可能
 - 各ブレークアウトセッションの右端にある「割り当て」や数字をクリックすると割り当て可能

93

- 「ブレイクアウトルームに放り込まれるのは怖い。何していいかわからない」ことへの想像力を働かせる
- **グラウンドルールの設定**：互いの呼び方、3K（敬意をもって、忌憚なく、建設的に）、安心して転べる場、失敗からも学べる場、等
- **とにかく丁寧な指示を**：指示出しは、口頭だけでなく、スライド提示、それをさらにチャットボックスに転記
 - 指示の中身：
 - 誰から話を始めるか、
 - 何人のグループなのか、
 - 何分のワークなのか、
 - 何が成果物として求められるのか

94

具体的な方法1 Think Pair Share

- リモートワーク中は家にこもることが多かったと思います。どのように気分転換をしていましたか？
- 参加者側
 1. **(メイン部屋)** ひとりで考える (Think, 1分)
 2. **(各部屋)** 参加者がそれぞれ考えたことを話し(1分×2人)、他に何かないか発展的に話す(2分) (Pair 5分: 移動時間込み)
 3. **(メイン部屋)** 全体で数組に話した内容を共有したり、質問する、解説を聞く
- 講師側
 - (1で) 問いを提示して、作業内容を伝える
 - (2までに) ブレイクアウトで参加者の数/2となるセッション数を設定する
 - (2までに) 各部屋に参加者を自動で割り当てる (奇数の場合は TA が入る or 割り当てずにメイン部屋に残ってもらい教員と話す)
 - (2までに) 「詳細設定」から時間設定を行う
 - (2で) 各部屋での作業内容を改めて伝える
 - (2で) 適宜、ブロードキャストを使って話し手の交代などを伝える
 - (3で) 全体共有を促す、質疑応答する、解説する

95

具体的な方法2 ポスターツアー

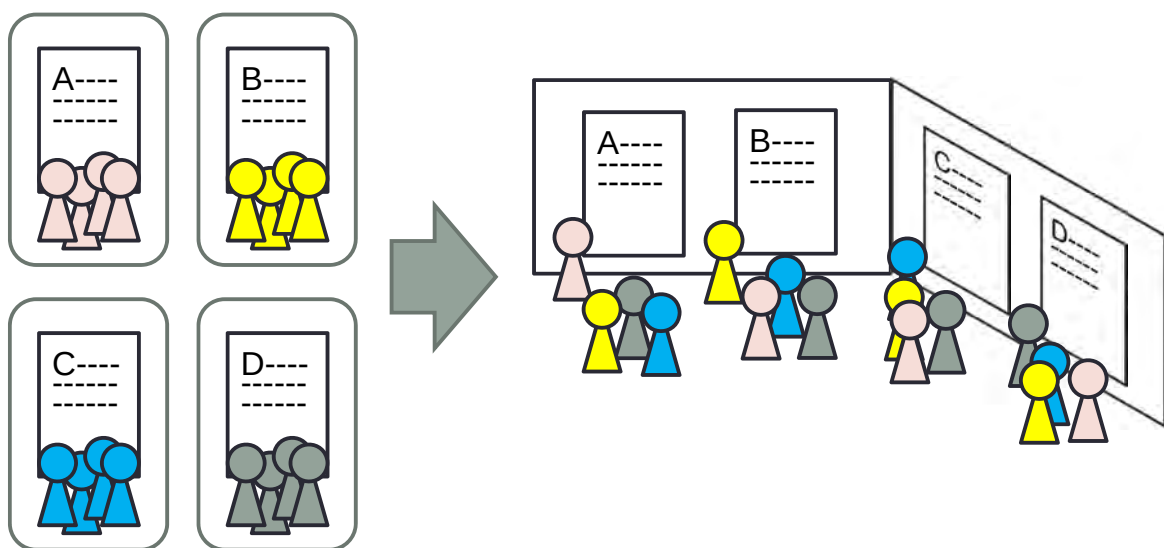
【ポスター作成】

- ・（ブレイクアウト）ポスター作成グループを編成し，Google Slideでポスターを作成する（20分）
- ・全員が説明できるようにしておく旨伝える

【ツアー】

1. **（メイン）** 各グループ、あいうえお順に名前の前に番号を追加→番号になるようにツアーグループを再編成
2. **（ブレイクアウト）** ツアーグループでブレイクアウトへ
 1. 自己紹介．自己紹介最初の人（あいうえお）が進行とタイムキーパー
 2. ツアー開始．説明(2分)&コメント (2分) 新グループで，ツアーを開始．自分の作成したスライドを説明．
3. **（メイン）** 質疑応答

具体的な方法2 ポスターツアー



- ・ジグソー法の応用
- ・グループでポスターを作成して、説明を行う

*スライドのまわりかた

30名を前後半で15名（3名＊5グループ）に編成

- 前半グループ
 - スライド 1 2 3 4 5をまわる
 - 全グループがスライド1からスタート
- 後半グループ
 - スライド 6 7 8 9 10をまわる
 - 全グループがスライド6からスタート
- 1スライド 4分

オンライン授業で使えるツール

Google ドキュメントを用いたグループワーク

- (授業前準備) Google Driveに予め
グループ数分のワークシートを用意
 - 例: フォルダ「groupwork」を作成し, group1, group2, …のようにファイル作成
- (授業中) 学生とGoogle Driveのフォルダを共有. このとき「編集可能」にしておくこと
- (授業中) ブレイクアウトセッションのRoom番号と同じ番号のワークシートを使うように指示.
(Room番号はブレイクアウトセッション中の上部に表示
参加者の名前の先頭にグループ番号を入れると楽)
- ブレイクアウトセッション中, 教員はグループの進捗確認ができる
- (授業中) ブレイクアウトセッション後, 適宜全体でワークシートを共有し発表やコメント, 補足などを行う

100

グループウェア Slack

<https://slack.com/intl/ja-jp/>

- 概要
 - メンバー間で情報共有, コミュニケーションができる
 - テキストチャットがグループ内で共有できるイメージ
- 使い方
 - ワークスペースを作る
 - 授業, プロジェクト毎に作成
 - 目的別にチャンネルを作ってコミュニケーションをとる
 - 例: 情報共有, 質問, 課題, …
 - ダイレクトメッセージで個別にやりとりする
 - @を用いると対象に通知が届く形でメッセージを送れる
 - @ユーザー名: 特定のユーザーが対象
 - @channel: チャンネル全員が対象

101

タイマー Hourglass

- 概要
 - 学生にワークをしてもらうときに所要時間を示すツール
 - 時間設定が容易（例: 1m30s と入力 → 1分30秒タイマー）
 - Windows のみ（Mac については情報提供求む）
- 使い方
 - Hourglassを起動して任意の時間に設定する
- PowerPoint のスライドショーと併用する際の工夫
 - 前提: Zoom では画面全体を共有しておく
 - 案1: Alt + tab を使って hourglass を選択する
 - 案2: 「スライドショーの設定」の「設定」で「出席者として閲覧（ウィンドウ表示）」を選択しておく
- 参考情報
 - <https://www.softantenna.com/wp/review/hourglass/>
 - <https://chris.dziemborowicz.com/apps/hourglass/>

102

オンラインストレージ Google Drive

- 概要
 - Google の提供するオンラインストレージサービス。
Google Doc, Google Sheet, Google Slideなど様々な文書、表計算、スライド作成その他を保存・共有
- 使い方
 - 右上の9つの■の並んだアイコンをクリックして、google driveを選択する

103

質問フォーム Google Form

- 概要
 - Googleの提供するアプリケーションの一つ
 - 簡単に多様な質問を作成することができる入力フォーム
 - 授業における匿名・非匿名の学生からの応答回収に活用
- 使い方
 - googleにログインして、Google Formを選択
 - 歯車マークをおしアクセス権限を確認（デフォルトは学内限定）
 - 送信をおして共有用のURLを取得
- 参考情報
 - https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/using_google_forms.php

104

アイデア共有 Google Jamboard

- 概要
 - Google の提供するアプリケーションの一つ（Jamboardはハードウェアとして提供されているデジタルホワイトボードもあり）
 - ふせんや図形などを使ってアイデアを共有
- 使い方
 - googleにログインしJamboardを選択
 - 右上「共有」から共有についての設定を行いURLを取得
 - 保存などは「共有」左横の3つの縦に並んだ黒丸から
 - 一つのJamboardを共有できるのは最大20人程度（経験値）
- 参考情報
 - [https://gsuiteguide.jp/jamboard/what-is-jamboard/#Google Jamboard %E3%81%AE%E4%BD%BF%E3%81%84%E6%96%B9%E3%81%AF%E4%BC%9F](https://gsuiteguide.jp/jamboard/what-is-jamboard/#Google%20Jamboard%E3%81%AE%E4%BD%BF%E3%81%84%E6%96%B9%E3%81%AF%E4%BC%9F)

105

資料

106

参考文献

- スーザン A. アンブローズ, マイケル W. ブリッジズ, ミケーレ ディピエトロ, マーシャ C. ロベット, マリー K. ノーマン, 栗田佳代子訳 (2014)『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』玉川大学出版部
- Bloom, B. S. (1956). Taxonomy of educational objectives. Vol. 1: Cognitive domain. *New York: McKay*, 20-24.
- Deslauriers, L., Schelew, E., & Wieman, C. (2011). Improved learning in a large-enrollment physics class. *science*, 332(6031), 862-864.
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2009). An educational psychology success story: Social interdependence theory and cooperative learning. *Educational researcher*, 38(5), 365-379.
- Mayer, Richard E. (2009). *Multimedia Learning*, Cambridge University Press
- Wiggins, G. P., & McTighe, J. (2005). *Understanding by design*. Ascd.
- ガニエ・ウェイジャー, グラス・ケラー (著) 鈴木克明, 岩崎 信 (監訳) (2007) *インストラクショナルデザインの原理* 北大路書房
- 伝わるデザイン <https://tsutawarudesign.com/> (参照日 2021.10.26)
- 西野浩輝 (2012) *仕事ができる人の5日で身につく「伝える技術」* 改訂版、東洋経済新報社

107

参考文献

- ディック, W.・ケアリー, L.・ケアリー, J. O. /角行之 (監訳) (2004) 『はじめてのインストラクショナルデザイン』ピアソン・エデュケーション
- ケラー J.M. 著、鈴木克明訳 (2010) 『学習意欲をデザインする -ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン-』北大路書房 (Keller, J. M. (2009). Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach. Springer Science & Business Media.)
- ミラー、G. A. /高田洋一郎(訳) (1972) 『心理学への情報科学的アプローチ』培風館
- ロバート・パイク (中村文子監訳) (2008) 『クリエイティブ・トレーニング・テクニック・ハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター
- Eric Mazur (1996) "Peer Instruction: A User's Manual" Addison-Wesley
- スーザン A. アンブローズ, マイケル W. ブリッジズ, ミケーレ ディピエトロ, マーシャ C. ロベット, マリー K. ノーマン, 栗田佳代子訳 (2014) 『大学における「学びの場」づくりよりよいティーチングのための7つの原理』玉川大学出版部
- 日本医学教育学会 (2008) 『医療プロフェッショナルワークショップガイド』篠原出版新社
- 栗田佳代子・日本教育研究イノベーションセンター (2017) 『インタラクティブ・ティーチング』河合出版
- 友野伸一郎 (2013) Kawaijuku Report ハーバード大学とMITのアクティブラーニング視察報告、Guideline 9月号、32-35

108

参考動画

- アクティブ・ラーニングを促す方法
 - <http://www.utokyofd.com/mooc/contents/knowledge/week2>
- モチベーション
 - <http://www.utokyofd.com/mooc/contents/knowledge/week3>
- ADDIEモデル
 - <http://www.utokyofd.com/mooc/contents/knowledge/week4>

栗田先生 (sli.do) への質問・回答

質問	回答
学生の求めるものと、教員（&社会）が求めるもののギャップはどの程度、どう埋めたら、折り合いをつけたらいいのでしょうか。	学生の求めるものと教員が求めるもののギャップはどうしてもあると思います。講演時にはADDIEモデルのA（分析）で学生のことを理解する必要はあるものの、迎合すればよいというものでもなく、学生の感じる価値を示しつつ、また、学生の興味関心に沿うことでモチベーションを高めてあげることは必要である一方、ディプロマ・ポリシーに添った内容を提供することになります。大きな視点でいえば、このギャップは1つの授業でうまるものでもなく、大学レベルにおいて、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確に定めそれを社会に明示することで、折り合いをつけていくものと考えます。
学生の求めるものと、教員（&社会）が求めるもののギャップがあるからこそ、大学の存在意義があるのでしょうか。それをシラバスで動機づけるのには、組織的なたくらみが必要になるのではないのでしょうか。	それ（組織的なくらみ）が学部（あるいは教養）教育としてのカリキュラム設計方針になるのかもしれませんが。本学ではそういうところの一貫制がまだ弱い気はします。
目的と目標は、英語ではそれぞれ何というのでしょうか？	purpose、objective
90/20/8で20分毎に切り替えるとは、休憩なしで良いのでしょうか？	90分なら通常は休憩なしで問題ないとのことで、なるべく20分置きにトピックを切り替えるよう心掛けたいと思います。
ADDIEモデルやブルームらに限ったことではありませんが、教育方法理論では一般に「楽しさ」「学生の目の輝き」あるいは「笑顔」という観点・軸が弱い(orない)ように感じますが…。	質疑応答時にも回答いたしましたが、私も同感です。これらを取りいれてデザインするためには学生さんのモチベーションを基軸とした考え方も同時に導入する必要があると思います。
「足場外し」を徐々に増やしていることを学生に伝えても良いのでしょうか？	伝えることが、学生さん達が自身の成長に気づき、より自主性をもって学習する姿勢を促進するように作用するのであれば、良いと思います。
教養教育科目で、文系学生と理系学生の混合クラスにおいて理系科目を教える必要がある場合、どのレベルに合わせるべきなのか悩んでおります。先ほどはレベル設定を中間レベルくらいにとおっしゃっていたと思いますが、このようなケースだと文系学生に合わせることになるのでしょうか？そもそも文系学生と理系学生を混合させること自体に無理があるようにも思いますがどう思われますか？	本学の仕組み（自然系教養科目を理工の学生もとれる）が存在する以上、シラバスで規制するしかないと思います。本来はこのような形で「楽に卒業単位を確保する仕組み」を学部が廃止すべきです。
東大では、コロナ禍後もオンラインでの授業を継続されることですが、授業時間割設計はどのようにされているのでしょうか。対面の遠隔が入り混じると混乱しないのでしょうか。	授業時間割の設計は、実際にはほとんど動かすことが不可能なのでほぼ手をいれていません。したがって、対面のためにできた学生さんがキャンパスでオンライン授業も受講できるよう、wifi環境のインフラ強化や、オンライン授業受講時の発言可能な学習スペース設置などを進めています。
本学ではTeams（マイクロソフト）が導入されたのですが、ツールとしてどのように活用できるのか、学生や教育に対してどのような良い面が出せるのか、試行錯誤の最中です。ツールとしてはどのような強みがあると捉えれば良いのでしょうか…？	Teamsは私自身は授業で使っていないため、あまり詳しくなく申し訳ありません。ただ、TeamsはMicrosoftのアプリケーションなので、他のMicrosoftのアプリケーションとの連携がスムーズなのではないでしょうか。既にご存知かもしれませんが、下記Teamsに関する説明がまとめてありましたのでご紹介します。 https://education.microsoft.com/ja-jp/resource/647fbbe0

【参加者感想】

多くの本学教員が抱えている悩みが、学生の勉学に対するモチベーションの低下であろう。青年人口がピーク時の半分になったにも関わらず、大学の入学定員が据え置かれているため、少し勉強すれば「入学できてしまう」、状況があり、高度な知識・技術を身に付けようと向学心に燃える昔ながらの大学生がいる一方、最低限の勉学で大卒者の称号を得ただけの学生も多い。私は（おそらくは多くの大学教員も）これまで後者の「底上げ」のために暗中模索してきたものの、具体的に何をどうすれば良いか途方に暮れていた。今回の全学FDはこの点に関して明確な方策を与えてくれるものとなった。私にとって一番参考になったのは、授業の学習目標を学生が教員の指導を受けつつ自力で辿り着けるレベルに設定すること、毎回の授業で3つぐらいのトピックに絞り、20分間ごとに分けて説明すること、一つの概念を繰り返し取り上げること、授業で取り上げた知識と知識の繋がりを明示すること、など極めて具体的な教育技術であり、自身の授業を組み立てていく上で反省と自信をもたらすものとなった。大学教員は各専門分野の専門家としての教育は受けているものの、教育者としての教育を受ける機会は少ないため、全学FDを含む教員研修で実践的な教育技術（≠さまざまな教育方法論の抽象的な学理）を学修したいと考えている。今回の全学FDはこのような教員のニーズに応える素晴らしい企画であったと思う。今後の全学FDでも、例えば、向学心に燃える学生とそうでない学生が混在するクラスでどのように授業を進めるべきかなど、教育技術を一層深化させる企画を期待している。

（学術研究部工学系教授 田端 俊英）

FD から得た知識と微生物学教育の接点

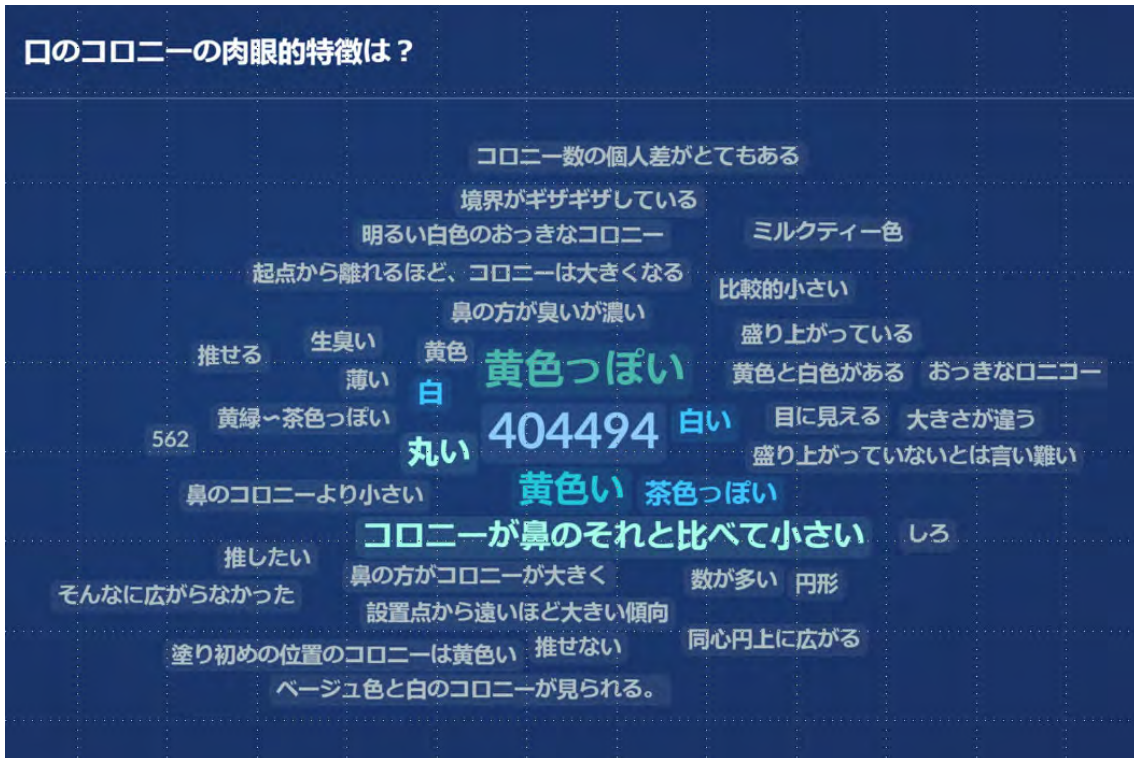
自らが学生時代に過ごした講義は基本的に座学であり、それなりに楽しかった。どちらかというとずっと聞いておきたい方の人間である。コロナを契機にオンラインツールを用いた教育が注目され、オンデマンドで時間に合わせた動画の視聴、反復学習ができるようになり、教員としては学生へのアプローチ手法、学生としては学びの手法が多様になった。前述のような学生であった私としては、急な教育環境の変化で見聞きする概念やツールを実践するには、少し敷居の高さ、とまどいも感じている。

さて今回、全学FDとしてオンラインで開催された、東京大学の栗田佳代子氏による「学びの場を変えたい 学生が主体的に学べるクラスデザイン」を拝聴した。全体を通して、教育者に必要な基本的知識・概念をご説明いただきながら、時折 web ツールを実際に使って聴衆との相互意見交換を実践されていた。例えば、ある事柄を実践するためには、はじめは気づいていなくて（知っていなくて）何もできないというレベルであるが、教育を受けることでだんだんできるようになり、理想的には意識しなくともできる unconscious competence レベルにまで到達することができれば、その事柄は高いレベルで習得したといえるということが紹介された。また、教育ではガイドがあればできるレベルを目標とすべきと紹介されていた。医学教育では、将来就く職業に求められる最低レベルが比較的整理されているが、確実にそのレベルに上げることが大切であることを認識した。いくつか紹介いただいた web ツールの中では、『Slido』というがもっとも取りつきやすいという印象を持ったため、早速自身が担当する微生物学の実習の中で取り入れてみることにした。

微生物学では、病気を起こす微生物について学生には学修してもらう必要があるが、近年病気を起こさない微生物が注目されていることから、先入観を持つ前に実習を行うようにしている。知識を植え付ける前に培地に発育した細菌を観察する際に、『Slido』を活用してみた（図）。よく観察して、どんな形、色、性状があるのか、という問いをひとりずつ問わずとも、共通するコメントがある一方で、まれなコメントも寄せられていて、意外と観察できていると実感できた。予想はしていたが、さすがに繰り返して使うと学生も飽きることも確認できた。うまいタイミング、問いかけ方などの工夫が教員側でなされないと押し売りになるのだらうと思われた。

教員は基本的な教育学を学びながら、新しい技術をうまく取り入れ、そして適切に使っていくのが大切と考えられ、今回のFDは、これらを確認する機会となった。

（学術研究部医学系教授 森永 芳智）



学びの場を「デザインする」という趣旨のお話を興味深く拝聴しました。一般的には審美的と考えられる要素が、学習者にとってよりよい教育環境の提供につながるということが明確に示されており、参考になりました。

お話の中の「分析」の項目では、事前調査の大切さをお伝えいただきました。授業は始まってみないと分からないという面も実際には多々あると思いますが、授業展開の方法や、授業計画についても、ふだんなんとなく意識しているところに分かりやすいモデルを提示していただくことにより、自分の授業構成の見直しにつながりました。ご紹介いただいた、グループワークや様々な評価方法はより活性化した学びの場を提供することにつながると思いました。一方で、何かしらの問題点も必ずあるはずだと思われ、その点についても考えていくべきだと感じました。

授業の場を離れても学生が自主的に学習を継続できるように、というお話は特に印象に残りました。それは教育現場が目標とする大きな一つだと思われます。好奇心をそそり、面白い、と興味をもってくれる内容を具備するものが、学生にとって、大学で出会うことができる授業なのでしょう。私は英語科目担当ですが、英語を苦手とする学生もいます。そういう人たちにも面白い、自分で勉強してみよう、と思ってもらえるには、彼らの心をつかみ、心を動かすような題材を提供することがやはり大切だと思っています。授業をデザインして、モチベーションに繋がるような構成を大切に考えることで、そうした題材はいかされてくるのだと認識しました。

図式を基にお話しいただき、授業計画が分かりやすく提示されていました。一方で、教育においては、教える側にとっても学ぶ側にとっても、図式化や可視化が難しい要素もあって、そこもまた大切なのだと思います。教える側としては、学識や経験の蓄積を教育に還元するために、学ぶ時間を確保することが大切だと、あらためて思った次第です。

(学術研究部芸術文化学系 須田 久美子)

富山大学第2回全学FD2021 参加者アンケート

全学FD・教育評価専門会議

本日は、富山大学第2回全学FD2021に御出席いただき、ありがとうございます。今後の企画の一層の充実を図るため、アンケートに御協力をお願いいたします。

1. 属性を選んでください。

- ア. 教員 イ. 職員 ウ. 学生 エ. 他大学
オ. その他 ()

2. 所属を選んでください。(※1で「職員」を選んだ場合は回答不要)

(1で「教員」を選んだ場合)

- ア. 人文科学系 イ. 教育学系 ウ. 社会科学系 エ. 芸術文化学系
オ. 教養教育学系 カ. 理学系 キ. 都市デザイン学系 ク. 工学系
ケ. 医学系 コ. 薬学・和漢系 サ. 教育研究推進系
シ. 非常勤講師(教科をご記入ください _____)
ス. 他大学(大学名をご記入ください _____)

(1で「学生」を選んだ場合)

- ア. 人文学部 イ. 人間発達科学部 ウ. 経済学部 エ. 理学部
オ. 医学部 カ. 薬学部 キ. 工学部 ク. 芸術文化学部
ケ. 都市デザイン学部 コ. 大学院生

3. (1で「教員」及び「他大学」を選択した方のみ回答)

今回のFDのテーマ「クラスデザイン」について、担当されている授業に実際に応用して役立てることができかどうか、お考えをご記入ください。
(「教員」のみお答えください)

4. 開催時期について、どう思いますか。

- ア. 適当である イ. 変えたほうがよい (時期: _____)

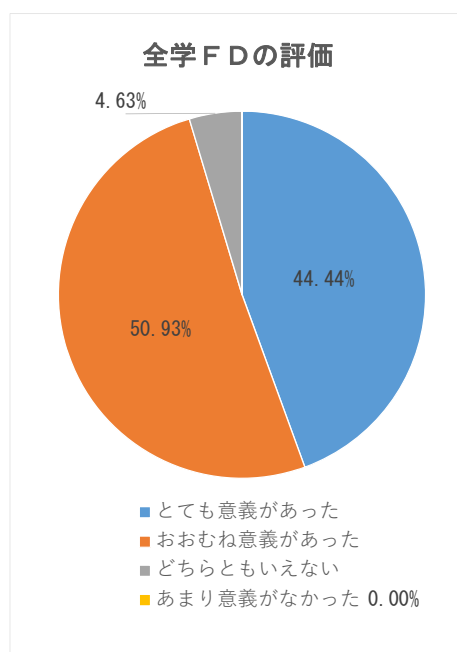
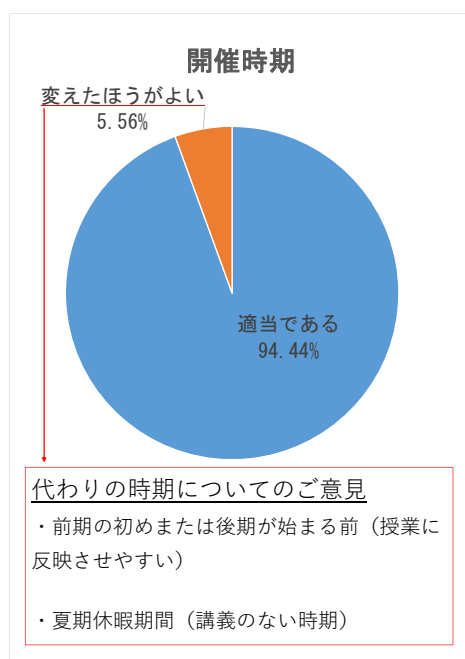
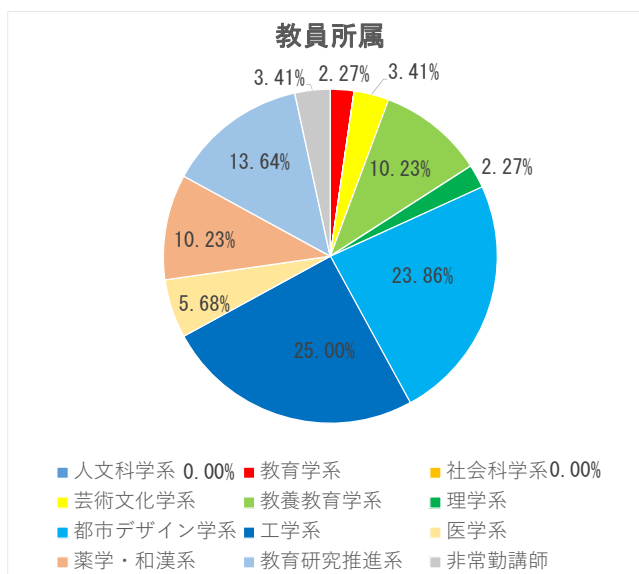
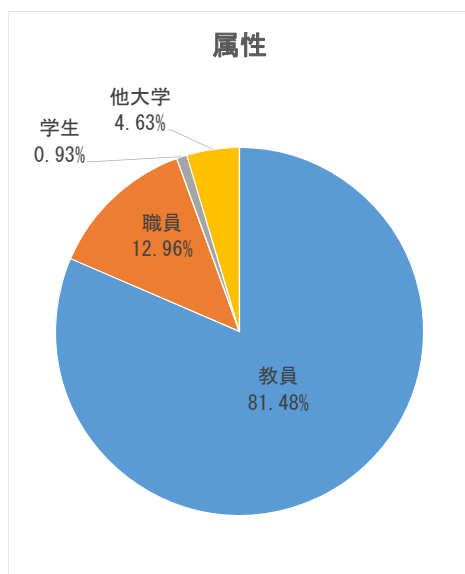
5. 全学FD2021に参加しての評価を次の中から選んでください。

- ア. とても意義があった イ. おおむね意義があった
ウ. どちらとも言えない エ. あまり意義がなかった

オ. 意義がなかった

6. 本日の全学FDについて、ご意見・ご感想を自由にご記入ください。
7. 今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、ご記入ください。

第2回全学FD2021 参加者アンケート結果



設問3 今回のFDのテーマ「クラスデザイン」について、担当する授業に実際に応用して役立てることができるかどうか（「教員」のみ回答）

ークラスデザインについてー

- ・シラバス作成から実際の授業にも使える話がたくさんあり、大変勉強になりました。
- ・クラスデザインについてあまり深く考えていなかったので、ADDIEモデルは参考になった。目標の設定など様々な面で役立てることができると思う。
- ・クラスデザインを導入することで学生のニーズに応え、限られた授業時間を最大限に生かすことができる。
- ・クラスデザインへの認識が深まりました。
- ・担当講義が、基礎学力の養成のためのものなので、「クラスデザイン」を直ぐに取り入れられるとは思っていません。ですが、情報だけは常にアップデートしておきたいと思っています。
- ・本日のご講演内容では、自分自身のクラスデザインに応用できるヒントが数多くあり、今後授業改善の指針とさせていただきたいと思います。
- ・授業内容を分析することから始めるつもりです。
- ・授業のブレークダウンを明確化することが肝要だと改めて考えさせられました。
- ・役に立てることができると思います。講義の目標設定など漠然と考えていたところがあったが、今回のFDにより明確に意識することができるようになりました。
- ・目標設定などは行っているが、反復学習のためのレポート課題などは1度のみになっているため、課題の出し方などを工夫し、授業期間中に何度か学生が反復できるようなスケジュールを組むことにより、学生に内容を身につけさせることができるのではないかと思います。また来年度に向け、もっとも大事なことと思われる学生のモチベーションを持続させる工夫を模索していきたいです。
- ・学生の興味と課題内容のバランスをどのようにとるのか、参考になりました。
- ・興味を引き立てるということ、小さい課題から大きい課題へ導いていくこと、また忘却曲線についてとても勉強になりました。
- ・語学(英語リテラシー)を担当しています。学生さんに課題を与え、自身で、あるいは学友と一緒に考える事ができるような授業を目指したいと思うようになりました。英語の授業で「課題の設定」を行うのは難しいと感じておりますが、まずは学生さん同士が話をする工夫から始めてみたいと思います。
- ・講義主体の授業であるが、課題の出し方として、学生が興味のある分野との関連付けや課題をもとにしたグループワークなどを通じて学生の理解度を深めることができるのではないかと感じた。また、対面でのzoom併用は講義主体の授業でも活用できると思う。
- ・繰返しインプットさせる方法、モチベーションを持たせる仕掛けについて考えていきたい。
- ・学生のモチベーションを高める工夫など、役立つ点があったと感じました。

- ・分析を計画に生かすことが最も大切など心構えや授業設計へのモチベーションをいただきました。ありがとうございました。
- ・反転授業は是非取り入れたいが、なかなか設計が難しい。
- ・意識して講義の準備を行おうと思います。
- ・授業の振り返りになりました。
- ・事前アンケートで学生のおおよその理解度を測る方法

—ツールについて—

- ・紹介されていたオンラインツールを活用したい。Slido や liveQ はクリッカーのように事前の準備も要らないので導入しやすく、学生との双方向性を高めることに寄与すると期待している。
- ・特に学生からの反応を得るツールに関して、役立てることができると考えている。
- ・moodle ではアンケートや質問のリアルタイム表示できないので、照会されたツールは有用だと思った。
- ・スライドソフトは試してみたい。
- ・対面の授業においてもオンラインで教員が回答を求めたり、学生どうしが意見を共有できるようにすれば興味関心を保ち続けることができると感じた。
- ・役立てることが可能（複数回答有）
- ・大いに役立てられそうです。（複数回答有）
- ・役立てる事ができるものも多々あり
- ・役立てて授業の質向上に努めるべきと思いました。
- ・とても役立てることができると感じた
- ・ぜひそうしたい
- ・可能と思います。
- ・色々できそうです。
- ・非常に参考になりました
- ・出来ます。ちょうど来年度担当の講義の準備をしていたところで、大変参考になりました。
- ・参考になりました
- ・参考にさせて頂きたいと思います。
- ・かなり有意義な研修でした。「ここまではやらないといけない」が他科目との繋がりやカリキュラムで制限されると苦しい点があるのは事実ですが、さまざまな観点を得ることができたと思います。
- ・とても有意義な内容だったので今後の授業に役立つと思います
- ・有意義でした。
- ・とても参考になりました。応用して活用したいと思います。

- ・いくつか有益な気づきがあり、今後の授業に応用できそうです。
- ・応用できそうです。
- ・応用して役立てることができると思う。
- ・役立てられる部分はある
- ・導入できそうなものもあります。
- ・場合によっては参考になると思います。
- ・ある程度反映できそう
- ・ある程度はできると思います。
- ・ある程度改善できるのでは無いかと感じた。
- ・部分的には可能
- ・部分的にはできそうです。
- ・部分的に役立てることができるかもしれません。
- ・授業のレベルを学生に合わせて調整するなど、部分的に応用できると考えています。ただ全部を当てはめるのは難しいと思います。
- ・担当している医学科の講義授業は、教授内容の基準となるコアカリキュラムが決まっているため、知識教授型のスタイルから逸脱できない。一方、実習では内容を工夫することで応用することは可能と思われるので、今後検討したい。
- ・たくさん取り入れたいアイデアがありました。一番考えが足りなかったのは、対象学生のことですね。反省です。
- ・導入できそうなものもあります。
- ・リモートの場合いろいろと取り入れられる知恵がありそうです。
- ・たくさんあってもすぐには考えられないが、できるものを見つけたい。
- ・講演内容のすべては無理だが、一部は取り入れることは可能である。
- ・内容の一部は参考となり、今後に活用できると思う。
- ・活用できるとは思いますが、咀嚼がまだ十分に行えていません。
- ・多少は応用できる。
- ・まずできることを考えます。
- ・検討します
- ・簡単ではないと思いました。
- ・できると思いますが、毎週複数の授業で学生に課題を出しており、その点検に追われる現状があります。クラスデザインを根本から変えないと、今日のお話のレベルには到達しないと思います。
- ・ツールの利用で、不慣れななか、逆にトラブルが起きる懸念を感じた
- ・ダークフォームは便利そうですが、実演してみせていただいても、自分で作れる自信がありません
- ・オンライン講義での見せ方・学生対応など、従来授業からの延長としてお話いただいてお

り、簡単そうに見えた。しかし、実際に一から導入してクラスデザインするには非常にハードルが高く感じました。特に従前の黒板講義に慣れた教員の場合、全教科をデザインするだけでエフォートがなくなるため、本格的に導入できる教員がどれだけいるか疑問でした。

- ・今日の講演だけでは、なんとも言えません。実際に取り組んでみて、それを第三者とともに評価して、試行錯誤を続けないと、なんとも言えません。
- ・授業自体は完成度が高いと考えており、今回のFDはあくまで参考程度のつもりで受講。

設問6 本日の全学FDについてのご意見・ご感想

—肯定的な意見—

- ・栗田先生のお話は非常に分かりやすく、内容はもちろんのこと、ご講演の構成自体も非常に勉強になりました。技術的なことも含め、今後の自分自身の授業に取り入れて行きたいと思います。本日は、貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。
- ・講義について考え直す良い機会となりました。ありがとうございました。
- ・参考になる内容があったので、今後の講義に取り入れてみたい。
- ・授業に活かせる感じがします。
- ・ワークショップで、実際に遠隔授業を行う際に役立ちそうなツール等を、画面共有しながらご紹介いただいたのが、大変参考になってよかったかと思います。
- ・素晴らしい講師から、限られた時間で多くのことを学ぶことができた。
- ・集団教育をしている以上、学生からのアンケートを活かすにしても、すべての意見を取り入れることが不可能だと思います。先生のご講演は有意義でしたが、良いバランスを自分で判断するのはやはり難しいのだと感じました。
- ・栗田先生の著書は事前に目を通していたが、講演を聴くことで内容が整理されて把握しやすかった。ありがとうございました。
- ・もっと詳しく多くの話を聞きたいと感じた。栗田先生の著書を読みたいと思います。
- ・教員ではなく、職員ですが、講師（栗田先生）のお話は具体的な内容も多く、大変わかりやすかったです。
- ・それぞれ工夫された授業をされており、とても勉強になりました。
- ・理論的な部分と事例もあってよかったと思います。
- ・とても学びの多いご講義でした。ありがとうございました。
- ・非常に参考になりました
- ・たいへん参考になりました。ありがとうございました。
- ・とても参考になりました。どうもありがとうございました。
- ・参考になりました。
- ・役立った

- ・参加者の能動的な関わりが多く、有意義だった。参考になる書籍やウェブサイトも紹介もあり、今後活用したい。
- ・大変有意義であった。
- ・大変有意義な FD であったし、参加者も多くてよかったと思います。これはオンラインの威力ですね。
- ・スライドデザインやモチベーションに関する解説もあり、とても有意義な FD 研修会でした。
- ・具体的で有意義な内容でした。ありがとうございました。
- ・私にとって有意義な FD になったと思います。
- ・有意義でした。
- ・講師の選定が良かったと思います。
- ・いい内容でした
- ・技術的なトレーニングができるような研修だった。
- ・普段あまりアプローチできていない点についてアドバイスをいただき大変参考になりました。
- ・次回以降も他大学への受講案内をして下さい。

—建設的な意見—

- ・授業担当教員向けの話と、カリキュラム編成を行う職員向けの話が混在していたので、話題を分け、それぞれの話題の会に当該教職員を招く方式にした方がもっと深く参考になることを学べると思いました。
- ・本日の FD は具体策が多く提示されており良かった。学生による授業評価が悪い方は、オンデマンドでも受講いただき、授業改善の参考にされたい。なお、授業改善について、グッドプラクティスを Web で公開したり、それらを題材に勉強会を開催するなど、教員同士で気軽に相談できる機会（教養教育の部会、学部の FD 委員会、シラバス勉強会、その他）を増やせば、より組織的に改善が進むと思われる。
- ・ご企画ありがとうございました。アメリカでも活躍されてられた栗田先生に、アメリカと日本の教育法の違い、それぞれの利点、課題などもお聞きしたかったです。
- ・日程調整上、やむを得ないものと理解しているが、定例教授会等で参加できない部局がある中で開催することは残念だと感じた。後日、オンデマンドで視聴できる機会を設けていただければ幸いです。
- ・まずはこのような機会に参加させていただきありがとうございました。今日は栗田先生の知識及び経験を踏まえた、且つ非常に整理された内容のレクチャーが非常に参考になりました。学生さんにわかりやすい丁寧な授業づくりの工夫として役立てたく思いましたが、実際のワークショップでの活動時間が短かったのが若干残念でした。
- ・質疑応答に工夫がほしかった

- ・大変興味深い研修でした。（本論とは関係ありませんが）チャットで一部の教員が話の流れを切るような不規則発言をしているのが目につき、講師の先生の対応がスマートだったな、という感想を持ちました。ただ、運営側でも交通整理ができるとよいのかもな、と感じました。教員免許を有さない大学教員が講義をする上では、こうしたものを全教員必修研修（新任教員研修にも盛り込むなど）にしてみるのも良いかもしれません。
- ・チャット機能が活用されていたが、野放図な書き込みが多かったと思う
- ・Zoom ミーティングではなくウェビナーの方が良かったかもしれない。

—その他—

- ・開催時に授業があったため参加できませんでしたが、動画が共有されていたので、後で視聴することができ、良かったと思います。
- ・自分自身で答えが見つけられずにあります。実際の授業の中で色々試行してみたいと思います。
- ・抽象的な話しが多く、こちらが期待していた内容とは異なりました。
- ・私が企画・立案・実施していたものと比べると教育学っぽい。
- ・zoom でグループ分けされる側の気持ちがわかった。
- ・試験を厳しくして、しっかり学習しない学生は留年させるべき。

設問7 今後、全学FDで取り上げてほしいテーマ

- ・大学における学びといった根本的な課題について意見交換ができればと思います。
- ・国立大学の個性なき平準化
- ・大学としての授業の在り方
- ・同様のテーマ（講義の仕方）について別の講師の講演も聞いてみたい。
- ・授業改善のケーススタディを取り上げてほしい
- ・アクティブラーニングの促進についてほかの先生の経験をお聞きしたいです。
- ・AL, DS, 英語教育で育成される人材像とは？
- ・反転授業
- ・大教室（300人以上の教室）での講義の工夫
- ・板書をうまくするやり方を学びたい
- ・オンラインでの教育効果
- ・周知の通り、学力に学生間で大きな差があります。それぞれのレベルに合わせた習熟度別授業を編成するやり方、学生が自らの学力を評価して適切なレベルの授業を選択する方法などに関して実践例をお聞きしたいと思います。
- ・授業における学生のモチベーションを高める方法など
- ・授業評価アンケートと改善（の実例）
→実際に、授業評価の内容を踏まえてクラスデザインを工夫し、成功した事例の共有など

- ・教員の困りごとを共有して検討する
- ・ヨビノリ・たくみ氏による講義・解説の指南
- ・適切かつ厳格な「成績評価」の方法・講義運営に役立つ（かもしれない）ツールの使用実践例
 - 学内教員の好事例を共有
- ・成績の厳密化評価の意味する所
- ・成績評価の分布付けは本当に必要なのだろうか？ 適切な評価の仕方とは？
 - 今回のFDの冒頭質問（失敗例）を事前に集約した上で、何点かを選定し、講師および受講者で事例検討を行うなど”
- ・大学教員の研究と授業の両立
- ・教育と研究の両立のための良い方法
- ・PBLなどで学外との連携が増えているが、（毎年受講生はかわる）学生主体というPBL授業についての学外協力者の距離感などについて取り上げていただきたい.
- ・学生主体のゼミナール運営
- ・MicrosoftTeamsの講習はFDでやるべきかと感じました。
- ・組織におけるメンタルヘルス

3. 各部局におけるFD活動報告

令和3年度FD活動報告

部局名 人文学部・人文科学研究科

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

今年度は、部局で2回FD研修会を実施した。第1回研修会では、他大学におけるアクティブ・ラーニングの実践例に関する講演会を開催した。第2回研修会では、第1回研修会でのアンケート結果を踏まえ、基礎ゼミナールの経緯と内容を部局の教員で共有した。

【取組事例】

- ・第1回FD研修会（2021年10月13日（水）13:15-14:15）
「九州大学文系ディシプリン科目「芸術学入門」における双方向的授業実施について」
講師：石井祐子先生（九州大学基幹教育院准教授）
講師から、本学でも導入しているMoodleを活用した学生による相互評価など、アクティブ・ラーニングの具体的な実践方法について講演していただいた後、質疑応答を行った。
- ・第2回FD研修会（2022年2月9日（水）14:50-15:00）
「基礎ゼミナールのこれまでと今後」
近年着任された若手教員に基礎ゼミナールに関する情報を提供する機会として、特に今年度退職される教員からこれまでのご経験を伝えていただいた。

【得られた成果とその活用】

第1回研修会のアンケートでは、大人数を対象とした講義で、Moodleを活用したアクティブ・ラーニングの具体的な実践例が紹介されたので、大変参考になり、自分の授業でも取り入れてみたいという回答が複数得られた。第2回研修会は、来年度初めて基礎ゼミナールを担当する教員だけでなく、これまでに担当経験のある教員にとっても参考になる情報交換の機会となった。従って、いずれも今後の教育改善に向けて一定の成果があったと考えられる。

【今後の課題】

個々の教員・分野・コースでの取り組みを組織として共有し、どのようにして教育改善・教育評価に反映させていくかは、今後も検討すべき課題である。

令和3年度FD活動報告

部局名 人間発達科学部

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

- ①学部授業評価アンケートの実施
- ②大学院授業評価アンケートの実施
- ③卒業時調査の実施
- ④修了時調査の実施
- ⑤授業評価プレアンケートの実施
- ⑥学部FD研修会の開催（年1回以上を目標に）

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載）

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい）

●授業評価関連：①②⑤

授業評価の分析結果は、教育方法改善検討委員会において算出し、全体結果を教授会にて説明・共有している（現在分析中のものは後日）。また、教員個々に対する詳細なフィードバックも行う。

●卒業・修了時調査関連③④

学生の修学やそれらに対する評価等について、全学と連携し実施した。

●学部FD研修会⑥

本学部は令和4年度より教育学部の改組を控えている。そのため、令和3年度はカリキュラムの調整などに大幅な時間と労力が割かれた。

今年度は、金沢大学との共同教育課程において、教員養成プログラムのテキストとなる「なるためノート」の活用や理解について研修会を実施する予定である（3/9を予定するも、改組に関する学部会議のため、3/20に実施を延期）。

【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

●授業評価関連：①②⑤

教授法の振り返り、学生とのコミュニケーション、授業の改善

●卒業・修了時調査関連③④

現在、データ収集を完了し、集計結果については全学からの報告を待機

●学部FD研修会⑥

富山大学と金沢大学が合同で設置する新課程（教員養成課程）において、学生指導体制として

ユニット制を採用する。学生においては、希望する免許種や科目を超えて、さまざまな学生相互による共同活動を通じ、互いに刺激を与え合う集団となるよう、教員の心構えや活動の指針となる「なるためノート」の活用などについて、検討する。

【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

令和4年度より開始される共同教育課程においては、金沢大学との遠隔授業なども実施予定である。ICTや各種システムによる深い学びが伴う授業運営について研修する必要がある。

また、上記の通り、教職を希望する学生に向けた学生達への教授法や体制について引き続き研修を企画する。

以上

令和3年度FD活動報告

部局名 経済学部

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

- ・授業評価アンケートを継続的に実施している。
- ・卒業次アンケートを継続的に実施している。
- ・過去数年次にわたり実施してきた、Progテストの説明会を本年度も行った。入試の多様化などでさまざまな学生が入学する中、経済学部学生のリテラシーとコンピテンシーの現状を知る機会とした。リテラシーについては高い数値を保ち、近年は伸びる傾向が見られていることを確認した。
- ・出版社の編集者を招き、オンライン講義で準備する教材作成の注意点について学んだ。自習できる教材が求められていることで、コロナ禍での学習者の変化がよく理解できた。
- ・教授会開催日に合わせて研修会を行うことで、研修会への参加状況はかなり良好である。現行の方式に対して、参加しやすいとの意見があった。
- ・研修会への参加を、教育活動の実践として教育評価との指標としている。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載）

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい）

- ・教員対象のFD研修会を3回行った。
- 第1回（6月23日）参加者：48名（参加率92%）、テーマ「Progテストの解説（1年次）」
- 第2回（11月10日）参加者：45名（参加率87%）、テーマ「オンライン教材の課題－編集者の視点から－」
- 第3回（12月8日）参加者：48名（参加率92%）、テーマ「Progテストの解説（3年次）」

【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

研修会終了後に行ったアンケートから、何点か抜粋する。

- ・知らない分野の人の話を聞くことができて有意義だった（第2回）。
- ・違う学問分野の話ではあったが、いろいろと注意すべき点が分かった（第2回）。
- ・編集者という第3者の見立てを学ぶことができた（第2回）。
- ・出版社の実際が分かった（第2回）。
- ・今までに知らなかった事実を知ることができた。

【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

研修会終了後に行ったアンケートから、何点か抜粋する。

- ・ 研究活動に関する F D 推進への希望があった。次年度以降の課題となるテーマである。
- ・ Prog テストについては参考になっていないとの意見も見られた。調査内容に教員が積極的に関わる必要があるかもしれない。
- ・ 効果が分からないので Prog テストは再検討した方がよい。
- ・ 過去に開催した授業評価が高い教員の実践例の報告が最も有意義だった。次年度以降の課題である。
- ・ 3 学科に共通した F D 実施は難しい。
- ・ 実践の具体化が見えない。

令和３年度ＦＤ活動報告

部局名 理学部

【令和３年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたＦＤを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

令和３年度は、理学部教員の間で要望が高かったデータサイエンス教育に関するＦＤ研修会を１２月に開催した。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載

教育改善・教育評価に資するＦＤの実施状況を記載してもよい）

データサイエンスに関するＦＤ研修会（オンライン開催）

「データサイエンス教育の進め方について - モデルカリキュラム、新指導要領との関連 - 」

日時：令和３年１２月１日（水）１３：００～１３：３０

講師：データサイエンス推進センター長

総合情報基盤センター長

教養教育院 栗本 猛 教授

【得られた成果とその活用】

（ＦＤを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

以下の内容をご説明いただき、データサイエンス教育に関して情報共有することができた。

- ・データサイエンス教育の目的
- ・データサイエンス教育モデルカリキュラム
- ・高校での教育と新指導要領
- ・高等教育機関でのデータサイエンス教育

【今後の課題】

（今年度のＦＤの実施により明らかになった課題等を記載）

今後も教員が教育の現場で直面している問題に対するサポートとなるようなテーマを企画できるような取り組みを進めていきたい。

令和3年度FD活動報告

部局名 工学部

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

学部3年生の投票に基づき選出された令和2年度ザ・ティーチャーの教員から、コロナ禍における授業の実施に際して意識したことや工夫したこと等についてご講演いただき、授業や教育方法の改善・向上に役立てるために研修会を開催した。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい）

「Zoom」ミーティングを利用したオンライン配信により、令和2年度工学部ザ・ティーチャー選出教員（5名）による学生の満足度が高い授業などの事例発表及び質疑応答を行った。

【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

各コースのザ・ティーチャーに選出された5名の教員による事例紹介を行い、授業の実施に際して意識していることや工夫等について情報共有を行った。その結果、多くの教員が今後の授業改善に役立つヒントを学んだ。

以下は、講師から紹介された事例の一部である。

- ・ 遠隔授業用に準備した講義動画教材の長さは、視聴者の集中力等の観点から20分程度又は40分程度と短めにした方が良い。これに、クイズや課題演習などの学生の作業を組み合わせる1コマの授業を組み立てるのが良い。
- ・ 教養教育科目を担当している教員からは、他学部向けの講義の準備が工学部向けの授業にも、説明の導入部分に生かせることが分かった。
- ・ 板書は、学生が書き取るノートを意識しながら行う。説明時は、論理の飛躍が無いようにペースの配分に気を配る、といった事を重視している。
- ・ 1年次の科目の中には、講義に関連する理科の科目を高校で履修している者と履修していない者の両方がおり、理解度に差があるため、学生が求めているものを把握して早めに対応する事が重要であること。

【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

今回の発表は、令和2年度の取り組みによるため、遠隔授業の実施報告など今年度の状況と異なる部分はあるが、遠隔授業の実施に当たって準備した資料や動画が学生の反復学習に繋がっている報告が多くなされた。

そのため、対面中心の授業を実施する際にも、これらの取り組みを上手く取り込められればとの意見が出された。

中には、電子資料や講義動画等の提供により成績評価の向上に結び付いていたとの報告もあったが、質疑の際には、評価をリモート形式で行った場合に公正性などの担保が難しいのではとの質問もあり、今後の課題となる事が窺えた。

以上

令和３年度ＦＤ活動報告

部局名 医学部

【令和３年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたＦＤを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

昨年度までは、変わりゆく医学教育の考え方や教育手段を取りいれながら、コロナ禍での教育の工夫について取り上げてきた。今年度も引き続き取り上げるとともに、R4年度に控える医学教育の認証の認定更新に備えて共有すべき内容を取り扱った。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載）

教育改善・教育評価に資するＦＤの実施状況を記載してもよい）

第１回 令和３年６月２５日（金）１７：３０～１８：３０「コロナ禍の医学教育」（Zoom開催。参加者３２名）

コロナ禍での取組みを情報共有したのち、Googleスライドを利用したグループワークを体験した。試験に関わるテーマを取り扱う都合で、小規模開催とした。となったが、オンデマンド視聴可能とした。班分けや事前学習が課題と考えられた。

第２回 令和３年８月７日（土）１３：３０～１６：３０「Whole Person Care 研究会＆富山大学医学部FD・併催 Whole Person Care の事例検討とマインドフルネスの教育」（Zoom開催。共催関係含め事前登録者９５名、うち富山大学３割。当日参加者８１名）

事例提示後にグループワーク「whole person care に近づくためにできること」を行い、パネルディスカッション「Whole Person Care の視点」と全体討論を行った。「エクササイズと瞑想によるマインドフルネス」により、医療者自身のセルフケアについて体験型学習を行った。

第３回 令和３年１０月４日（月）１７：３０～１８：３０「分野別認証評価認定更新に向けて」（対面・オンライン。参加者４５名）

医学教育の分野別認証評価認定更新に向けて、受審の振り返りと認定更新に向けた対応、分野別担当者と更新に向けての対策を検討した。

【得られた成果とその活用】

（ＦＤを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

FDとして初めて用いることとなった、Zoomのブレイクアウトセッション機能、Googleスライドが手段として活用できることが確認できたとともに、参加者自身の授業での活用が期待された。また、共催オンライン開催とすることで、他施設・多職種との共同の機会となることが確かめられた。分野別認証評価認定更新についての情報共有につながった。

【今後の課題】

（今年度のＦＤの実施により明らかになった課題等を記載）

FD開催の案内方法について検討の余地があると考えられた。

令和３年度FD活動報告

部局名 医学部看護学科

【令和３年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

看護学科における過去数年のFDに関する内容は、「看護学科におけるアクティブラーニング」「障がいのある学生に対する支援」「パフォーマンス課題と評価」などであった。毎年、看護学科の教員がほぼ全員参加で実施しており、その年度の課題を中心に、講義、グループディスカッション、全体討議等で、教育に関する情報共有、教育における課題や解決の方向性を具体化している。しかし、令和２年度は教員削減による教員の負担増による対策のため、講座構成の枠組みを検討し、組織改編の検討に入った。そして令和３年度は教員のストレスや心の在り方に関する話題となり、これまでの学生に対する課題から、教員側の課題に視点が大きく変わったことになる。

その理由として、２つ挙げられる。まず教員人数としては、平成２５年には３６名が在籍したが、現在は２７名（令和３年９月以降）で９名の減少になり、教授も３名減った。一方、古今未曾有のコロナ禍により、オンライン授業による教育手段の変更、実習の継続方法などに伴う教員の労働ストレスが増してきたと思われる。

従って、COVID-19 対策のため非対面授業が多くなる中、より良い教育改善・教育評価に携わる教員の心の在り方に目を向け、教員のマインドフルネスなどを考えるに至ったのである。

【取組事例】

そのため令和３年度のFDは「看護学科教員自身のためのWhole Person Careのために」というテーマで、教員一人ひとりが自己の心に向き合い、ストレスの状態を把握し、マインドフルネスへの取り組みの方向性を具体化することを目的にした。すなわち、コロナ禍の時代を乗り切るために、各教員が自己を見つめなおし、トータルケアの対象としてアセスメントしなおす機会をもつことである。また同時に、少ない教員で多くの課題に対峙するため、相互のサポートを考える機会にしたいと考えた。

方法としては、Whole Person Care 研究会と併催した医学部FDに参加し、医学部内あるいは当該研究会に所属する学外の教員とパネルディスカッションや総合討論により意見を交えて、自身の状況を見つめなおすものである。なお感染対策を前提にするためオンラインでの実施である。

【得られた成果とその活用】

今回の当該研究会のテーマは「Whole Person Care の事例検討とマインドフルネスの教育」であり、第一部は事例提示とパネルディスカッションで、第二部はエクササイズと瞑想によるマインドフルネスについての講義と総合討論である。今年度の看護学科FDでは２７名の全教員が参加した。Whole Person Care 研究会の会員の先生は普段ではコミュニケーションが持てない先生方で、そのことを重視した考え方や状況も共有できた。またグループ別のディスカッションでは教育現場における自身の在り方を個別に述べることで心のストレスを客観的に評価できたのではないかと考えられた。エクササイズと瞑想によるマインドフルネスの考え方を取り入れることで、ストレス軽減につながることを学んだ。もちろん各個人がこの機会に学んだことはそれぞれ異な

るため、令和3年度FD報告書として冊子体にまとめて報告書となる。それを振り返ることで相互の考え方を理解し、学生教育に携わる者としてのより良い日常生活に活用したい。

【今後の課題】

これまで看護学科では、看護学教育のカリキュラム改正や大学の方針を受けて、教育内容、教育方法、開講時期、授業時間等を見直し、改善を多角的に行ってきた。一方、教員が考える看護学を学生に深く教育するには難しい側面も多い。カリキュラムを追従するだけが全てではないし、経済的あるいは時間的に効率的な看護教育が最善とも言えない。ここに教員のジレンマが多々生じるだけでなく、コロナ禍という特殊な環境で、自分が理想とする教育になかなか近づけないことにストレスを感じる現状である。これらを教員個別の問題と捉えず、共通の課題として、少しでも解決できるようにしていきたい。そのための模索と取り組みを今後も継続・発展していく。

令和3年度FD活動報告

部局名 薬学部

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

主に授業満足度向上とR4年度改革に向けたカリキュラム再編の2つの課題について取り組んだ。特に、R2年度に行った高評価科目担当者へのアンケート調査、および最近数年の授業評価の解析、カリキュラム部会での学生との意見交換などを基に、本年度薬学部FDで教育効果の更なる向上を図るための方策について議論した。FDでは、別途、アクティブラーニングを先導している教養理系基盤科目担当の杉森保准教授に「講義での工夫と心がけていること」として、実践しているアクティブラーニングやその効果等について紹介して頂いた。R4年度学部改革でのカリキュラムの見直しについては、理系基盤科目担当教員にオブザーバー参加頂き、教養教育と専門教育の分担や継続性を念頭に、具体的なカリキュラム編成内容について意見交換した。このFD討議の前に、講義内容やカリキュラムに関して、FD参加教員と薬学部1～6年生との意見交換を予定していたが、コロナウィルス感染拡大の影響をうけ中止となった。学生との意見交換については、後日、教務委員会を中心とした教員とのカリキュラム部会を開催した。

【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

授業の質改善への取り組み：授業満足度、アクティブラーニング

- FDや教授会では授業評価結果を報告した。また授業への自由意見の内容についても公開し、他の科目の学生評価を参考できるようにした。
- アクティブラーニングへの取り組み状況を再調査した。優秀な取り組みは教授会で紹介され、全学FDで事例として報告した。
- アクティブラーニングに関する杉森准教授の講義をon lineで行った。数多くの質問があり、活発な意見交換がなされた。
- 薬学部1～6年の学生と教員で構成されるカリキュラム部会を開催し、講義に関する内容、具体的には、わかりやすい講義、集中できる講義、講義に求める工夫や手法、英語教育などに関する意見交換を行った。
- 英語教育では、卒研発表会におけるプレゼンテーション資料の英語表記、英語による概要説明を実施した。
- 実務経験者による講義については、可能な限り、対面あるいはon time講義を実施し、学生との討議などを通して、モチベーション向上に取り組んだ。

カリキュラム改革

- 物理／化学／和漢系と生物／薬剤・薬理／医療系の分野別で専門科目の具体的な講義内容の確認を行い、重複や繋がりなどを検討して薬学部としての意見を集約した。それを基にFDでは、基盤教育科目担当者を交えて、教養教育科目と専門科目の役割分担に関するコンセンサスをとった。また、R4改革による2年次の科目増加に対する方策についても話し合った。
- カリキュラム部会では、英語教育／キャリア教育にもとめるもの、講義・実習科目の順序や学習範囲の重複などに関する意見交換を行った。
- 薬学部各学科に特化した科目、および専門コースを新設した。また、新しい卓越薬学教育プログラム「脳科学コース」を追加することにした。
- R4以降入学生の3年次での研究室配属に伴い、基礎薬学実習の再編と再配置、さらに一部の座学の再編および再配置を行うことを決めた。
- 各学年、前期後期における負担度を考慮して、複数科目の年次配当を変更し、さらに、卒業要件単位数の見直しを行った。
- データサイエンス教育、キャリア教育、医療人教育に関連する科目の新設、および既存科目の再配置を決定した。

【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

- FDでの議論や、教授会における授業評価結果の報告を行い、教員の意識改革に繋がるよう努めた。R3年度FDでの杉森准教授の講義には多くの質問がなされたが、実際に、アクティブラーニングの導入、授業満足度向上に向けた取り組みが複数科目で実施されている。R3年度前期までの数年間において、満足度に関する学生評価は着実に向上しており、改善が図られていることが示された。
- 教養理系基盤科目や実験の内容の把握と順次性、重なり等を再確認した。それらを考慮し、R4以降の入学生に対する1年次実験、2年次以降の専門実習については学年、学期、科目順を考慮して配置し、それに従って座学の配置を決定した。
- R4カリキュラム改革における2年次への科目増加に対し、複数の2単位科目において1単位分割を行い、開講学年と試験期間の分散化を図ることにした。
- 以上の改革内容を考慮して、進級要件、卒業要件を検討し、決定した。

【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

- 講義では、質問しやすい環境作り、問題意識を持ち集中しやすい資料作り、資料や機器などの効果的な活用、などが細かな配慮が大切となる。
- 専門英語では論文翻訳、読解等が多いため、自分の意見を述べる内容も組み入れてはどうか。
- 講義内容が多い専門科目では、アクティブラーニングの時間をとりにくい。

令和3年度FD活動報告

部局名 学術研究部芸術文化学系

【令和2年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

7月28日に芸術文化学系のFD研修会を実施した。また、3度行われた全学FDおよび2度行われた教養教育院のFD研修を学系内に案内し、積極的な参加を促した。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい）

7月28日富山大学アドミッションセンターの舟橋特命教授を講師として、「富山大学を受験する高校生の動向について」のタイトルで講演頂き、その後舟橋教授と学系の教員との間で、入試志願倍率の変化、受験生の層の変化等に関する意見交換を行い、アドミッションセンターが考える受験状況の変化について学修した。

【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

入試のあり方、入試改革の方向性に対する貴重な情報を得ることができた。

【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

コロナ禍が続き、オンライン講義が増加する中で、いくつかの問題が浮かび上がってきた。来年度は以下の点についてFD研修を行うことを考えている。

- ・オンライン講義での学修状況の把握－講義内容をどこまで修得できているかをどうやって把握するか、また学修を深めるためにはどうすればよいか

- ・大学に登校できないことによる学生間のつながりの希薄化の把握とメンタルケア

コロナ禍とは直接の関係はないが、最近の問題の一つとして

- ・障害のある学生への学修支援をどう行うか

令和３年度ＦＤ活動報告

部局名 都市デザイン学部

【令和３年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたＦＤを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

令和２年度に実施した「カリキュラムや授業改善に向けたアンケート（当時学部３年次対象）」、学部ＦＤ研修会「カリキュラムや授業の改善に関する学生と教員の意見交換会（令和２年１０月２６日開催）」により得られたカリキュラム上の課題を解決すべく、令和４年度カリキュラムの見直しを実施し、規則改正を行った。

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載

教育改善・教育評価に資するＦＤの実施状況を記載してもよい）

学生生活に関するＦＤ研修会を実施した（令和３年１１月１７日（水）１３時）。西山志満子 保健管理センター講師を研修会講師に迎え、「学生の心の不調を早期に発見し対応するには―問題が大きくなる前に―」と題して講演いただいた。

【得られた成果とその活用】

（ＦＤを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

学生が心の不調を引き起こす背景要因、学生支援のポイントについて理解を深めた。

【今後の課題】

（今年度のＦＤの実施により明らかになった課題等を記載）

コロナ禍において教員と学生の接触機会が減少しており、学生の心身の不調を早期に発見することがより難しくなっていることが課題である。

令和3年度FD活動報告

部局名 教養教育院

【令和3年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

（これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載）

教養教育についての教育改善を図るために次の活動を行った。

- （１）FD研修会（３回実施）
- （２）同一科目複数コマ開講科目における公平性の担保のための指針の策定
- （３）教育改善プロジェクトの推進
- （４）昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析
- （５）学生による授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼

【取組事例】

（どのような取組みを行ったかを具体的に記載）

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい）

前項に挙げた5つのFD活動について、それぞれの具体的な内容を以下に示す。

（１）FD研修会（３回実施）

今年度は3回のFD研修会を企画・実施した。第1回と第2回のFD研修会については、既に報告書を作成し、その公開を行った。第3回のFD研修会についても、今年度中に報告書を作成する予定である。それらのFD研修会の概要は次の様である。

○第1回：使えるシラバスの書き方と主体的学びを促すルーブリック

シラバスとルーブリックをテーマとして扱い、2部構成で企画した。第1部では「学生と教員との共通理解を図るためのツールとなるシラバス」とはどのようなものかを示した。第2部では、ルーブリックの基本的な説明を行ったうえで、正しい成績評価の在り方について理解を深めることを目指した。これらにより、教育の質の保証に対する問題意識を教員間で共有し、大学教育に対する教員の意識改革を促すことを図った。

開催日時：令和3年9月10日（金）、参加人数：58名（内訳：常勤教員49名、非常勤講師4名、職員5名）

○第2回：学生と考えるグループワークからPBLへ

グループワークを導入したアクティブラーニングやPBL（Project Based LearningまたはProgram Based Learning）をテーマとして扱い、それらの基礎知識と導入事例からの知見を共有することを図った。

開催日時：令和3年12月1日（水）、参加人数：46名（内訳：常勤教員34名、非常勤講師4名、職員5名、学生3名）

○第3回：先進事例に学ぶ教養教育 ～PBLと異文化理解～

全学的にアクティブラーニングに取り組んでいる三重大大学の先生方を講師として招き、PBLの導入とその実際について学ぶことを図った。講演者の方々を含めたパネルディスカッションや質疑応答を行い、今後の教養教育への高度なアクティブラーニングの拡大について議論した。

開催日時：令和4年2月2日（水）、参加人数：29名（内訳：常勤教員26名、非常勤講師1名、職員2名）

（2）同一科目複数コマ開講科目における公平性の担保のための指針の策定

同一科目で複数コマを開講している教養教育科目は多くあり、それらの成績評価の公平性や妥当性を担保するための指針を策定した。具体的には、そのような科目のシラバスについて、「授業のねらいとカリキュラム上の位置づけ」、「達成目標」、「授業評価の方法」の欄に科目共通の内容を記載することを求め、また成績評価についてはルーブリックを利用することを推奨することとした。

（3）「教育改善プロジェクト」制度の設立

教養教育院の各教員や教員グループの教育改善活動を「教育改善プロジェクト」として教育改善検討WGに申請・登録し、その遂行を推進・把握する仕組みを制定した。これにより個々の教育改善活動を可視化し、その推進を図ることができると考えている。これまでに10件の申請があり、本年度末にそれらの活動の進捗状況についての報告会を行うことを計画している。

（4）昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析

昨年度の授業評価アンケート結果とそれに対する授業担当教員からのフィードバックの内容について、教育改善検討WGにおいて調査・分析を行った。特に授業満足度を中心とした授業評価指標について分析を行い、オンライン形式の授業が行われたことによる影響についても探った。また、その調査・分析結果を報告書として公表した。

（5）学生による授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼

前期と後期それぞれの学期末に、教養教育科目についての学生への授業評価アンケートを実施した。また、昨年度後期と今年度前期の授業評価アンケートの集計結果を授業担当教員に示し、そのアンケート結果を受けての自己分析と改善への取り組み、学生の自由記述への回答を求めた。

【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

上記の5つのFD活動の成果について、それぞれ以下に示す。

(1) FD研修会(3回実施)

「第1回：使えるシラバスの書き方と主体的学びを促すルーブリック」では、学生と教員との共通理解を図るためのツールとなるシラバスと客観性のある成績評価のためのルーブリックの説明を行い、参加教員の間でそれらの知識の共有ができた。また、シラバスの作成やルーブリックの導入のためのテキストとなるようFD研修会報告書を作成しており、適宜その活用を期待している。「第2回：学生と考えるグループワークからPBLへ」では、高度なアクティブラーニングの導入事例についての情報共有を行い、今後の教養教育への高度なアクティブラーニングの導入についての議論を行うことができた。「第3回：先進事例に学ぶ教養教育～PBLと異文化理解～」では、PBLの導入を先進的に行っている三重大大学の事例を学び、PBL形式の授業の企画や運営、課題についての知見を得た。

(2) 同一科目複数コマ開講科目における公平性の担保のための指針の策定

策定した指針は、教育推進センター会議において承認され、来年度のシラバス作成に対する依頼要件となった。これにより、同一科目複数コマ開講科目の授業のねらいや達成目標、授業評価の方法等の標準化が進み、また成績評価の公平性がより担保されるようになるものと考えられる。

(3) 「教育改善プロジェクト」制度の設立

教養教育院の教員個人や教員グループによる教育改善活動をより推進するための制度であり、その設立により10件のプロジェクトの実施を促した。これにより、教養教育院の教員個人や教員グループの教育改善活動が可視化され、その推進を組織的に補佐できる体制が構築できた。

(4) 昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析

授業評価アンケート結果についての調査・分析により、教養教育の分野ごとの授業満足度に関する特色を整理し、授業満足度の向上に関連する要因を探ることができた。そこでは、教養教育一元化の体制となった昨年度、一昨年度と比べ、授業満足度の全体的な向上が見られた。また、前期のほぼ全ての期間と後期の数週間が非対面での授業となったことの影響も読み取ることができた。この調査・分析で得られた知見は、今後のFD活動においても活用していく。

(5) 学生による授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼

学生による授業評価アンケートを実施し、その結果に対する各授業担当教員からのフィードバックを求めることで、授業担当者の授業に対する自己分析と改善への取り組みのための機会を提供した。この授業アンケート結果と教員からのフィードバックについては、調査・

分析を行い、今後のFD活動に活用していく。

【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

- グループワークやPBLのような高度なアクティブラーニングを実施する授業の導入においては、複数の教員が共同で取り組むチームティーチングのような教育スタイルが有用であり、そのための仕組みを策定していく必要がある。
- 教養教育の教育改善においては、教養教育院の専任教員のみならず、学部の教員や非常勤講師も含めて担当教員の間での教養教育に取り組む意識の共有が必要となる。そのため、教養教育院のFD研修会を一層開かれたものとして企画・開催し、幅広い部局の教員および非常勤講師の参加を促せるよう考えていく必要がある。特に、テーマの選定や周知の仕方についての改善を検討する。
- 全学的なFDに貢献できるような教養教育院の教育改善活動を充実させていく必要がある。

4. 全学におけるアンケート結果

DP達成度調査実施

調査の目的

入学時からこれまでの教育成果を検証するため、全学部の学生(最終学年を除く。)に対し、学年末において裏面の項目についての調査を実施します。

これは、皆さんが、DP(ディプロマ・ポリシー:学位授与方針)に掲げる能力をどの程度身に付けることができたかを調査するためのものです。

皆さんはこの調査への回答を通して、自ら評価し、これまでの本学での学修を振り返って、今後の計画的な履修を行ってもらいたいと思います。

なお、皆さんからの回答は、学部・学科・学年毎に集計を行い、能力達成状況の把握を行うとともに、カリキュラム改善等に活用します。

回答方法

「Moodle」から回答してください。

(本学トップページ)→「在学生・教職員の方」→「Moodle」

<https://lms.u-toyama.ac.jp/login/index.php> (学外からもアクセス可)

ログイン後、「**DP 達成度調査 2020**」をクリックし、回答願います。

※ログイン時のパスワードは、本学情報システム(PC やヘルンシステム等)の利用時と同様です。

ユーザ ID(例) s2012345.ems

スマホからの回答は
こちらから願います



回答期限

令和3年 月 日17:00まで

留意事項

最終学年以外は、原則として全員が回答することとしますので調査への御協力をお願いします。

なお、未回答の方については、提出期限後に指導教員等を通じて調査回答依頼を行う予定です。

[お問い合わせ]

所属学部の教務担当または学務部学務課修学支援チーム

E-mail: j-gakumu@adm.u-toyama.ac.jp

※裏面は参考として回答項目を掲載

入学からこれまでの教育によって、DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与方針）に掲げる以下の能力をどの程度身に付けることができたのかを回答してください。

- 1) 課題や問題を自ら解決する能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 2) 組織や社会の一員として責任を持って行動する能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 3) 他者と協力し合うコミュニケーション能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 4) 口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 5) 母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 6) 国際的な視点で考えることや国際的な感覚
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 7) 教養教育等による幅広い知識
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 8) 専門教育による深い専門知識・技能
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 9) 幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 10) 地域を志向する意識（富山を通して、地域社会における諸課題を理解し、貢献しようとする意識）
 1. 十分身に付けることができた
 2. ある程度身に付けることができた
 3. あまり身に付けることができなかった
 4. 全く身に付けることができなかった
- 11) 本学での学生生活で得られたこと、あるいは得られなかったことについて、思うところがあれば自由にお書きください。

御回答ありがとうございました。

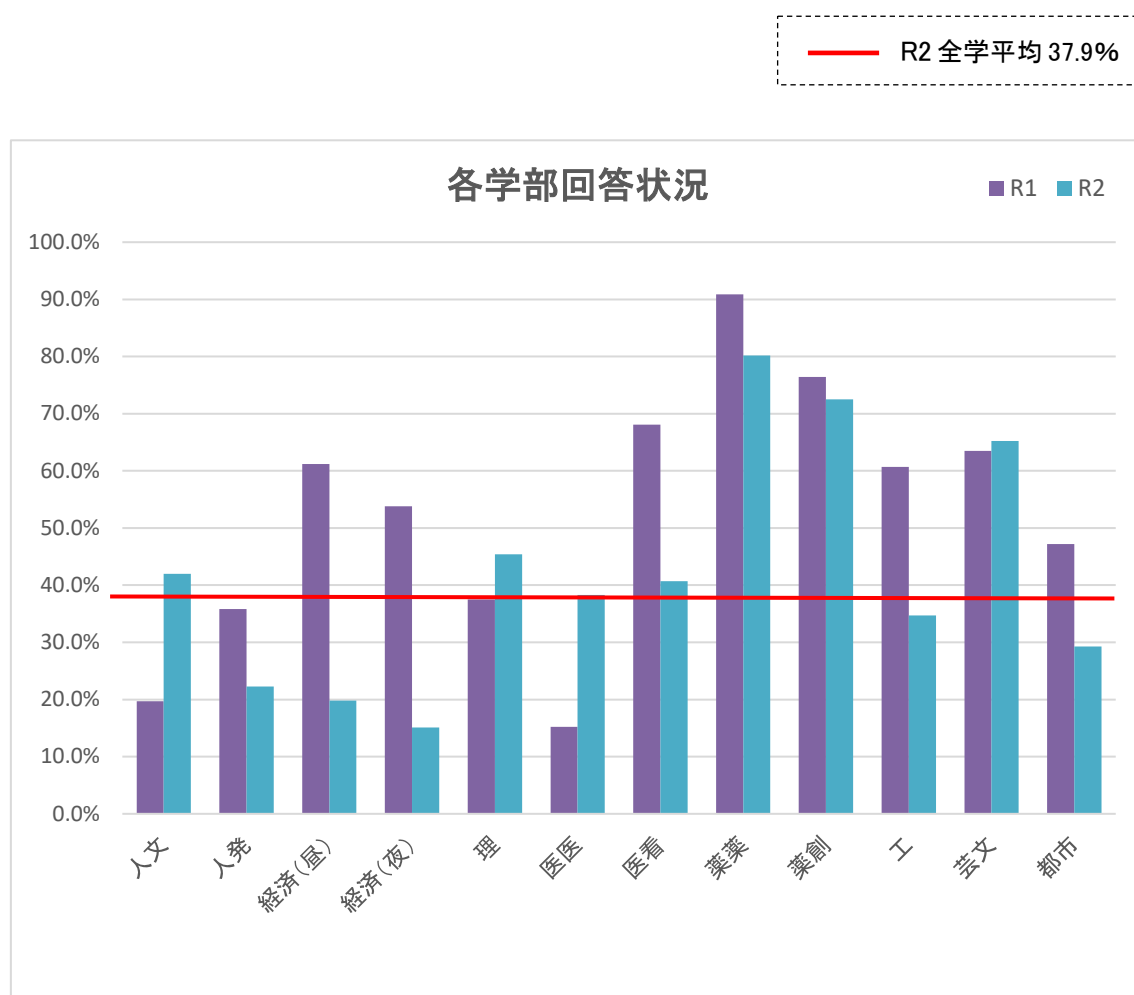
令和２年度ＤＰ達成度調査実施結果

実施時期：令和３年１月上旬～５月下旬（※一部の学部においては、４月中旬以降に実施）

対象学年：最終学年を除く全学年（対象学生数：５,８４５人）

実施方法：Moodleによる回答

回答学生数：２,２１６人（回答率３７.９％）



令和2年度DP達成度調査回答状況調

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率
人文学部	人文学科	1	178	536	109	225	61.2%	42.0%
人文学部	人文学科	2	174		61		35.1%	
人文学部	人文学科	3	184		55		29.9%	
人間発達科学部	発達教育学科	1	82	521	39	116	47.6%	22.3%
人間発達科学部	発達教育学科	2	82		15		18.3%	
人間発達科学部	発達教育学科	3	82		14		17.1%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	1	92		29		31.5%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	2	91		9		9.9%	
人間発達科学部	人間環境システム学科	3	92		10		10.9%	
経済学部(昼間主)	経済学科	1	119	936	35	185	29.4%	19.8%
経済学部(昼間主)	経済学科	2	126		14		11.1%	
経済学部(昼間主)	経済学科	3	128		18		14.1%	
経済学部(昼間主)	経営学科	1	104		31		29.8%	
経済学部(昼間主)	経営学科	2	101		29		28.7%	
経済学部(昼間主)	経営学科	3	103		23		22.3%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	1	84		26		31.0%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	2	83		5		6.0%	
経済学部(昼間主)	経営法学科	3	88		4		4.5%	
経済学部(夜間主)	経済学科	1	12	93	3	14	25.0%	15.1%
経済学部(夜間主)	経済学科	2	10				0.0%	
経済学部(夜間主)	経済学科	3	11		1		9.1%	
経済学部(夜間主)	経営学科	1	11		1		9.1%	
経済学部(夜間主)	経営学科	2	10		3		30.0%	
経済学部(夜間主)	経営学科	3	9		2		22.2%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	1	10		2		20.0%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	2	10		1		10.0%	
経済学部(夜間主)	経営法学科	3	10		1		10.0%	
理学部	数学科	1	51	614	29	279	56.9%	45.4%
理学部	数学科	2	50		19		38.0%	
理学部	数学科	3	51		17		33.3%	
理学部	物理学科	1	42		23		54.8%	
理学部	物理学科	2	42		17		40.5%	
理学部	物理学科	3	55		16		29.1%	
理学部	化学科	1	37		26		70.3%	
理学部	化学科	2	38		14		36.8%	
理学部	化学科	3	41		11		26.8%	
理学部	生物学科	1	35		31		88.6%	
理学部	生物学科	2	37		12		32.4%	
理学部	生物学科	3	37		14		37.8%	
理学部	地球科学科	3	4		1		25.0%	
理学部	生物圏環境科学科	1	30		23		76.7%	
理学部	生物圏環境科学科	2	30		12		40.0%	
理学部	生物圏環境科学科	3	34		14		41.2%	
医学部	医学科	1	106	549	37	210	34.9%	38.3%
医学部	医学科	2	111		77		69.4%	
医学部	医学科	3	115		46		40.0%	
医学部	医学科	4	114		27		23.7%	
医学部	医学科	5	103		23		22.3%	
医学部	看護学科	1	80	248	77	101	96.3%	40.7%
医学部	看護学科	2	78		9		11.5%	
医学部	看護学科	3	90		15		16.7%	
薬学部	薬学科	1	56	288	55	231	98.2%	80.2%
薬学部	薬学科	2	60		59		98.3%	
薬学部	薬学科	3	59		56		94.9%	
薬学部	薬学科	4	63		22		34.9%	
薬学部	薬学科	5	50		39		78.0%	
薬学部	創薬科学科	1	58	160	50	116	86.2%	72.5%
薬学部	創薬科学科	2	55		41		74.5%	
薬学部	創薬科学科	3	47		25		53.2%	

令和2年度DP達成度調査回答状況調

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率
工学部	電気電子システム工学科	2	4	1134		393	0.0%	34.7%
工学部	電気電子システム工学科	3	2				0.0%	
工学部	知能情報工学科	3	5		1		20.0%	
工学部	機械知能システム工学科	3	8		1		12.5%	
工学部	生命工学科	2	2				0.0%	
工学部	生命工学科	3	3		1		33.3%	
工学部	環境応用化学科	2	1				0.0%	
工学部	環境応用化学科	3	2				0.0%	
工学部	材料機能工学科	2	1				0.0%	
工学部	材料機能工学科	3	5		2		40.0%	
工学部	工学科電気電子工学コース	1	92		50		54.3%	
工学部	工学科電気電子工学コース	2	97		26		26.8%	
工学部	工学科電気電子工学コース	3	84		37		44.0%	
工学部	工学科知能情報工学コース	1	77		29		37.7%	
工学部	工学科知能情報工学コース	2	81		27		33.3%	
工学部	工学科知能情報工学コース	3	85		34		40.0%	
工学部	工学科機械工学コース	1	93		39		41.9%	
工学部	工学科機械工学コース	2	95		15		15.8%	
工学部	工学科機械工学コース	3	91		31		34.1%	
工学部	工学科生命工学コース	1	48		24		50.0%	
工学部	工学科生命工学コース	2	57		7		12.3%	
工学部	工学科生命工学コース	3	46		8		17.4%	
工学部	工学科応用化学コース	1	60		33		55.0%	
工学部	工学科応用化学コース	2	53		17		32.1%	
工学部	工学科応用化学コース	3	42		11		26.2%	
芸術文化学部	芸術文化学科	1	112	339	100	221	89.3%	65.2%
芸術文化学部	芸術文化学科	2	117		84		71.8%	
芸術文化学部	芸術文化学科	3	110		37		33.6%	
都市デザイン学部	地球システム科学科	1	39	427	25	125	64.1%	29.3%
都市デザイン学部	地球システム科学科	2	42		13		31.0%	
都市デザイン学部	地球システム科学科	3	39		13		33.3%	
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	1	41		19		46.3%	
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	2	41		6		14.6%	
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	3	40		9		22.5%	
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	1	67		23		34.3%	
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	2	63		8		12.7%	
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	3	55		9		16.4%	
				5845		2216		37.9%
文系				2425		761		31.4%
理系				3420		1455		42.5%

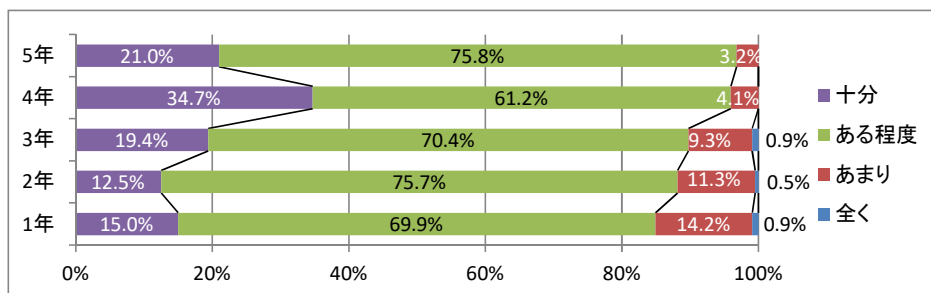
※学生数(休学者を除く。), 回答数は, R2年度における学年を基に集計。

R2年度 全学部

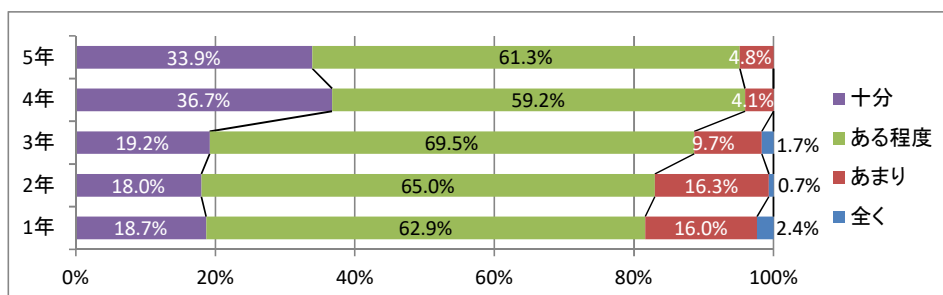
DPIに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

※4年・5年は、医学科及び薬学科の回答

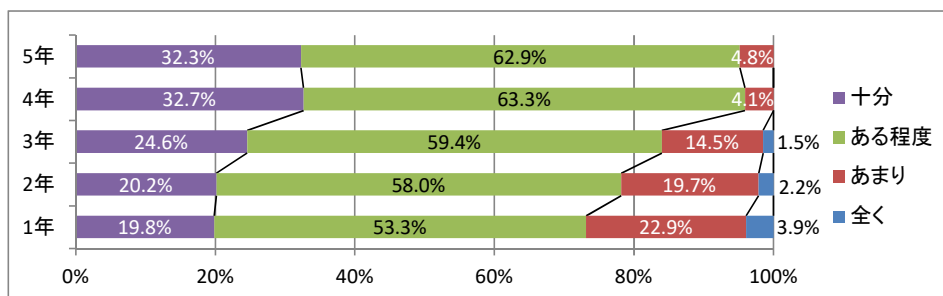
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



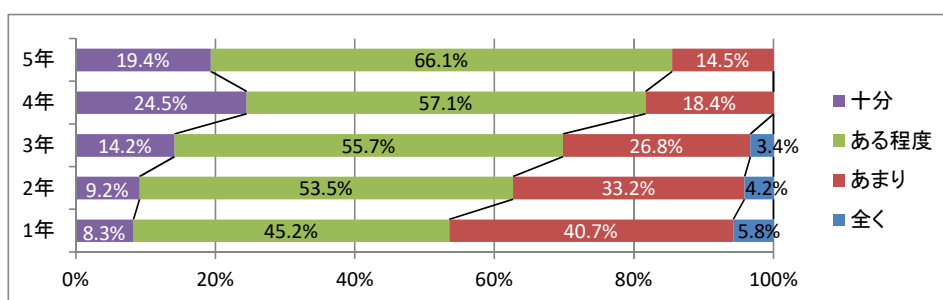
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



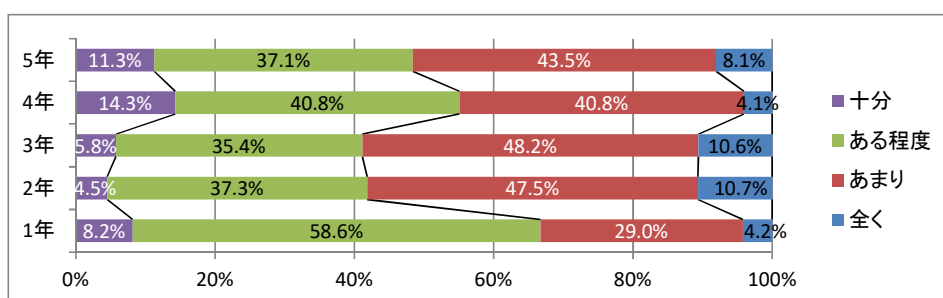
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



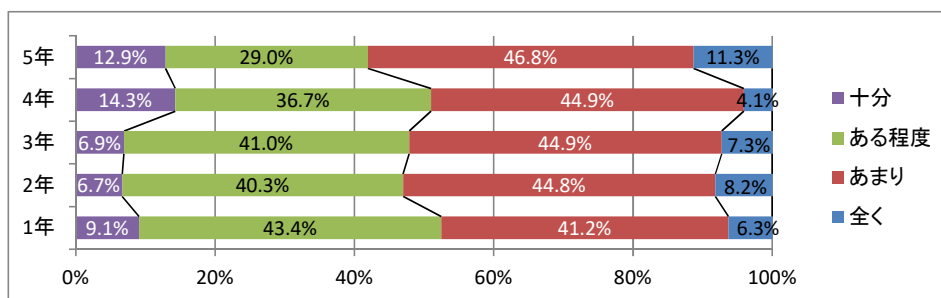
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



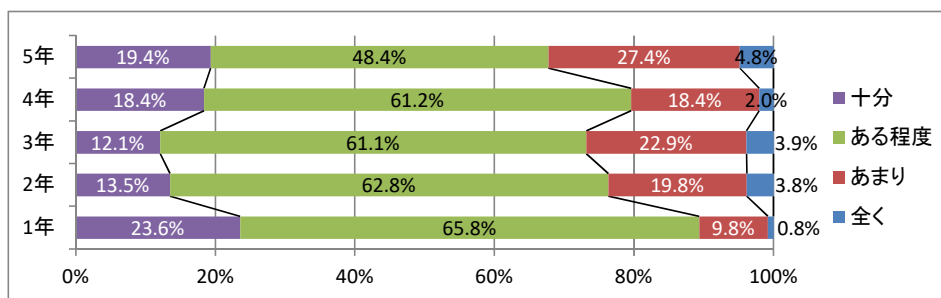
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



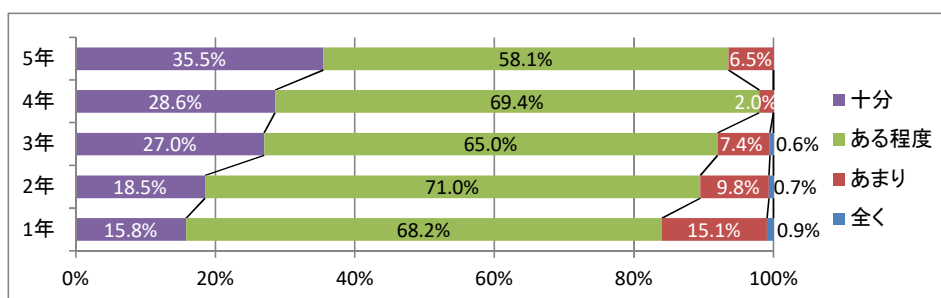
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



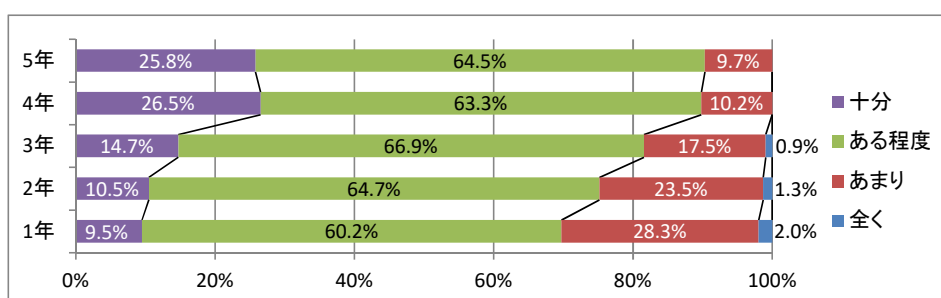
7)「教養教育等による幅広い知識」



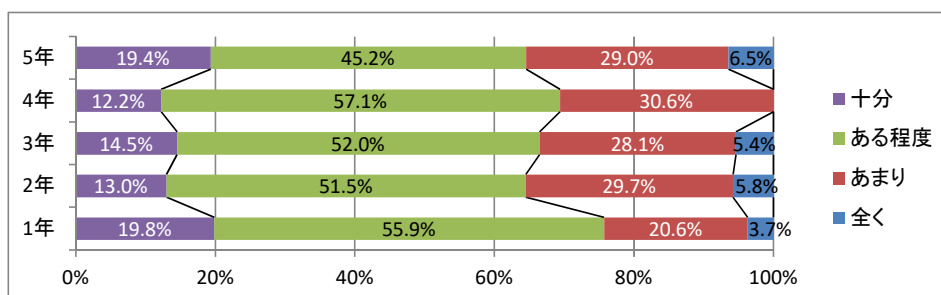
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

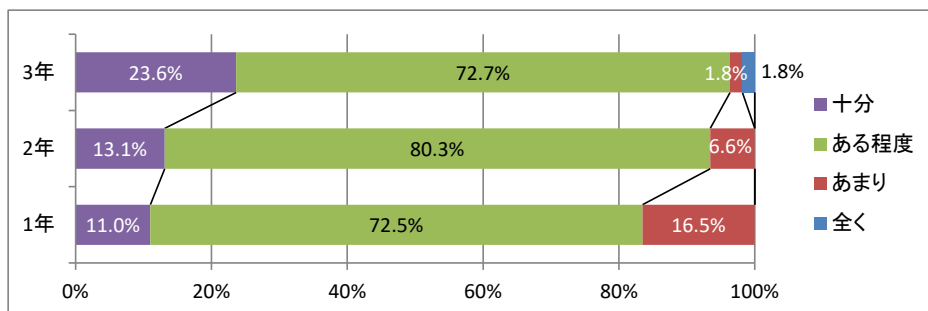


10)「地域を志向する意識」

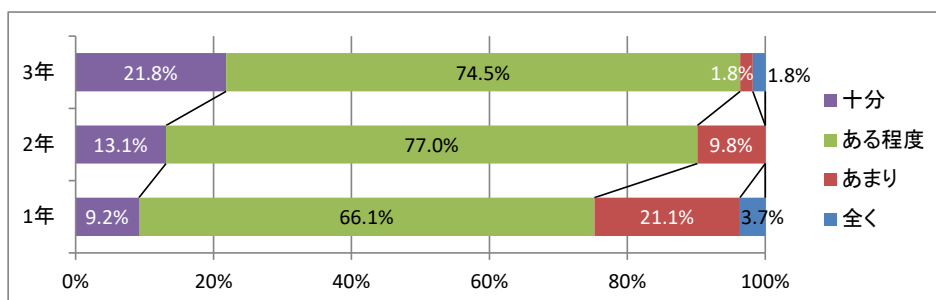


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

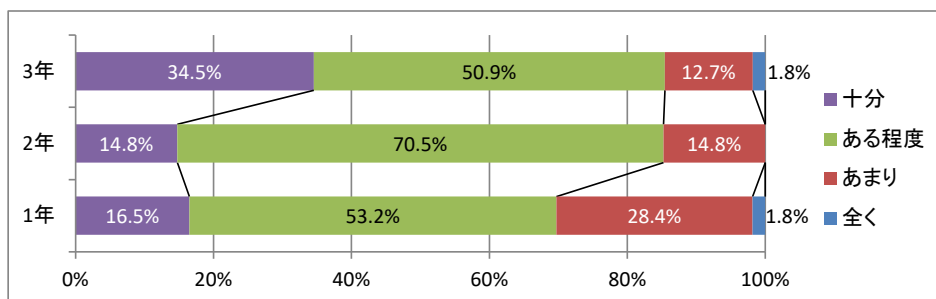
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



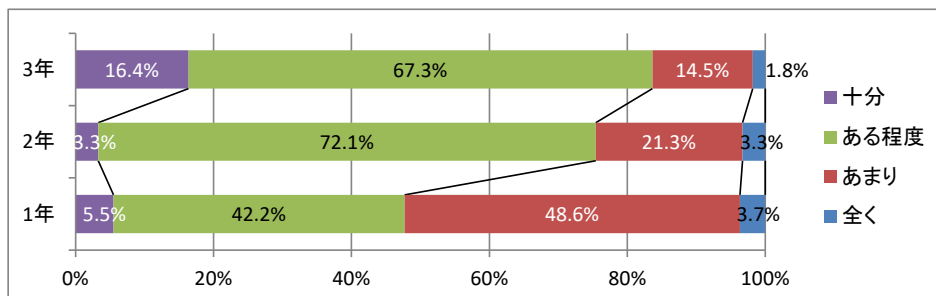
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



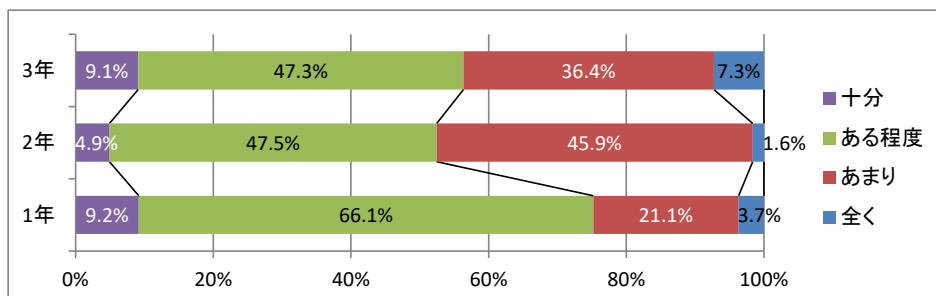
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



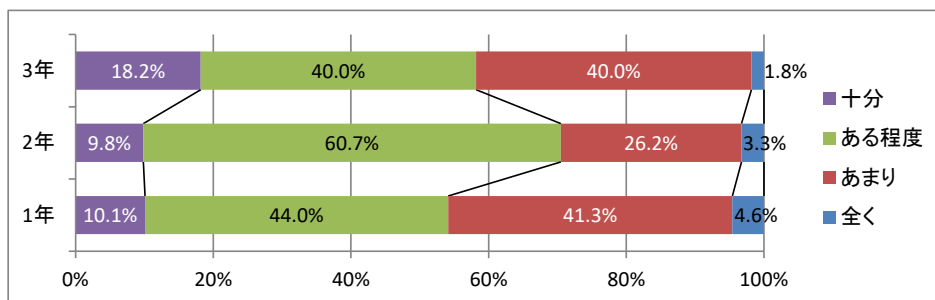
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



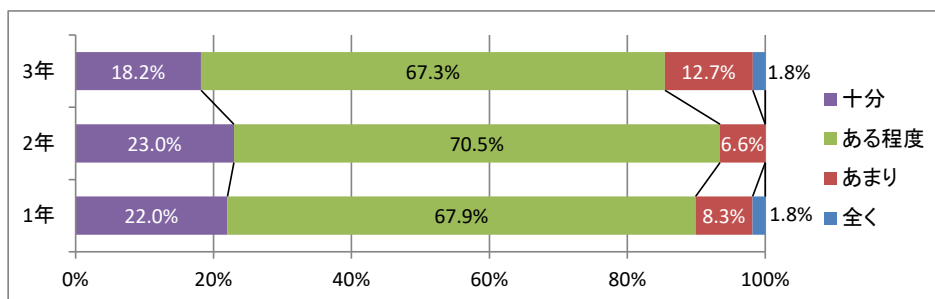
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



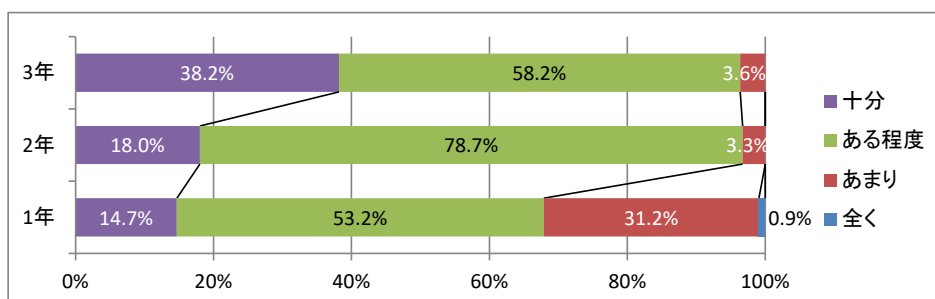
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



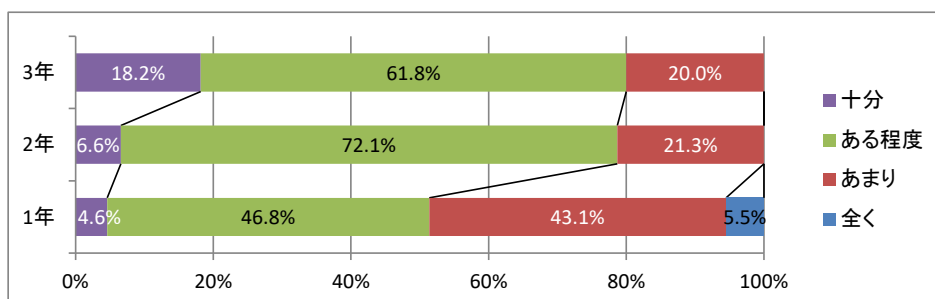
7)「教養教育等による幅広い知識」



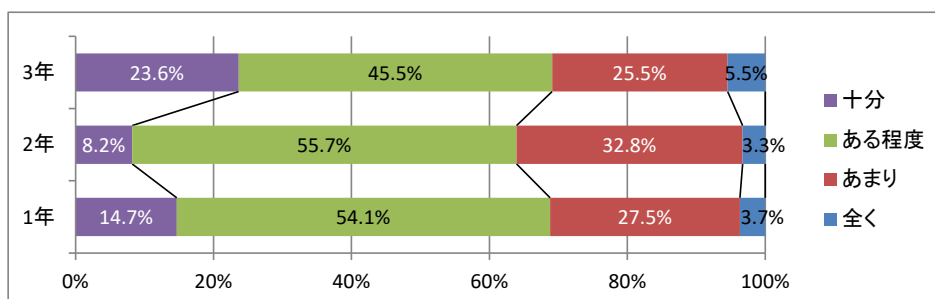
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

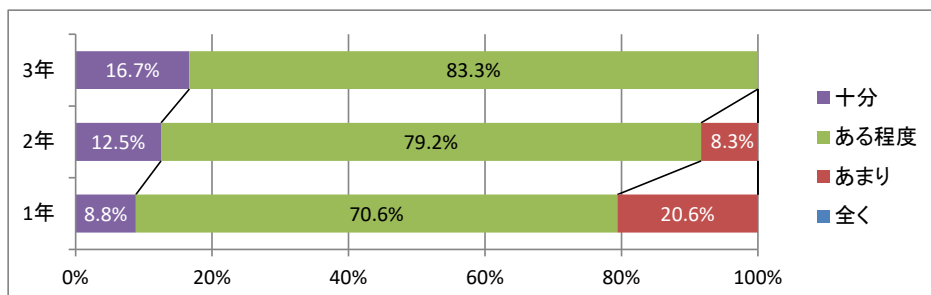


10)「地域を志向する意識」

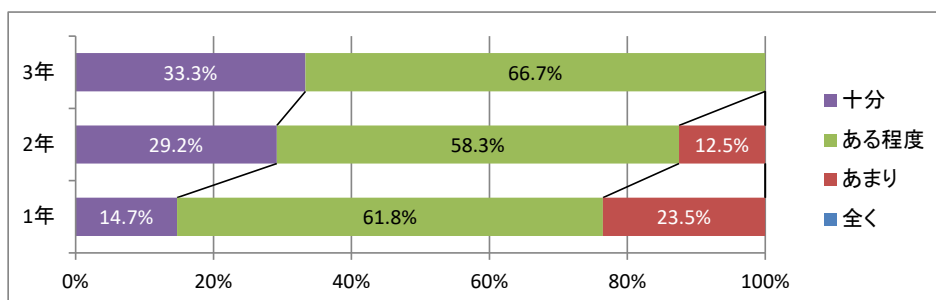


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

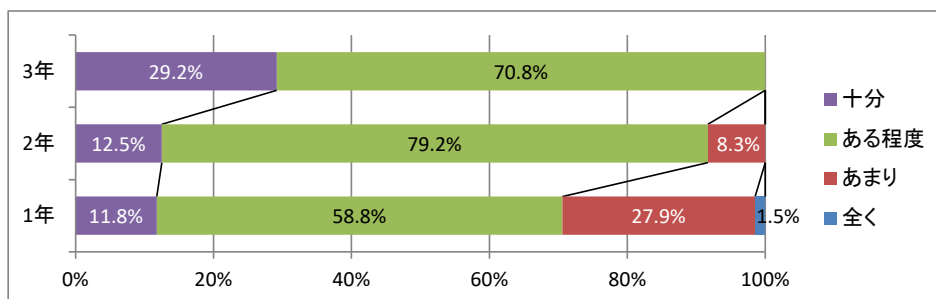
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



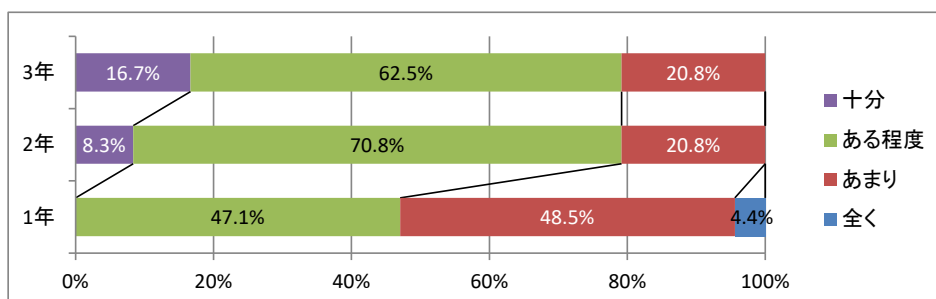
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



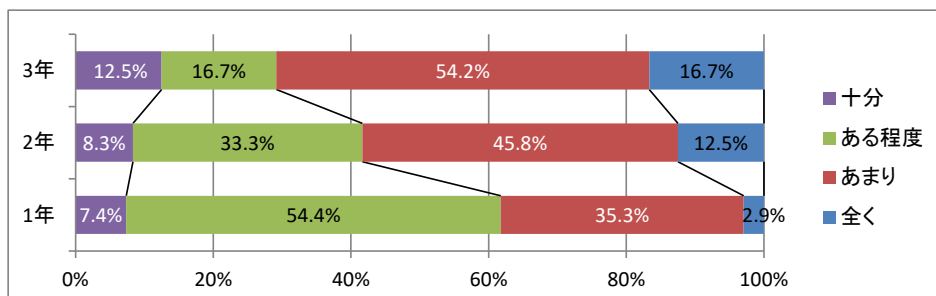
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



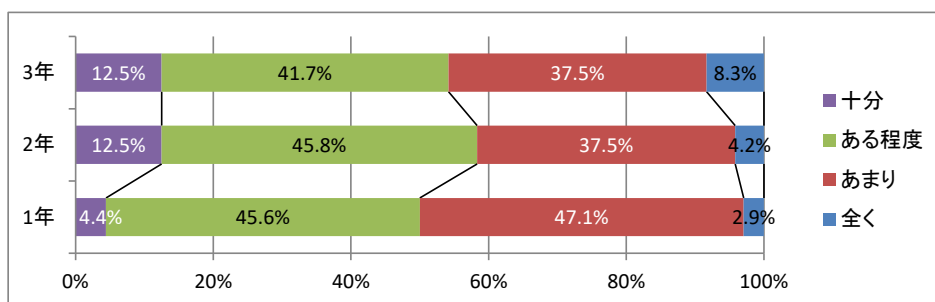
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



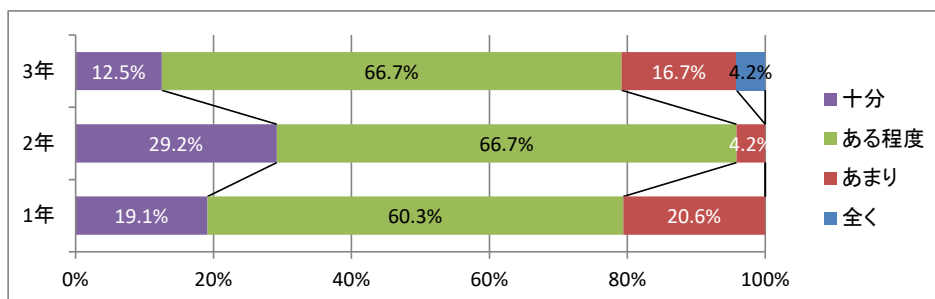
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



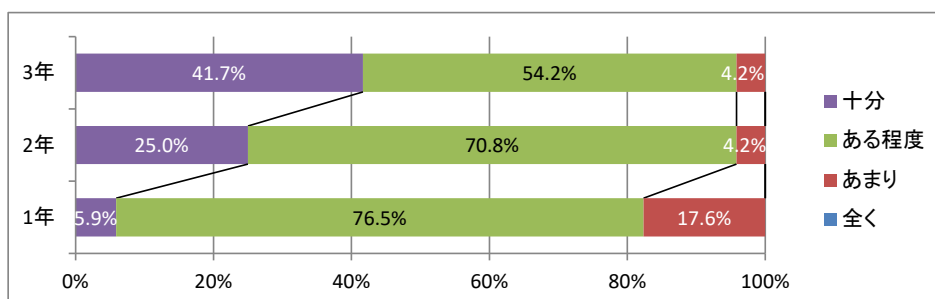
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



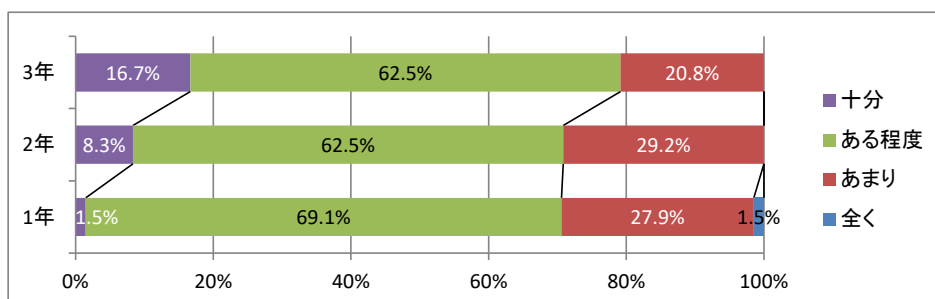
7)「教養教育等による幅広い知識」



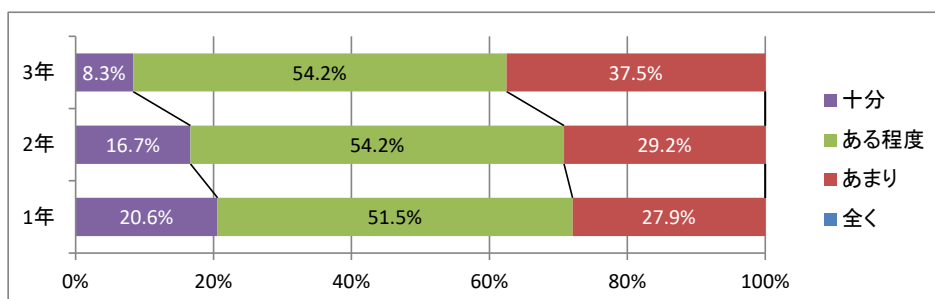
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

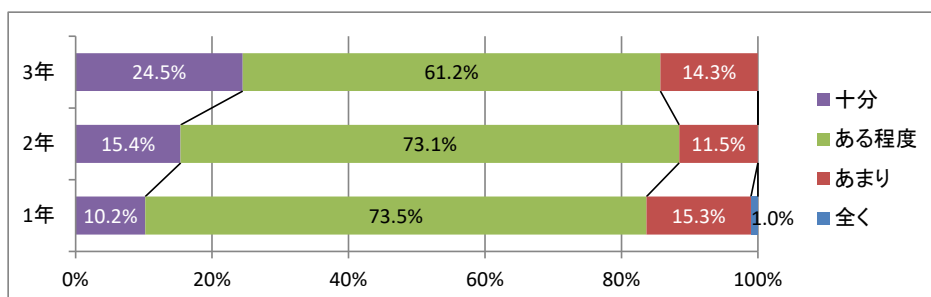


10)「地域を志向する意識」

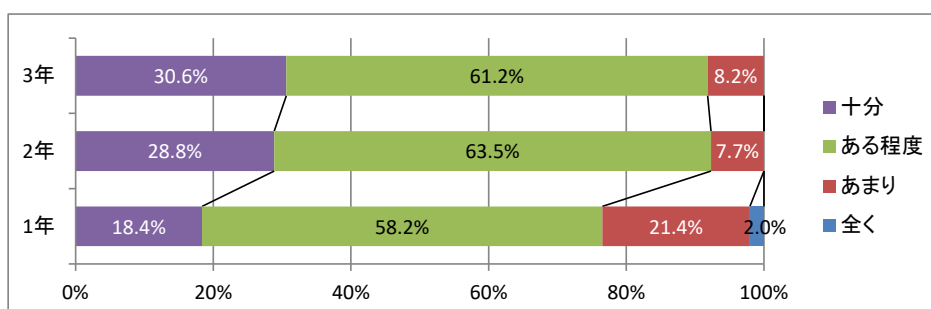


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

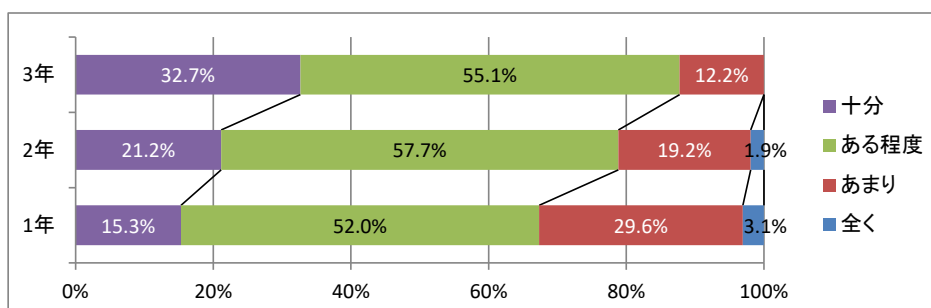
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



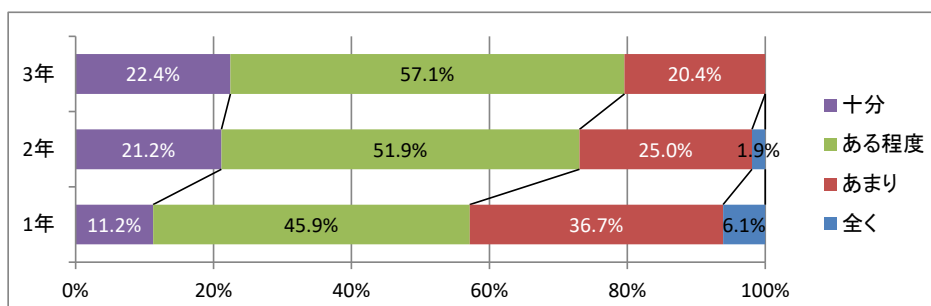
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



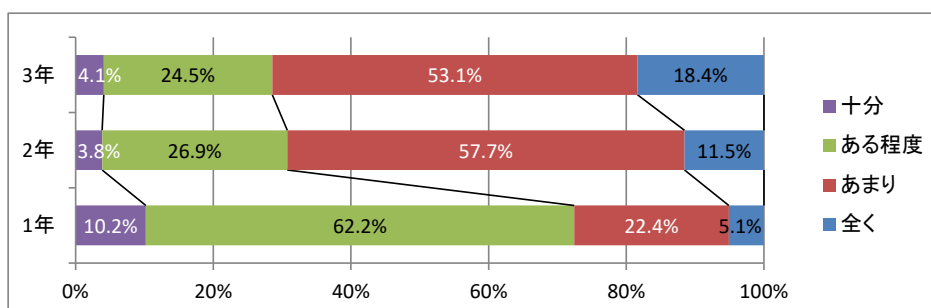
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



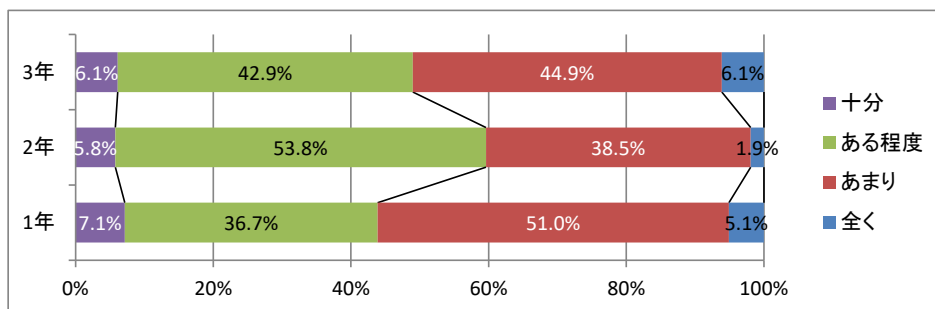
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



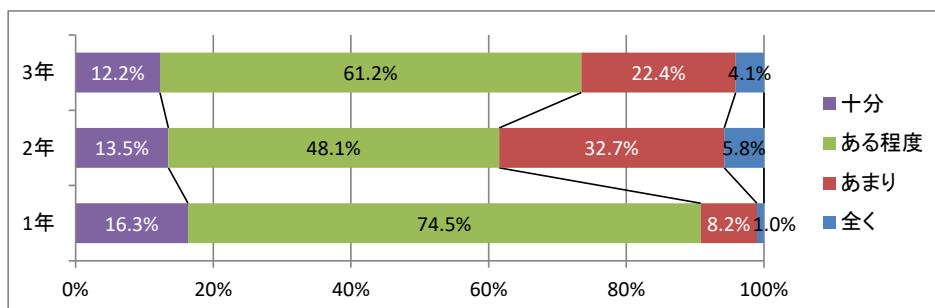
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



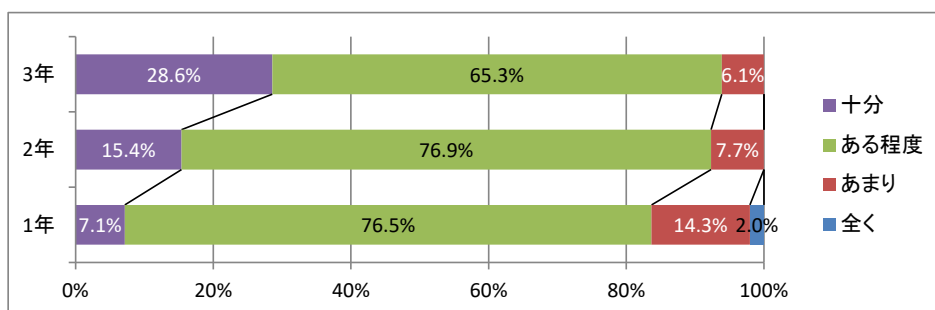
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



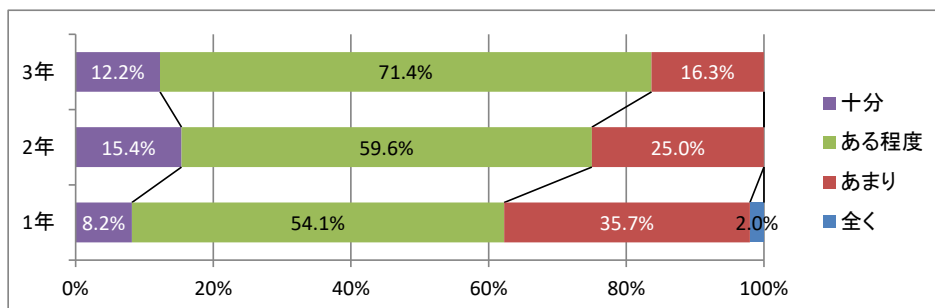
7)「教養教育等による幅広い知識」



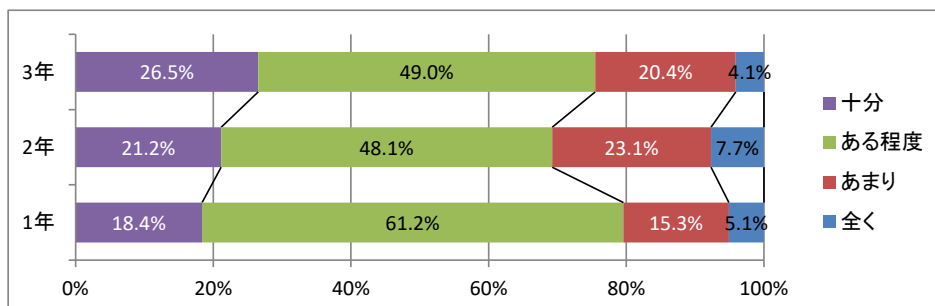
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」



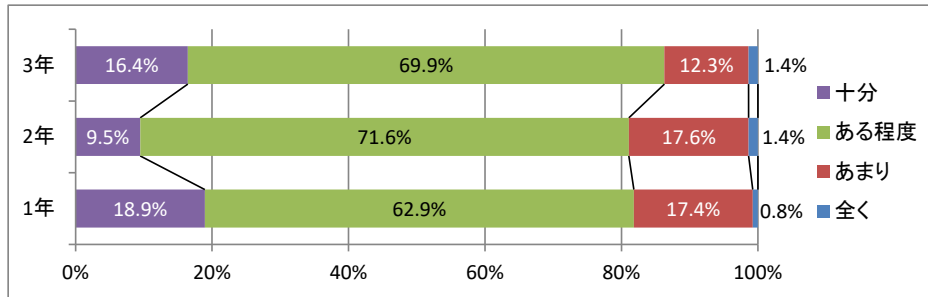
10)「地域を志向する意識」



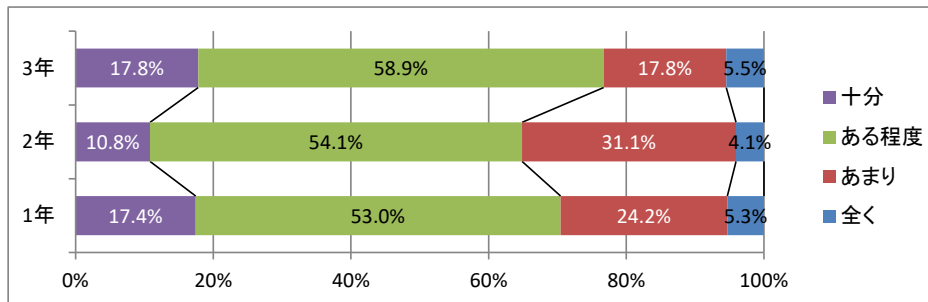
理学部

DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

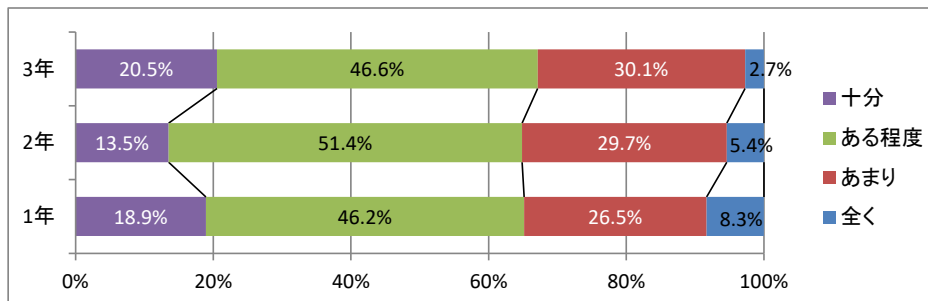
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



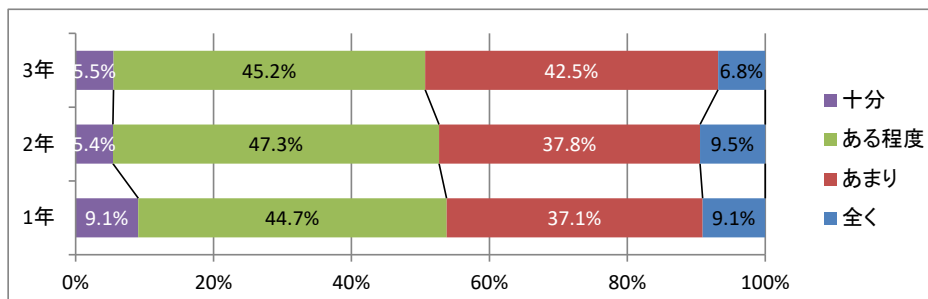
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



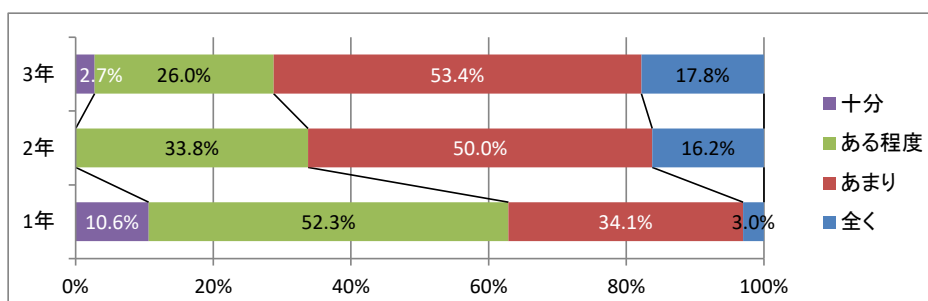
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



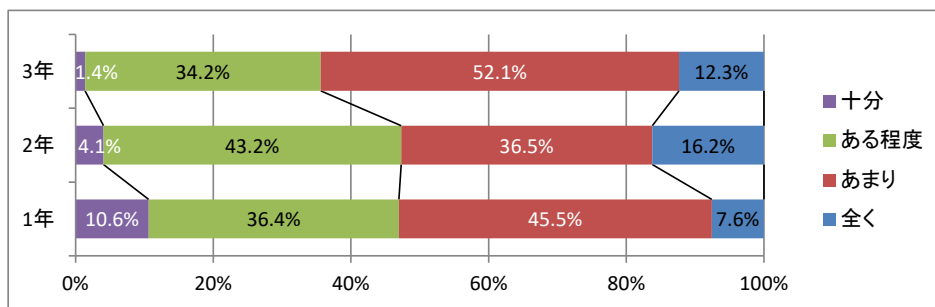
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



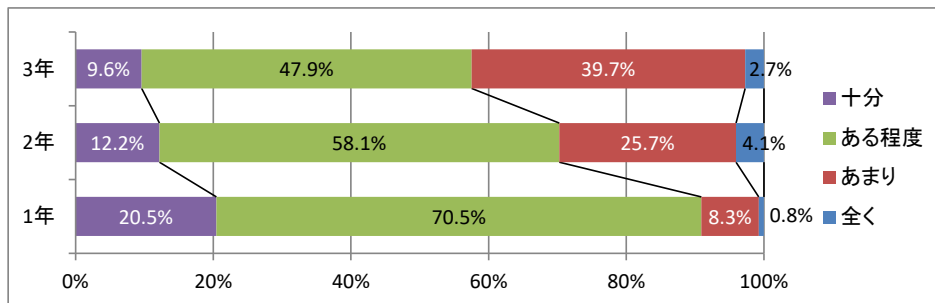
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



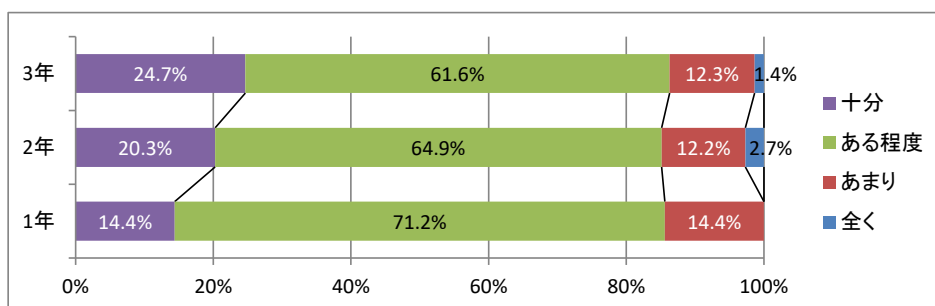
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



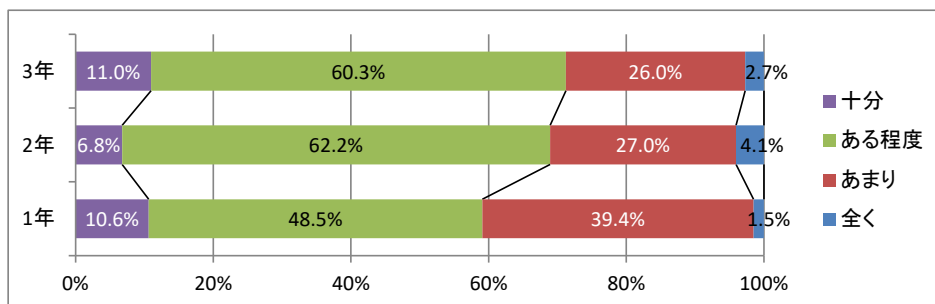
7)「教養教育等による幅広い知識」



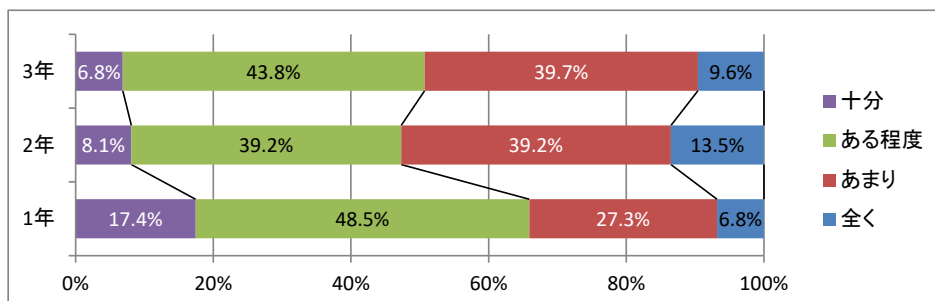
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

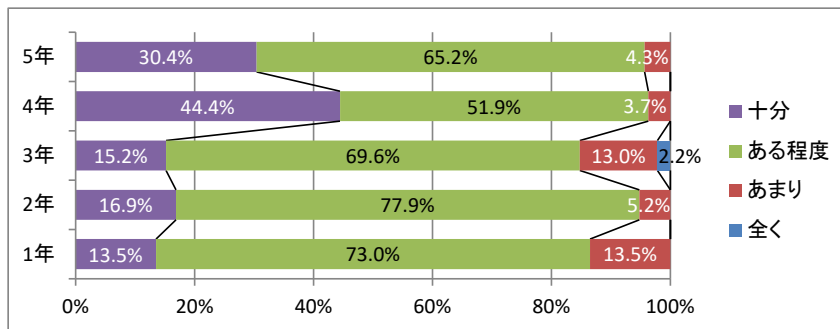


10)「地域を志向する意識」

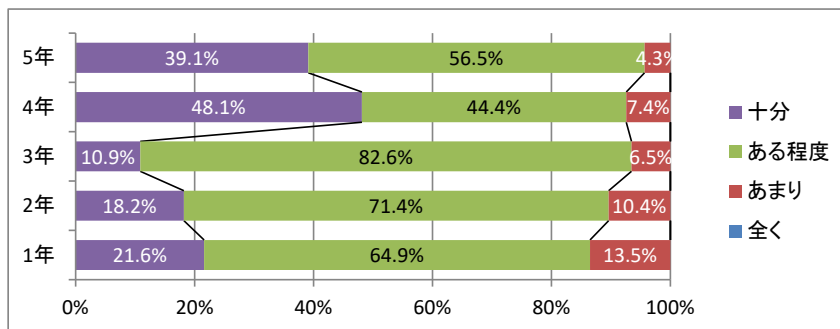


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

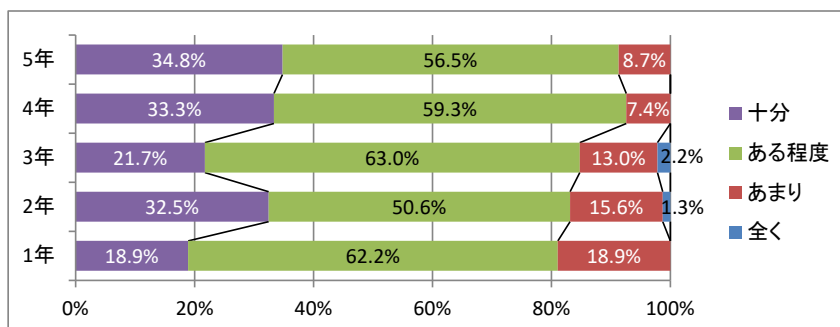
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



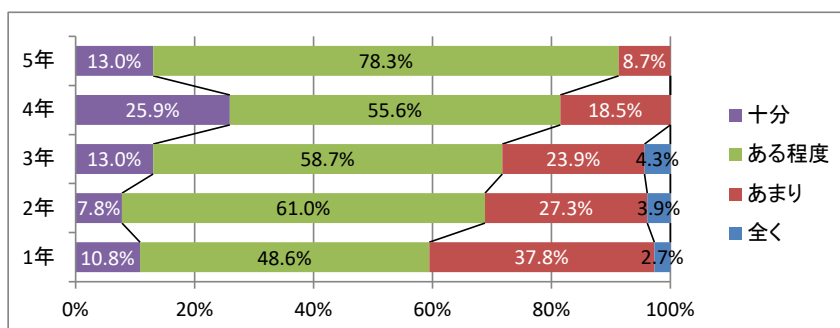
2)「課題や問題を自ら解決する能力」



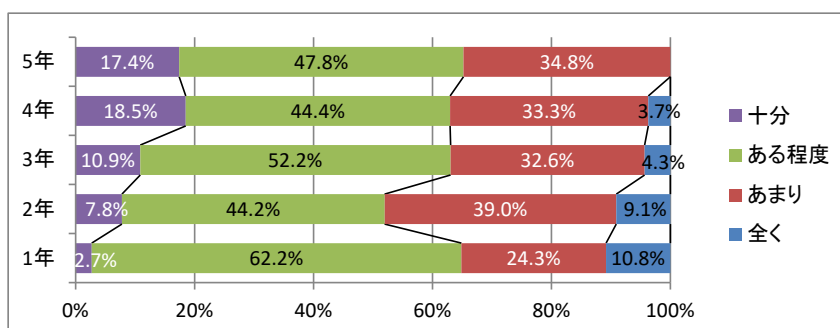
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



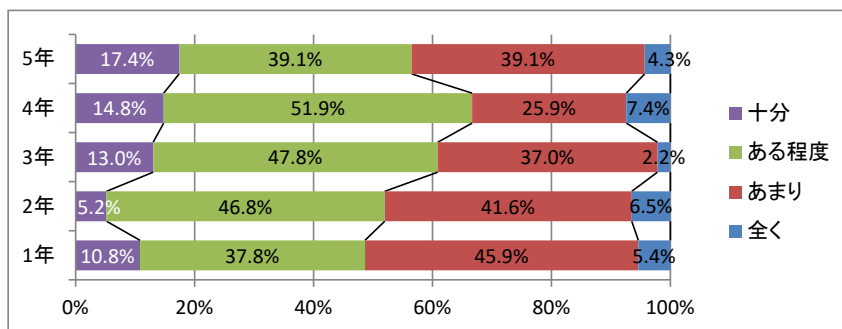
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



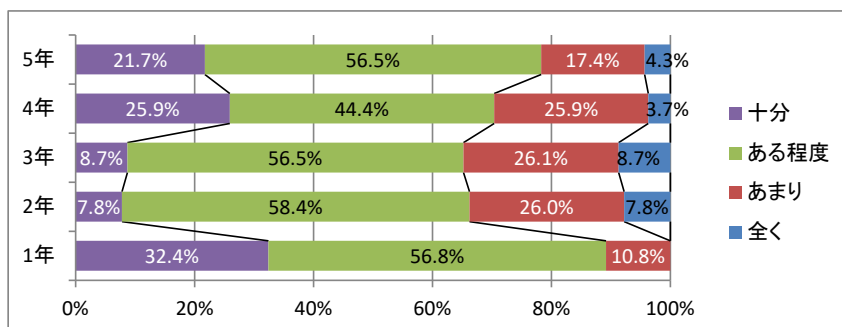
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



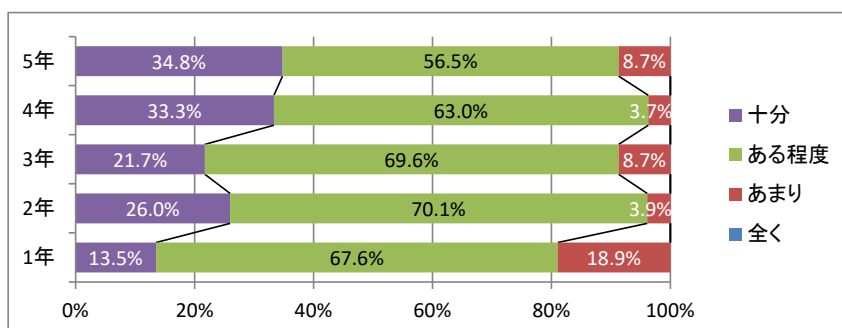
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



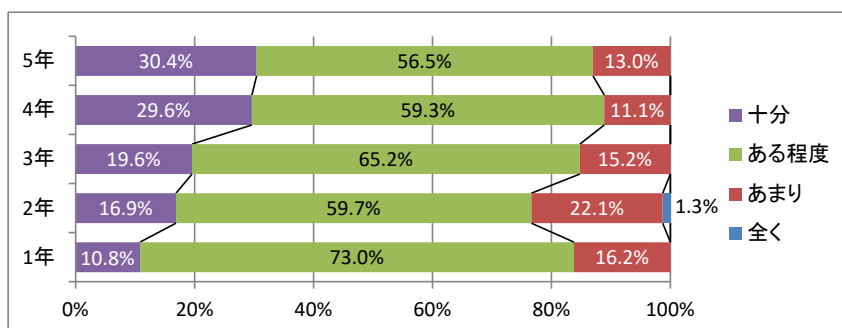
7)「教養教育等による幅広い知識」



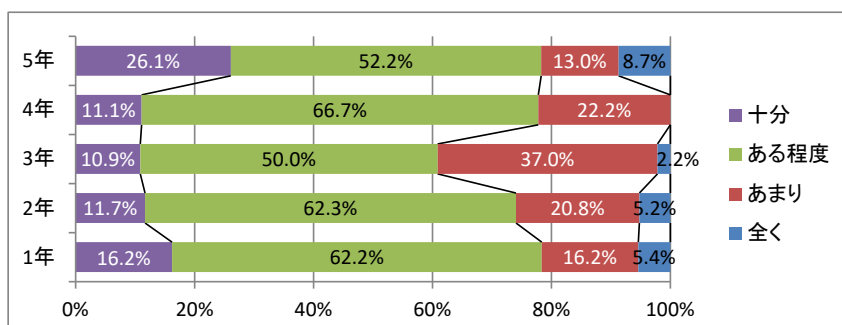
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

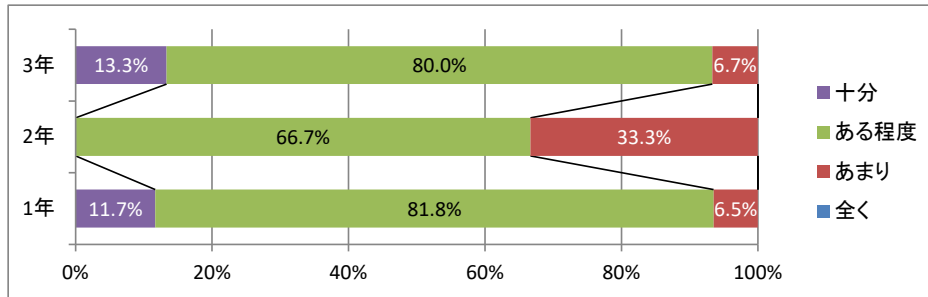


10)「地域を志向する意識」

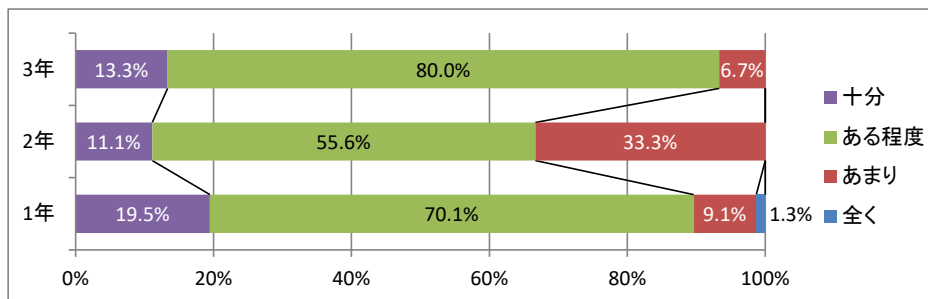


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

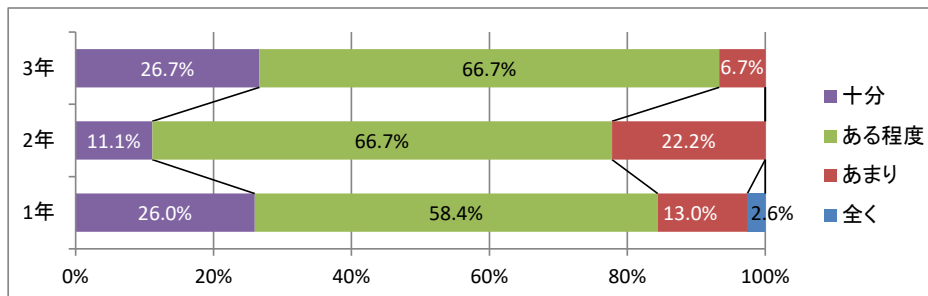
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



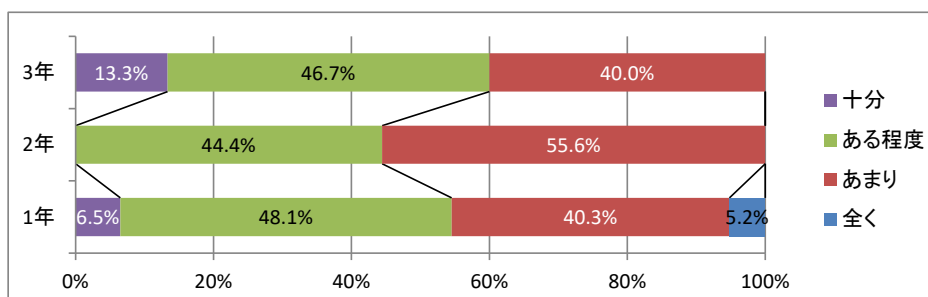
2)「課題や問題を自ら解決する能力」



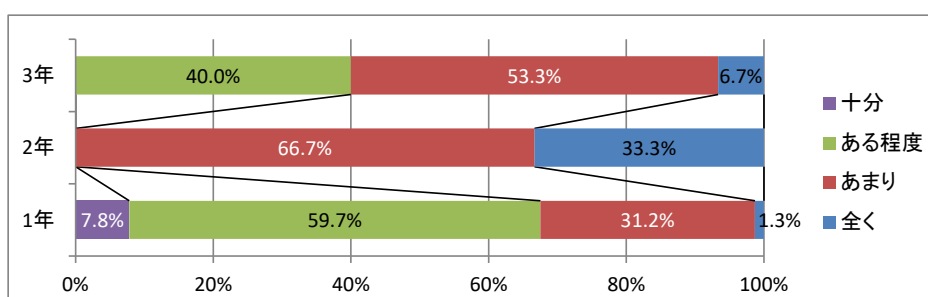
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



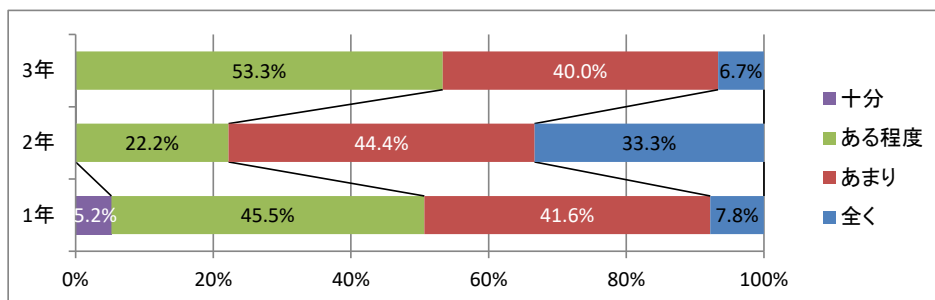
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



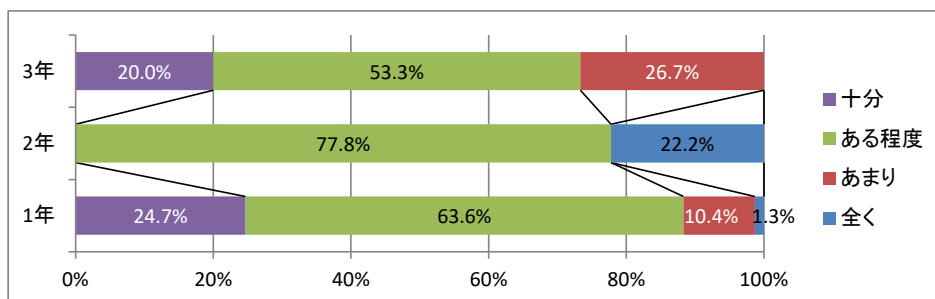
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



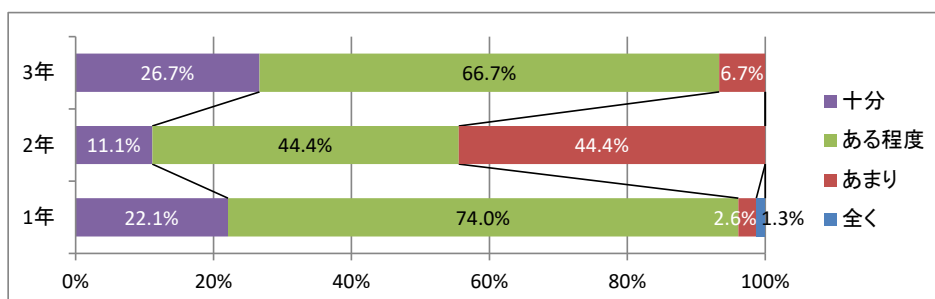
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



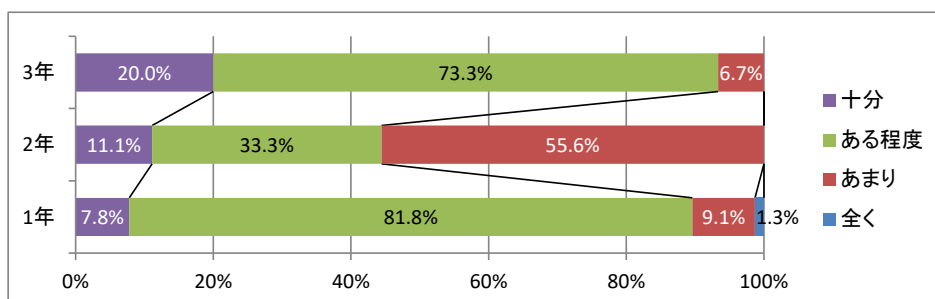
7)「教養教育等による幅広い知識」



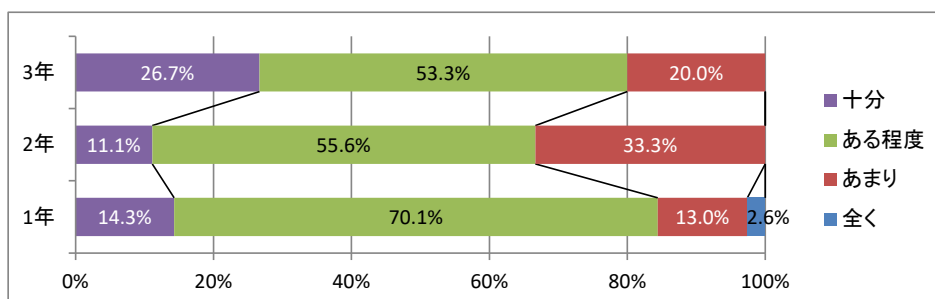
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

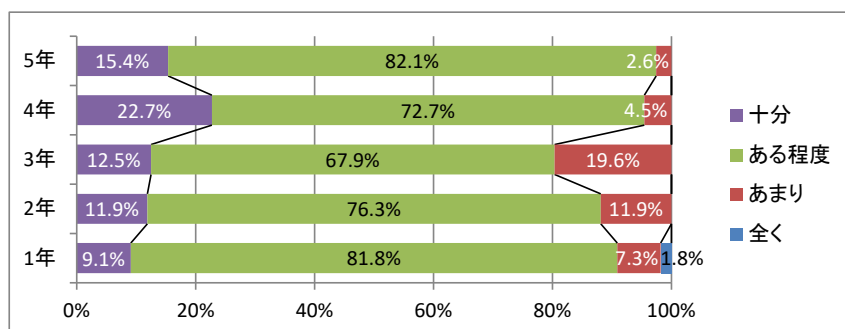


10)「地域を志向する意識」

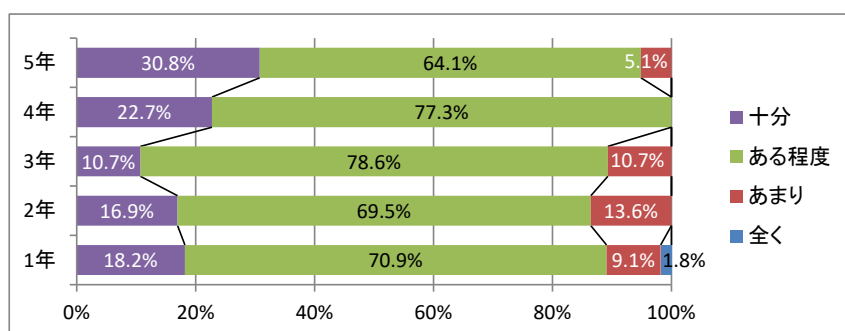


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

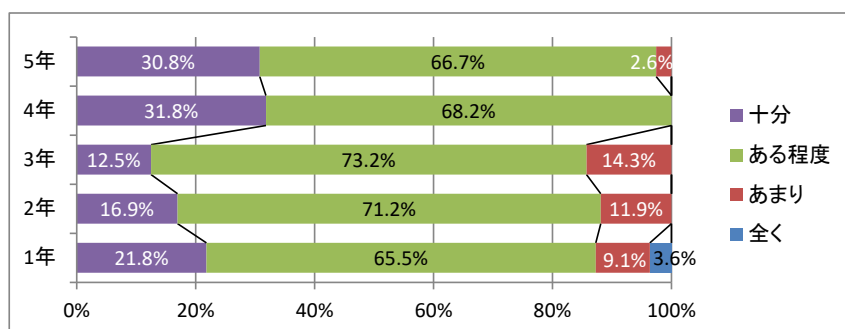
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



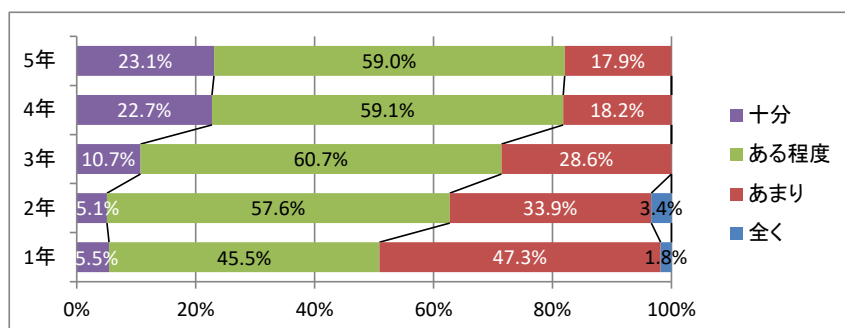
2)「課題や問題を自ら解決する能力」



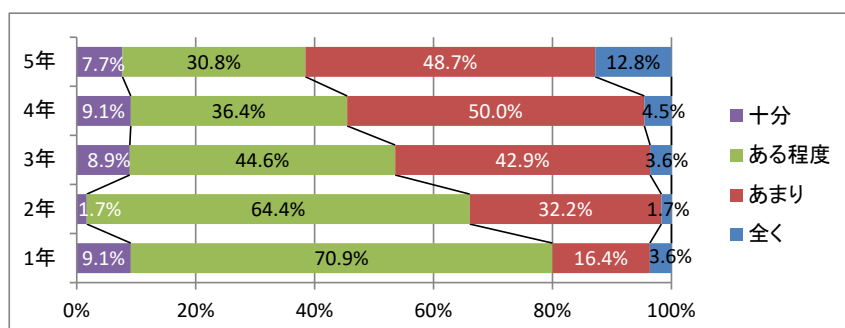
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



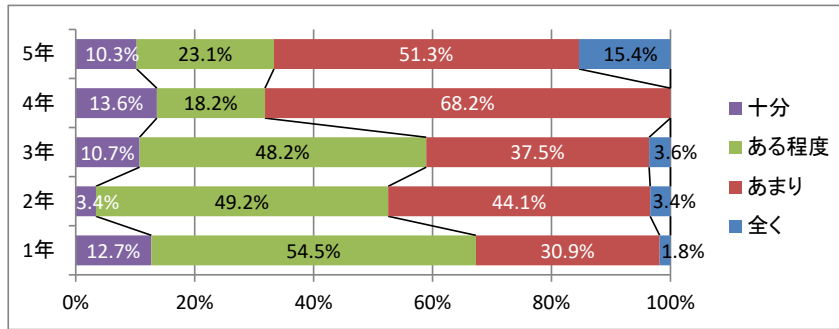
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



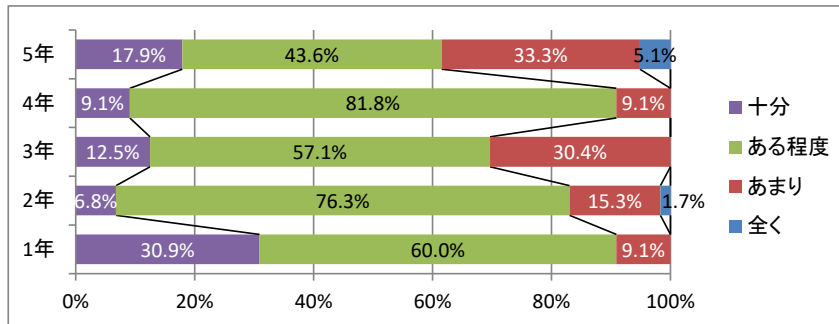
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



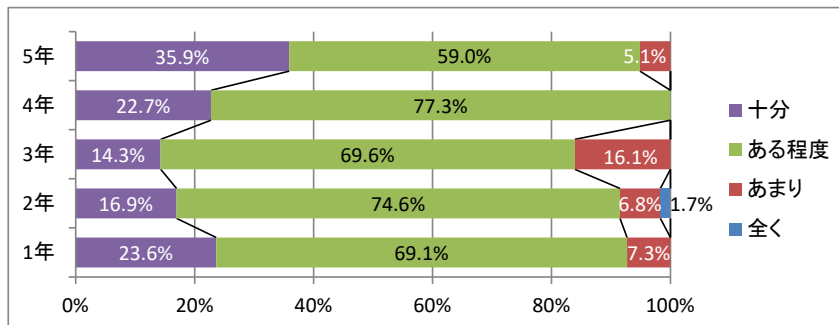
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



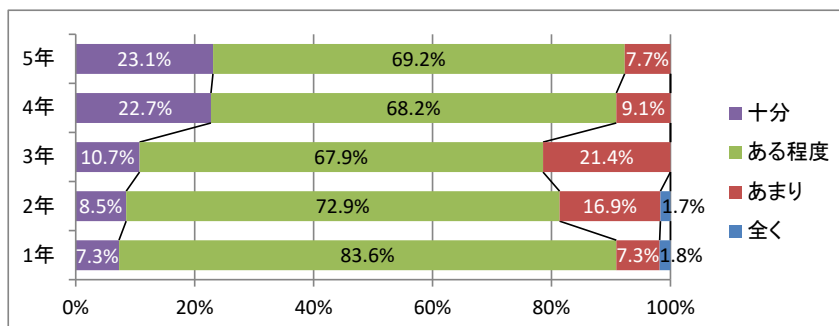
7)「教養教育等による幅広い知識」



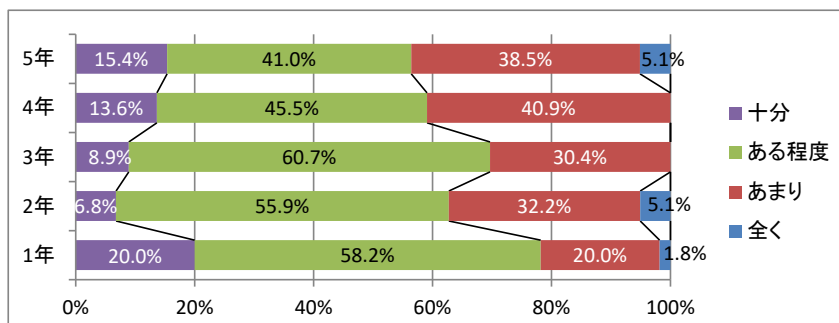
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

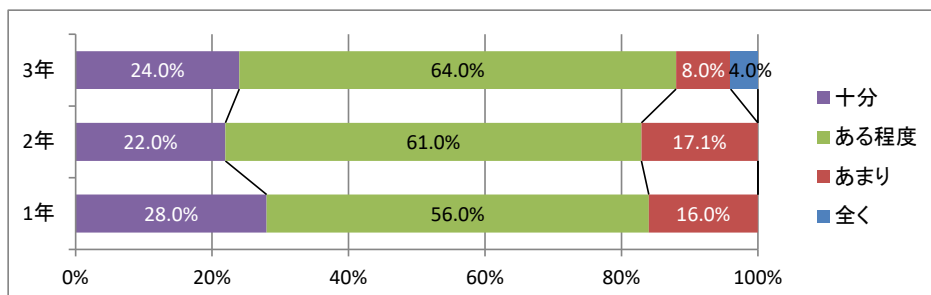


10)「地域を志向する意識」

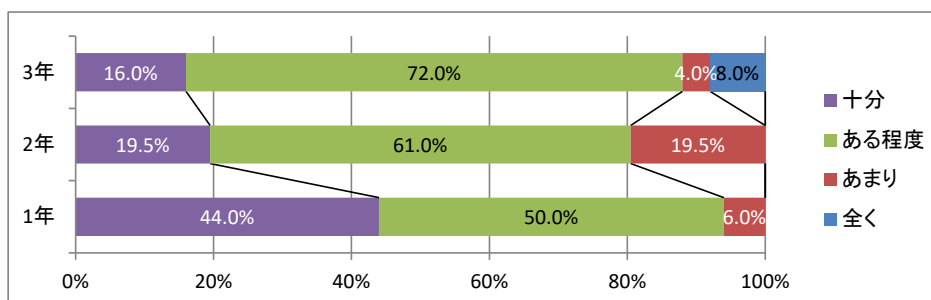


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

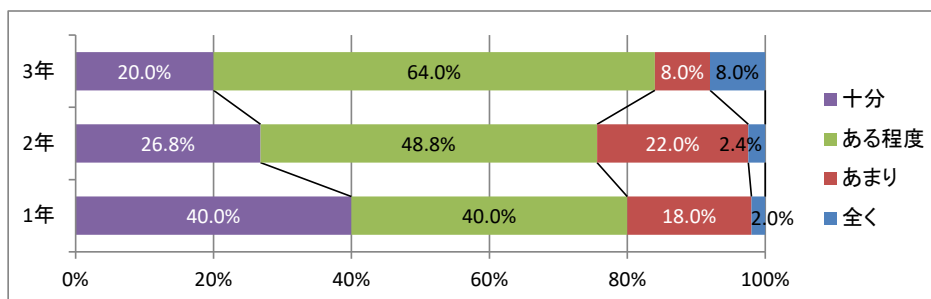
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



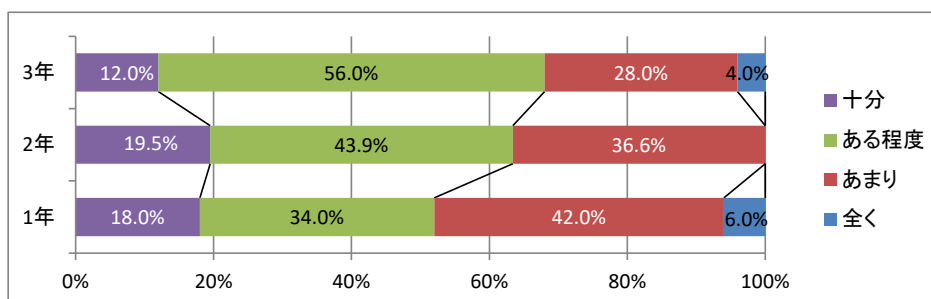
2)「課題や問題を自ら解決する能力」



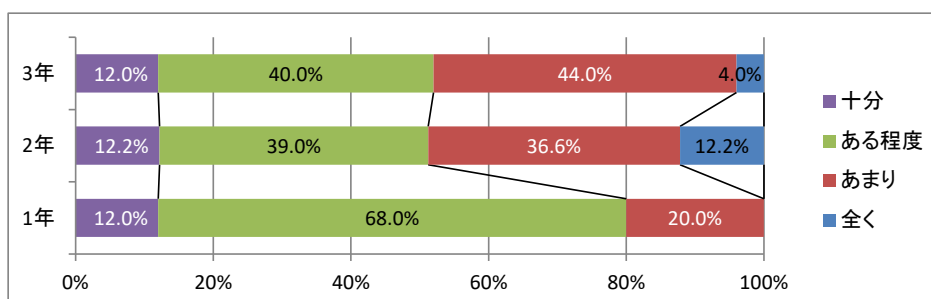
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



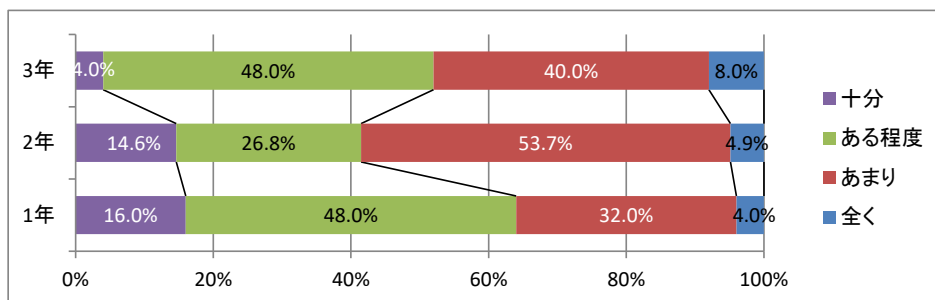
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



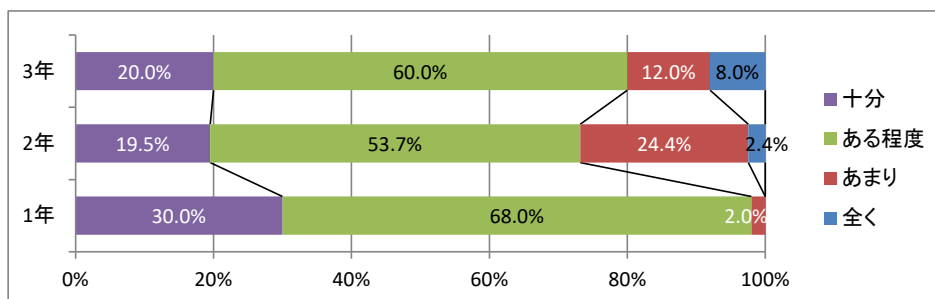
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



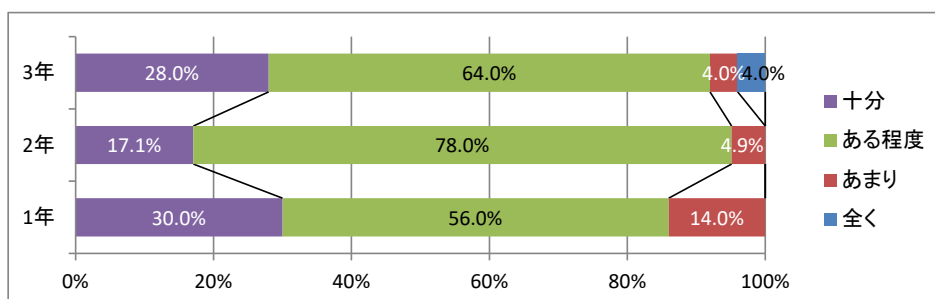
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



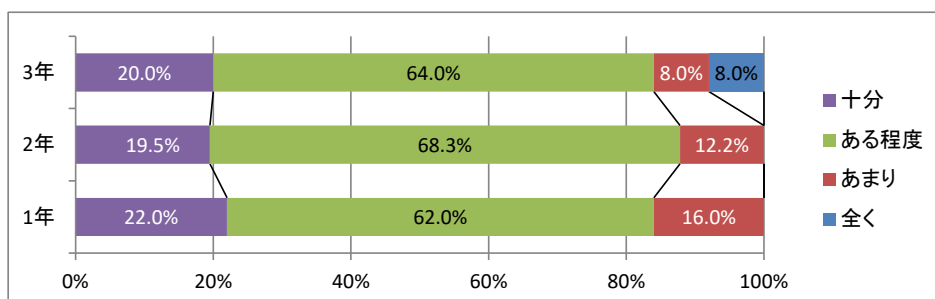
7)「教養教育等による幅広い知識」



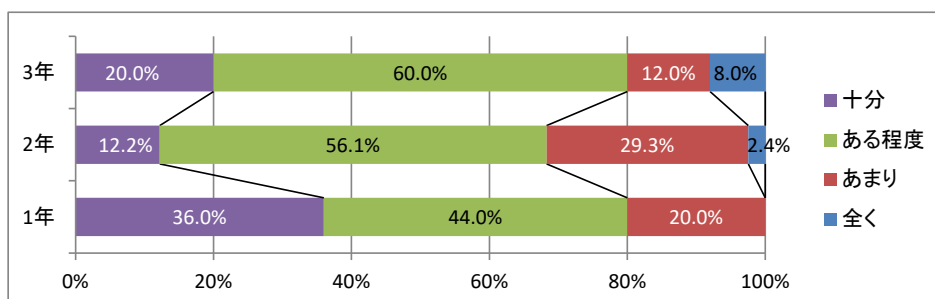
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」



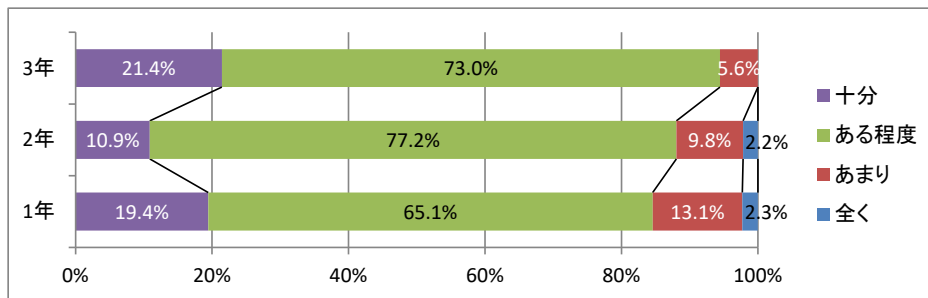
10)「地域を志向する意識」



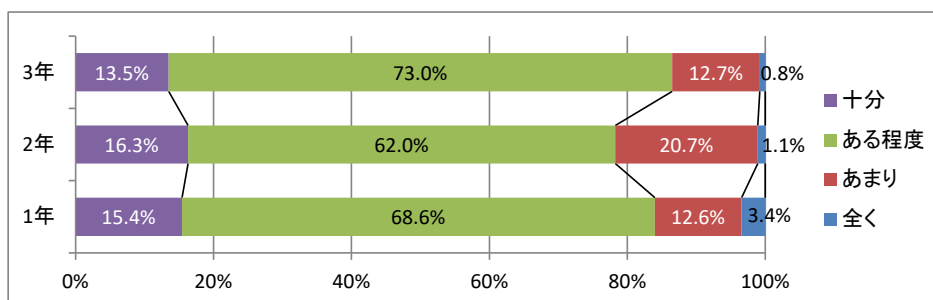
工学部

DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

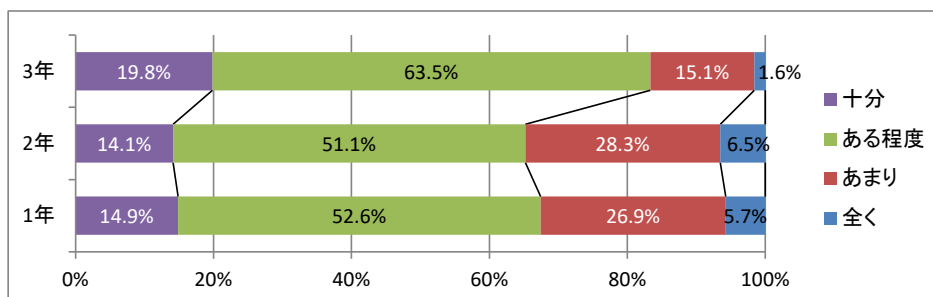
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



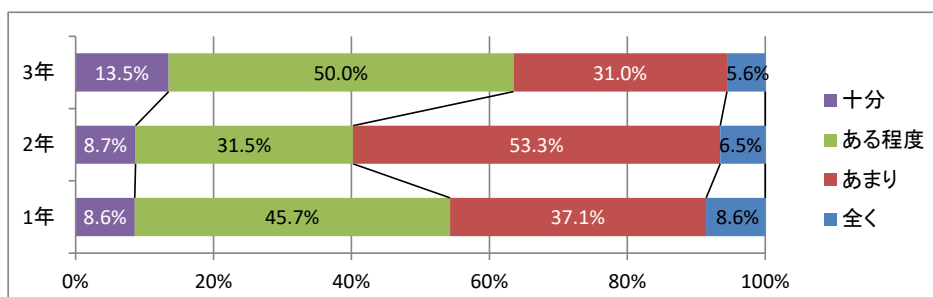
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



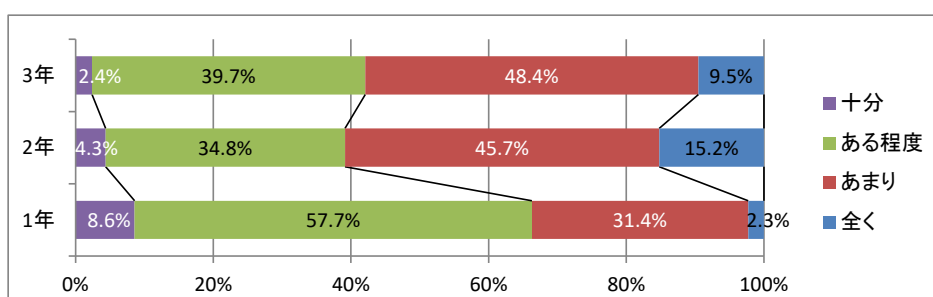
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



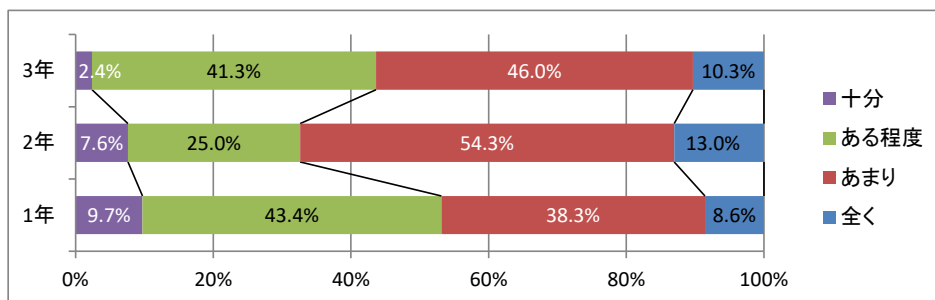
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



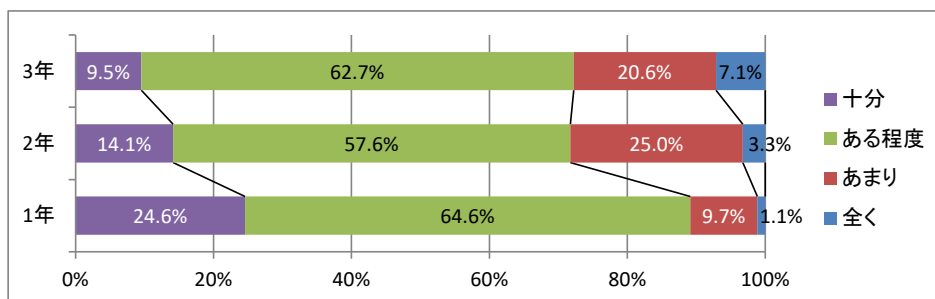
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



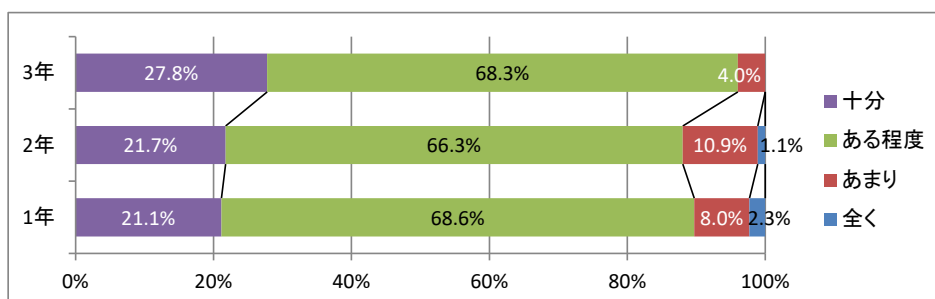
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



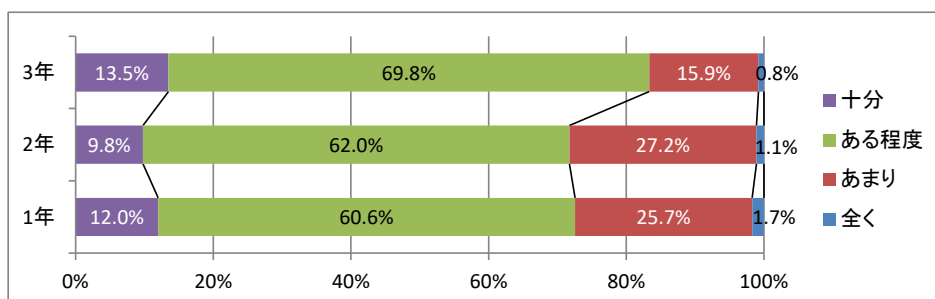
7)「教養教育等による幅広い知識」



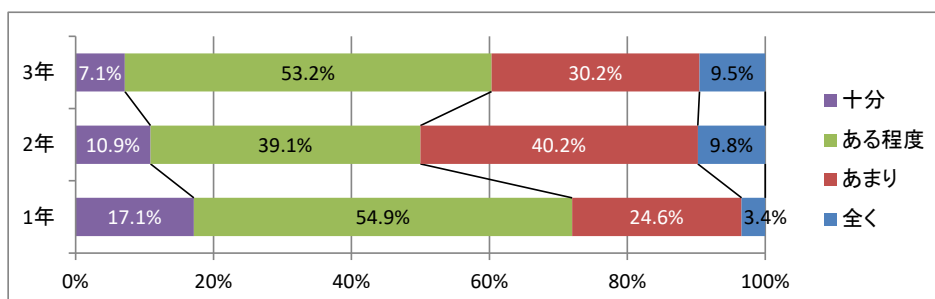
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

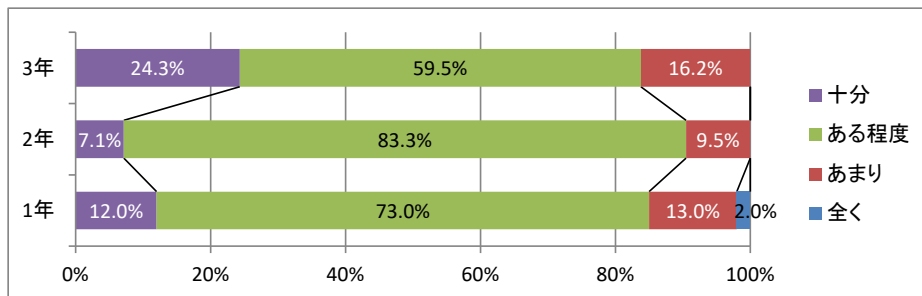


10)「地域を志向する意識」

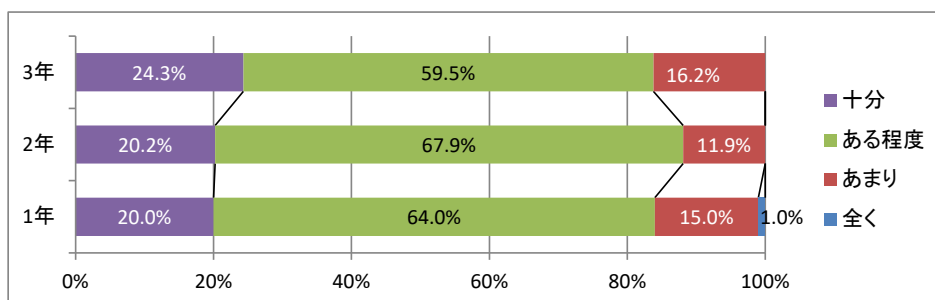


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

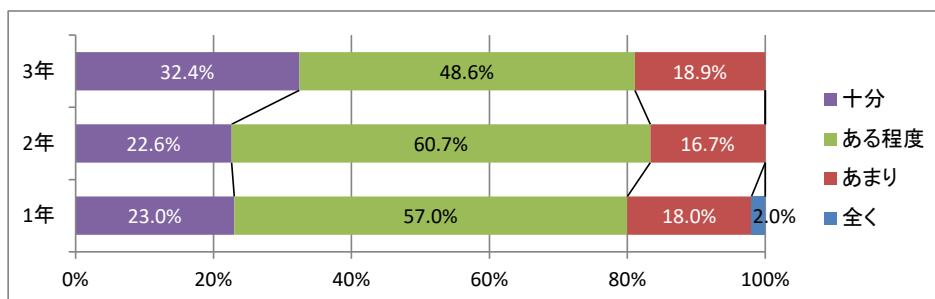
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



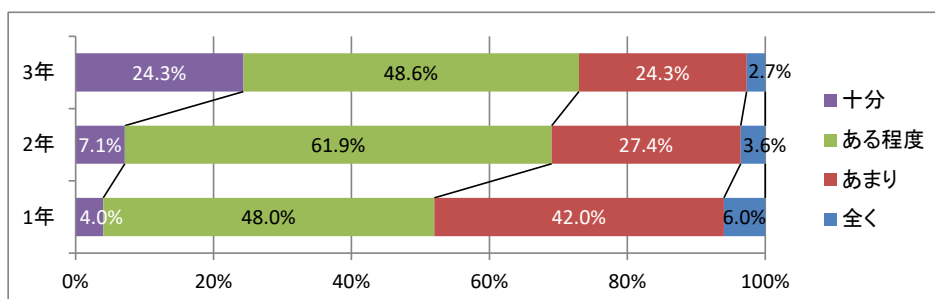
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



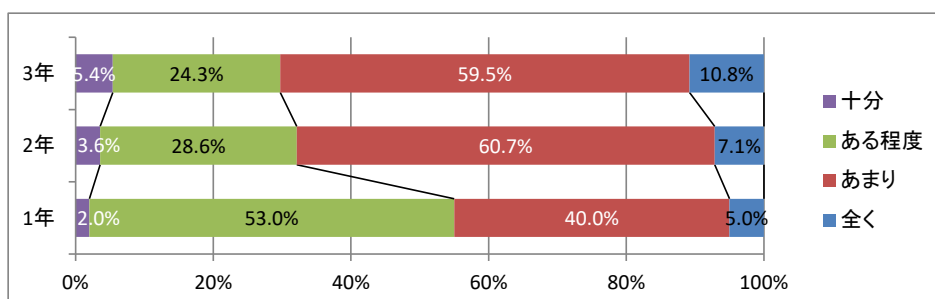
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



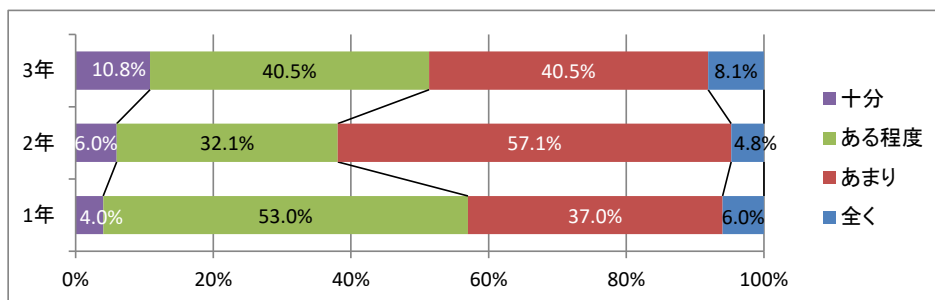
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



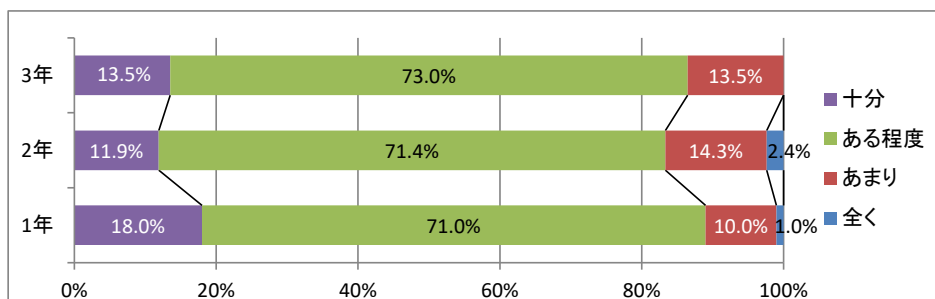
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



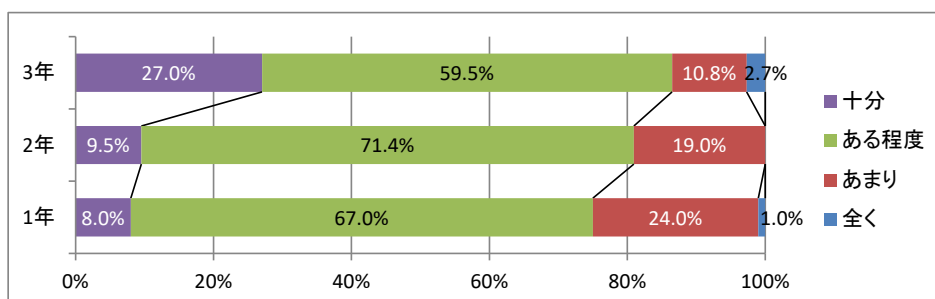
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



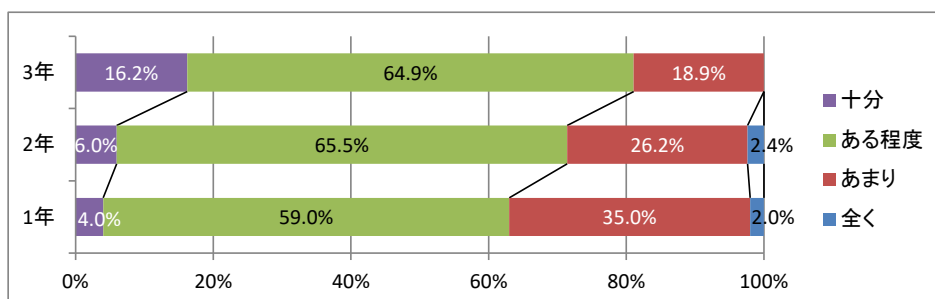
7)「教養教育等による幅広い知識」



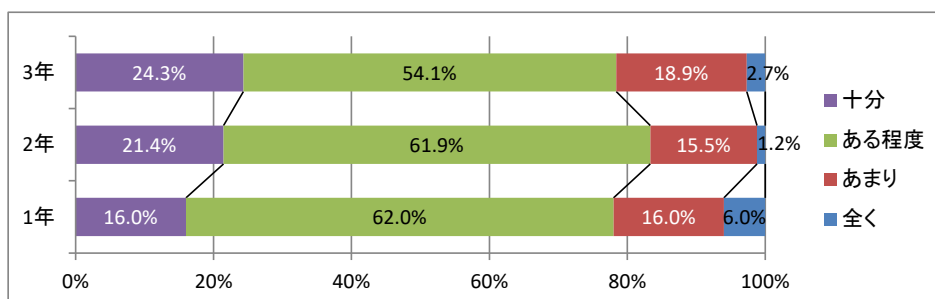
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」

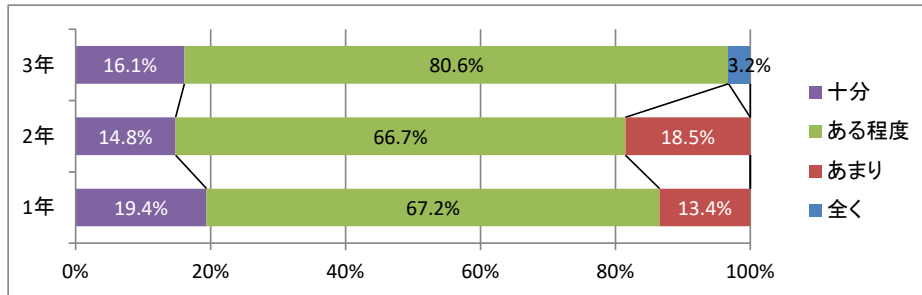


10)「地域を志向する意識」

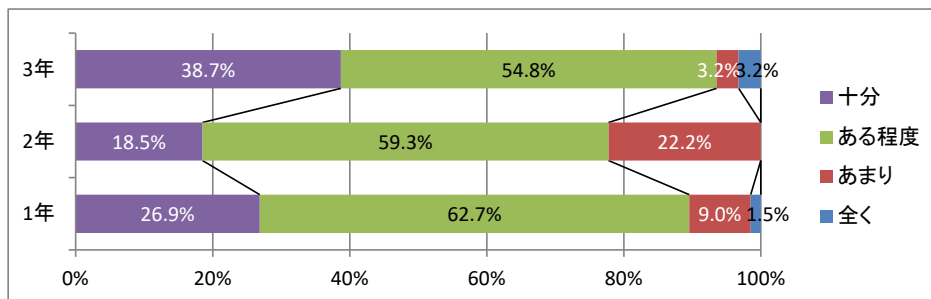


DPに掲げる能力をどの程度身に付けることができましたか？

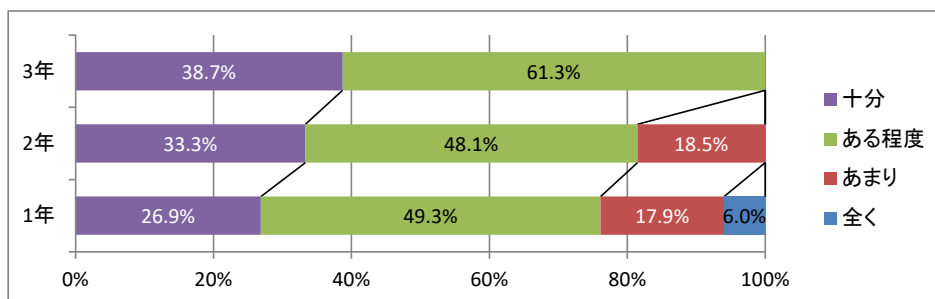
1)「課題や問題を自ら解決する能力」



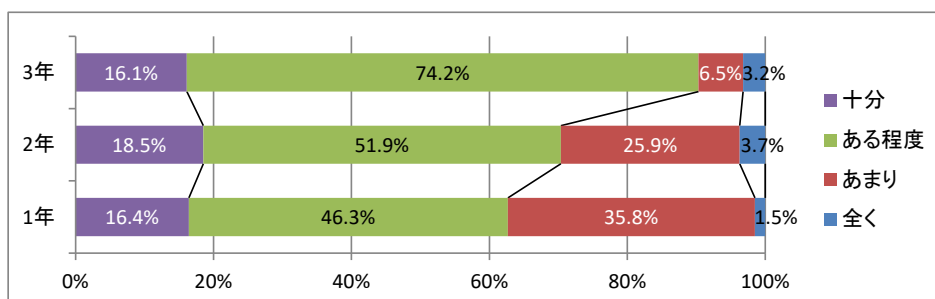
2)「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



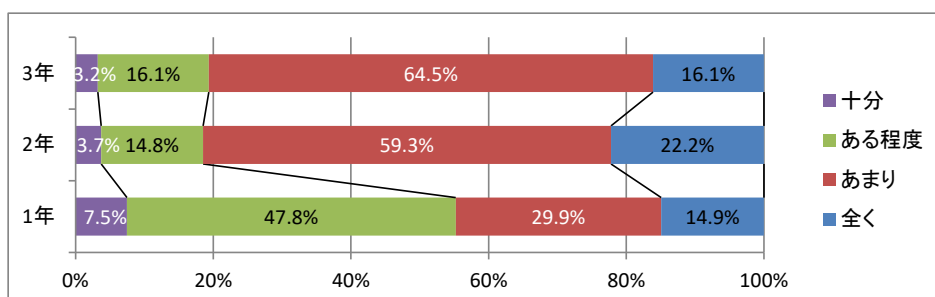
3)「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



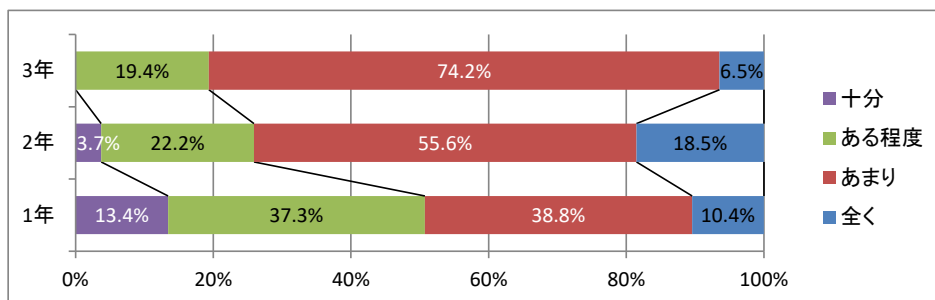
4)「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」



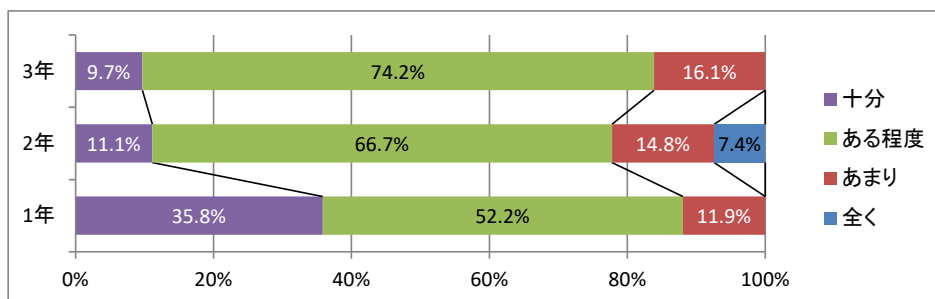
5)「母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く、話す、読む、書く)」



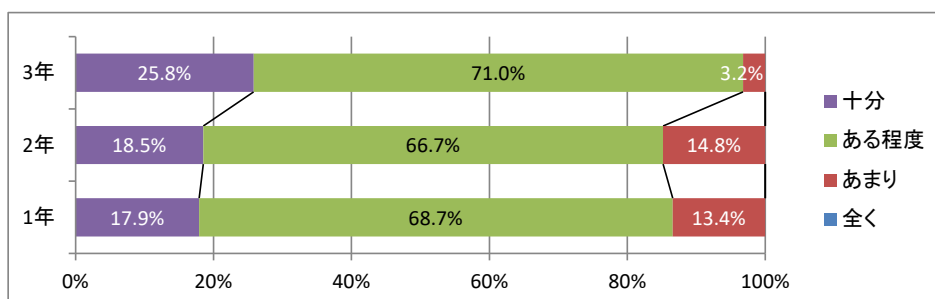
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



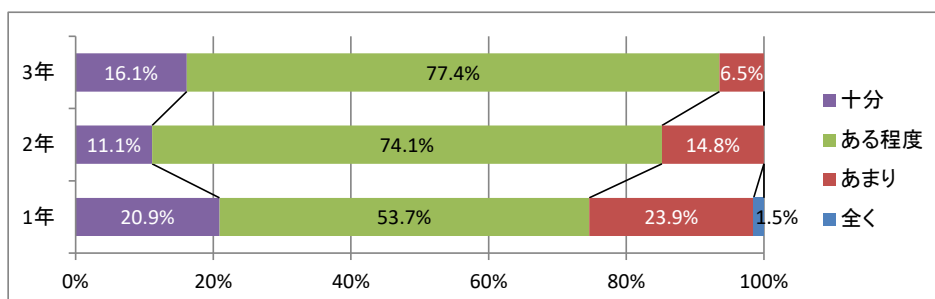
7)「教養教育等による幅広い知識」



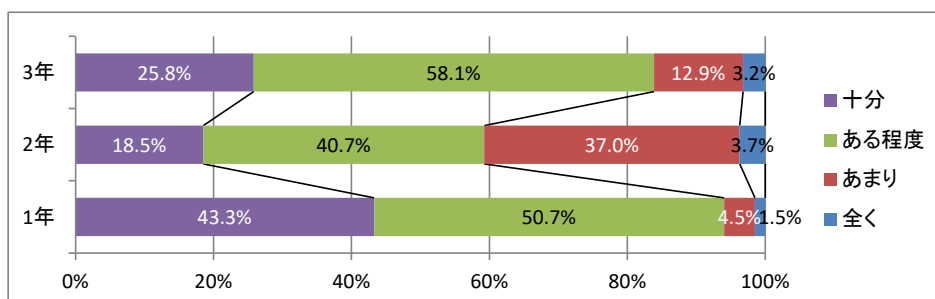
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」



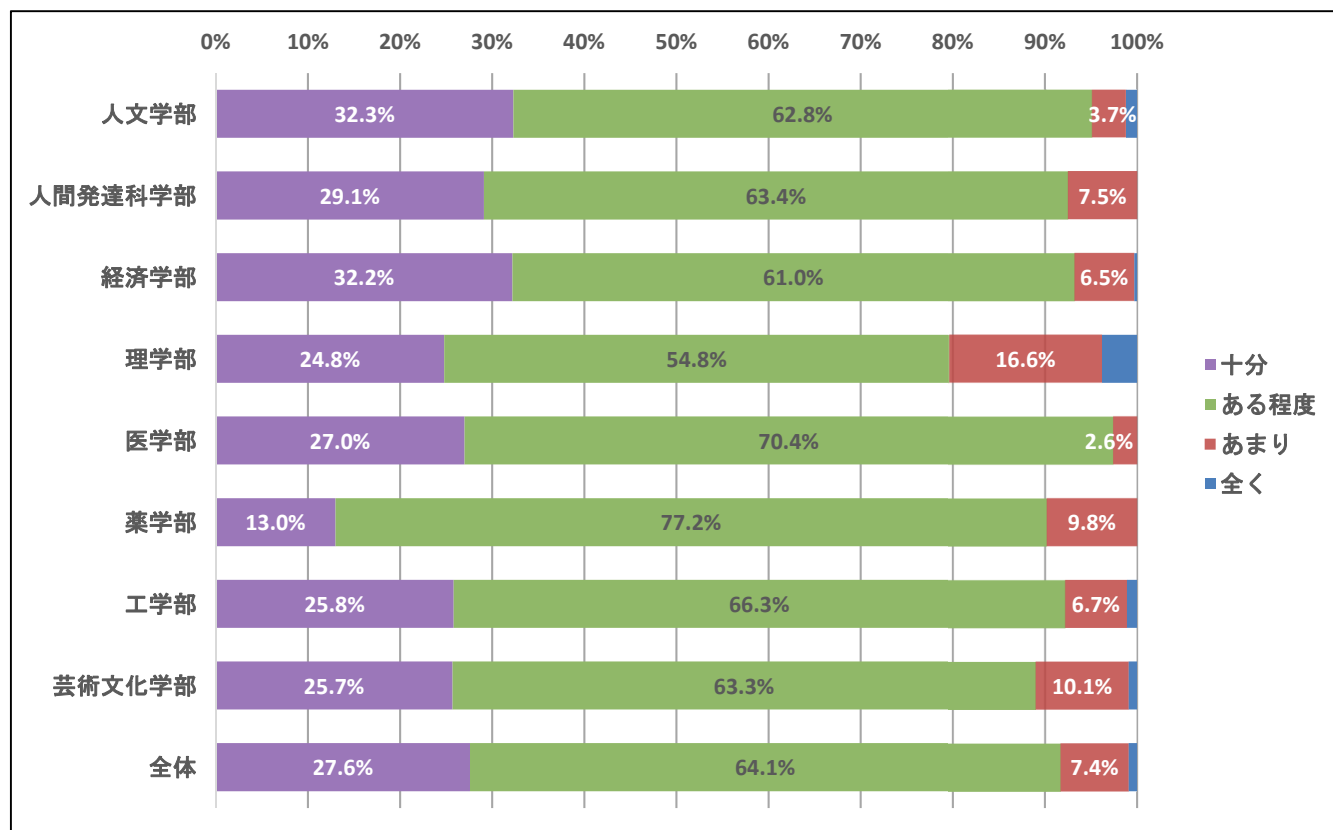
10)「地域を志向する意識」



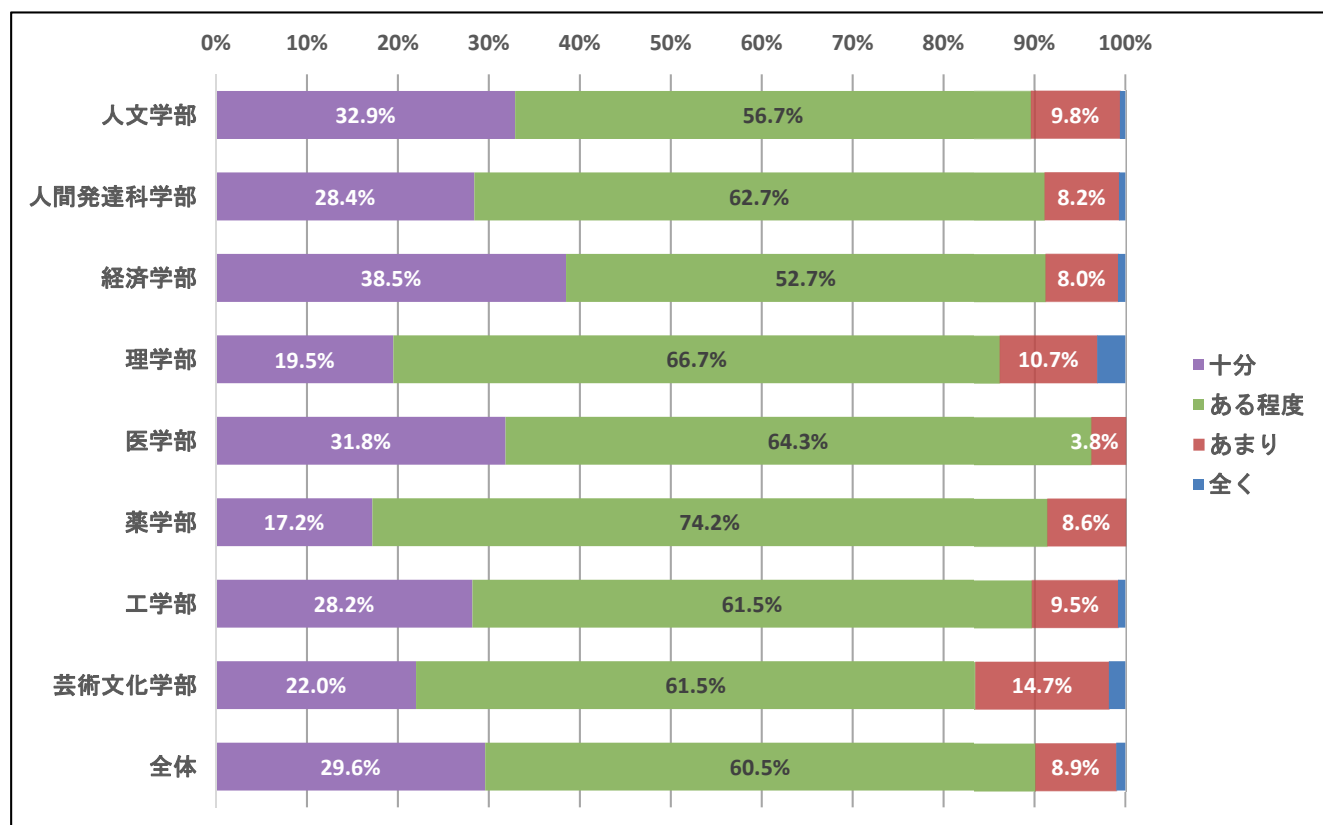
令和2年度卒業時調査における全学共通項目（DP 能力達成状況）回答状況

在学時に、以下の能力等をどの程度身に付けることができましたか？

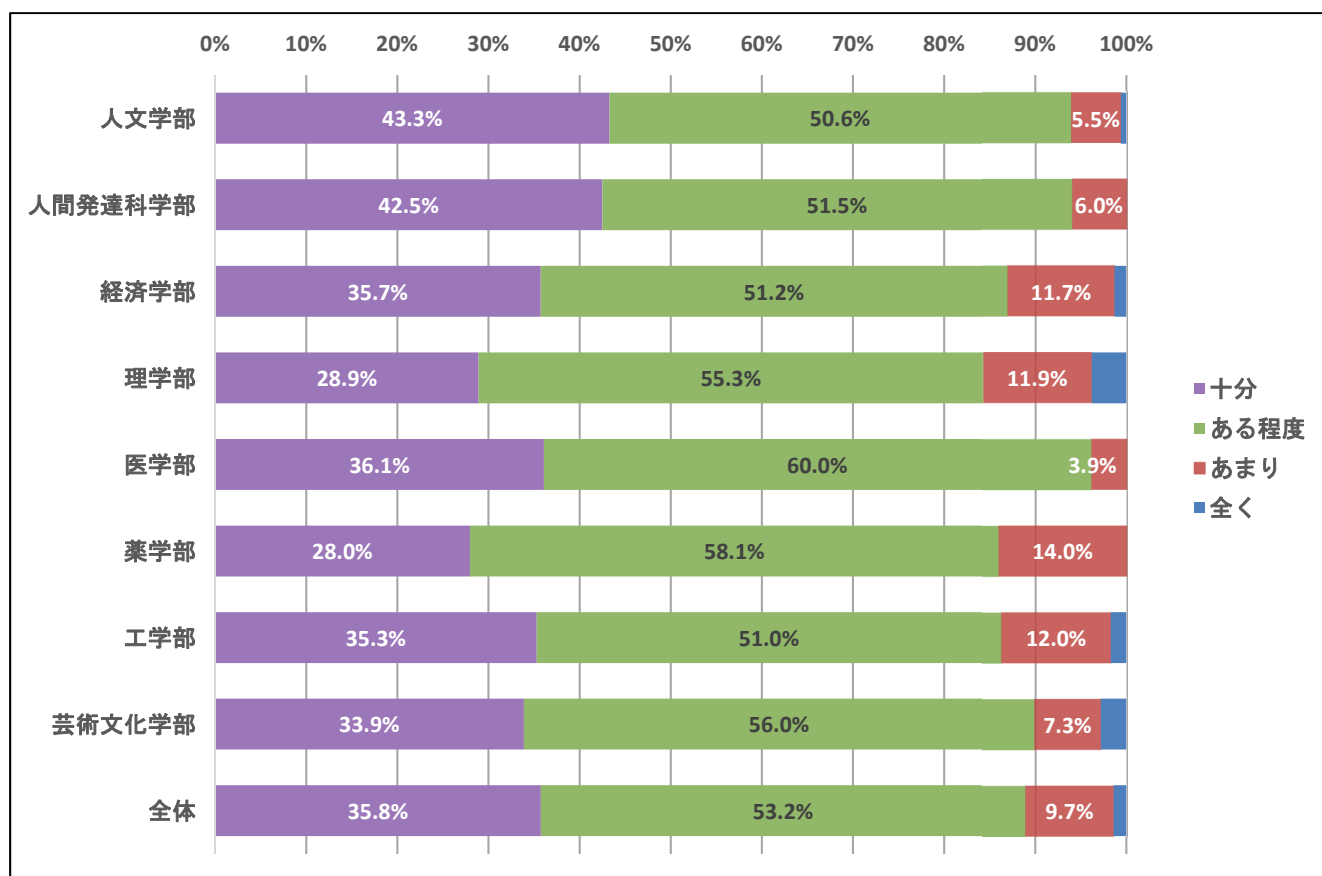
1) 「課題や問題を自ら解決する能力」



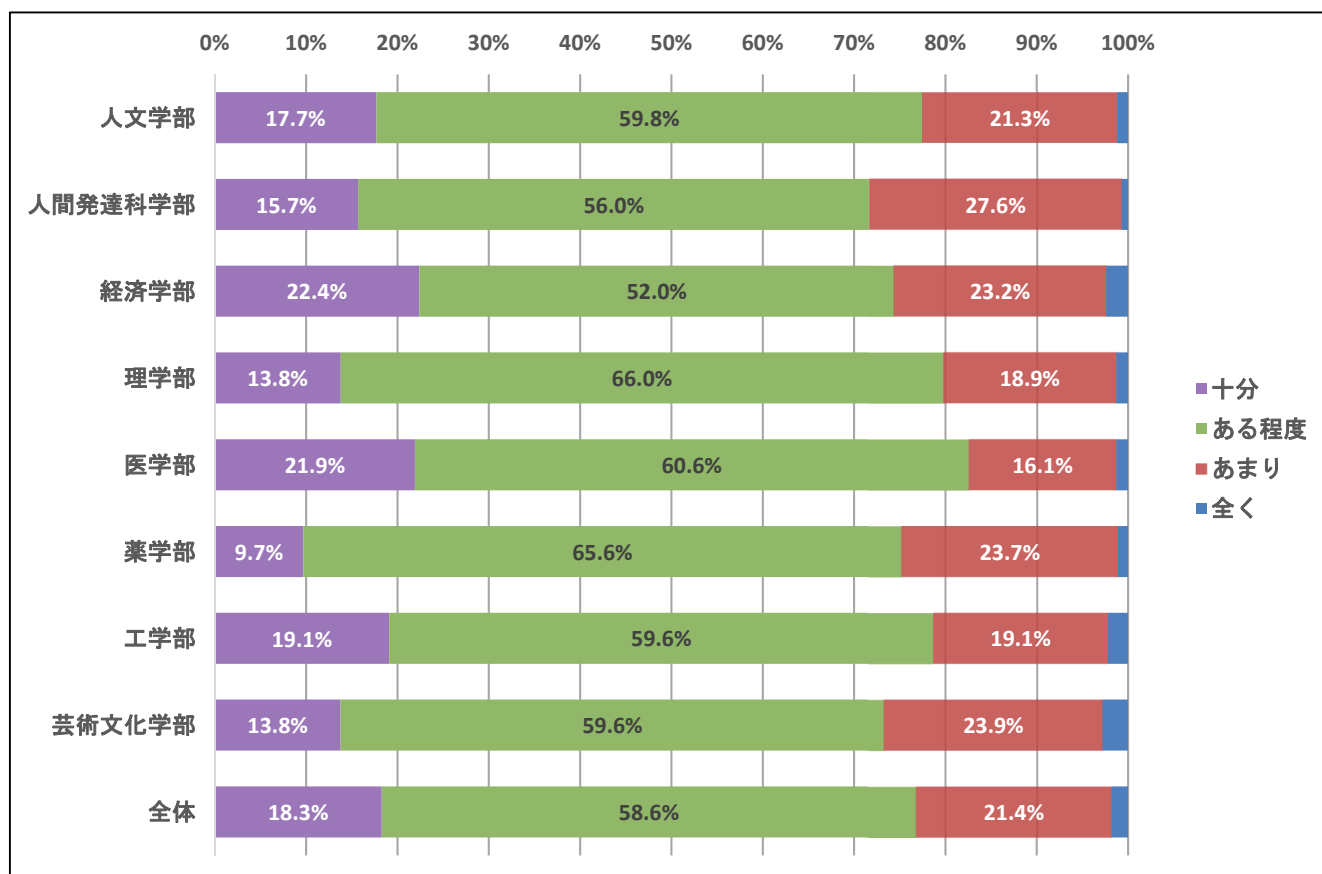
2) 「組織や社会の一員として責任を持って行動する能力」



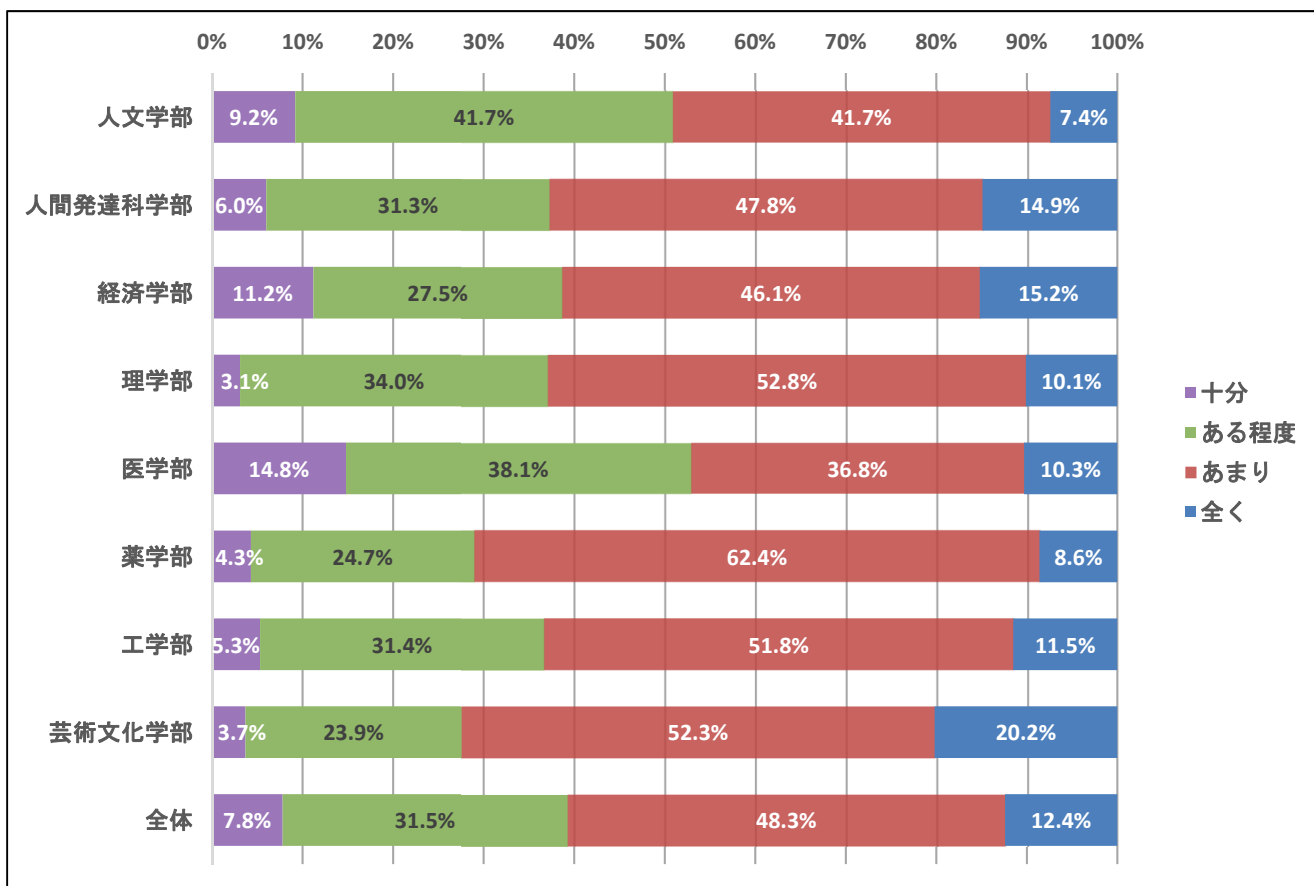
3) 「他者と協力し合うコミュニケーション能力」



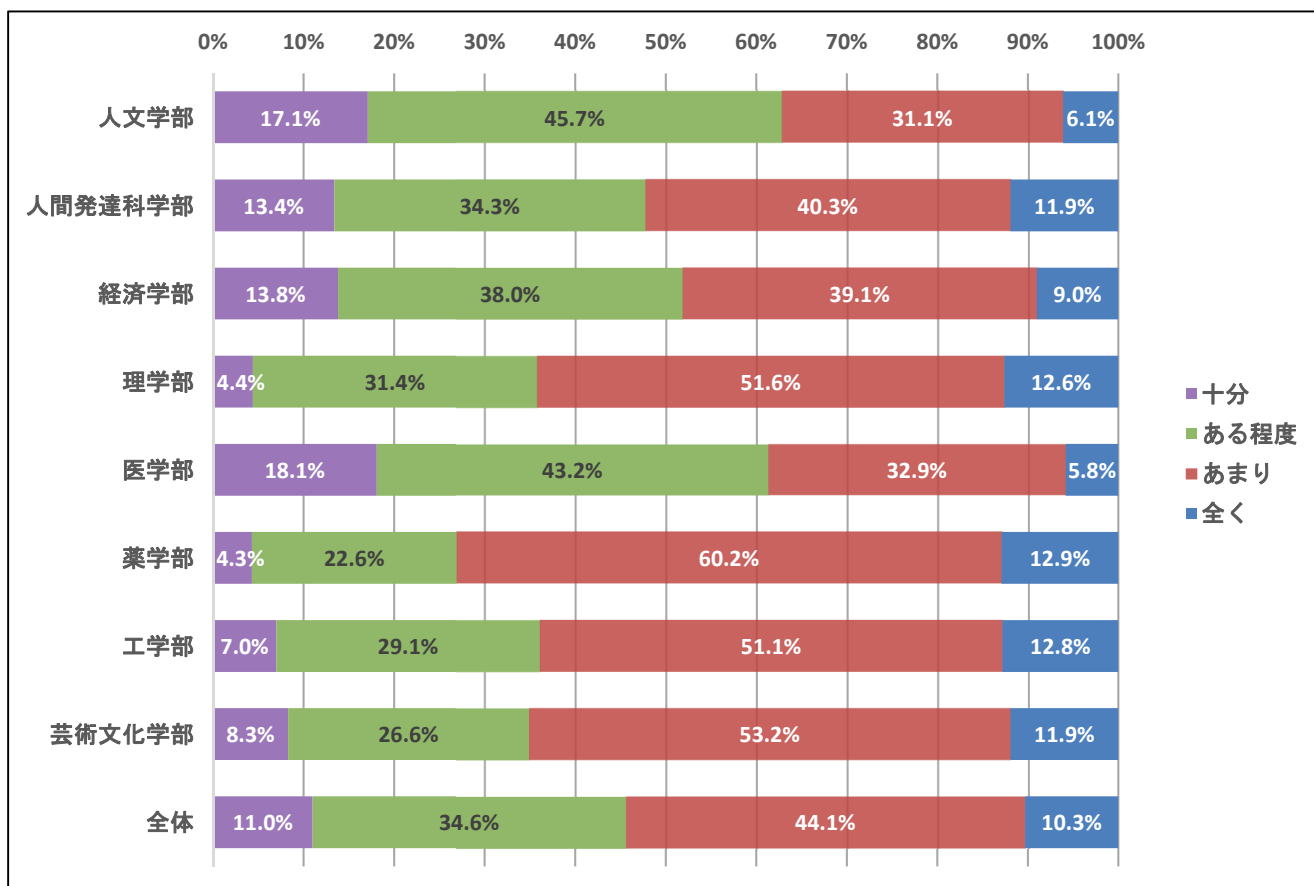
4) 「口頭発表，説明，討論などのプレゼンテーション能力」



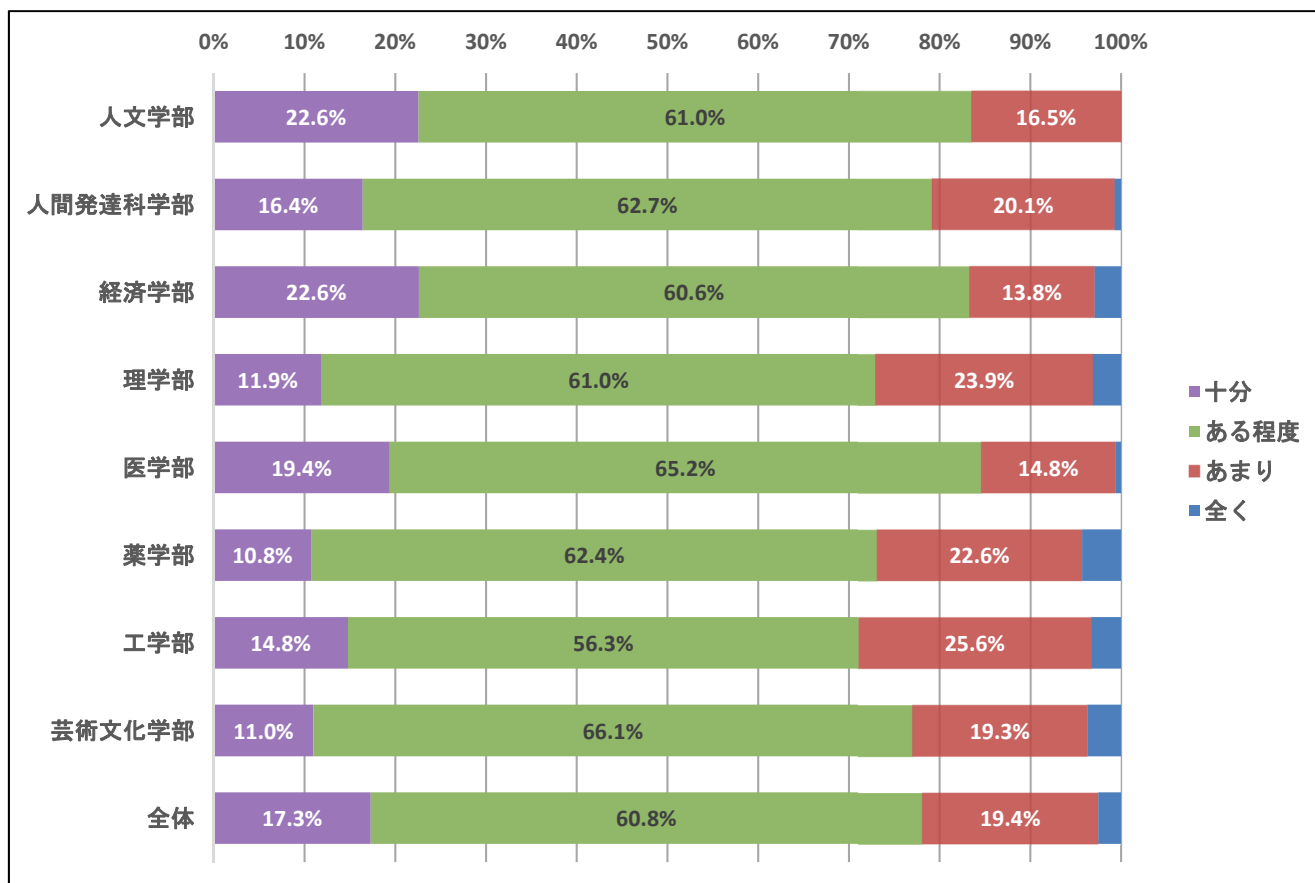
5)「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」



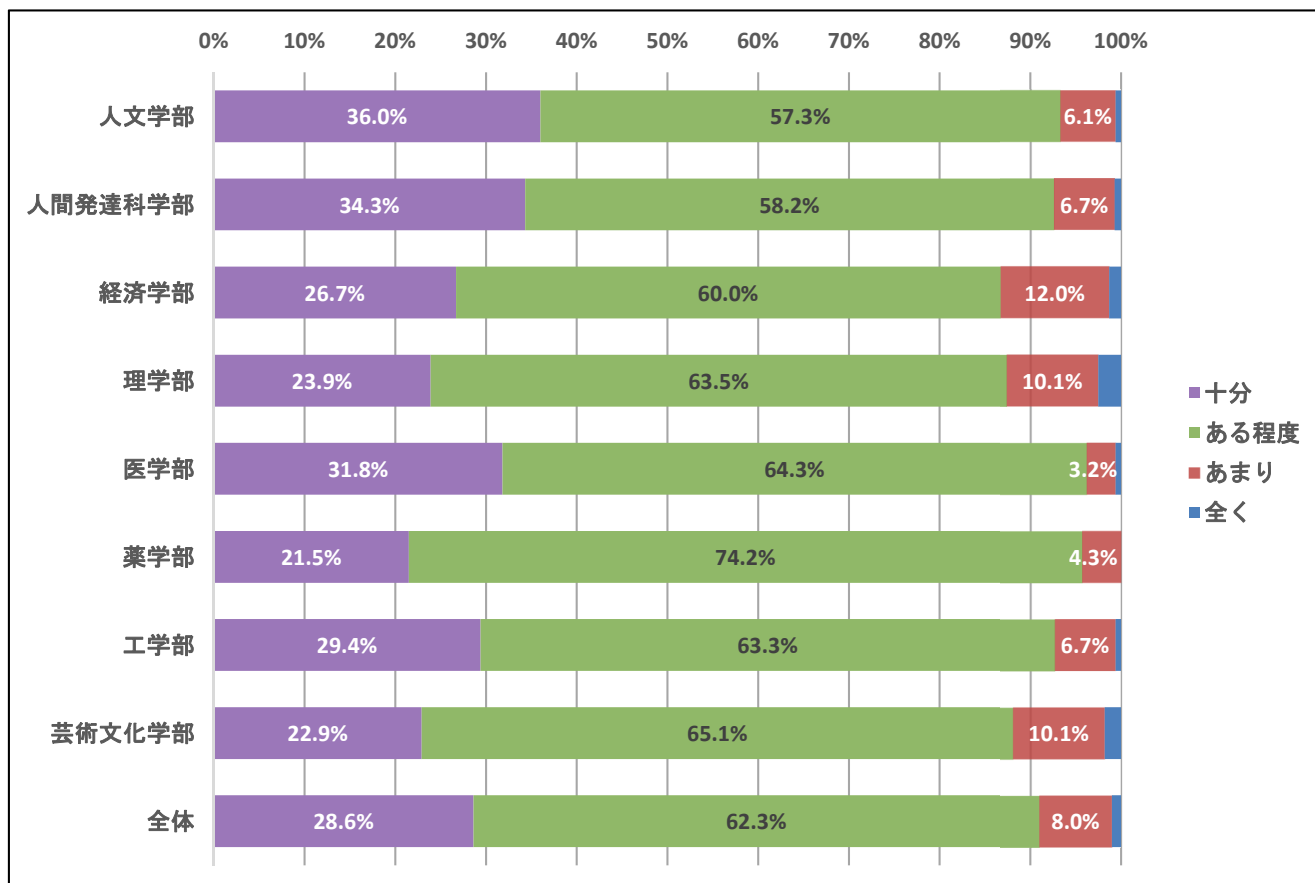
6)「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」



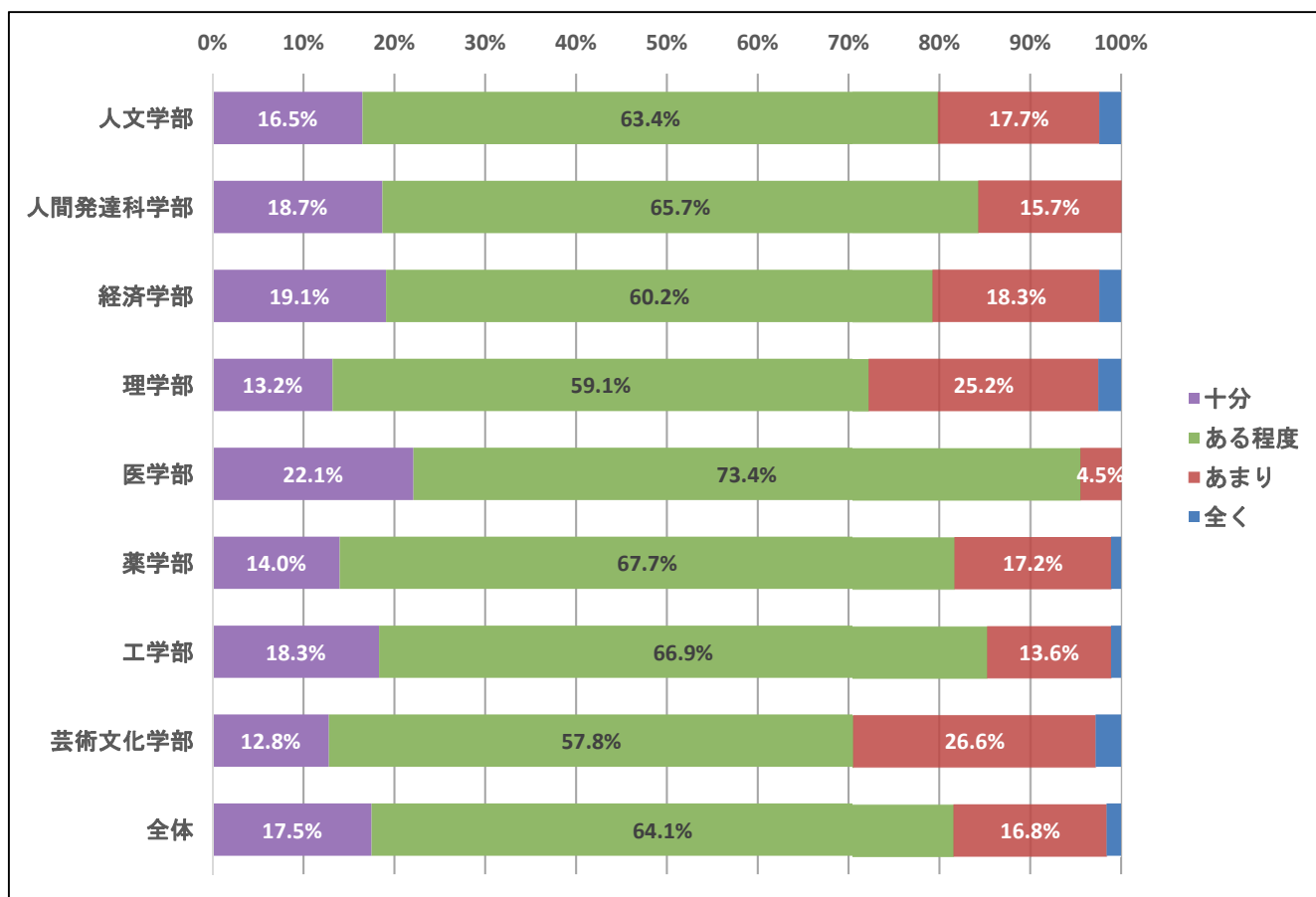
7)「教養教育等による幅広い知識」



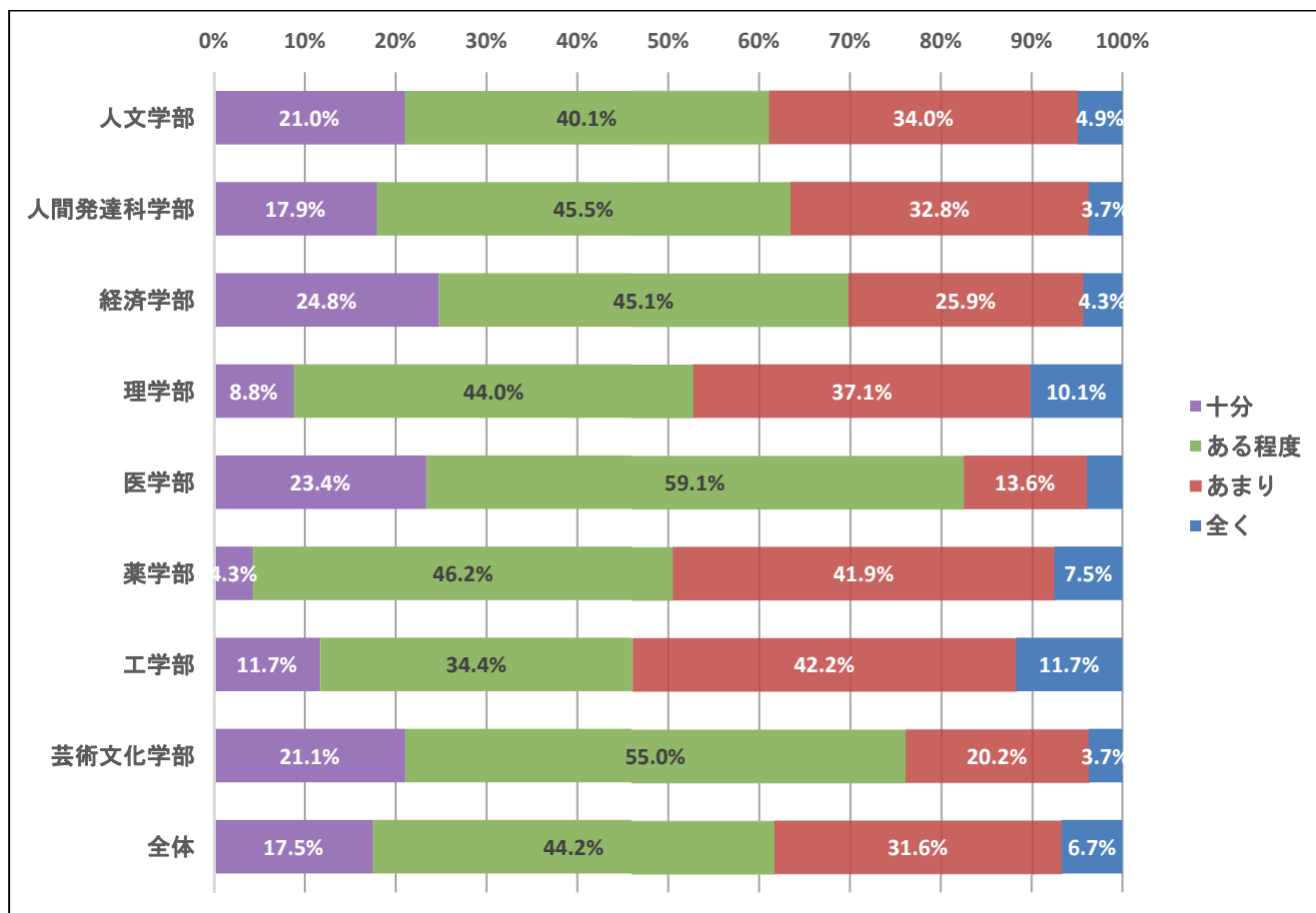
8)「専門教育による深い専門知識・技能」



9)「幅広い知識、深い専門知識・技能の修得により、社会で活躍できる能力」



10)「地域を志向する意識」



5. 全部局FD活動一覧及び 参加状況

令和3年度FD参加状況(令和3年4月～令和3年10月)

令和3年10月31日現在

部局名等	参加率	FD参加者数 (人)	学部教育を担当する教員数	備考
人文学部	90.7%	49	54	(目標参加率達成)
人間発達科学部	100.0%	51	51	(目標参加率達成)
経済学部	90.7%	49	54	(目標参加率達成)
理工学研究部(理学)	46.7%	28	60	(令和3年度中に参加率達成見込み)
理工学研究部(工学)	57.1%	48	84	(令和3年度中に参加率達成見込み)
理工学研究部(都市デザイン学)	78.0%	39	50	(令和3年度中に参加率達成見込み)
医学薬学研究部(医学)	91.5%	140	153	(目標参加率達成)
医学薬学研究部(薬学)	94.1%	48	51	(目標参加率達成)
芸術文化学部	89.7%	35	39	(目標参加率達成)
教養教育院	79.2%	19	24	(令和3年度中に参加率達成見込み)
大学院教職実践開発研究科	62.5%	5	8	(令和3年度中に参加率達成見込み)
和漢医薬学総合研究所	95.5%	21	22	(目標参加率達成)
附属病院	100.0%	108	108	(目標参加率達成)
教育・学生支援機構	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
研究推進機構	87.5%	14	16	(目標参加率達成)
地域連携推進機構	100.0%	3	3	(目標参加率達成)
国際機構	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
総合情報基盤センター	100.0%	6	6	(目標参加率達成)
環境安全推進センター	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
保健管理センター	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
FD参加率	84.9%	673	793	

【調査方法】

今回の調査は、令和3年4月1日から令和3年10月末までのFD参加状況を各部局に照会したものである。
 参加率の算出に当たり、対象は、学部等に所属する専任教員のうち、「学部教育を担当する専任教員」であり、FDの参加者数については、延べ人数ではなく、実人数を記載したものである。よって、1人の教員が複数回(全学、自学部、他学部、教養教育等)のFDに参加してもFD参加数は1カウントとしている。
 昨年度の同調査では、全体のFD参加率は94.4%であった。

令和3年度 F D活動実施状況・実施予定一覧

(様式2)

※開催場所について、Zoom等を利用したオンライン開催の場合は、プルダウンより「オンライン開催」を選択ください。

会場を設けて対面型でのFDを行った場合は、開催場所（学部棟名、教室名等）を記入ください。

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	※開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	講師名（所属）	他部局参加可否	備考
1	令和3年度第1回人文学部FD研修会	九州大学文系ディシプリン科目「芸術学入門」における双方向的授業実施について	2021/10/13(水)	1H	オンライン開催	人文学部	人文学部	人文学部教員	47人	石井 祐子 准教授（九州大学 基幹教育院）	不可	第6講義室を会場とし、講師にはZoomで講演いただいた。
2	未定	未定	2022/1～3	1H	未定	人間発達科学部	人間発達科学部教育方法改善検討委員会	人間発達科学部教員 ／ 教職実践開発研究科教員	未定	未定	可	
3	第1回経済学部FD研修会	PROGテストの解説会（1年次）	2021/9/8(水)	1H	オンライン開催	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	48人	谷川 雅之 氏（株式会社リアセック）	不可	
4	学生生活に関する理学部FD研修会	COVID-19対策を考える ～第5波を経験して～	2021/11/10(水)	30M	オンライン開催	理学部	理学部学科長会議、 理学部学生生活委員会	理学部教員	74人	山本 善裕 教授（医学部）	不可	
5	理学部・理工学教育部（理学領域）合同FD研修会	データサイエンス教育の進め方について －モデルカリキュラム、新指導要領との関連－	2021/12/1(水)	30M	オンライン開催	理学部	理学部教務委員会、 理工学教育部（修士課程）理学領域部会 教育委員会	理学部教員	71人	栗本 猛 教授（データサイエンス推進センター長、総合情報基盤センター長、教養教育院）	可	
6	医学部医学科FD	コロナ禍での学生評価	2021/6/25(金)	1H	オンライン開催	医学部	医学部医学科	医学部教員	21人	岸 浩幸 教授 高村 昭輝 教授 （いずれも医学部）	不可	
7	医学部FD	事例検討と マインドフルネスの教育	2021/8/7(土)	3H	オンライン開催	医学部	医学部	医学部教員 他	41人 （看護学科FDの参加者を含む）	関根 道和 教授（医学部長） 石木 学 准教授（保健管理センター杉谷分室） 北 啓一朗 准教授（附属病院 総合診療科） 三原 弘 助教（医師キャリア創造センター）	可	
8	看護学科FD 看護学科教員自身のためのWhole Person Careのために	コロナ禍の時代を乗り切るために、自己を見つめなおし、各個人が教員という立場での自分を、トータルケアの対象としてアセスメントしないうちから機会をもつ。同時に、少ない教員で多くの課題に対応するため、相互のサポートを考える機会にしたい。そしてScrapするものとBuildするものを提示する。	2021/8/7(土)	第1部 1H30M 第2部 1H20M	オンライン開催	医学部	看護学科	看護学科教員	28人	北 啓一朗 准教授（附属病院 総合診療科） 進藤 善予 氏（市立東大阪医療センター 緩和ケアセンター） 谷口 純一 氏（熊本大学病院）	可	Whole Person Care研究会 & 富山大学医学部FD
9	医学部医学科FD	分野別認証評価認定更新に向けて	2021/10/4(月)	1H	臨床講義室Ⅱ オンライン 併用	医学部	医学部医学科	医学部教員	50人	関根 道和 教授（医学部長） 三原 弘 助教（医師キャリア創造センター）	不可	

10	令和3年度薬学部・大学院医学薬学教育部薬学系部会FD	講演会及び班別討議 (※発表は、薬学部教授会で実施)	2021/8/19 (木)	3H	オンライン開催及び 杉谷キャンパス・講 義実習棟202、203、 303講義室	薬学部・大 学院医学薬 学教育部薬 学系部会	薬学部・大学院医学薬学教 育部薬学系部会	薬学部及び和漢医薬 学総合研究所の教員	71名	杉森 保 准教授 (教養教育院)	不可	附属病院薬剤部教員は薬学部教授会 構成員であるため例年参加可能。 今年度は教養教育に関する討議が あったため、教養教育院の教員5名 を招いている。 (いずれも参加者数に含んでいる) また、直前に新型コロナウイルスの 感染が拡大したことにより、当初予 定していた学生との意見交換会を中 止し、1日開催から半日開催に変更 した。
11	多様な新ニーズに対応する「がん専 門医療人材 (がんプロフェッショ ナル) 養成プラン 北信がんプロFD講演会	呼吸器外科医ができる臨床と研究とは？	2021/9/3 (金)	1H30M	オンライン開催	北信がんブ ロ	金沢医科大学	がん医療に興味を持 つ者	3名 (本学 教員の参加 人数)	芳川 豊史 氏 (名古屋大学大学院医学系研究科 病態外科学講座 (呼吸器 外科学分野) 教授)	可	
12	令和3年度医学薬学教育部 (看護学 液) FD研修会	教員自身を含めたWhole Person Care (WPC) について考える : 資料①②③の閲覧と音声①②③の聴取後 (前半部)、課題を提出する (後半部)	2021/10/1 (金) (オンデマンド: 9/3~10/8)	6H (前半部3H +後半部 3H)	オンライン開催	大学院医学 薬学教育部 (看護学 系)	大学院医学薬学教育部 (看 護学系)	大学院医学薬学教育 部 (看護学系) 担当 教員	14名	資料提供 ①飯田淳子 (川崎医療福祉大学) ②松川えり③宮地由佳 (日本Whole Person Care研究会)	不可	
13	令和3年度生命融合科学教育部FD研 修会 (共催: 医学薬学教育部 (医学 系))	生命融合科学教育部博士課程の講義科目の あり方について	2021/12/9 (木)	1H30M	工学部大会議室 講義実習棟303講義 室 ※オンライン (Zoom) 併用	大学院生命 融合科学教 育部	大学院生命融合科学教育部 教務委員会	・大学院生命融合科 学教育部担当教員 ・大学院医学薬学教 育部 (医学系) 担当 教員		1. 田村 了以 教授 (医学部) 2. 中村 真人 教授 (工学部) 3. 迫野 昌文 准教授 (工学部)	不可	
14	工学部FD研修会	検討中	2022/2予定	1H程度								
15	富山大学を受験する高校生の動向に 関するFD研修会	芸術文化学部の受験倍率アップについて意 見交換を実施	2021/7/28 (水)	1H	芸術文化学部B棟 B212講義室	芸術文化学 部	芸術文化学部教育部会議	芸術文化学部教員	28人	船橋 伸一 特命教授 (アドミッションセンター)	不可	
16	学生生活に関するFD研修会 「学生の心の不調を早期に発見し対 応するには ―問題が大きくなる前 に―」	学生が心の不調を引き起こす背景要因、学 生支援のポイントについて理解を深め、学 生のメンタルヘルスの維持・増進を図るこ とを目的とする。	2021/11/17 (水)	30M	オンライン開催	都市デザイ ン学部	都市デザイン学部学生生活 委員会、都市デザイン学部 FD委員会	教員	44人	西山 志満子 講師 (保健管理センター)	不可	
17	令和3年度第1回教養教育院FD「学習 を促進するシラバスの書き方とルー ブリックの活用」	履修者の学習をより効果的に促進させるた めのシラバスと公平な成績評価を促すため のルーブリックの作成方法について説明 し、それらを踏まえた実践的な演習を行 う。	2021/9/10 (金)	2H30M	オンライン開催	教養教育院	教養教育院教育改善検討WG	本学教職員 非常勤講師	58人	福田 翔 准教授 (教養教育院) 大橋 隼人 講師 (教養教育院)	可	
18	令和3年度第2回教養教育院FD「学生 と考えるグループワークからPBL へ」	グループワークを導入したアクティブラー ニングからより高度な形態であるPBL (Project Based Learning : 課題解決型学 習) についての本学での導入事例を紹介し、 参加者からの意見を踏まえたパネルディス カッションを行う。	2021/12/1 (水)	2H	共通教育棟A42番教 室 (オンラインでの 同時配信有)	教養教育院	教養教育院教育改善検討WG	本学教職員 非常勤講師 本学学生	未定	武山 良三 理事 (教養教育院長) 塩見 一三男 講師 (地域連携戦略室) 矢口 忠憲 教授 (都市デザイン学部)	可	
19	第1回医療安全講習会	1. 富山大学附属病院における医療安全の 基本 2. 医療機器の安全な取扱いについて 3. 医薬品の安全使用のための業務手順書 等の改定等 4. RRSの起動基準と現状	2021/4/12 (月)	1H	日医工オーデイトリ アム	附属病院	医療安全管理室	全職員	1588人	1. 長島 久 特命教授 (附属病院 副院長・医療安全管理部長) 2. 佐藤 邦昭 氏 (附属病院 医療機器管理センター) 3. 小野 敦夫 氏 (附属病院 薬剤部) 4. 若杉 雅浩 准教授 (附属病院 災害・救命センター)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講

20	第1回院内感染対策講習会	感染制御と抗菌薬適正使用の重要性 ～COVID-19を含めて～	2021/5/20(木)	1H	日医工オーディトリ アム	附属病院	感染制御部	全職員	1588人	山本 善裕 教授 (医学部)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
21	第2回医療安全講習会	医療におけるコミュニケーションとクレ ームへの対応	2021/7/14(水)	1H	日医工オーディトリ アム	附属病院	医療安全管理室	全職員	1579人	長島 久 特命教授 (附属病院 副病院長・医療安全管理部長)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
22	第3回医療安全講習会	RRSについて	2021/10/5(火)	45M	日医工オーディトリ アム	附属病院	医療安全管理室	医師・看護師	(受講期間 中)	若杉 雅浩 准教授 (附属病院 災害・救命センター)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
23	持続可能社会創成学環グローバル SDGsプログラムにおける日英バイリ ング教育の実践法について	日英バイリンガル教育の実践法について、 具体例を挙げた講義を行う	2021/12～2022/1			研究推進機 構極東地域 研究セン ター		持続可能社会創成学 環グローバルSDGsプ ログラム担当教員他		和田 直也 教授 (極東地域研究センター) 堀江 典生 教授 (極東地域研究センター) 池田 丈佑 准教授 (人間発達科学部)	可	
24	第1回全学FD2021	アクティブ・ラーニングの優れた取組み事 例の情報共有並びに授業の質の向上	2021/6/23(水)	1H30M	オンライン開催	教育推進セ ンター	教育推進センター	本学教職員・学生	313人	谷井全学FD・教育評価専門会議議長 (教養教育院) 黒田 卓 教授 (人間発達科学部) 松田 恒平 教授 (理学部) 大路 貴久 教授 (工学部) 桶本 千史 准教授 (医学部) 大西 宏治 教授 (人文学部) 柴柳 敏哉 教授 (都市デザイン学部) 奥 敬一 教授 (芸術文化学部) 新田 淳美 教授 (薬学部) 中村 真由美 教授 (経済学部) 福田 翔 准教授 (教養教育院)	可	
25	北陸地区データサイエンス・オンラ インFD	文科省のDSモデルカリキュラムの概要、北 陸3県のDS教育の現状等の発表・意見交換	2021/8/31(火)	2H	オンライン開催	教育・学生 支援機構 データサイ エンス推進 センター	教育・学生支援機構 デ ータサイエンス推進セン ター	富山大学・金沢大 学・福井大学の教職 員・学生 北陸3県の高等教育 機関の教職員	179人	孝忠 大輔 氏 (日本電気株式会社AI・アナリティクス事業部事業部長代 理 兼 AI人材育成センター長)	可	
26	教育現場における危機管理について ー医療安全管理の視点からー	附属病院医療安全管理部における医療事故 防止のためのシステムを参考に、教育現場 における危機管理、なにかずく組織的対応 に関する示唆を得る。	2021/10/5(火)	1H	オンライン開催	人間発達科 学部附属学 校園	人間発達科学部附属学校園	富山大学教職員 ※人間発達科学部教 職員および附属学園 教職員は全員参加	159人	長島 久 特命教授 (附属病院 副病院長・医療安全管理部長)	可	
27	第2回全学FD2021	学生が主体的に学べるためのクラスデザイ ン	2021/10/27(水)	2H50M	オンライン開催	教育推進セ ンター	教育推進センター	本学教職員・学生・ 他大学教職員等	145人	栗田 佳代子 氏 (東京大学 大学院教育学研究科附属 学校教 育高度化・効果検証センター 教授)	可	
28	令和3年度ダイバーシティ・セミ ナー 第1回 異文化コミュニケー ション	異文化コミュニケーション ～アンステレオタイプと多様性の追求～	2021/10/29(金)	1H15M	共通教育棟D-11 (Zoomライブ配信あ り)	ダイバーシ ティ推進セ ンター	ダイバーシティ推進セン ター	本学教職員・学生・ 一般	31人	池田 丈佑 准教授 (人間発達科学部)	可	

6. 各種資料

教育成果の評価についての基本方針

1. 趣旨と目的

認証評価等で学修成果の評価が求められている状況に対応し、富山大学においても学修成果の組織的な評価を行う。

その目的は、学修成果を明らかにして教育の質保証を行うとともに、評価に基づいた教育活動の水準の維持・向上を図ることである。

2. 評価の基準

学修成果は、どのような能力を身に付けたかによって評価することが求められている。そのため、同様の趣旨で制定された学位授与方針を評価基準とすることが適切である。

3. 評価の方法

以下の 4 つの方法によって評価を行う。

- 1) 在学中の自己評価
- 2) 卒業・修了時の自己評価及び客観的な資料による評価
- 3) 卒業・修了後数年を経た時期の自己評価
- 4) 就職先による評価

それぞれについての具体的な方法は、教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議が企画・実行し、教育・学生支援機構会議等に報告する。

4. 評価の実施体制

- ・各学部等，大学院において，自己評価を行い，課題を析出する。
- ・教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議において，各学部等，大学院の評価を取りまとめ，全学的な課題を析出する。
- ・教育推進センター会議において評価によって得られた課題等を提言する。

富山大学教育・学生支援機構教育推進センター専門会議要項

平成 27 年 6 月 16 日制定
平成 27 年 12 月 2 日改正
平成 28 年 6 月 23 日改正
平成 29 年 11 月 10 日改正
平成 30 年 3 月 27 日改正

(趣旨)

第 1 条 この要項は、富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議内規（以下「センター会議内規」という。）第 7 条第 3 項の規定に基づき、富山大学教育・学生支援機構教育推進センターに置く専門会議（以下「専門会議」という。）に関し必要な事項を定める。

(専門会議)

第 2 条 専門会議として、全学 F D ・教育評価専門会議、学芸員養成科目専門会議及び大学院教務専門会議（以下「各専門会議」という。）を置く。

(機能)

第 3 条 各専門会議は、センター会議内規第 7 条第 2 項の規定に基づき、富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議（以下「センター会議」という。）から付託された次に掲げる事項について審議し、実施する。

(1) 全学 F D ・教育評価専門会議

- イ 学部等の教育の質保証に関すること。
- ロ 学部等の教育評価に関すること。
- ハ 全学的 F D に関すること。

(2) 学芸員養成科目専門会議

- イ 全学の学芸員養成科目に関すること。

(3) 大学院教務専門会議

- イ 大学院の教育の質保証に関すること。
- ロ 大学院の教育評価に関すること。

(組織)

第 4 条 各専門会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 全学 F D ・教育評価専門会議

- イ 富山大学教育・学生支援機構教育推進センター長（以下「センター長」という。）が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 各学部の F D 担当組織の長
- ハ 教養教育院の F D 担当教員 1 人
- ニ 学務部学務課長
- ホ その他センター長が必要と認めた者

(2) 学芸員養成科目専門会議

- イ センター長が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 人文学部, 人間発達科学部, 理学部, 芸術文化学部及び都市デザイン学部から選出された教員 各1人
- ハ 学務部学務課長
- ニ その他センター長が必要と認めた者

(3) 大学院教務専門会議

- イ センター長が指名したセンター会議の委員 若干人
- ロ 各研究科から選出された教員 各1人
- ハ 生命融合科学教育部から選出された教員 1人
- ニ 医学薬学教育部の医学系及び薬学系から選出された教員 各1人
- ホ 理工学教育部の理学系及び工学系から選出された教員 各1人
- ヘ 学務部学務課長
- ト その他センター長が必要と認めた者

- 2 前項第1号ハ及びホ並びに前項第2号ロ及びニ並びに前項第3号ロ, ハ, ニ, ホ及びトの委員の任期は, 2年とし, 再任を妨げない。ただし, 欠員が生じた場合の後任の委員の任期は, 前任者の残任期間とする。

(議長)

第5条 各専門会議に議長を置き, 前条第1項各号イの委員から, センター長が指名する委員をもって充てる。

- 2 議長に事故があるときは, 議長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 各専門会議は, 委員の過半数が出席しなければ開会できない。

- 2 議事は, 出席委員の過半数をもって決する。ただし, 可否同数のときは, 議長がこれを決する。

(意見の聴取)

第7条 各専門会議が必要と認めたときは, 委員以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

(議事の報告)

第8条 各専門会議は, 原則として議事内容をセンター会議に報告する。

(雑則)

第9条 この要項に定めるもののほか, 各専門会議に関し必要な事項は, 各専門会議において定める。

(事務)

第10条 各専門会議の事務は, 学務部学務課において処理する。

附 則

この要項は、平成 27 年 6 月 16 日から施行する。

附 則

- 1 この要項は、平成 27 年 12 月 2 日から施行する。
- 2 この要項の施行日において委員である者の任期は、第 4 条第 2 項の規定にかかわらず平成 29 年 3 月 31 日までとする。

附 則

この要項は、平成 28 年 7 月 1 日から施行する。

附 則

- 1 この要項は、平成 29 年 11 月 10 日から施行する。
- 2 この要項の施行後最初に選出される第 4 条第 1 項第 5 号ロ、ハ、ニ、ホ及びトの委員の任期は、第 4 条第 2 項の規定にかかわらず平成 31 年 3 月 31 日までとする。

附 則

この要項は、平成 30 年 4 月 1 日から施行する。

教育・学生支援機構教育推進センター全学FD・教育評価専門会議 委員名簿

令和3年4月1日

職 名 等		氏 名 等	備 考
センター長が指名したセンター会議の委員（第1号イ委員）		たに い 一郎 谷 井 一 郎	（議長）
各学部FD担当委員長 （第1号ロ委員）	人文学部	お の なお こ 小 野 直 子	
	人間発達科学部	やま ぐち のり かず 山 口 範 和	
	経済学部	しら いし しゅんすけ 白 石 俊 輔	
	理学部	はやし なお と 林 直 人	
	医学部	もり なが よし とも 森 永 芳 智	
	薬学部	とも ひろ たけ のり 友 廣 岳 則	
	工学部	お ぐま のり やす 小 熊 規 泰	
	芸術文化学部	むら た さとる 村 田 聡	
	都市デザイン学部	まつ だ けん じ 松 田 健 二	
教養教育院のFD担当 教員（第1号ハ委員）	教養教育院	ひこ さか やす まさ 彦 坂 泰 正	
学務部学務課長（第1号ニ委員）		た さい たか ひろ 田 才 貴 大	
その他センター長が必要と認 めた者（第1号ホ委員）			

富山大学における F D 活動報告書 2 0 2 1

発行／2 0 2 2 年 3 月

編集・発行／富山大学教育・学生支援機構教育推進センター
富山市五福 3 1 9 0 番地